

お問い合わせ先
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ
〒430-0939 静岡県浜松市中央区連尺町314-30
〔 電 話 〕 053-451-1355 〔 メール 〕 lets-arsnova@nifty.com
〔 ホームページ 〕 <https://cslets.net/>

～生きること、暮らすこと、過ごすこと、出会うこと～

2024年度記録集

エトセトラブックス代表
編集者
松尾亜紀子
ヤマハ発動機株式会社
青田元



P006	はじめに
P007	ひとインれじでんす
P008	第1回 岸井大輔さん（劇作家） トークまとめ 寄稿
P016	第2回 松村圭一郎さん（文化人類学者） トークまとめ 寄稿
P026	第3回 村上慧さん（作家） トークまとめ 寄稿
P037	第4回 西川勝さん（臨床哲学プレイヤー） トークまとめ Day1 トークまとめ Day2 寄稿
P054	第5回 伊藤亜紗さん（美学者） トークまとめ 寄稿
P061	第6回 小松理虔さん（地域活動家） トークまとめ 寄稿
P074	第7回 松尾亜紀子さん（エトセトラブックス代表、編集者） トークまとめ 寄稿
P082	第8回 青田元（ヤマハ発動機株式会社） トークまとめ 寄稿
P092	京都哲学研究所×クリエイティブサポートレッツ コラボレーション企画「"できなさ"の現場から考える」
P100	かしだしたけし かしだしたけし in ぶんじ寮 かしだしたけしレポート レッツ×ぶんじ寮滞在 = 「かしだしたけし？」
P108	新しい価値創造 ～福祉・アート・文化・障害・まちづくりが混然一体となる
P109	事業データ

1.「見えかた」を増やすエクササイズ



ひとインれじでんす

様々な分野の専門家が、レッツの運営するたけし文化センター連尺町やちまた公民館に滞在します。知的障害のある人たちと過ごしたり、スタッフと話してみたい何をするのでしょうか。文化人類学者なら、劇作家なら、編集者なら、それらの風景はどんな風に見えるのでしょうか!? 滞在2日目に公開トークもあります。

参加費 1,000円(毎回)
定員/先着30名(毎回)

〈お申し込み方法〉
右の申し込みフォームまたは
電話:053-451-1355
メール:lets-arsnova@nifty.com



申し込みフォーム



8/3 17:30~19:00

場所:ちまた公民館

参加費:カンパ制

岸井大輔 劇作家



9/14 13:30~15:30

場所:たけし文化センター連尺町

松村圭一郎 文化人類学者



10/5 13:30~15:30

場所:ちまた公民館

村上 慧 作家



10/9 18:00~20:00

場所:たけし文化センター連尺町

西川勝 臨床哲学プレイヤー

10/10 10:30~12:30

場所:ちまた公民館

西川勝 臨床哲学プレイヤー



11/9 13:30~15:30

場所:たけし文化センター連尺町

伊藤亜紗 美学者



11/13 18:00~20:00(予定)

場所:調整中(浜松市中心市街地)

小松理彦 地域活動家



12/7 13:30~15:30

場所:ちまた公民館

松尾亜紀子 エトセラブックス代表、編集者



2025年 1/11 13:30~15:30

場所:たけし文化センター連尺町

青田元 ヤマハ発動機株式会社 執行役員 新事業開発本部長

ミドのヴぁ スペシャル

毎月1回、レッツ代表久保田翠のファシリテーションによる哲学カフェ「ミドのヴぁ」を行います。今まで日本人が大切にしてきた暮らしや住まい方、生き方の根幹をなしていた「家族・血縁・地縁」。それらに頼らない生き方、暮らし方、住まい方を、重度障害者の家族の「暮らし」をもとに考えてみます。こども、障害、女性、ジェンダー、人権など。代わりゆく社会の中で私たちは何を大切に生きていくのか。皆さんで語り合ひましょう。

参加費 300円(申込み不要)
場所:ちまた公民館
開催日時:毎月第2火曜
10:30~12:30



● 親亡き後をぶっ壊せ!

1 7/9(火)「子供の自立と親の自立 ~親の人権、子どもの人権」

2 8/20(火)「家族という呪縛~家族のことは 家族が担うべきものなのか」

3 9/10(火)「母親・女性神話の幻想~母親は家族のために人生をささげていいの」

4 10/8(火)「役割分担の幻想 ~男だから女だから、にある呪縛」

5 11/12(火)「家族神話の幻想
~家族がいるから安心? 家族がすべてを担えるのか」

● 「健康で文化的な生活」を考える
~これからの住まい・くらしのカタチ

6 12/10(火)「健康で文化的な最低限度の生活って何?」

7 2025年 1/14(火)「文化的な生活が必要な理由」

8 2/18(火)「これからの住まい・くらしのカタチ」

タイムトラベル100時間ツアー

毎月第3 金曜~土曜

たけし文化センター連尺町やちまた公民館に滞在する観光ツアー。100時間あれば、もう以前の自分ではいられなくなる!という噂(?)の人気ツアーです。忙しい現代人にむけて、まずは1泊2日のツアーを毎月開催しています。一生に一度くらい、重度の知的障害がある人たちと寝食ともにすごしてみませんか。

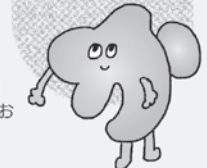


ツアーの申込みはコチラから

かしだしたけし

あなたの見慣れた景色を、重度の知的障害のある人たちが塗り替えてくれる、おでかけ企画。おでかけ先でその土地のみなさんと過ごしたり、レッツ代表の久保田がお話したりします!お出かけ先も募集中です!メール件名に「かしだし」と書いてお問い合わせを。

2024年度のおでかけ先
聖隷クリストファー大学/冨家中学校/ぶんじ寮/佐鳴台小学校 and more...



2.じぶんの「ちまた」をつくるエクササイズ

お祭りごっこ!! みんなでつくる 凸凹まつり2024



公式サイト

スケジュール



2023年から始まった凸凹まつりは、多様な人たちが共に生きる街を目指して、いろいろな人たちと協力しながら祭りを作り上げるイベントです。今年は「デコキチウナギとシラス隊」!? ちまた公民館を拠点にみんなで作った巨大ウナギとシラスのマラカスを持ってパレードします!

プレワークショップ

まつり当日に向け巨大ウナギ(デコキチウナギ)づくりを行う活動拠点「デコ基地(でこきち)」がちまた公民館にオープンします。アーティストや街のみなさんと一緒にみんなで一緒に祭りづくりを楽しみましょう。

参加アーティスト
遠州天狗屋(縁起物づくりユニット)、竹村真人(FabLab 浜松/TAKE-SPACE 代表)
ブスブス byZING(オープンパブリッシングスタジオ&ZINGショップ)

みんなでつくる凸凹まつり 2024

内容:デコキチウナギわんぱく! 海遊パレード/ DJ&盆踊り/スケートボード体験/ウォーキングフットボール体験/ eスポーツ体験/出店(たこやき、エスニックなど)/ワークショップ(カラフルお面づくり)などほか

①わんぱく!! 海遊パレード
時間:11:00~12:00(11:00までにデコ基地集合)

②みんなでつくる凸凹まつり
場所:新川モール 時間:12:00~18:00

参加費:無料 ※事前申込み不要、出入り自由

ちまた公民館

開館時間:月・火・水・金・土
12:00~17:00



浜松市田町で、福祉施設でありながら私設の公民館でもある「ちまた公民館」がいろいろなイベントを行います。哲学カフェ「かたりのヴぁ」、銅版画教室、パステルアート講座、ゲームなどなど。持ち寄り企画もお待ちしております!



ちまちまトーク

ゲスト

★ 8/28 18:30~19:30 ROCCA 美容室

★ 8/30 18:00~19:00 鈴木藤男 元新瀬社勤務、鈴木邸店主

★ 9/4 18:30~20:00 荒石真生 JICA 浜松デスク

★ 10/21 18:00~19:30 空閑美帆 ツインギャラリー 豊

★ 11/21 18:00~19:00 後藤誠之 tyu beer 代表

★ 11/27 18:00~19:00 御園井智三郎 ミノイサイクル代表取締役

★ 12/3 18:00~19:30 竹村有希 Fablab 浜松/Take-Space デキスタイル担当

場所:ちまた公民館
定員:先着15名(毎回)
参加費:無料 ※申込み不要

浜松中心市街のご近所のあの人の人、気になるあの人の人。話を聞いてみたいけど、なかなかゆっくり話せない、そんな人たちにお声かけして、気楽におしゃべりする会。今年も各スタッフが話を聞きたい人たちをお誘いし公開トークイベントを開催しますよ!

2025年

★ 1/15 18:00~19:00 中出慎佑 West Goat Coffee オーナー/パリスタ

★ 1/21 18:30~19:30 高橋久美子 古本屋サイダーハウス・ルール

★ 2/4 17:30~19:00 三浦京子 丸喜屋商店・食育インストラクター

★ 2/18 19:00~20:00 山崎大介 ZOOT HORN ROLLO 店長



公開トーク
開催決定!

2025年
1/26日

「できなさ」の現場から考える
京都哲学研究所 X レッツ

はじめに

困難な状況におかれたとき、「出口がない」と思うことがあります。

災害、孤立、感染症、差別、貧困など危機的な状況だけでなく、

住む家がない、友達がいない、周りからの圧力、

期待されすぎている・・・といった、

いつ起こってもおかしくない、そんな状況に対して、

知的障害のある人たちと共にあがいてきたクリエイティブサポートレッツは

これまでアートの子カラでなんとか切り抜けてきました。

今年はそんなレッツと一緒に「生きのびるためのエクササイズ」をしてみませんか？

気軽に参加できるものから、

じっくり思考するものまで、各種揃えて、あなたをお待ちしています。

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ



ひとイン れじでんす

ひとインれじでんす とは？

様々な分野の専門家が、
レッツの運営するたけし文化センター連尺町や
ちまた公民館に滞在します。

知的障害のある人たちと過ごしたり、

スタッフと話してみても、

いったい何を思うのでしょうか。

文化人類学者なら、劇作家なら、編集者なら、
それらの風景はどんな風に見えるでしょうか！？





PROFILE

拠点形成の実践や芸術教育の活動を、演劇の形式を考え可能性を開く様々な作品群として発表している劇作家。1970年生。代表作『東京の条件』『戯曲は作品である』『龍灯祭文』ほか。

第1回
ゲスト

劇作家

岸井大輔 さん

聞き手：久保田瑛

トークテーマ

「共有することは可能か？暮らすこと、共に居ること、」

レッツにあった高い椅子

瑛 「ひとインれじでんす」の第一弾として、劇作家の岸井さんをお呼びしました。岸井さんと初めて出会ったのは2010年頃だったと思います。15年近く、レッツの活動を定期的に観察しに来てくれる岸井さんに今日は、「共有」をテーマにお話いただこうかと思います。

岸井 僕が最初にレッツに出会ったのは、「たけし文化センターBUNSEND（2010）」の前を通りかかった時です。なにか面白い場所があるなと思って入ったら、テニスの審判台とかの高いイスがやたら置いてあったんですね。で、ここは一体なにか、と、その場にいたメガネの男性スタッフに聞いたら、この場所は、たけし君（重度知的障害がある久保田壮さん）がみんなと一緒に居れる場所を作りたいと思ってこうなったんです、と言うんです。意味が分からない。お客さんにお茶を出すと、たけし君はお茶を倒してしまう。

そうするとたけしと一緒にいれない。じゃあ、お客さんがたけしの手が届かない高い椅子に座って、お茶を飲めるカフェを作ったらいいんじゃないかと考えて、あちこちに頼んで高い椅子を集めたそうなんです。ところが、集めた椅子にたけし君は登れるので、高いイスがあっても意味がない。じゃあどうしよう。彼がお茶を倒しにきたら、お客さんは自分のお茶は自分で持てばいいだけじゃないかということに気がついた、というんですね。これでたけし君と一緒に居れるじゃないか、ということになった。集めた高い椅子はもういらない。だけど、面白いから椅子は取ってある、と。

僕は割と日本中の面白い所に行っているんですが、こんな面白い話はめったにないなあ、と思いました。高い椅子が10脚以上あって、でもそれは実は全て無駄ですっていう。頑張って椅子を集めたのに、使っていない。その椅子が普通においてあってその失敗が共有されるカフェ。

瑛 ちょうどたけし文化センターBUNSENDって今空き地になっている場所なんですけど、看板だけ残ってますね。元本屋さんの跡地で、私たちがまだアートNPOで障害福祉サービス事業をやってなかった2010年代時に、スタッフのアーティストがオルタナティブスペースを作った一番最初のきっかけとなるような場所です。そこにきていただいたんですね。

岸井 面白い場所は偶然見つけます。

瑛 それから14年ですかね。今回は岸井さんをお呼びして、私たちが考える「共有」というのを考えたいと思います。

共有は「やること」「話してもしょうがない」

岸井 共有をテーマにいただいて、少し困りました。というのは共有はやること。話すことじゃないんですよ。

例えば、自転車に乗ることを考えてください。自転車の乗り方について訳知り顔に話しても、自転車に乗れなかったら、自転車の乗り方についてわかっていない。じゃあ自転車に乗れる人は自転車の乗り方を説明できるかということ、そんなことはない。

共有はそんな感じです。まず「やること」。実践なので話しても上手くいかないことが多い。

他人と一緒に暮らすことを考えてみましょう。子供のころ、家を親と共有していた。個室はあっても水回りとかは共有されます。面白いのはピカピカな水回りが必ずしも共有が上手くいっているサインではないということです。使われてないのでピカピカということもある。ルールがちゃんと決まっている、というのも仲が悪いからということもある。共有が上手くいっている水回りは、散らかっていて、ルールも不明で、なんとなく嫌な思いはみんなしているけれど、あんまり困っていない、なんてことが多いです。

共有毎に、その共有の何がいい感じなのかは違います。一般化できません。よい共有の方法が一般化できるなら戦争とかはもうないはずですから、正解が全くない。

私たちは何かしら「共有」している

岸井 共有は実践の問題という、自分は共有をやったことがないので、今日の話は自分とは関係ないと思うかもしれませんが。ですが共有をしていないということもあり得ないんです。例えば道路とか空気とかを私たちは共有しています。今日はトークイベントですからトークを共有できる前提でそこにいらっしゃいます。共有しているものは沢山ある。

じゃあどうやって共有しているの？なんであんまり困らずに共有できているの？といわれても上手く説明できないと思うんですよ。上手く説明はできないけどみんな何かしら「共有」はしています。

私たちは何かしら「共有」している。そして共有は個別的で、やることで、一般的に説明してもしょうがない。なら話す必要は

ないのかというともいきません。

というのは、共有が上手くいかないときになされることこそ「話し合い」だからです。というか、よく考えてみると、人間がかかわる問題のほとんどは共有の問題です。なので「共有について話せ」といわれても困るわけです。あまりにでかく、具体的で、繊細。

ドラマとは共有の失敗

岸井 とはいえ僕は劇作家なので「共有」に興味があります。というのはドラマとは「共有」の失敗のことなんです。ドラマでよく描かれる、夫婦喧嘩とか殺人事件とかは全部共有のトラブルでしょ。共有がうまくいかない当事者には誰もなりたくないけど、他人の共有の失敗を見るのは楽しいんですよ。

瑛 リアリティショーとか複雑なドラマですよ。

岸井 共有がうまくいかない状態を作ればドラマになってしまふんです。劇作家である僕はいつも共有をリサーチしているといってもいい。しかも共有を、面白いかつまらないか、かっこいいかわるいかの観点で見ている。

ドラマの専門家はいろいろいます。演劇は、ドラマを身を寄せ集まって共有する。演劇は共有の失敗を共有するんです。

「装置」で考える

岸井 今日は、共有を「装置」で考えるというアイデアを提案します。舞台装置とかの装置ですね。装置は「共有をいじる」ときに便利なんです。

共有について、実践の中で考えようとする、掃除が雑だとか、感謝がたりないとか、態度の話になりがちです。演劇でいうと、演技の良し悪しの話になる。そうすると人間から切り離せないで喧嘩のタネになってしまうし、変更が難しいですよ。ところが装置は人間と切り離して考えることができます。装置で考えるとうまくいきやすい。

「装置」はいろんな意味で使われる言葉です。福祉施設の制度、法律とか仕組みも「装置」と呼ばれることもありますね。今日は「装置」を広く捉えてみます。

瑛 文化やルールに近いもの、あらゆるものが装置化されているってことですね。

岸井 そうです。装置は、どこかに何かが配置されることで誰かの振る舞いに影響を与えます。例えば今トークイベントを始めるときにイスを並べましたよね。で、皆さんが座る。特に共有について考えずにできたと思うのですが、だからこのトークは共有される。イメージを考えたりするより、設置されている装置を考えた方が実践的です。人間は、他人と共有する時、いろんなものを装置にします。福祉施設は装置でできているといっていいいでしょう。

夏目 逆に装置じゃないものってあるんでしょうか？

岸井 基本、万物は装置であるでいいと考えていいと思いま

す。私たちは全てを装置扱いして共有しようとしている、それが人間の条件でしょう。

ただ、装置と捉えると、一つ一つの共有を取り出して考えやすい。イスも部屋も浜松もレッツも法律も装置ですが、装置としてみることで一つ一つの共有を考えやすい。だから装置は実践的に使うとよい言葉だと僕は思う。

たけしは装置を認識できるのか

レッツ久保田 私たちは装置を認識できるけど、レッツの利用者さんやたけしとかはそもそも装置を認識できないと思うんですよ。

岸井 いえ、そう思いません。それが装置と捉えるよさです。というのも、階段とかイスと認識していなくても、そこにモノがあればぶつかったりよじ登ったりしますよね。装置は共有されてしまう。むしろ、たけし文化センターは、装置で考えるよい例だと僕は思う。福祉施設が多様な人たちと、いろいろ経験してきた結果、モノが具体的な場所に配置され、利用者さんとも共有している。

久保田 こちらは心地いいかどうかは全然わからない。こちらが思っている装置を提供していても、どんどん上書きされて、上書きされるとそれがそのまま残る。そしてまた上書きされます。残って欲しいかというそうではありません。

岸井 装置は誰かが提供したものでもないし、誰かが納得したものでもない。ただの具体的なモノがなんとなくそこにあって共有されている。

久保田 誰にとって心地いいかもさっぱりわからないです。

岸井 共有されているかと、心地いいとは別ですよ。装置が共有されているのは結果論。特に誰もそれがいいかは考えていない。現状使い勝手がいいだけでしょ。

久保田 使い勝手が良いところに落ち着いてるのかもどうかよくわからないんです。

岸井 そうですね。落ち着いているかはよくわからない。それも「装置」のいいところじゃないでしょうか。建設とか施設と違って、装置には仮設というニュアンスがある。だから変更も比較的容易です。

心地よさとか残したいとかで共有を考えるとレッツでは使えないんじゃないか。でも装置ならどうか、というのが僕の提案です。装置は共有の現状をとらえるだけです。装置を見ることで、共有が思考可能になるんじゃないかと思うのです。

久保田 同意は取れてるのかとか。

岸井 同意は関係ないんですよ。装置には誰も同意していない。

久保田 みんなが困っていないだけ？

岸井 そうです。いいとも思っていない。共有されてそこにあるだけ。

共有されているものの一つに慣習があります。右側通行とか。

同意した覚えがないですし、心地よくもない。なぜ日本で歩行者が右側通行かというそれで誰も困っていないだけです。

ただ、慣習は変え難い。慣習に問題があったら修正がききません。明日右側通行をやめるといわれても困る。

ところが装置にはそれができます。動かしたり壊したりすればいい。共有を変更する可能性がある。共有を考えるために装置を提案したい理由です。

まず、共有を装置で考える。次に共有のトラブルを装置の変更で考える、ということですね。

共有を変える・1「揉める」

岸井 レッツはいつも新しい共有の形を探っていると思います。そこで今日は共有の変更に参考になりそうな思想を三つ紹介します。

一つ目はジュディス・パトラーの『ジェンダートラブル』から「揉めろ」というアイデア。障害は、何かトラブルが起きた時に「あれは障害だ」と言われることで決まる。つまり障害は共有の問題です。共有といっても、DNAや身体能力的とかの能力で定義されるのではなく、その都度のパフォーマンスにおける共有。そのように障害を考えるなら、障害の問題を解決したり変化させたりするなら、もう一度出会うって共有しなおすしかない。これは、揉めた出合いをやり直すということですから、当然揉める可能性は高い。でもトラブルを避けては問題は先送りになる。だから、パトラーは「揉めろ」と言います。1990年代にこの本が出て、そうか揉めたらいいんだ、と大きな影響を与えました。

瑛 社会に出よう、みたいな。

岸井 そう。開かれた福祉のことですね。揉めることこそ重要。硬直した共有をどうにかしたい時、話し合いとかじゃなくて、揉めるとよってことです。

瑛 どういう状態が揉めることですか？

岸井 僕の読みだと、関係者の変容・変身が避けられなくなるまでいくのがトラブルですね。

久保田 ああ、わかる。変身を強要される。揉めるってことですね。家族においてわたしは変身をいつも強要されていて、常に私が変わるしかないんだなって思います。

岸井 変身は自由の侵害ともいえます。でもパトラーは自由という代わりにトラブルと言っているとも解釈できます。というのは揉めるってことは互いに違うのに一緒にいるってことですからね。そこには自由がある。

共有を変える・2「ケア」

岸井 パトラーがジェンダートラブルを書いて30年。パトラーの提案は多くの人を救ったと思います。僕も救われました。でも揉め続けた結果単に共有が崩壊しただけのこともある。分断ですね。

それで、最近流行っているのはケアです。人間は存在している限りずっとケアしていると考えたのがハイデガー。他人とともにある世界をケアしているわけです。心を配る。

ハイデガーは世界を配慮されたものである道具の連なりで見えています。そしてどの道具も他人もケアしている。この考えだと世界を変えるのはとても困難ということになりますが、共有されているものを丁寧に扱うことができます。ケアすることで共有されているものが芸術にさえる。

共有を変える思考・3「装置の芸術」

岸井 ボリス・グロイスという影響力の大きい美術批評家が最近『ケアの哲学』という本を書きました。ケアでアートと哲学の歴史を語りなおそうという野心的な本です。そこにはいくつかの提案がありますが、ケアを寛容させるものがこそが芸術と言っているとは僕は読みました。

で、最近芸術では装置がはやっています。インスタレーションとかリアル脱出ゲームとかARとかVRとか。装置を改変する芸術。そうすることで変な共有、面白い共有を作り出せるし、共有の失敗さえ楽しめる。

現状共有を変えたい場合、揉めて変身するか、ルールや仕組みをケアするか、アートとして装置をつくるかがあるんじゃないか。

瑛 レッツが行っているプロジェクト「かしだしたけし」は集団で全くお互い知らないような場所に行ってみて、そこで起きるトラブルを、お互い楽しんでみるみたいなことはなんとなくトラブルと変身の話に近いのかなと。そしてどちらかという、相手が変身してもらうことを願っている。観光もそれに近いかなと思います。

〈質疑応答〉

ケアの詩・トラブルの批評

来場者 ケアは、装置を変えられるんでしょうか？トラブルがあった時に結局ケアをするというのはトラブルの前に戻るだけじゃないでしょうか？

岸井 そうですね。ただ、ちゃんとケアすると、共有されている装置に触れていきます。そのとき、共有はルールでなく詩になるとハイデガーは考えていると思います。ケアによって、共有を芸術として捉えるという変更はかけられるかもしれない。

来場者 個人的なことなのですが、実際トラブルが大事と思う気持ちと、でもトラブルばかりだと疲れて戦いたくないという気持ちがあります。体力がないから戦いたくないけど、ケアの気持ちを持ちうる限り日々起こ

る戦いがあって辛いことがあります。

岸井 パトラーで重要なのはトラブルを抱えた同士の連帯ではないでしょうか。各自のトラブルは異なるんですが、世の中から排除されて傷ついているという意味では連帯してしまう。連帯しなくても、それぞれが揉めていくことで世の中が変わっていく。

また、トラブルで考えるときに、批評は不可欠だと僕は思う。僕は渋谷ハロウィンを見て、パトラーを思い出しました。ハロウィンってキリスト教によって抑圧された妖怪たちのパーティですよ。参加者は顔に傷をつけたりして、バラバラに街にでていく。それぞれが勝手に集まるし、中心になるメッセージもない。でもおそらく、世の中に居場所がない人が多く集まっているんじゃないでしょうか。トラブルが集まる。あれこど開かれた福祉であり、無為の共同体でしょう。

僕の知る限り、パトラーの専門家が誰も渋谷ハロインに言及していないと思います。これは僕の見立てが的外れなのか、トラブルをキャッチできる批評が機能していないかのいずれかだとおもう。

日本でトラブルが大事という活動をしていったときに、重要なことだと指摘する人が不足しているのかもと思います。

自分なりの装置に変えていく

久保田 傷ついたことを誰とも共有できないけれど自分なりの装置に変えちゃうって言うのは方法としてはありますよね？私のやってることはそういう活動だと思っている。怒りからしか活動は生まれなくなつて常に思っている。怒りを怒りのまま表出したところで、誰も幸せになれないし、批判されて終わるのであれば、装置というか、違う形にして出しちゃう。それを今まではアートって呼んでたけれど、でも今日の話では装置ですよ。

岸井 アートでいいと思います。ただ装置の方が広く考えられると思いました。つまりアートっていわなくてもいい。変な装置



とかおもしろい装置でよいかな、と。

久保田 個人的に頑張って装置化し続けているだけな気がする。

共有されている装置

瑛 もうちょっとレッツの場づくりとか今やっていることと引き寄せながら話そうと思います。このトーク会場のちまた公民館はある種の装置をこれから作っていかなきゃいけません。2年間やってきて、共有することがいかに困難かっていることを思っています。ハッピーの家ろっけんが、「トラブルが2つだとその2つに集中しちゃうんだけど、トラブルが3つ以上だとどうでも良くなっちゃうから、3つ以上持ち込もう」みたいなことを言っていて、それがすごくいい話だなと思っています。ちまた公民館でも混沌としようと思っはいるのですが、実際に混沌としたら混沌としたで難しい。単純な衝突で終わり、硬直した関係が続いてしまったり。

トラブルを起こしたときに、気にしなかったり強い人しか残らないみたいな、荒野になりませんか。どんなスペースにも言えることだと思いますけど、ある種配慮があったり身をひいたりトラブルが苦手な人はどんどんいなくなっていく。

岸井 フリーライダー問題ですかね。「共有ってことはこのものは全部自由に使っていいんですよ」って共有物が使えなくなるまで消費して壊しちゃう人のことです。

久保田 むしろ壊しちゃうっていう手もありますよね。大体関係性も場も硬直していく。そうした時にその人たちだけのものになってしまう、そうでない人が排除されてしまうってことが起こったら壊せばいい。そうするとまたガラッと場所が変わる。それってケアと逆の方向になるけど、変身を促進するかもしれない。その人たち自身が変わるチャンスかもしれない。他の場所を探す動機にもなるし悪いことではない気がします。

岸井 人を入れ替えかわり、継承や記憶が消えても、土壌とか根っこだけ残るのが大事です。ドゥルーズの言うリゾームですね。

いまの会場のちまた公民館は「たけし文化センターインフォラウンジ」「黒板とキッチン」という場所の跡地でやっている。あのかの雰囲気も人も記憶もないけど、耕された土壌だけが残されていると感じます。

久保田 そう、「黒板とキッチン」も悩んでたんですよ。同じような人たちがやってきてその人たちだけのスペースになっていく。でもそこで一回ケアされたっていう体験もある訳ですよ。その体験があればいいと思う。ある日突然出ていってと言われたとしても、なんてひどい奴らだっていうかもしれないけど、でも一回認められた経験もあるから、やっぱりじゃあ次ってなるかもしれないし、ごめんなさいちょっと気をつけますっていうふうになるかもしれない。変化は起こすしかないと思うんですよ。そこを怖がっていると、場はどんどん硬直して、

結局働いている人もつまらなくなるっていう。私今日の話を聞いて、それでいいんだなって、気をつかわなくていいんだなって思いました。

その時に、重度の知的障害者の人たちってすごいんですよ、一気に場の硬直を壊してくれるから。誰も彼らを排除できなくなる。ちょっとこの人たちに意地悪できないってなる。ここはこういう場所かっているのを見せてくれる。

岸井 僕は、レッツは、豊かな土壌が装置の形で継承されているんじゃないかと思うんですよ。

意図的にできない「装置」

瑛 岸井さんがいろんなスペースを見られて、秀逸だと思った装置ってありますか？

岸井 それが、最初にはなしたたけし文化センターBUNSENDOです。無意味な高いイスは、今のレッツにも装置となって機能していると思う。レッツには無意味な高い場所が必ずあります。でも高い椅子のことはだれも覚えてない。共有が意識されず残っている。これを装置じゃないですか。

久保田 たけしがいられる場所を作りたいって思いがあって、一般の人もお茶を飲みに来て欲しいって思いがあって生まれたもの。

岸井 なんでレッツがいい例なのかというと、あの高い椅子は役に立ってない訳ですよ。ただ、そこにいる人がお茶を持ち上げるだけでいいことに気づいたんです。そしてそれを話す時の舞台装置として「無意味な高い椅子」があり、「無意味な高い場所」が残ったんじゃないか。

このトークをうけてあとから文章をかくことになっているので、この話詳しくは文章にかきますので読んでくださいー。

共有のトラブルを共有する

来場者 そもそも共有している前提であるっていうのは思ったことがなかったので、ちまた公民館に来る人はそもそも誰かと共有しようと思ってきているのか、という考え方自体が違っているのかなと。

岸井 そうですね。今日は共有の話をしよということだったので、共有の話をしました。

でもだれでも空気とか道路とか何かは共有しています。でも何を共有しているかを捉えるのは難しいし変な共有は忘れられがち。

私は共有のトラブルを面白く共有するということに興味があるんです。劇作家ですから。

瑛 岸井さんありがとうございました。

日時：2024年8月3日(土) 17:30～19:00
会場：ちまた公民館

寄稿

レッツは「あそびのある物体」をつくり続けている

文：岸井大輔

僕は毎年浜松に行っていました。レッツを観光するために。2009年からです。コロナで中断していたので今回は4年ぶり。

福祉施設はまず近隣の人権のためにあるわけで、レッツを観光するときはまちから観ることにしています。浜松は大企業が強いですが小さな名店も多い。天錦もララカレーも幸楽もTHINKも健在。コロナは全国的に個人商店を根こそぎにしたので少し安心しました。新しいカフェや服屋や酒場もいくつもオープンしていて元気な個人はたくさんいるようです。とはいえ閉店した店も多い。駅前の新しいタワーマンションが象徴するように貧富の差の拡大をあちこちで感じました。

レッツはいまや福祉施設として全国的に高い評価を得ていると思います。15年前は、ほとんど理解されない集団だった。隔世の感があります。でもレッツは達成したという顔をしません。利用者さんが普通にいられるように「世界を変えたい」というからでしょう。レッツにいついっても、次どうしようか、と考えています。

2009年にはじめてレッツと会ったときのことを思い出します。別の仕事で浜松のゆりの木通りを歩いていました。ナゾのミセがありました。多分カフェ。でも端っこで木工をしている人とか、カフェではやりえないことをしている人がたくさんいます。何よりナゾなのは、テニスの審判台とかプールの監視椅子とかがたくさんあることです。2メートルの高さの椅子が20脚ほどある。そこにいるヒゲと眼鏡の男性に「あの椅子はなんですか?」と聞きました。

「あそこにいる、たけし、わかりますか。」

見ると、紙を粉々にしている男性がいます。

「たけしは飲み物が入っている器があると倒すんです。私たちは、たけしが他人といっしょにいることができる場所をつくりたい。フラッと来る訪問者とたけしがいっしょにお茶を飲めたらいい。そのために、たけしが登れないところでお茶をしてもらえばいいんじゃないかと考えました。で、背の高い椅子をもらってきたんですよ。小学校とかプールとかテニス場に頼んで。」

なるほど、お客さんが高さ2-3メートルのところでお茶をしているカフェをやる予定だったわけですね。でも誰も高い椅子でお茶をしていません。普通に机でお茶をしている。

「そうなんですよ。たけし、この椅子登れるんですよね。」

あー。

「でも。お茶をしていて気が付いたんですが、たけしが来たらこうやってコーヒーを持ち上げたらいいんだ、と。そしたら、たけしと一緒にいれるな、と。」

なるほど?じゃあ、このイスはもう意味がない?

「意味がないんです。」

僕はお茶をしている4人の人と、20脚の背の高いイスを見て、声をあげて笑い、コーヒーをもらうことにしました。そして、このなんだかわからない人たちと関わりたいと心から思いました。

さて、この文章を読んでいる人は、重度の知的障害者とされる「たけし」といっしょにいるのがレッツの変わらないコンセプトなことを知っていると思います。そんなレッツにとって「コーヒーをちょっと持ち上げる」は大発見でしょう。それだけで、誰でもた

けしとお茶をできるようになったのですから。そんな簡単なこと、と思うかもしれませんが、高いイスをもらい集めているときは誰も気が付かなかった。それが実践の面白さです。

僕は「意味のない高い椅子を残してある」のは重要だと感じました。でも何故でしょう。上記のような会話が起きるからでしょうか。いや、高いイスなんかなくても、この経験は共有できるでしょう。「悩むよりまずやってみないとわからないことがある」とか「失敗の意味を変えるマインド」とか「たけしに徹底的に寄り添おう」とか。でも、こんな話で納得するより、高い椅子がいっぱいある場所でお茶を持ち上げたほうが楽しいですね。僕はこの楽しさを「あそびがある」と呼びたいです。あそびには、隙間とか無駄とか無意味という意味もある。レッツはいつも「あそび」だらけです。マインドや現場の行為だけでなく、そこにおいてある物体に「あそびがある」。

「あそびのある物体」のあそびはエピソードを知らない人とも共有されます。高いイスがあれば登って遊ぶ人がいる。たけしも。高いイスに登るのは危険？そうですが、これもコーヒーを持ち上げるのと同じです。誰かが見ていればいいんです。

さて、レッツは何度も引っ越しました。引っ越すたびに「意味のないちょっと高い場所」をつくります。例えば、入野のたけし文化センターは、個室の上に登っていけるようになっていました。僕は「テニスの審判台ですね」と言ってレッツのスタッフさんと笑いあいました。連尺町に2018年にできた今のたけし文化センターにも、高い場所がつくられます。入るとまず、階段とかロープとか高い場所で何かをしている人が目につく。この建物は、リノベーションではなく、設計して0からつくったわけですから、高い、少し危ない場所があるのは、レッツの狙いなのです。もはやスタッフのほとんどが、2009年に高いイスを集めたエピソードを覚えていない。でも、あそびは継承される。そして「意味のない少し危ない高い場所」がある限り、コーヒーをちょっと

もちあげる文化も継承されると僕は思います。

レッツには、というか福祉には、常に現場と理念があります。この2つをレッツはとりわけ大事にしている。そのため、会議は常にまとまりがなく、なんの結論もでない。解決していない問題を解決しないままに扱うのはとても重要なことです。でもレッツに進捗がないわけではありません。レッツは記憶を継承し、出来事を積み上げてきました。それはあそびのある物がたくさんあり、継承されてきたからではないか、と僕は推測します。

入野のレッツの職員の仕事スペースはペンキで塗られていない木で作られていました。スタッフのいる空間と利用者さんのいる場所に質的な差がないのです。スタッフのいる場所と、「意味のないちょっと高い場所」が地続きで、遊び場の中で仕事をしているようでした。利用者さんはスタッフルームぎりぎりまで入ってきますし、スタッフも利用者さんを見ながら仕事をしています。

そんな入野レッツがオープンしたばかりのころ、アーティストの深澤孝史さんが、オーダーに答え木工をするプロジェクトをしました。利用者さん、父兄、スタッフのオーダーに答え、イスやピストルやタナや人形などが木でつくられ、レッツに置かれています。元から遊びに満ちた木工空間ですから、このプロジェクトで新たに作られたものと、元からあるものの区別がつきません。「あそびのあるもの」は、一度場に登場すると、そこにいる全てが遊びます。スタッフ・利用者さん・外来者関係なく。動物も遊べますし、非生物の物も遊びでおけます。使用目的が決まっている物、例えば道具では、そうはいきません。「あそびがあるもの」は初めから目的があまり決まっていないので、誰でも遊べるのです。そのおかげで、レッツにある、半壊した楽器も、ふとも、たたみも、全て遊具に見えてきます。深澤のプロジェクト終了後も、レッツにはあそびがつくり足されていきます。利用者さんがつくったもの、イベントでつくったもの。レッツは遊ばれつくり続けられる

巨大なおもちゃのようです。

いま、ちまた公民館があるところに、昔、インフォラウンジがありました。市街地の駐車場の1階。常駐のスタッフ2人と、送られてくるチラシしかない場所でした。チラシがたくさんある場所、というのはまちづくりではすでに定番でしたが、インフォラウンジは、それをクリアファイルにおさめハンガーに釣っていくという道具を開発したのが画期的でした。平たく並べると面積を取るので片づけねばなりませんし、本棚だと探して取り出すのが手間です。インフォラウンジに立ち寄る人たちがチラシを適当に見ます。

このチラシのラックが画期的なのは、終了したチラシも手に取ることができることでした。一見無駄に見えますが、終わったチラシからでも活動している団体や人の情報を得ることができます。まちでの活動は積みあがらずに消えていくことも多いのですが、ラックがあるだけで情報は残る。そこから会話が生まれまちでの具体的な活動が発生する。それも本は、遊びのあるモノを残していく精神から来ていると思われます。レッツのDIY精神は、インフォラウンジからのヴァー公民館へとうけつがれ、展示やイベントのたびに何か新しくものが作られ、過去に作られたものが使われたりしました。手押し車にテレビが置かれ、本が作られ、梯子が組まれる。インフォラウンジにあったハンガー式のチラシラックも違う用途でレッツに残って現役で使われています。

さて、最近のレッツといえば、利用者さんとの買い物に同行できる観光です。スタッフさんと利用者さんとコンビニにいて、買い物をする。利用者さんがどうしても欲しい物と、残っているお金や、スタッフの愛情（チョコレートだけを夕飯にするのはちょっとなあ、、、）の葛藤がおきる。レッツを訪れた人はそれに同行します。最近のレッツはこの経験をなんとか物体にしようとしているんじゃないか、と思います。それがたとえば「マイ「ベッド」タウンをつくろう」ではないか。



たけし文化センターBUNSEDOの高いイス

浜松市中心市街地、更地となった松菱百貨店跡地の一角に、自分達の「ベッドルーム」を複数こしらえて、それぞれ思い思いに過ごせる「ベッドタウン」を作ってみよう！

半分プライベート、半分パブリックのような感覚で、ベッドルーム作りや、さまざまな活動をしてくれる人（ただ寝るだけでも含む）を募集します！（オン・ライン・クロスロード2022 チラシテキストより）

レッツに久しぶりに登場したアーティストの深澤さんのプロジェクトです。こうしてまちに仕込まれたベッドが、ちまた公民館やレッツの意味を変えます。意味というより、遊ばれ方といったほうがいいかもしれない。レッツは寝ていいし、生活してもいい。ここは福祉施設でも、一時的な居場所でもない、街中のベッドルームでもありうるのだ、と。レッツが中心市街地に連尺町のレッツよりも大きな建物を計画しているという夢物語をききました。それは、街中に常設されたベッドルームでした。

レッツは知っているのです。おもちゃが楽しければ捨てられることはなく延々と影響を与えるということ。それは理念でも実践でもなく、ただのおもちゃです。すぐに効果が出たり、意味がわかられたりすることはない。でも、世界を変える。

「世界を変える、あそびのある物体」とはアート作品の定義のようなものです。レッツはここきて、ますますアートのNPOになっていると感じました。



第2回
ゲスト

文化人類学者

松村圭一郎さん

聞き手：夏目はるな

PROFILE

岡山大学文学部准教授。所有と分配、海外出稼ぎ、市場と国家の関係などについて研究。著書に『所有と分配の人類学』（ちくま学芸文庫）、『うしろめたさの人類学』（ミシマ社）、『くらしのアナキズム』（ミシマ社）、『はみだしの人類学』（NHK出版）、『小さき者たちの』（ミシマ社）、『旋回する人類学』（講談社）、『人類学者のレンズ』（西日本新聞社）など、共編著に『文化人類学の思考法』（世界思想社）、『働くことの人類学』（黒鳥社）がある。

夏目 今年レッツが実施している「生きのびるためのエクササイズ」というプログラムの枠で松村さんをお招きしています。私たちは、様々な困難や苦しい状況に遭遇したときに、ファイトの姿勢ではない形で立ち向かえないかということを昔からやってきたので、今回、その参考になりそうな方のお話を伺ったり、自分の居場所や人との繋がりを作っていく活動をしたりしています。「生きのびるためのエクササイズ」の中の「「見えかた」をふやすエクササイズ」では、いろいろな研究者やアーティストに来て滞在していただいて、その方の見え方で考えていただいたりスタッフと話していただいたりしています。「生きのびるためのエクササイズ」には「生きること、暮らすこと、過ごすこと、出会うこと」というサブタイトルがありまして、これをキーワードに私たちはプログラムを実施しています。そういう意味では、主にエチオピアをフィールドに、人間の様々な「生きる」現場に立ち合って、暮らしを見つめてきた松村さんにいろいろなお話を伺えるのではないかなと思って呼びました。今日は「人類学から見る家族の形 〜カテゴリーを溶かすために〜」というテーマで、まず

は「家族」というところからお話を伺えたらと思います。よろしくをお願いします。

人類学一想定していなかった生き方に気づく

松村 はい。よろしくお願いします。人類学ってどういう学問かとよく聞かれるんですが、「生きることを考える学問だ」とティム・インゴルドという人類学者がズバツと言っています。「どう生きるかを考えることが人間を人間にする」という書き方をしています。それを考えることを宿命づけられている存在が人間なのだと。それをどう考えるかというときに人類学が手がかりにしたのが、馴染みのある身近な人だけではなくて、知らない生き方をしている人たち。その人たちの生き方を教えてもらって、自分が想定していた選択肢に収まらない生き方もあることに気づくことから考えていくのが人類学のスタンスなんですね。

フィールドワークのはじまり

松村 そこで私が触れてきたのが、エチオピアの南西部にあ

るジンマ県というコーヒーの原産地として知られているところです。私は最初、コーヒーの調査するつもりでその村に行っただんですけど、コーヒーのことはあんまり面白くなくて、村の方で調査を始めました。

子どもを育てるのは親だけではない

松村 村で生活しながらいろんなことを研究していくのが人類学なので、当然いろんなものが目に入って来ます。今、生後数ヶ月の赤ちゃんの写真を見ていただいているんですが、この赤ちゃんが家の居間に一人ボンと置かれているんです。母親は何をしているかというと、ご飯作りや洗濯などで忙しくしているんですね。これ、どうするのかなと思っていたら、近くでサッカーをしていた従兄弟のお兄ちゃんが入ってきて赤ちゃんを眺めている。でも飽きたらいなくなってしまう。そうするとその辺で世間話をしていた近所のおばさんがやってきて、その赤ちゃんをあやしたりする。お母さんは時々帰ってきてお乳だけあげて、またボンって置く。「そうか、子育てって別にお母さんだけでやってるわけではないんだな」と思ったんですね。それに、私もそこにいるので、誰もいなくなったら私の番です（笑）。家と家の間は一応区切られてはいるんですけど、いろんな人が敷地の中をショートカットの道として通るんです。近所の人に来て一緒に女性同士でおしゃべりをしながらコーヒーの選別をしたりもする。家の敷地の中に近所の人や通行人、親戚の人とかいろんな人がいて、赤ちゃんを置いておいても、誰か手の空いている人がちゃんとケアできる状況にある。これだったらお母さんも他のことをできるし、こういうのがないから日本のお母さんは大変なんじゃないかと気づくわけですね。誰がいつその子を見るか決まっているわけではなく、いろんな人の目で見守られて子どもが育っていく。

誰のもとで育つかを子ども自身が選ぶ

松村 エチオピアで家族と生活したり、家族を訪ねたりすると、子どもが一体誰の子どもなのかわからないことがよくあるんですね。子どもたちが同じ家で寝泊まりしていても兄弟ではなかったり、父親が違ったり。1930年代とか1940年代生まれの人の結婚歴を聞くと結婚と離婚を繰り返していて、その度に子どもが生まれている。子どもを母親の実家に預けて、そこにいろんな夫との子供がいることも結構あって、そういう意味で家族の構成が複雑なことがあります。ある子がある家でずっと一緒に生活しているから、当然その家の子ともだちと思っていたら、親戚の子ともだったこともよくある。どうということ？って思うんですけど、子どもがどこで寝泊まりするかは子どもが決めていいらしい。例えば、子どもがよその家で遊んでいて日が暮れて、そのままご飯を食べてその

家で寝るとするのは当たり前。そのように親戚や友達の家に1日2日泊まることも普通にある。7-8歳の子どもでも、親と喧嘩したから親戚の家に行くと言言してずっと帰らないこともある。子どもがそこで生活をしたいと言ったときに、「そこはあなたの家じゃないでしょ」と止められない。直接の血縁関係がない子どもと一緒に生活するんですね。最初は結構驚いたんですけど、人類学的にはよくある話なんですね。ブッシュマンの研究をしている丸山淳子さんも、子どもがどこで人生を過ごすかは子どもが決めると言っています。誰が子どもを面倒見るかが決まっておらず、誰の子どもとして子どもが育っていくかも全然固定していない。それをある程度、子ども自身で決める余地がある。それは珍しいことではなくて、世界的に見ると結構いろんな地域で行われているんです。

子どもは父親と母親のものという常識を問う

松村 日本でも昔は、家を絶やさないために親戚の子などを養子に迎えることがよくありました。それは子どもの決定というより大人の事情が強かったと思いますが、でもそれが広く認められていたのは、そもそも子どもは生まれてくるお父さんやお母さんだけのものではなかったからです。だから、その子がいるところがその子の家族になるんですね。有名なマリノフスキーという人類学者が1920年代に書いた本でも触れられていますけど、ニューギニアのトロブリアンド諸島では、お父さんの存在は生物学的に子どもが生まれることに何の寄与もしていないと考えられていたと言います。子どもはお母さんの血から生まれる。母系社会ですね。母親からその子どもにその家の血筋グループが引き継がれているため、母親が大事になるんです。

私たちにとって、子どもは父親と母親がその第一の責任を持つし、子どもが意思決定ができないときは両親が代わりに意思決定をする。それを常識と捉えているかもしれませんが、それはもしかしたら私たちにとっても、世界的に見ても、実はすごく例外的な捉え方かもしれない。日本で児童虐待のケースが絶えない背景には、私たちが家族をどう認識しているのか、子どもは誰が面倒を見るべきと考えているのかという、大多数の人が抱えている「常識」が関係しているのかもしれない。つまり、虐待事件に私たちは全く加担してないわけではない気がするんですね。もう一つは、家族の中で起こっている問題を隣近所の人知ることができない。日本では、家族で問題が起きたら家族の中だけで処理することを求められたり、周りの人が助けてくれなかったり、周りの人がそれを知る余地もなかったりする。

問題を抱えた人のケアは制度の問題ではなく 周囲の人との関係の問題

松村 私の『うしろめたさの人類学』という著書の中で触れているのですが、エチオピアの村でも時々精神を病んでしまう人がいるんですね。このアブドという少年もしばらくおかしくなって、頭にオレンジ色の紐を結んで棒を持って集落をフラフラしていた。でも家に入ってきたら「ご飯を食べていきな」と言われたりして、彼が今問題を抱えていることをみんなが分かった上でケアをしている。つまり、閉じ込められてないんですね。近くに精神病院もないので、普通に村で生活をするんです。ある時、彼が村の一軒の家を燃やしてしまう事件があっても、誰も警察に通報するわけでもなく、「彼は今問題を抱えているから仕方ないよね」ということで、彼は普通に生活をしていく。そのあり方は日本ではやはり難しいですね。エチオピアでは自由に歩き回れることがすごいし、自由に歩き回った先で何かしら手が差し伸べられる。例え大人でも、問題を抱えていたら集落の人が何かしら気にかけている。

数年後に村にまた行って、とうもろこしの収穫作業の写真を撮っていたら、アブドがいて、回復していたんです。村の人は、それは驚くほどのことではないという様子で、誰でも時々精神を病んだり元気になったりするものだと言います。人間が常にまともで健康でいられるとは思っていない。何か問題を抱えた時はみんながそれを分かって、みんなで会議や周知をするわけでもなく、当然の常識として、集落の仲間として対応していく。

日本だと家族とか何らかの施設とか専門的な機関が問題を抱えた人に対処することになっています。他の人はその人に直接手を差し伸べる機会もなければ、その問題を抱えていることすら知らないまま過ぎてしまう。エチオピアの生活を見ると、私たちが生活保護や民生委員などの制度の問題と考えてしまうものも、むしろ日頃から周囲の人とどんな関係を築くかという問題だと気づかれます。

エチオピアでは問題が可視化される

松村 エチオピアでは、問題が起きた時に周囲の人が関わらざるを得ない関係がある。問題を持っている側も表沙汰にするし、周りの人もそれを無視できない。『うしろめたさの人類学』では、アジスアベバという大都会の大通りの歩道に突っ立っているおばあさんの話を書いています。足が不自由なのであまり動き回れないのですが、通行人にガッと手を突き出す。いきなり手を出された若者は、最初は驚いて怪訝そうな顔をするけど、おばあさんの容貌を見ると、なんか渡さざるを得なくなって、「しょうがないなあ」という感じでお金を少し渡すんです。このように、問題を抱えている人がこの世の中で問題が

あることを声に出さなくても、表沙汰にしている。堂々と「困っているから助けて」と表明できる。周囲の人は慈善の心で助けるのではなく、見てしまったら助けざるを得ず、問題解決に巻き込まれていくんです。

日本では問題が内に閉ざされる

松村 日本は先進国と思われているので、問題があるとはエチオピアでなかなか理解されない。その理由の一つは、日本は豊かな国だから、豊かなものはみんなで分け合ったら、貧しい人にも最終的には行き着くと思われてしまう。でも実際は行き着かないですね。一つは問題が内側に閉じ込められているから。もう一つは助けたいと思う人がたくさんいても、手を必要としている人の存在が周りに見当たらない。

なかでも一番、問題を見えにくくしているのが家族。「家」が外に対して閉ざされてしまっていることで、問題を抱えているのか、今どういう状況なのか周囲には見えない。例えばいろんなセクターの役所の人員を増やしたとしても、めちゃくちゃ増やさないと、すべての家庭をモニタリングするなんて不可能ですね。一番簡単なのは、近所の人がある程度状況を把握できる関係が日頃からできていれば、コストをかけて制度を作ったり人員を配置したり権力を使ったりする必要もないんですね。日本でも少し前までは家は閉ざされた環境ではなくて近所の人に開かれていたけど、今はプライバシーを確保する家庭のあり方を作っている。でも、家が閉ざされることである種の心地よさを私たちは手にしたと同時に、起こっている問題に対処するための関係性を失ってしまった。そういうことをエチオピアの家族のあり方を見ていると痛感します。その背後には、家族はこういうものだという常識、父親と母親、血縁関係で結ばれた子どもで構成されるものだという見方にとらわれてきたことがあると思います。

人類学は「いろんな見え方」 「別の生き方の可能性」を捉える

松村 そのように視野が狭まったときに、まさに「見え方をふやす」。人類学では、私たちは生きることとはどういうことかを考えるときに、いろんな見え方、家族ってこうでなくてもいいよね、多分こうでないあり方を実践している人が世界中にはたくさんいるし、私たちも別のやり方をしていたかもしれない、と考える。その中で、別の生き方の可能性を捉えていくのが人類学の視点です。

現代の日本社会における家族の別のあり方

夏目 家族のことを現代の日本でそういうふうに使われても、プライバシーのことがあって、なかなか問題を可視化でき

ない状況です。

松村 だから、そこで新たな形を考えないといけません。そのときにやっぱり、家族を別の形、つまり単に血縁だけではなくて、別の人が関わる家族の形を考えないといけません。そのヒントがレッツにあると思います。

夏目 松村さんがこうすけさんという利用者さんに、私を指さして「この人は家族ですか？」と聞いていました。つまり、障害のある利

用者に対して、いつもスタッフはケアをしているわけですけど、ケアをしている私はこの人にとって家族かと松村さんが聞いたんですね。私は障害者福祉施設の利用者を子どもだとは思わないし、ましてや彼が私を家族だと思っているかは分かりませんが、少なくとも、ケアをしてくれる一人だとは思っているかもしれない。ケアするという意味では、さっきの「家族」、一つ屋根の下でご飯を食べさせているということでは似ているかもしれない。

松村 「私の子じゃない」と言ったときに、「私の子」って夏目さんにとってどういう存在ですか？何がこうすけさんを「私の子」ではなくしているのでしょうか？

夏目 え…（困惑）。こうすけさんのケアって、他のスタッフに「今は勤務時間外だから代わって」と代われるからでしょうか…。お母さんは逃げれない。

松村 逃げれないと思っているんですね。代わっていいじゃないですか（笑）。何が「私の子である」という感情を引き起こしているのか。それが「私の子ではない人」との間にどういう実質的な差をもたらしているのかは、一度立ち止まって考えてみた方がいいかもしれない。

ブッシュマンの例で面白いのは、赤ちゃんが砂糖を食べ始めても止めないという話。ある程度食べたら満足するだろうし、彼が食べたいのなら食べさせるべきと考えて、子どもの意思が徹底的に尊重される。そういう考え方を持っている社会において、「私の子である子ども」と「私の子でない子ども」の線引きはかなり微妙になる。

夏目 もし子どもがある人を選んだら、その人が親になる？家族になるってことでしょうか？

松村 そう。実際にさっき挙げた例のようになっていくわけですよ。だから住む場所もお嫁に出る家も子どもが選ぶ。結婚相手は生みの親じゃなくて育ての親に挨拶に行く。「私の子である」と言ったときに、親である私は彼／彼女の人生に助言や意見を言う権利があると思っている。だけど、レッツはそう



いうことを問い返される場所だと思います。

ケアをする関係を別の形の「家族」と呼ぶ

松村 たけしくんは数年前に自立生活を始めたんですね。家族でずっと面倒を見てたけど、時間をかけてだんだんヘルパーさんにケアをしてもらうことに慣れていった。慣れるのにはどれくらいかかったんですか？

レッツ久保田 たけしの母です。自立生活は5年くらい前に始めて、慣れるのには2年くらいかかりました。

松村 その後にたけしくんが劇的に変わったという話を聞いたんですけど、ちょっと話を聞かせてください。

久保田 家のことが全てたけしを中心に回り、家族が奴隷のように扱われていると感じていました。でも、たけしが自立生活をして、ヘルパーに愛想笑いをできるようになったのはものすごい衝撃的でした。

松村 これまでは、自分は親だから、自分がいなければこの子は生きていけないという感じがあったんですか？

久保田 そうですね。レッツをずっとやってきましたけど、たけしを完全に委ねたことはなかったし、自分でも大変なのに人に委ねるのは申し訳ないという気持ちがありました。

松村 ヘルパーさんに頼むことが可能になったのはなんでなんですか？

久保田 私が限界だったのは明らかだったけど、たけしの場合は意思がわからない。でもどこかで、たけしが出て行きたいんだろう、もうお前たちじゃないと思っているんだろうというのは感じていました。そこから彼の社会が始まった気がして。社会の中で自分が一人でちゃんと生きていかないといけないと本人は何となくわかっていて、その中でいろんな術を学んでいく、人と関係を作っていくということが本当に始まったんだというふうには思っています。

松村 例え親子であっても、普通に健康に育ったとしても、ある時は親元を離れて一人暮らしを始めたりする。そして、新し

い家族を作るときは、他人と作るわけですね。家族は永続的なものではなく、子どもに手が必要な時に手をかける関係なのであって、関係を離れて、別の人とケアをする関係をもう一度取り結ぶ。そこで生まれるものを新たな「家族」と名づけてもいいかもしれない。

ここに来て印象深いのは、利用者さんもスタッフもみんなバラバラ。それぞれにそれぞれの個性をちゃんと認識しているのは面白いなと思いました。つまり、ここには、たけしくんをサポートするヘルパーという匿名の存在があるのではなくて、それぞれにやり方や癖が違う人たちがいる。おそらくたけしくんもそれぞれの相手を認識している。昨日聞いて面白かったのは、たけしくんのトイレ介助のやり方がヘルパーさんによって実は違う。たけしくんもそれぞれに合わせている。つまり、「この人と私」の関係が取り結ばれている。多くの場合、市場経済のお金を介した関係は、誰がやってもいい関係。人によって買うか買わないかを選ぶことはあまりない。商品が同じであればどこで買っても基本的に同じ。でも、レッツでは、一応お金は発生しているはずなんですけど、一人一人の顔と名前を持った存在、個性を持った存在同士がお互いに向き合っている。それは永続的ではないかもしれないけど、一般化された、マニュアル化された関係で行われているのではない。どこまで行っても「〇〇さんと私」という関係が結ばれている。これは「固有性」に基づいていると思うんですね。私たちが家族を特別なものと思う根底にあるのも固有性。「私が生んだ」「私の子ども」とか。だとしたら、ある固有な存在として関係を持つことを、別の形の「家族」のようなものとして想像してもいいかもしれない。資本主義は乗り越えるべきものだとして200年以上前から言われていますけど、どう乗り越えるかは難しい。でも、資本主義が前提とする商品交換の関係を脱することが、実はこのレッツの場では起こっていて、それには私たちが戦後に信じ始めた家族のあり方自体も脱していく可能性すらあるなと思いましたね。

複数の依存先を持ち、 依存先との関係を見える化する

夏目 たけしくんを例にすれば、自立生活に移行し、依存する相手が久保田さんから様々なヘルパーに代わったことで、エチオピアじゃないですけど、ある意味、依存する先が多様になったというイメージでしょうか。

松村 そうそう。やはり関係が閉じると問題が外に漏れていけない。関係が開いていると問題も漏れ出していくし、何が今必要なのか、得意なことは何か、こういう状況にはこの人が対処できる、とかも見えてくる。レッツにもこういう状況にはこの人だというのはありますよね。スタッフのみなさんにも個性が

あるのが面白いなと思いましたね。この場所では、個性をそのまま職場で発揮できて、それがある種の強みになる。一方で、正解があるわけでもない。人のケアに解決法みたいなものがあるわけではないと感じました。

夏目 ケアをする人が複数いることで、「自分だったらこうする」「自分だったらこうしない」みたいなことを発露することができる。考えていることを交換することができる。それは本人にとってもすごいいいことだなと思いました。

松村 父親母親以外に、もう一人の父、もう一人の母がいる社会はよくある。例えば、名付け親。それは、何か困った時に、父母ではない依存先・相談先があるということ。今の家族のあり方を一気に変えるのは難しいかもしれないけど、子どもに問題が起こったときに、それを察知したり相談したりする相手が親しかいない状況は回避すべきかもしれない。例えば、子どもが困ったときに相談できる近所のおじちゃん・おばちゃんとの関係があるとか、複数の依存先を作ることができると思います。

それに、私たちは依存しないと生きていけない。考えてみれば、現代の市場社会は誰かがものを作ってくれないと生きていけない状況にあるはずなのに、私たちは誰がそれを作ったのかわからない。実は私たちも依存しているけれど、その依存の関係が見えていない、隠されている。私が生きるためにものを作ってくれている人との関係をもう1回つなぎ直すことは今の世の中でもできないことはないですね。だから、依存先のことをちゃんと知る。自分が働いているものの届け先のことも考える。見えなくされてしまっている関係のラインをもう一回見えるようにしていくことはやらなくてはいけないことだと思いますね。そして、福祉の制度を使いながら、別の家族やケアの関係を編み直すことがレッツでは起こっていると思います。

夏目 たけしくんの例で言うと、いろんな依存先をこちらは用意しているつもりでも、それを超えて本人にも選択する権利があるというか。本人の方がこの人とこういう関係を紡いでいくという、双方向の依存の仕方っていうのがきっとあるんだろうなと思います。私たちは「支援する」という言葉でついケアを提供しがちですが、子どもや障害のある人も自分で選んでいくという双方向の関係性があると思うんです。

松村 でも「提供」しているのかな？利用者スタッフのどちらが主役かって言ったら両者が主役ですからね、この場所は。それぞれがしたいことをやっていることを見守る。そこにケアする人がどう関わるのかは悩ましいことだし、考えてらっしゃることなんだろうなと思いました。プログラムのなものは全然ないし、それぞれが今したいことをするのが基本、そしてそれに寄り添う、見守る。それが非常に徹底されている場だなと思いました。そういう方針になったのはどういう経緯なんで

すか？

レッツ佐藤 久保田さんから入社するときに話はあります。久保田さんは理念という言葉を大事にされていて。障害者を尊重するとか、障害者のためにではなくて、あなたはあなたでいてもらった方がいいと言われる。そういう理念は共有されています。

松村 スタッフもちゃんと「私」でいるし、利用者も「私」でいるのが、すごいと思う。

夏目 複数スタッフがいるからそれができる。うまくいかなければ、別の人にいくということができる。それは家庭でもそうだし、このように開けた場所でも、それができるのは人がたくさんいるからだだと思います。

松村 家族がある種のケアの関係の場なら、ここで起きているケアのあり方には、家族が置かれているケアのあり方を問い直すもう一つ別の見方がある気がするんですね。

〈質疑応答〉 政策や仕組みができるとき 民間や個人の動きが先行している

来場者 「頼り」がキーワードだと思いました。親として家族を閉じているつもりはないんですけど、個人だけではなく、家族以外の「頼り」をどう作っていくかが大事だなと思っていて。久保田さんはレッツを立ち上げて、たくさん「頼り」になる人たちのネットワークを作ってらっしゃるけど、私はできないな、どうやっていったらいいんだろうと思います。

松村 レッツのような場所を立ち上げるにはやっぱり仲間が必要ですかね。立ち上げていくにあたって仲間が集まったことはやはり力になりましたか？

久保田 でも、ボランティア団体で計画的に長年続けていくというイメージはなかったので、一緒にレッツを立ち上げたお母さんたちは、3年経ったらみんな、家族の状況の変化とかでやめていっちゃいましたね。それでやめてもよかったけど、自分がやめたら居場所がなくなるので、そこで組織にして。声はかけるけど、基本的には一人だったなと思います。

松村 じゃあ、基本的にはみんなのためにというより、自分のため、たけしくんのためにということだったんですね。それが形を結んで、アルバイトも含めて50人くらいのスタッフの雇用まで生む場所にまで成長したのはすごいですね。一人のために始めたのに、それがある種、社会的な仕組みとしての役割を持って、いろんな人が頼りにできる場所になったということですね。

夏目 松村さんは『くらしのアナキズム』の中で、必ずしも大きなシステムで自分の暮らしやすさや身の回りが変わるわけではない、自分の個人的な問題意識から動いていくことで社

会は変わっていく、という話をされていますよね。

松村 はい。岡山に「岡山ネット懇」っていう組織があって、一人の精神障害を持っている人のケースに対応するために、弁護士会とか社協とか精神科のお医者さんたちとかがネットワークを作り始めて、それが全国的に注目されるモデルになっている。その経験から厚生労働省に働きかけて制度化が実現したりもしている。つまり、そういう制度って、国が作ってくれるというよりも、一人の人のために動き始めた人たちの動きかけによって作り出されたんですね。福岡の「宅老所よりあい」の村瀬孝生さんもおっしゃってますけど、日本の福祉政策って国が整えてくれたんじゃないくて、民間や個人が先行してやったことを国が取り入れて制度化している。政策や仕組みができるときに、本当は民間や個人の動きの方が先行しているんだということですね。それは心に留めておいていいかなと思います。

依存先を可視化すると「贈与的な関係」が 生まれて依存が循環する

来場者 今日のお話を聞いて、一つの家族の中だけではなく、もっと広く、地域とか自治での「依存の循環」が起こっていると思いました。「依存した」「依存された」というやり取りの中ではどういうことが起こっているのでしょうか？

松村 依存が循環するためには、私は誰に助けられたかが明確に意識できることが必要です。そうでないとお返しできない。今の社会は市場システムにすごい依存しているんですね。なのにそれがなぜ循環しないのかって言ったら、誰から自分は助けられているのかが見えないから。自分が一人で生きているかのような幻想を抱かせる社会になっているので、私は誰かに助けられているから誰かにお返しをしようという感じにならないですね。自分が依存していること自体が見えなくなっているから、それをどう可視化するのが一つのポイント。そして可視化されると、恩義みたいなものが出てきて、それが関係を継続させるんですね。この人にお世話になったからとか、生まれ育つ中でいろんなものに助けられてきたら、次の世代へ繋げようとなる。そうして恩送りみたいなものがちゃんと発動するようになる。それは人類学の用語で言えば「贈与的な関係」が生まれている。「贈与」というのは、匿名だと機能しないんですよ。プレゼントは欲しいものであったとしても誰が送ってくれたかわからないと怖い。プレゼントは名前があって、この人からもらうと分かるから嬉しい。でも、私たちは商品、例えばペットボトルを手にした時に誰が作ったかとか分からないのに、怖いと思わずに飲むわけです。だから、商品は匿名が基本。「贈与的な関係」は名前のある関係として継続していくから、循環していくのだと思います。

周りの人が個人の特徴を捉えることで 差別ではない関係性が生まれる

来場者 私の夫が生まれた集落は山の中で、そこには障害のある方も何人かいるのですが、その方は犬の散歩もするし、お祭りで係もしているんです。犬の散歩をしていても周りの人と違う行動をするので、周りの人は「あいつ、バカだしな」とか平気で言うんです。でも、彼はその集落で立場があって、ある役割を果たしているんです。そのように「頼りなさ」に依存して一つの役割を見出すという考え方も元々あったんじゃないかと思っているのですが、そのことをどういうふうに伝えていったらいいのでしょうか？

松村 『コモンの「自治」論』という斉藤幸平さんと松本卓也さんの本で、自治の柱になるのは何なのかということで、それは「店」だという話をしたんです。もはや村に戻ることはできないですよね。既存の町内会に来てくださいと言ってもなかなか人が集まらない。そういうときに「店」は誰もが立ち寄れる場所で、顔の見える固有の関係性が生まれうる場所なんですよ。

おっしゃるように、エチオピアでも障害を持つ人は半分バカにされたりする関係があるんですけど、今の日本ではバカにすることすらしない、バカにする関係すらない。そうするとどういう特徴を持っているかを周りの人は知らない。差別すら生まれないほど、周囲との関係が断たれている。そのときのポイントはそれぞれの人の特徴を周りの人が知っていることで、それはこのレッツで起きていること。レッツでは本当にみんなが多样で、周りの人が個人の特徴を捉えることによって関係が生まれている。それは村でなくても、街の中でも生まれうるものなんだと思います。

文化人類学者としての フィールドに対するまなざし

来場者 文化人類学者として初めていく場所に何を見ているんですか？普段どこに着眼点を置いているんだろうなと思いました。

松村 昨日、迎えに来ていただいて、簡単に説明を受けた後は「あとはご自由に」という感じで放置されたので、まず2階でスタッフの方々が会議していたのを観察しました。来週「凸凹まつり」があるからなんですが、この場所で「会議」とか「実行委員会」という言葉遣いが異様に聞こえたんですよね。それらはスタッフが普通にここで働く上では出てこない言葉で、私たちは会議で一体何をやっているんだろう？働くって何だろう？と思ったんです。周りは音楽が鳴っていたりするのに、そこだけ、言葉遣いも表情も違って、「働いている感」があった。

そこで、私たちは働いているときに、独特の働いている感のある言葉遣いとか表情とか姿勢をしている。ケアの時とは全然違うんですよね。

なので、何を見るかは特に決めていないわけですよ。その場で起きていることで、何か面白そうなところにいる。でもそこに座っていると、会議だけじゃなくて、ちょっと利用者さん同士で小競り合いがあったりして、それがどう展開するかとかを見えています。

来場者 例えば、この場に来て会議が行われていて、疑問が湧いてきた時に、その場に介入していくのか、それとも自分はいないものかのようにして観察するのか。

松村 介入は基本的にしないですね。最初はよくわからないし、ただいるってだけなんですよ。でも、介入はしないけど、私がいることで絶対に影響があり、当然その場を乱しているわけですよ。乱すことによって生まれる何かも、自分の身に起こることも観察対象になる。

昨日はその後、2階から1階に降りて来て階段に座ってたらすぐ眠くなってきたんですよ。つまり、1階は全然「働く」という感じの空気ではなくて。なんかここは、さっきの2階での会議の空間とは違う時間が流れているのではないかと私の体を感じていた。そういう私の体の反応も観察対象になります。

「働く」って一体何だろう？働く感を出すことで働いているつもりになっているけど、実質はどういう意味があるんだろう？あるいは、「ケアする」ことが「働く」に見えないのだとしたら、それはなぜなんだろう？利用者とスタッフが突然外に飛び出して踊っている場面を見て、それは働いているようには見えないけど、それはここでの「働く」ことなんですよ。そうだとしたら、「ケアする」と「働く」がどういう関係にあるのかみたいな問いが芽生える。そのように問いを見つけていくということですかね。

夏目 ありがとうございます。

日時：2024年9月14日(土) 13:30～15:30
会場：たけし文化センター連尺町

寄稿

生きのびるための＜関係＞の技法

文：松村圭一郎

「働く」がそぐわない場所で

2024年9月13日から14日にかけて、「ひとインれじでんす」の企画で、たけし文化センターに滞在した。簡単な説明が終わると、「あとはご自由に」という感じで放置される。とりあえず2階に上がって、しばらく様子をみていた。

DJブースのようなテーブルの前で音楽を流している人、それに合わせて身体を動かす人、ただ寝転がっている人、ずっと壁にテープを貼りつけている人……。誰もユニフォームを着ていないので、いったい誰がスタッフで利用者なのか、まったくわからない。ところが2階の一角でミーティングがはじまると、雰囲気が一変する。そこに集まった人は、あきらかに「働いている」人にみえる。1週間後に予定されている「凸凹まつり」の準備のための話し合いだった。

ミーティングでは、名簿をつくる、時間を割りふる、分担を決める、連絡事項を確認するなど、あきらかに「会議」らしい言葉が飛び交う。周りでは、コウちゃんがサトちゃんにちょっかいを出すなど、いろんなことが起こりつづける。みんな真面目な顔で「会議」をする。その行為が、この場所ではあきらかに場違いな、異様なふるまいにみえてくるのが興味深い。まるで、そこだけ「仕事」という劇が演じられているかのよう。「働く」ことが、なぜかこの場にはそぐわないのだ。

1階に下りる。この日は、看護学校の学生が「実習」に来ていた。レッツには、リハビリとか、学習とか、みんなで一緒にやると定められたプログラムはない。実習生も、私と同じように放置されて、手持無

沙汰にしている。ときどき利用者から話しかけられて話し相手をしたり、とくに反応もないまま自分から話しかけたりしている。なかには、机に向かって熱心にメモをとっている学生もいる。何を記録しているのかは、よくわからない。

はたして人と雑談することは「実習」なのか、この場の何がわかったら「学んだ」ことになるのか、本人たちも当惑している様子だった。その日を終わると、彼女たちは「実習レポート」を提出するのだという。いったい何が実習内容として「報告」されるのか、それをどういう基準で「評価」するのか、なかなかしゅるだ。

「福祉」とは何か？

レッツが開設している「アルス・ノヴァ」は「障害福祉サービス事業所」だ。たしかに、そこでは「福祉」という仕事が行われている。スタッフは給料をもらって働く従業員である。だが、なぜこうもこの場所は「仕事」から遠く離れてみえるのか。そこには、ただ時間をともに過ごし、生きている人たちがいるだけだからだ。障害があろうが、なかろうが、その場で一日を過ごす。そこにただけなのに、それが「仕事」になるのは、国の福祉政策というフレームがあるからにすぎない。

考えてみれば、私が研究してきたエチオピアの農村には、「福祉」という仕事は存在しなかった。もちろん子どもも、老人も、さまざまな「障害」をもつ人も。だが基本的には、施設に入ることなどないの、ただ村で生きている。お年寄りで足が不自由

なれば、だんだん行動範囲が狭まり、家の周囲で用を足しに立つくらいしか、出歩かなくなる。家族などがその老人をサポートはしている。だが、とりたてて「介護」をしている様子ではない。人の手が必要な人に、近くにいる人が手を差し伸べる。それが大人だろうが、子どもだろうが、貧しい人だろうが、精神を病んでいようが、そこにあまり区別はない。それは「仕事」の範疇に入る行為ではないのだ。

「福祉」という領域は、人間が生きて老いて死んでいく道のりのなかの一部を「サービス」におきかえ、「仕事」にする仕組みだ。そこには、ケアする人がいて、ケアされる人がいる。だが、本来は、誰がケアされるべき人なのか、固定していない。手がかかる子どもが親になり、自分の子の面倒をみる立場になる。そして、やがて老いて人の手助けが必要になる。こうして一生のうちで、ケアする人とケアされる人の関係は、移り変わっていく。

それだけではない。たとえば「子育て」は、親から子への一方向的な行為ではない。親は最初から「親」ではなく、子どもとの関わりの中で「親」になる。子は一方的に育てられる側ではなく、大人を「親」として育てる側にもいる。ケアされる側のある種の「欠如」や「不足」は、ケアする側の行為や能力を引き出す役割を担っている。はたして、どちらがケアしているのか、ケアされているのか、そもそもとて

もあいまいなのだ。

その意味で、レッツで誰がスタッフで利用者なのか判然としないのは、自然なことのように思える。何かが起きれば、周りの人が手を差し伸べる。何も起きなければ、ただその場に一緒にいる。そこにスタッフと利用者の線引きはない。ただともに生きている人たちがいる。その様子を観察していると、レッツで「働く」人たちは、ふつうの企業の「労働」にはおさまらない人たちにみえてくる。利用者とスタッフの区別がつかないのは、ユニフォームを着ていないからだけではない。みんなそれぞれが自分の個性のまま、その場にいることを認められているからだ。だとしたら、この場所は「利用者」のためというよりも、特定の人たちが「社会人」として生きられる居場所だともいえる。ここでも、ケアの関係は固定していない。

スタッフ会議が終わり、2階から人が下りてくる。また、誰がスタッフで利用者なのか、よくわからなくなる。急にチハナさんがコウちゃんを誘って、外に出る。と、二人は大道路に向かって大きく身体を動かし、踊りはじめた。突然のことで、あっけにとられてしまった。だが、二人は踊り終わると、いつものことといった様子で、平然と戻ってくる。ここでの「仕事」は、これがふつうなのだ。スタッフが踊りというプログラムを利用者に提供しているわけではない。どちらかと言えば、踊りたくなったチハナさんがコウちゃんに付き添ってもらった、ともみえる場面だった。

帰りの時間が近づくと、みんな落ち着いた様子になる。帰り支度をはじめる人もいる。コウちゃんが、リュックを背負おうとするアキラくんの手助けをする。その横で、同じリュックを背負ったサトウさんが、うろうろしている。そこにも固定的な境界はない。ただ、一日のうち

のある時間をともに過ごす。目的と役割が明確に固定された「施設」とはかけはなれた場のあり方が、なによりも新鮮だった。

入れ替え可能な、でも固有な関係

レッツでお話を伺うなかで、いくつか印象に残った言葉がある。ひとつは、「スタッフと利用者の関係は入れ替え可能でなければならない」という言葉だ。この人の介助は私にしかできない。そんな固定した関係が生まれたら、それはケアを受ける側にとっても、大きな制約になる。その介助者がいなくなれば、生きていけなくなるからだ。介助者にとっても、24時間、気が休まらず、大きな負担になるだろう。だから、介助の関係は入れ替え可能でなければならない。

ただ、その一方で「介助のやり方は、人それぞれで固有なもの」という言葉も耳にした。たとえば、同じ利用者でも、トイレに付き添うときのやり方は、かならずしもスタッフ間で共有されていない。この人はいつもこうするものだ、と思っていたら、他のスタッフは別のやり方をしていた。そんなことがよくあるそう。つまり、利用者はこの人がトイレに付き添うときは、このやり方なのだな、とわかって対応を変えていることになる。そこには「この人と私」という固有な関係が築かれている。こうして利用者やスタッフは、それぞれに個性をもった固有な存在でありながらも、同時に入れ替え可能でもある。

タケシくんが、親元を離れてシェアハウスに入ることになった経緯も興味深い。生まれたときからタケシくんの面倒をみてきた母親のミドリさんにとって、その親子の関係は、まさに「入れ替え不可能」にみえていたはずだ。母親である自分以外の人がタケシくんの介助をすることも、タケシくんが他人の介助のもとで生きていくことも、可能だとは思えなかつ

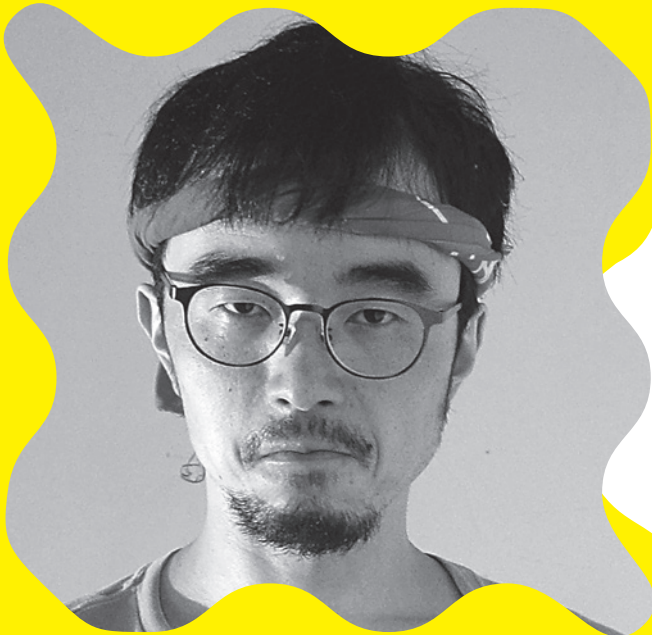
た。自分でもたいへんなのに他人に委ねるのは申し訳ないという気持ちもあった。

だがタケシくんは、母親に頼れないことがわかると、他の人の介助を積極的に受け入れはじめた。それは、あっけないほどの変化だったようだ。親子は、きわめて固有な関係である。だが、永続的なものではない。家族も、固有でありながら入り替え可能な関係になる。それが、これからの「家族」のあり方を考えるときに重要に思える。

私がエチオピアで目にしてきた「家族」の関係は、とても柔軟だった。いつも一緒に過ごしているので、その家の子だと思っていたら、親戚の子だった、ということがよくある。基本的に、子どもはどこの家でご飯食べようが、遊ぼうが、寝ようがかまわれない。親との関係が悪くなれば、子どもの側から親戚を頼ったりして、他の家庭で過ごすようになる。これはエチオピアに限らず、人類学が研究対象とする多くの社会で報告されてきたことだ。「家族」の関係は固有であっても、入り替え可能になっている。それは子どもに自由が認められているという以上に、互いを極限の状態に追い込まないための術でもある。

私がいなければ、この子は生きていけない。この親から見放されたら、自分は生きていけない。親も、子も、そう思えば思うほど、互いを強固な檻に閉じ込めてしまう。そんな「家族」の関係が、現代日本の親子を縛り、苦しめているように思える。「家族」だけではない。私が辞めたら会社に迷惑をかける、この会社をクビになったら私は生きていけない。この「働く」をめぐる閉塞した固定的な関係が「ブラック」な状況の背後にある。レッツで目にした関係のとり方には、「福祉」という領域にとどまらない、生きのびるための知恵がありそうだ。





PROFILE

東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。自作した発泡スチロール製の家を背負って移動生活をしたり、広告収入を使って看板の中で生活するプロジェクトなどを行なっている。最近千葉県山武市に購入した土地で、地下水の気化熱と落ち葉の発酵熱を利用した冷暖房を開発する《村上勉強堂》計画を進めている。著書に『家をせおって歩く』（福音館書店）『家をせおって歩いた』（夕書房）などがある。

第3回 ゲスト 作家 村上 慧 さん

聞き手：高木路子

地面の凸凹

村上 今日のトークのタイトルは、「地面が凸凹してきちゃう」です。普通、街はアスファルトに覆われていて凸凹してないですね。今長野県に住んでいて、トレッキングやハイキングに行く機会が何度かあったんですけど、地面がすごく凸凹してるんです。凸凹している中を歩いていると、歩いていること自体に意識が向くんですね。それで去年落ち込んでいた時期に山登りをしたら、すごく元気になったんです。凸凹しているので体のバランスを崩して、転びそうになるたびに体勢を立て直そうとします。そうしていると、命がここにあるんだっていうのを感じた。それに対して、平らな地面を歩いていると、歩いていることをあまり意識しない。なので凸凹した地面は体に良い、という感覚があります。

村上勉強堂について

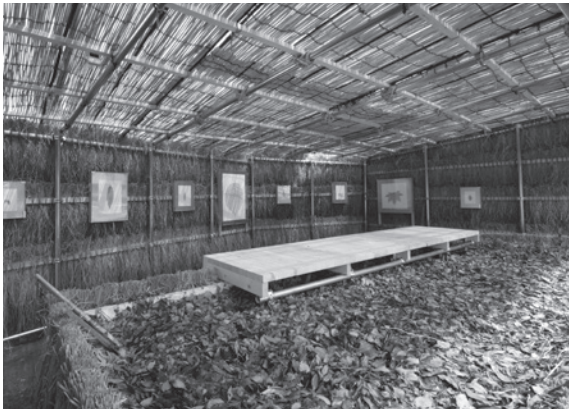
村上 千葉県山武市で「村上勉強堂」というプロジェクトを進めています。2年前に土地を買って、色々実験をしているん

です。宅地開発された後、何にも建たなかった土地で、50年くらい放置されていた。そこでユンボを借りて、穴を掘りました。その時に出土に消石灰を混ぜて、水を加えて、木材で作った型枠の中に入れて、上から棒で叩くと、土が固まります。一回で5センチずつ進んでいって、最後に型枠をとると、こういう壁ができます。版築という方法です。最終的にはこの方法で小屋を作ろうとしています。いまはまだ壁を立てている途中です。「勉強堂」は、自分で暖房と冷房くらい自作できないかなと思って始めたんです。仕組みがよくわかんないからなんです。生活に欠かせないものの、冷房はどういう仕組みで冷えているのか、自分で理解できる範囲を超えていて、その状態がちょっと気持ちが悪い。



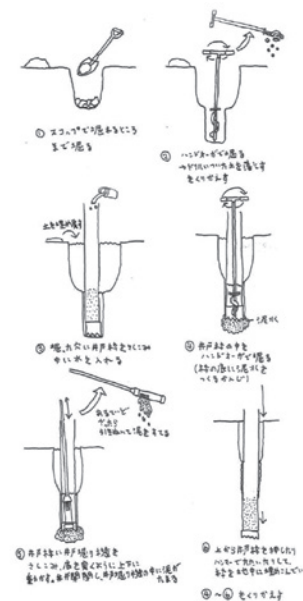
熱の連帯（足湯）

村上 長野県大町市で北アルプス国際芸術祭という芸術祭が開催されていて、僕も参加しています。「熱の連帯（足湯）」という作品をつくりました。落ち葉に米ぬかと水を混ぜると、発酵して温度が上がるんです。そこにお客さんが足を入れると足があったかいていう、足湯の作品です。9月1日に落ち葉を仕込んでからもう1ヶ月以上経ってるんですが、まだ50度を切ってない。勉強堂ではこの仕組みを使って暖房をつくろうとしていて、あったまった空気を閉じ込める壁を、土を使って作っているというわけです。



勉強堂の井戸掘り

村上 勉強堂では井戸も掘っています。塩ビ管を地面にさして井戸を掘る方法があるんです。あらかじめ掘っておいた穴の底をこの道具で叩くだけで、底の土が泥になってこの中に入ってきます。その泥を穴からかき出すという作業を繰り返すと、9メートルくらい掘れます。これで水が確保できました。版築の壁に井戸水を染み込めさせると、蒸発するときに壁が冷える。これが冷房の仕組みです。要するに、僕は村上勉強堂で井戸水の冷房と落ち葉の暖房を作ろうとしています。



凸凹していないと、 生きることを忘れ ちゃう

村上 こんなことをやっている、地面がどん

どん凸凹になっていきます。草勉強堂に行くときは、あの凸凹の場所に行くのか、みたいな気持ちになります。それがまた良い。場所の固有性みたいなものを考えた時に、地面を平らにすることによって、その場所らしさは失われてしまうなと思っているので、勉強堂の地面は最後まで凸凹にしておきたいと思っています。一方で例えば、休憩用のテーブルとか椅子とかは、地面が平らじゃないと使い物にならないでしょう。凸凹にしようとしてやっているのではなくて、穴を掘ったり草を刈ったりしているうちにどうしても凸凹してきちゃう。アスファルトを流し込んだり重機でならさない限りは、地面は凸凹しているのが通常の状態なんです。だから、地面が凸凹していないというのは、普通じゃないんです。凸凹していないと、自分が歩いていることも忘れちゃう。どっかで生きることも忘れちゃう、そんな感覚があります。

高木 勉強堂ではどういうスタイルで休憩しているんですか？

村上 椅子とテーブルは絶対欲しいので、どんな地面でも水平を作るテーブルを作れば良いなと思いました。地面は凸凹がいいんですけど、テーブルは水平じゃないと作業ができないので。

高木 普段何人くらいで作業をしているんですか？

村上 基本1人でやってます。壁の作業は鬼のように大変で、ゴールデンウィークに20人くらいの友人に呼びかけて手伝ってもらって、それでも壁がやっと5枚できたくらい。あと6枚くらい作らないといけななんです。3日間朝から晩まで作業して、やっと壁が一枚できました。土を固めて壁を作る版築の方法は、日本だと地震があってあまり定着しなかったんですが、ヨーロッパ、ドイツとかだと今でも版築で作った5階建てのアパートがあるらしいんです。万里の長城も、レンガを焼成する技術が生まれる前は、全部版築でやっていたそうです。だから、この版築というのはかなり古い、人間が昔から知っていた方法なんです。ただ、日本ではあまり馴染まなかったですね。

来場者 勉強堂は何年からやっているんですか？

村上 2022年からです。勉強堂は完成したら、人を招いて、泊まれるような場所につつ、記録も膨大にあるので、本にしたいなと思っています。あと3年くらいはかかる予定です。『村上勉強堂報告書』っていうのがあって、これは僕のウェブサイトに載っているんで、よかったら、興味のある人は見てみてください。

家を背負って歩く

村上 2014年から2021年まで全国各地で行っていた「移住を生活する」というプロジェクトがあります。

（映像） 40:00（「移住を生活する」の記録映像」村上さんは、発泡スチロールで作った小さな白い家をせおって歩いて、日本各地を移動しながら生活していました。）映像にあるように、このときは撮影の人もついてきてもらっています。最後にしきりに「敷地外」って言葉が出てきましたね（映像の中で、ここに「家」を置いたらいけない、出て行ってくださいという意味で「敷地外」と言われるシーンがある）。「敷地」っていう考え方が大事で、とにかくここには入って



れるなっていうのが東京とか都市だとすごく多い。コンビニとかに入るのも苦労します。駐車場に家を置いても、場合によ

ては警察を呼ばれて面倒臭いことになるので、できるだけ速やかに、店の人にバレル前に立ち去るっていう感じになる。車や自転車は街に置き場所がありますが、家の置き場所ってないですよ

ね。交渉しないと、家を肩からおろすことができない。寝る時も、主にお寺とか神社が多いんですけど、交渉して置かせてもらっていました。だ

いたい350箇所くらいの敷地を借りました。

来場者 車輪つければ車になりますよね？

村上 なります。それで法的には車両扱いにはなりますが例えば車輪をつけて、これは車ですと言い張っても、寝る時は駐車場を借りないといけない。結局交渉しなきゃいけないんです。勝手に置いて寝るということができないんです。ちゃんと場所を与えてもらって、ここで寝てよいとならないと安心して眠れない。

日記を書くことが家である

村上 「移住を生活する」を始めたとき、自然と日記を書き始めました。その日の日記を書くことによって「家に帰る」ことができるというか、その日の経験を終わらせるというか。たぶん、その日のことを報告する場所が欲しかったんですよね。一緒に住んでいる人がいたら、今日はこんなことがあった、みたいな話ができて1日を終えることができるけど、移住を生活すると、とてもたくさんの出来事があったのに、ひとりで1日を終えなくてはいけない。帰る場所がないと何も経験できないな。書かないと経験した気がしない。なので、何かあるたびにメモのアプリで書いています。このPCが家ですね。

間取り図という考え方

村上 「間取り図」と言って、街全体を一つの家に見立てる考え方をしています。例えば、ここに家を置いたとして、銭湯がお風呂、コンビニがトイレ、そこまでの道が廊下になります。寝床だけは自分で確保するんだけど、他のインフラは基本的に全て街に頼る。電気も風呂もトイレも食べ物も、洗濯も、完全に街に依存している生活です。だから店がない街にはあまり行きたくない。家から風呂場まで1時間かかることもよくある。風呂から帰ったときに、この家が同じところにあるとそれだけで嬉しい。こんなふうに、電気もトイレも全部街に依存してるっていう生活をしていました。電気はどうしているんだとか、お金はどうしてるんだとか色々聞かれました。バイトも都度してたんですけど、どうやって生き延びていたのかあんまり覚えてないです。

看板に住む

村上 「広告看板の家」というプロジェクトを2021年からやっています。看板に住めば、広告収入で暮らせるんじゃないかと思ったんです。看板に住むだけでお金も入ってくる上に雨も凌げるなど。最初は大阪のマンションの屋上看板を使わせてもらって、電話番号を書いて広告主を募集しました。でも全然広告主が現れなかった。そこで自分で空間から作ることにしました。一口5万円とか3万円の広告費をもらって、札幌や名古屋の街の中に看板を作って、中を居室にして、1ヶ月くらい広告収入で住んでみました。

そのときに、さっきの勉強堂の話にもつながるんだけど、よくわからない大規模発電で生まれた電力を使って生活したくないなと思って、冷房と暖房を自分で作ろうと思ったんです。冬の札幌を広告収入と落ち葉の暖房で乗り切り、夏の名古屋を水の気化熱と広告収入で乗り切ったんですけど、どちらも他人が持っている土地なんで、2ヶ月とかでプロジェクトを終えなくちゃいけなかった。でも冷暖房の開発にはもっと時間をかけたかった。だから千葉県で勉強堂の土地を買いました。自分の土地だったらいくらでも時間をかけられるので。千葉でやっていることは美術かどうかもわからない。暖房と冷房を作ろうとしているだけ。なんだか遠くまで来たなと思います。

レッツの「触る」コミュニケーション

村上 レッツに滞在して、人が人をすぐ触っているなと思いました。たけしくんとか、のぶえさんとかめっちゃ顔を触ってくる。恋人以外の人からこんなに触られたことはない。でもそれがなんだか嬉しい。顔に限らず、体をつついたりとか、触る

コミュニケーションをしているなど。触ること自体に何かがあるんだろうと思います。

看板と僕の肉体はかなり近いところにある

村上 言葉のコミュニケーションって、形があんまり定まっていな

い、触れないものだと思います。この社会は言葉とか情報のコミュニケーションでいろいろなものが成り立っている。今度本を出すんですけど、主に飲食店でのメニューに印刷された写真と、それを注文した時に出てきたものをそれぞれ写真に撮る、ということ

を5年くらいやってるんですけど、それをまとめた本です。（「イメージと正体の調査報告」）。



こっちが商品の中身で、こっちがイメージ。これは広告看板の家をやっている時に思いつきました。看板の中に住んでいる僕は実体なのか？と。広告看板の家はファミマの看板を見たのがきっかけになっていて、近くで見ると看板で箱だよなと思ったんです。広告って本当は、情報だけを出したい。空間に文字だけあればいい。でもそれは現実世界では不可能だから、絶対に質量を伴う物体に文字をのせないといけない。それが自分とリンクした。つまり、僕は普段言葉でコミュニケーションをして、情報を入れたり出したりして仕事をしていますが、この体をを維持するためにはエネルギーを摂取しないとけない。水を飲まないと死んでしまうし。看板と僕の肉体は似てるなと思った。なんでさっきご飯食べたばかりなのに、また食べなきゃいけないんだろうってよく思っていました。本当は無限に動き続けられる肉体があればいいんだけど、寝なきゃいけないし、食べなくちゃいけないし、体って面倒臭いなと思ってた。微生物とか土を触るようになって、だんだん変わってきました。有機体としての自分があるっていう。例えば、バックに入ったトマトジュースを飲んでる時に、パッケージに何にも書いてなくて、透明な箱に入ったものを飲んでいただいぶ印象が違うはずです。僕たちはイメージを食べているようなところがある。野菜ジュースを飲んでる時も、とりあえず野菜も取っとうみみたいな意識があったりとか、その食物のことだけを思っ

この場所がここにあるということをこれから先思い出すだけで、多分背中を押してくれる

高木 村上さんは今日のトーク前に、レッツ主催の多国籍イベントに参加されてました。その時、レッツの利用者さんたちのファッションショーの時間がありましたね。

村上 レッツメンバーの、ファッションショーでの立ち方がすごいなと思って。社会生活をしていると、ある程度体の振る舞いって決まっちゃうじゃないですか。でも彼らは壇上に立ってるだけでパフォーマティブというか、社会化されていない振る舞いみたいなものを持っているなと思いました。

高木 床で転がり回ったりして。

村上 そう。あとたけし文化センターに入ったら床に人が寝ていた。実は新幹線の中でいやなことがあって、すごく落ち込んでいたんですけど、入ってすぐ床に人が寝てたんで、嫌な記憶が一瞬で吹き飛びました。レッツに来て疲れましたが、同時に何かがすごいチャージされた感じもあって、この場所がここにあるということをこれから先思い出すだけで、多分なんか背中を押してくれるんじゃないかって思います。一緒に散歩したりとかもいい経験でした。

人間の体は肉の断熱材に包まれた熱という現象

村上 去年から長野県の大町市というところに住んでいます。北アルプスの雪解け水が、街の水路に流れてきていて、春になるとその水量が増えるのが音でわかります。水道水も湧水なので、山にあった水を飲んでいます。生ゴミは庭に全部捨ててるんですけど、カボチャのタネとか、じゃがいもとかを捨てると忘れた頃に実ができてたりする。自分の体が循環の中にあって、自然の一部なんだと感じます。人間も腸の中に千種類くらいの菌がいて（土は1万種類とも言われているらしい）、親指の先には国の人口よりも多数の細菌が住んでて、人間の腸にも100兆個の細菌が住んでいる。彼らが腸の中で、食べたものを分解してくれる。さっき落ち葉の発酵熱の話をしましたけど、発酵熱って微生物の呼吸熱のことなんですね。ある種の細菌にとって心地よい環境になると、呼吸も活発になり、それによって熱が生まれる。彼らも僕の体も、同じように熱を必要としている。それを知ってから、自分の体の意識が変わりました。人間って、「肉の断熱材に包まれた熱」という現象だと言える。熱がなくなると命が止まってしまう。

自分の体の定義は実は難しい

村上 熱を保つために、ご飯も食べるし、お風呂に入ったりとか暖房をつけたりする。冬の街に行くとよく思うんです。店の中に入ってあったかいとか、何か食べてあったかい、その度

に、お互いに熱を保つために連帯してるって。今はご飯を食べるのがすごく好きになりました。人間の体の90%が微生物で、人間の部分は10%しかない。どこまでが自分の体なのかってのも定義がすごく難しい。

種の壁を超えたパンダという存在

村上 微生物の凄さの話をする、パンダって食肉目の動物なんですけど、笹を食べるじゃないですか。それは全て腸内細菌が分解しているおかげで栄養が摂取できているらしいです。種の壁を超えちゃってる。腸内細菌によって、草食動物になっちゃってる。

落ち葉の発酵熱の愛おしさ

来場者 落ち葉の微生物たちのことをかわいって言うんだけど、どういうかわいさがあるのですか？

村上 動物と同じで、熱があるんです。お風呂の場合、水自体は発熱してなくて、温まった水に体を入れているだけです。一方、落ち葉の足湯は、それ自体が熱源です。熱の感じが動物と同じだから、愛おしいんです。しかも一個一個はすごく小さな菌が億や兆の単位になって熱を発しているっていうのが、生き物なんだと量としてわかる。でもあんまりかわいかわいって油断して食べたりするとお腹を壊します。

来場者 お腹壊したことあるんですか？

村上 落ち葉の中に、カップワインを入れてホットワインにして飲もうとしたら、多分蓋のフチについてた菌が体に流れ込んできて、次の日丸一日倒れてました。彼らも生き物なので、愛おしくはあるけれど油断もできない。

落ち葉の発酵熱のハウツー

来場者 手入れとかもいるんですか？

村上 糠漬けと同じで、空気を入れることが大事です。もし家でやりたい人がいたら、深さ60センチ以上の大きさの箱（横180センチ、奥行き90センチ）でやればうまくいきます。あんまり体積が少ないと外気に負けちゃうので、その量の落ち葉に対して、米糠を30キロくらい入れて、落ち葉と米ぬかを交互に重ね、上から水をかけると、約3日で60度になります。その温度はが1ヶ月くらい保たれます。

来場者 匂いは？

村上 ちゃんと混ぜれば悪い匂いはしないです。落ち葉の温度が下がってきたら混ぜてあげると良いです。元々この技術は、冬に夏野菜の種を発芽させるためのものなんです。そこに生ゴミを入れると大体1週間くらいで跡形もなく無くなります。

来場者 掻き回さないと菌が湧いちゃいますよね？

村上 掻き回さないと「嫌気性発酵」とって酸素がない状態が得意な菌が湧いて、アンモニア臭が発生します。だから匂いが悪い時は酸素が足りていない状態です。

高木 先日、渋谷公園通りギャラリーで村上さんが制作した落ち葉の足湯を体感しました。じんわりあたたかくて、めっちゃいい匂いでした。

村上 この仕組みはコンポストと同じです。コンポストだったら90Lくらいのバケツでもできます。土に還っていくのが目に見えてわかるのが本当に感動しました。土の層を地球に増やしたぞっていう。

来場者 落ち葉はどこから集めてくるんですか？

村上 落ち葉は、渋谷では代々木公園の落ち葉を集め、札幌では、近所の公園からも集めました。

家を背負って歩くとき：地域性

来場者 家を背負って全国各地を歩く際に地域性ってありますか？みんな大体優しい？

村上 いや、そんなことないです。家を置いてくれる場所を探すときも、大体4軒くらい回って1軒OKならいい方です。2021年に奥能登国際芸術祭に参加して能登半島を歩いていた時は、全然断られなかったんですよ。お寺がめちゃくちゃ多くて、お寺同士が大体同級生で、「この次はここに行くといいよ」と教えてくれる事が多かった。その通り行けば珠洲まで行ける。でもそうなっちゃうとあんまり意味がない（笑）。

家を背負って歩くとき：人との交渉は自分の睡眠のため

来場者 家を背負って、人と交渉することは、人に認められたい、繋がりたいってことなのでしょう？

村上 それはあるかもしれない。僕はどこでも寝れるタイプの人間じゃないんです。レッツのシェアハウスに泊まる時も不安でした。その時はすごく酔っ払ってたから寝れましたが、普段は結構音に敏感で眠れません。「移住を生活する」は発泡スチロールでできた家なので、めちゃくちゃ弱いんです。発泡スチロールの家がぼんとあるだけでは、あまりにも心もとない。それよりは、塀がある中に家を置けた方がいい。自分の睡眠のために交渉したというのが大きいですね。

来場者 雨はどう凌いだのですか？

村上 実はこの家は3軒あるんです。1代目の時は雨漏りがあったんですけど、2代目では1軒目よりも軒を出したんですね。これだけで雨に強くなりました。

来場者 お家の中にいて孤独は感じないんですか？

村上 歩いているときは暇ですが、夜寝るときは幸せを感じていました。本当に自分の力で手に入れたものだからアパー

トで寝る時よりも寝床だと強く感じます。寝る時は本当に安らかに寝ていました。クセになりましたね。

自分の仕事は区切らなきゃいけない

来場者 家を背負って歩く生活にまた戻りたいとか思います？

村上 （家を背負うのは）めっちゃきついんですよ。そんなに大してやりたくはない。

「移住を生活する」が終わったきっかけは、2021年に金沢21世紀美術館で開催した展覧会です。歩く中でその日描いた家の絵と日記を展示しました。全ての日記を展示室の中に全部入れた時に、これで終わったなと思ったんです。一回終わらせないと、何をやったか検証できない。日記も、一日の最後に書きます。振り返らないとそれが良いものなのかどうかわからないんです。振り返るために一回区切らなきゃいけない。生活にしても、旅行にしても、仕事にしても同じです。始まりと終わりがあるから、終わった後に振り返ることができる。現代は、あまりにも世の中に区切りがないと思います。ひたすらお金を生み出して使うみたいなことをやり続けなきゃいけないから、いつまでもこの社会を検証できない。その中にあって、自分の仕事は区切らなきゃいけないと思っています。

システムの外を想像する

来場者 お話を聞いて、境界を超えていくというか外側に行くという感じがすごく受けました。自分は数年前に働けなくなり、社会から外された感覚があったんです。村上さんのやっていることは、固定概念の外側に行こうとしていて面白いです。人間を構成するあらゆる要素を取り除くと最後に残るのは熱なんだな、というのが僕の中ではすごく発見でした。すぐムカつくことを人に言われても、こいつは俺と同じ熱なんだなと思うと、なんか乗り切れそうです。村上さんはシステムの外側に出ちゃってるような感じがして、システムに対する反骨精神があるような印象を受けたんです。逆にシステムの良さに気づいたり、視点が変わったりしたことがありますか。

村上 本当にシステムの外側に行こうとすると、シベリアやアラスカで狩猟採集をしなければならないと思っています。僕は映画とか美術館とか好きだし、そういう営みを残すことができていシステムも、それがないと生きていけない感じもすごくする。例えばこの家

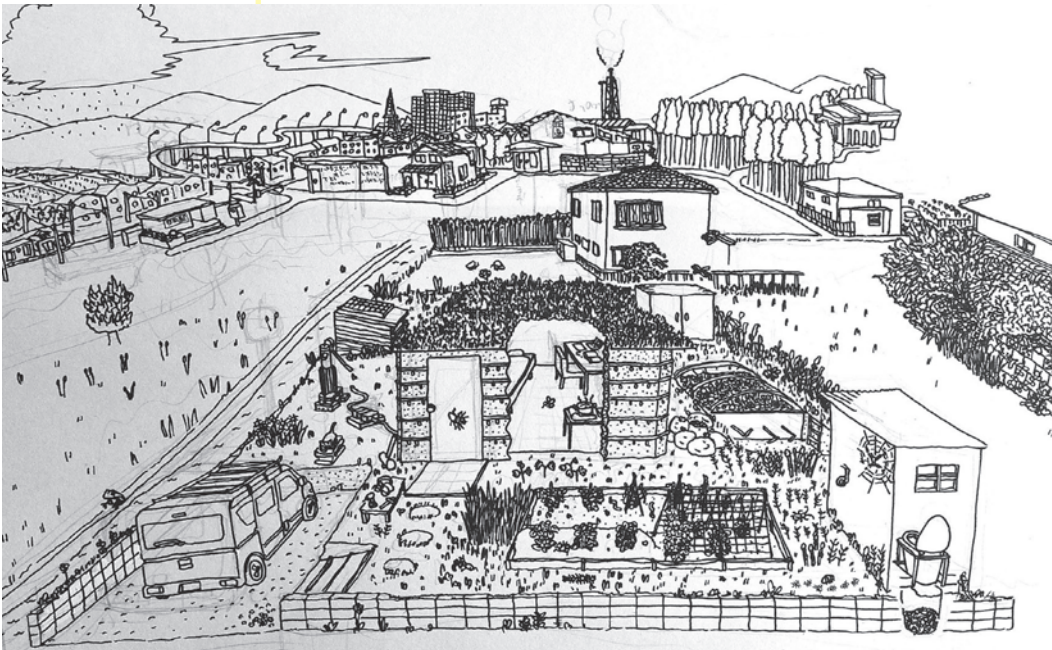
を背負っているときは、生活が忙しい。場所を探して交渉して、とかやっている、本当にあつという間に1日が終わるんです。本とか読めません。家賃を払うっていうのはやっぱり時間を買ってるんだなと思いました。

僕は生活の拠点が長野と東京と千葉の3つあります。1箇所だけにいと苦しいんです。家賃払ってアパートに住んで働くことをやりながら、千葉県には地面が凸凹の土地を持っています。そこには自分で掘った井戸があるという事に想いを馳せる。それぞれの拠点に良い面と悪い面があって、絶えず身を置く場所を動かし続けるみたいなことによって正気を保っています。質問の答えになってるかわからないけど、自分を見失わないようにするには、自分がやっていることをちゃんと理解しておく事が必要だと思う。システムの中だけに生きていて正気を失っていくと思うんです。ヘンリー・デイヴィット・ソローという作家がすごく好きなんです。彼は都市生活者で、政治のこことかやっている街の人なんですけど、森に家を建てて、森と街をめちゃくちゃ往復して生活している。行き来がすごく大事だったんだろうなって思います。

僕がことあるごとに思うのは、社会の全員が正気を失う可能性があるということです。最初から最後まで間違っている可能性がある。常に間違っている可能性があることを考えることで、やる気を出しています。

高木 村上さん、ありがとうございました。

日時:2024年10月5日(土) 17:30~19:30
会場:ちまた公民館



寄稿

レッツ滞在記

文：村上慧

新幹線で浜松に向かっていった。知的障害者向け福祉施設の「たけし文化センター連尺町」で、「ひとインれじでんす」という泊二日の滞在プログラムに参加するためである。自由席は混んでいた。電車に乗ることじたい久しぶりだったので、他人の体との距離の近さに慣れることができず、車両の連結部(トイレや洗面台のあるところ)に電車の揺れに押された大きめのスーツケースが、ドアにぶつかりながら飛びだしてきた。私は反射的に手を伸ばし、それをつかまえた。これ以上どこかに滑っていかないように、という親切心からである。しばらくして女がやってきた。私は「あ、これですか?」と尋ねた。

すこし言葉足らずだったかもしれないが、これを取りにきたんですか? という意味の、私なりに必死の表現である。すると女は、まるで自分の荷物から

盗みを働こうとしている不審者を見るかのように、私の足元から頭までを不快そうににらみつけ、そのまま無言で(相槌もなければ会釈もしない、まったくの無動作で)ケースの取手をつかみ、客室に戻っていった。

私は傷ついた。せっかく楽しく読書をしていたのに。普段そういうことは口にしないほうなのだけど、思わず「感じわるっ!」と悪態をついた。もし私が変な蛍光色の服ではなく小綺麗なスーツを着ていて、姿勢もよく、髭も生えてなくて、変な帽子も被ってなくて、さっぱり短髪清潔感100点満点のサラリーマンふうの見た目をしており、「もしかして、このスーツケースの持ち主でいらっしゃいますか? すみません、思わず受け止めてしまいました。では、よい旅を」みたいなせりふを、さわやかな笑顔と共に発することができていれば、あんな不遜な態度

を取られることはなかっただろう。私は明らかに、見た目と挙動によって差別を受けた。これだから電車はいやなんだ。乗ると絶対にいやなことが起こる。他人に対して疑心暗鬼になり、心を閉ざすこと。2024年、この国で働いて生きる能力とはつまり、電車でこういうことがあっても、自分をだまして平気なふりができ、何事もなかったかのように読書に戻ることができる



力。人に対して怯える力。誰かに声をかけられたら、無言で睨みつける力である、なんてことまで考えてしまった。

やがて浜松に到着し、もやもやした心を抱えたまま「たけし文化センター」の扉を開けると、足元の床でふたりの大人が寝そべっていた。畳とか板間とかではなく、コンクリートの床に直接である。そして、誰ひとりそのことを気にしていない。スタッフたちは同じ空間で打ち合わせをしていて、なんなら私が来たことにも気がついていないくらいの感じで議論に没頭している。この光景を見た瞬間、新幹線での出来事は吹っ飛んでしまった。冷たくて気持ちがいいから床で寝ている、ということなのだろうか? だとしたら、それはよいことだ。いちおう「失礼します」と断ってふたりを跨ぎ、私をこのプログラムに呼んでくれた高木落子さんに案内してもらって、奥へと進む。立ったまま斜め上を見つめ、何かに話しかけているひとや、チラシを延々と細長くちぎっているひとがいる。入り口近くの机には、国語辞典の裏表紙とカバーの間に、ハガキサイズの何かの書類やらメモ帳やらをパンパンに詰めた物体が机の上に積まれていて、その持ち主とおぼしき少年は絵を描いていた。色々な声があちこちから聞こえる。「おなかいたい」「ここにいてください」「まだおなかいたい」

階段で2階に上がると、カラーマジックで人の顔の絵をたくさん描いているひとや、一心不乱にスーパーファミコンのコントローラーを握ってゲームに興じているひと、そしてまたチラシをちぎりまくっている人たちがいる。高木さんはひとりひとり名前を教えてくれるが、ちょっと覚えられない。名前よりも先に、その挙動が脳に刻まれてしまう。ふだん人と接するときはまず名前を覚えるものだが、ここでは「動作」が先に目に入ってくるので、名前のような

概念的なものは後ろに追いやられてしまう。こんな経験は、ちょっと他ではできない。ギターを弾いているひとがいたので、なんとなく耳を傾けていると、眉間に深い皺を刻み、険しい表情をしているひとが近づいてきて、高木さんにペンを渡し、床に紙を置いて「いち、いち」と、なにかをお願いしている。高木さんは慣れた様子で紙に「1」と書く。それを見届けると今度は「かに」と言う。高木さんはカニの絵を描く。すると男は次のページを開き、また「いち」という。高木さんが「1」を描くと、今度は「イカ」と言う。高木さんがイカの絵を描く。するとまた次のページを開き……というやりとりを何度か繰り返しているうち、高木さんは痺れをきらし、「もうやだよ」と言って、「したで他の人にやってもらおう」と、男を連れて1階に戻る。私もついていく。

再び1階に戻り、とりあえずお昼を食べて落ち着こうと、高木さんが買ってくれていたカレーを食べる。カレーは辛くて、その日はとても暑い日だったので、私は汗だくになりながら、高木さんからレッツという組織や建物の説明を聞く。「名前がたくさんあってややこしいんですけど」と、「たけし文化センター」「アルスノヴァ」「レッツ」「ちまた公民館」などの名称を図解しながら、高木さんがわかりやすく説明してくれる。しかし集中するのが難しい。すぐその床ではまだ人が寝ているし、チラシをちぎりながら急に「ぱちんこ♪ パーラー♪」と歌いだし、そしてまた唐突に「パーラーってなんすか? パチンコパーラーってなんすか?」というひとなどがいるのである。情報量が多い。「情報量が多いというのは、こういうことを言うんだ」と、私は思う。どこを見ても主役がいて、「イベント」が発生している。群像劇みたいだ。

二日間のあいだ私はこの群像劇に巻き込まれつづけ、いま起きたイベントを消化しきれないまま次

のイベントが起こり、それが終わらないうちに次のイベントが目に入る、みたいな感じで過ごした。というか、そうやって過ごすことしかできなかった。ここで出会った人びとを以下に書き出してみる。

- ・「おはようございます!」とめちゃくちゃでかい声で明るく挨拶してくるひと。赤と黒のマッキーで、裏紙にちいさなぐるぐるをいくつか描き、それをじっと観察している。かと思うと、マッキーのほうを観察しはじめる。やがておもむろに日本地図らしきものを描きはじめたかと思うと「テレビ! テレビが流れていきますよ!」と、突然の実況がはじまる。私には、ここにテレビはないように思える。描き終えたマッキーは蓋をしてケースにしまい、そのケースもちゃんと蓋をしている
- ・私の手を触り、「おとうさん」と呼んでくれる少年。観察していると、いろいろなひとに「おとうさん」と声をかけている
- ・トランペットを常に唇にあてながら歩いているひと
- ・葉っぱをちぎって鼻に近づけ、香りを嗅いでいるひと。テイスティングするかのような動作だ
- ・チラシを同じ大きさのちいさな正方形にちぎり、一枚ずつビニール袋にいれているひと
- ・ずっとチラシをちぎる作業をしていたが、みんなで出かける時間になると「紙びりびりの作業はこれで終了なんで、もう出発時間なんで」と大きな声で宣言し、立ち上がるひと。でも直後に「まだ時間あるからもうちょっとやろうかな」と再開していた
- ・「わたしカニにとりつかれてたことがあって。すごいカニを新聞紙でつくったり、カニの絵を描いたりしてて」と言いながら鮭の被り物を作っているひと(高木さん)
- ・外を歩いていて、突然の屈伸を決めるひと。ノーモーションですばやく膝を落とし、すぐに立ち上がり、また歩きはじめる。予想がつかないから、後ろ

を歩いているとぶつかる

- ・ごはんを食べている最中、カルピスの原液とスプーンを手にやおらテーブルからすっと立ち上がるひと。スタッフから「なんでスプーン持ってんの?なんでスプーン持ってんの?」と言われている
- ・トイレのドアを開けると、体育座りが崩れたみたいな姿勢で床に座り、壁を見ているひと(三回目撃した)
- ・常にズボンが下がってくるひと。そのたびに両手でウエストをつかみ、ぐいっと上げている
- ・本を机の上に置き、表紙をたたきながら本に声をかけている、DANGEROUS ANIMALSと書かれたTシャツを着ているひと
- ・「だんご三兄弟」が流れるなか、マイクをもって歩きまわり「アウ!」「クウ~」「ジミヘン!」「ダ、ハンプストン!」「ばかだなあ」などとシャウトしながらジャンプするひと
- ・普段は利用者として過ごしているが、夜になるとスタッフとして他の(より障害の度合いが重い)利用者のご飯をつくったりもするひと

印象的だったのが、ワンピースが似合う女のひと。にこにこしながら近づいてきて、不意に手を伸ばして私の帽子をとりあげ、顔をぺたぺたと触ってきた。どきっとした。顔というのは、ふだん他人に触られることのない部位である。家族でさえ、顔への接触は緊張がともなう。すくなくとも初対面のひとから触られたのは、これが初めてだ。

触るという行為は、コミュニケーションの中でも最強で、問答無用な感じがある。他の利用者やスタッフたちも、お互いに手を握ったり、顔や頭を触ったり、仲よさそうにつつきあったりしている。たえず体の接触が起きている。触ったり触られたりすることが多い空間。何人かは私に対しても気軽に

手を握ってくるので、そういう惑星にきたような気分になる。そしてなんとなく、この星にいと健康になれるような気がする。誰かに触ること、それ自体に「嬉しさ」がある。

触るという行為の他に、コミュニケーションや、福祉のあり方についても、いくつか思ったことがある。

・利用者とスタッフが仲よ

さげに話したり触れあったりしている場面をたくさん見て、彼らが育んできた時間を見せつけられているようで、羨ましいと思った。「羨ましいと思っちゃいました」と、あるスタッフに話したら、たしかにそういう面はあるかもしれないけど、とはいえこれは「サービス業」で、利用者は「お客様」なので、私たちスタッフとしては相手にとって心地よいコミュニケーションを、仕事としてやっている面もある、と言われ、はっとした。たしかに「仲よさそうでいいなあ」なんて感想は、あまりにも牧歌的にすぎるかもしれない

・利用者とふたりきりの場面と、他にスタッフがいる場面とでは、自分の振る舞いが変わる。ふたりきりだったら、そこで世界が完結しているので、私も普段自分に(無意識に)課しているルールを取り払い、いろいろなコミュニケーションを試すことができる。いきなり歌ってみたり、寝てみたり、身振り手振りを交えて、相手と全力で向きあうことができる。しかしスタッフが近くにいると、途端に自意識が肥大化し、私は自らを一般常識という名のルールで縛ってしまう。おとなしくなり、利用者とのコ



ミュニケーションがぎこちなくなる。この感じは、英語を話すときに似ている。英語しか話せない人と一対一のとき、私はつたないながらも全力で相手にぶつかれる。文法や単語の間違いを気にせず、とりあえずなんでも口に出してみても、「とにかく何かが通じればいい」と聞き直ることができる。しかし日本語も英語も喋れる人がいる場では、私は自分が話す英語の間違いを気にするようになってしまい、本気でぶつかることができない

・たけし文化センター連尺町は、あえて浜松の中心市街地に建てられている。レッツのウェブサイトによると「重度の知的障害のある人たちが中心市街地に出かけ、トラブルも含めて、近隣のショップや、行き交うその姿を通して、まちに様々な影響を与えていけるのではないかと思います。障害のある人のありのままの姿が、人々の人生観を変えていくのではないかと考えています」とある。このようなコンセプトなので、たびたび利用者が失踪してしまったり、近隣でトラブルを起こしたりと、ある意味では狙いどおりのことが起きていた。とはいえ利用者が事故に巻き込まれたり、警察沙汰になったりするの

を防ぐためには、出入口を常時解放しているわけにもいかず、常にスタッフが目を光らせ、利用者が勝手に出ていかないように注意する必要がある。そこでドアに鍵をつけるべきではないか、という議論になり、結局それはつけられた。今では暗証番号を入れないと外に出られないようになっている。

ここは福祉施設なので、オープンしている時間帯は、利用者が失踪したり近所で問題を起こさないようにするという責任が生じる。とうぜん鍵をつけたほうが、その責任は果たしやすい。しかしそれは同時に監視でもある。

レッツとしては「監視」はしたくない、というジレンマがあった。

ここでいう責任とはなんなのか。なぜそのような責任が生まれ、なぜそれを社会全体ではなく、レッツという福祉施設が一手に引き受け、ジレンマに悩まされなければならないのか。たとえばこの社会の成り立ちがそもそも、障害者の存在を無視した上で設計されているから、という理由は考えられる。では誰の存在なら無視していないのかというと、これもわからない。もし誰の存在も無視していないのならば、私はもうすこし電車で心地よく過ごせるはずだが、そうってはいない

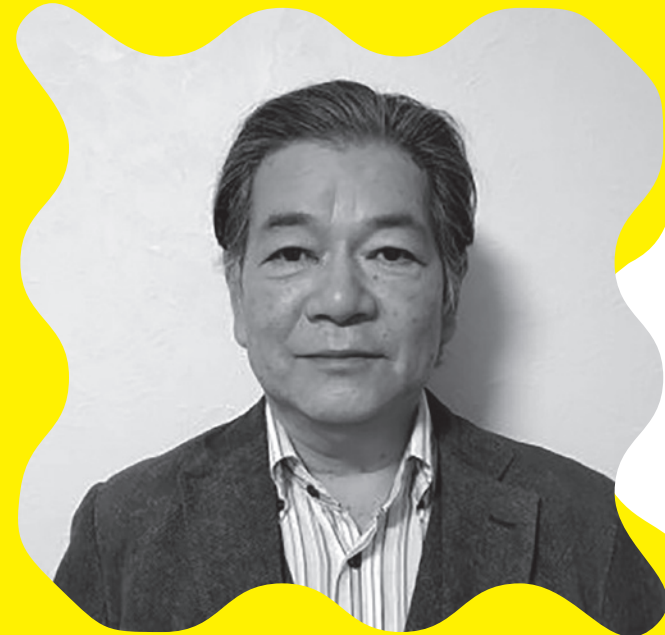
あるスタッフがレッツのことを「ピオトープ」と言っていた。たしかにここは独自の生態系が保存されているピオトープのような趣きがある。私たちはピオトープを守らなければいけない。しかしどうやったら守れるのか、なにをもって「守れている」と言えるのかはわからない。正解がないので、そのつど考えなくてはならない。ピオトープは閉じた生態系なので、新しい要素が入り込むと、それがどんな変化をもたらすのか予想がつかない。

そしてそれがよい変化なのかどうかも、時間が経

たなければわからないし、時間が経ってもわからないままのこともある。

そんな環境なので、別のスタッフから「映像が撮れる人に、一度レッツに来て欲しいと思ってる」と聞いたとき、それは切実な要望だなと思った。外からの視点をそのまま作品化できるような、写真や映像といったメディアを扱えるひとを呼ぶのは、よいことかもしれない。

とにかく最初から最後まで「イベント」づくしで、頭が働かされる材料を提供されつづけ、滞在を終えたあとはぐったりと疲れてしまった。先ほども書いたけど、どこか別の惑星に飛ばされていたようで、経験したものをどう消化すればいいのかもよくわからない。でも私は滞在を終えることができる。あの場所を離れられるおかげで、体験した出来事をまとめることができる。それは私の身近に、誰かのヘルプが絶えず必要なひとがいないからそうできているだけだ。生活は終わらないので、身内にそんなひとがいる場合や、あの場所で働いているひとたちは私のように「滞在が終わる」ことはない。そのうえ利用者はどんどん増えているという。港に着岸することのないまま、未開の海を走り続ける船のように、スタッフたちはずっと身を浸している。船内に浸水があれば何かで塞ぐことはできるし、人が増えたら部屋を増やすこともできなくはない。船首の先に見えるのは水平線のみで、陸に近づいているのか離れてしまっているのか、そもそも陸地があるのかどうかもわからないが、日々起こる問題を解決しながら進むしかない。風が吹き、夜が来て、生活が続くかぎり、波を超えていくしかない。平行に直線的にしか進まない電車とは違う。たった二日間だけの滞在だったけど、しばらく船酔いが抜けそうにない。



PROFILE

1957年、大阪生まれ。専門は、看護と臨床哲学。元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授。現在はNPOココベリ121理事。高校卒業後、精神科・透析治療・老人介護の現場で看護師や介護士として働く。一方で関西大学の2部で哲学を学び、後に大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。現在は「認知症コミュニケーション」の研究を行いつつ、哲学カフェやダンスワークショップなどの活動にも取り組む。著書に『となりの認知症』（ぶねうま舎）、『「一人」のうらに』（サウダージ・ブックス）、『増補 ためらいの看護』（ハザ）、など。共著に『ケアってなんだろう』（小澤勲編、医学書院）など。

第4回
ゲスト

臨床哲学プレイヤー

西川 勝 さん

聞き手：尾張美途

DAY 1

尾張 通常的意思決定支援会議には、普段の支援に関わっていない外部の人が入ることはあんまりありません。なぜ「いしけっていしえんかいぎ」とひらがなかというと、2018年に、外部の人が入っていろいろ討論をして、そして必ずしも答えを出さないといけないというわけではなくて、みんなで意見を出して考えていくということが主な目的の会議をしました。それを、普通の支援会議とは違う、アルス・ノヴァ流の支援会議ということでひらがなで「しえんかいぎ」としました。それもあるって、「いしけっていしえんかいぎ」としました。それにどうしてもたけしくんの「いしけってい」というと、たけしくんの石遊びが頭に浮かんでしまったので、「石」も絡ませながらひらがなにしました。というのも意思決定支援というのを考える上で、たけしくんの石遊びって外せないものなんじゃないかなと思ったんです。普段、たけしくんは散歩のときも石を選んで取っていくし、小学校に行くときもいろんな子がたけしくんに石を持ってくるんですね。すごく大きい石だったり、コンクリートのかけらみたいな小さな石だったり、中には枝を持ってくる子も

いて、たけしくんが石を鳴らして遊ぶタッパーの中に入れていくんですね。たけしくんはそれをパツとはじかずに、ただひたすらに鳴らしてるんですね。それも彼らの意思だなと思って。そういう石遊びとリンクするところがあるなと思って、ひらがなのタイトルにしてみました。

西川勝さん自己紹介

西川 西川と申します。レッツとは10年くらいの付き合いです。もう67歳なんですけど、65歳になってからいろんな病気が分かってきまして、末期腎不全、透析をしないとイケない。それから脳梗塞。それを調べているうちに肺がんが分かりまして、ステージ4ということで、半年も経てば命に危機的な状況にもなるということです。病人になってますけど、元々は看護師です。『ためらいの看護』なんてことを言っても本も書きました。あまり自信満々の看護師じゃなくて、やる度にこれでもいいのかなみたいな。ずっとためらい続けるみたいな人間なんですけど。ためらいの看護師が戸惑いの患者になったということです。元々僕は精神科にいましたので、認知症の人のことなんかもよくやっていたんですけど、認知症の人の家族の会

の世話人をしていました。で、認知症ケアの研究者ということでしばらく大学の方にいました。その僕が脳梗塞になって、右脳の血流がかなり低下しました。スペクトっていう検査を見たら、脳血管性の認知症って診断がついてもおかしくない感じでした。それから腎不全も、元々僕は血液透析の看護師でした。自分が透析患者になるとは思っていませんでした。あと、ターミナルケアも結構一生懸命やっていたんですけど、きっちりと肺がんのステージ4になってですね。自分が看護をになってないのは統合失調症だけという感じです。残念ながら統合失調症は才能に欠けて今のところまだお目にかかっていません。

いわゆるケアの現場にずっといながら、何かためらっている、考え続けている。答えはないんですね。で、答えがなくても、生きていける場所があるんですよ。哲学です。簡単に答えを出しちゃうと哲学にならないんで。答えがあるのか分からない、でも考える、というのが唯一許されるのが哲学です。臨床哲学という、大阪大学で始まったんですけど、人の話を聴く哲学がしたいと鷲田清一という人が言い出したんですけど、聞いているだけじゃ何を言っているか分からないですよ。でもそれが自分がしたい哲学だということで。臨床哲学に社会人になってから入って、それ以降ずっと臨床哲学を自分の立ち位置として活動してきました。だから、自称、臨床哲学プレイヤー。臨床哲学という学問のすごい知識・技術を持っているというわけではないです。臨床哲学は一言で言うと、一人では絶対できない哲学、相手がいる哲学。今日のいしけっていしえんかいぎも臨床哲学プレイヤーの立場から、みなさんと一緒に考えていきたいなと思います。よろしくお祈いします。

たけしさんの紹介

尾張 たけしさんのことをよく知らない方もいらっしゃると思うんですけど、28歳の男性ですね。あとは側弯、重度の知的障害、自閉症。あと重いてんかんがあります。今回のテーマは「てんかんの手術をするのか?」です。

そもそも「意思」も「決定」も何か分かっていない

西川 今日僕は意思決定支援会議の知識・情報を伝達するというよりは、一緒に考えたいと思っています。まず分からないことをはっきりさせた方がいい。分からないことが何かということが分かると、分かりたいと思いますから。まず、「いしけっていしえんかいぎ」とひらがなで書いてありますけど、漢字のテストでどう書くのか。尾張さんは「石」と書いたわけですけど、これは×にされますね。もう一つは「意志」、それから「意思」。そもそも「いしけっていしえんかいぎ」と言われたときにどっちのことか。「意志」と「意思」の違い、ちゃんと言えますか。これは行動に結びつくようなものになっているんですね。

もう一つは「知情意」。人の心の働きは、大きく分けると、知・情・意に分けられるってよく聞くんじゃないですか。これら3つは綺麗に分かれるかっていうと、そんな綺麗には分らないですよ。3つが渾然一体となって人の心を形作っているわけです。意思決定支援会議と言いながら、意思だけを、人間の精神の中の「意」だけをポンと取り外して議論することができるのかというところがちょっと、ん?って感じです。この知情意という3つが複雑な絡み合いをしながら人間の心をや行為の根っこにあるのに、「意思決定支援会議」というのは「意思」だけを特別に議論できるように成り立っているんですね。意思決定支援会議のガイドラインを見ると知・情の部分もある程度は配慮しているようになってるんですけど、知・情をしっかり考えずに意思だけが独立して存在するようにした途端におかしくなっちゃうんです。

それに、知も情も心ですけど、体抜きにして心はないんです。体っていうのが抜けているんです。だから、身体という議論を抜きにして、いわゆる精神機能の一部の意思というものを「決定」するという話。「決定」とはどういうことなのか。意思とは何なのかを議論せずに「決定」ということが可能かどうか。それは考えてみれば分かるわけです。みたいな感じで、本当は分からないことがいっぱい含まれている。意思決定支援会議と言われると、なんとなく、相手の意思、やりたいていという気持ちについて決めるってということだよ。それをみんなで決めて、この人のためだって大きな顔して言えるような決め方すればいいじゃないか、みたいな証拠を示すやり方をしようとする。そのためには、厚生労働省が出したガイドラインに沿ってやろう、国が決めたものなんだから、という形で手続き論に話が進んでしまう。でも、本来は意思についてよく分からなかった、決定できるものなのかどうかもよく分からなかった。抜け落ちている議論がたくさんある。それを、分からないことがたくさんあるということをまずは自分の中にしっかり留めておいて、いろいろ議論していきたいなと思います。

今日の「会議」は「私の会議」ではなく「私たちの会議」

西川 それからもう一つ。今日の会議は「私たちのいしけっていしえんかいぎ」と相談して決めただよね。普通、意思決定というのは「私」が主語になります。「私たち」が主語になることはほとんどない。でも「私」と「私たち」というのはどう違うのか。「私」が複数いれば「私たち」になるのか。「私たち」の「たち」には一体何が含まれているのか。考えてほしい。単なる複数なのか。それとも「私たち」が複数ある中の共通の属性で区別するのか。例えば「私たち日本人」と言うと、日本人じゃない人は「私たち」から外れてしまう。みたいな形で、何かの縛り、例えば属性、能力、所属している組織、そういうも

ので「私たち」を議論するのか。それとも向いている姿勢、例えば嗜好性において議論するのか。「私たち」の「たち」の共通性を一体どこに求めるのか。「私たちのいしけっていしえんかいぎ」で今日僕たちが議論するときの「私たち」が一体何なのかというのをまず考えてみたいと思います。それから今日はたけしくんの事柄について話し合うわけですけど、本来はたけしくんの自己決定を尊重する。じゃあ、「私たち」というのは、たけしくんとういうところで共通点があるのか。「私たち」としてここに参加しているのか。いや、たまたま来てるだけというのか。自分はたけしくんの直接の介護者ではないけど、障害者に対するケアということで常に自分の仕事として考えているという人もいるかもしれない。自分が「私たち」の一員としてこのしえんかいぎにどういう構えでいるのかを考えてほしい。そしてたけしくんのしえんかいぎに関わったときに、関わったことによって自分はどういうことを引き受けるのか。いしけっていしえんかいぎに参画する自分の意思を考えてもらいたい。

本日のいしけっていしえんかいぎの課題

西川 今日はものすごく具体的な課題が与えられているんですよ。

尾張 そうですね。てんかん手術のことです。たけしさんはてんかんが頻繁にありまして、硬直して尻餅をついたり後ろに倒れたりすることがあって、それだけでは命に別状はないんですけど、転倒によって危険な状態になりうることが支援中に頻繁にあります。これまで薬を調整してきてはいるんですけど、パタンと腰をついてしまうようなことが続いていて、今までかかっていた先生のところからセカンドオピニオンということでてんかんセンターに行って、手術するという方法もあるよと言われました。それは、脳梁という右脳と左脳を結んでいるものをカットすることによって硬直して倒れることを減少させる効果があるという手術の提案でした。すごい効果が出るのかというのは人によって違ったり、手術による感染症などのリスクもある。ただ今までよりは大きく硬直を起こすことは減るよということでした。

で、今は薬を変えて若干落ち着いてきていて、様子を見ましようということになっています。手術では麻酔を使ったり頭を切ったりボルトを埋め込んだり、体にも負担がかかる。それに、私たちはいろいろと考えているけど、たけしくん自身はどうなのか。

患者の権利が蔑ろにされてきた医療

西川 僕も脳梗塞なんで、普通は手術を勧められるんですね。で、僕は断りました。もう末期癌なので、手術したところで3ヶ月で死ぬかもしれないし、そんな頭を割る気ありませんわということで。それでやめでおきましょうということになったん

ですけど。基本、医療は患者の同意なしに手術することはできないんですね。ここで、『選択の科学』という本を紹介したいと思います。この中にですね、こんな事例が紹介されていました。「1905年に衝撃的な事件があった。ブラットという名の医師が、てんかんを患っている女性患者に簡単な手術をすれば病気が治ると告げた。だが、患者が麻酔で眠っている間、ホルモンレベルを安定させ、発作を抑えるという目的で、子宮と卵巣を無断で摘出してしまったのだ。医師は信頼を著しく侵害したとして訴えられ、有罪判決を受けた。」まあ当たり前ですね。「しかし、患者の意見や自己の身体に対する権利がこのような形で無視されるのは、当時珍しいことではなかった。第二次世界大戦後になっても医師たちは勝手なことをやり続けた。」といろんなことが書いてあるんですけど、これは僕自身の経験でも山ほどあります。精神病院に勤めてましたので、優生保護法の適用になるんですね。医療というのはある意味、医療者側が正しいと思ったことを患者の同意なしにやったりする。これはパターナリズムって言います。これはヒポクラテスの時代からあります。医者が父親、患者が子どもなんです。子どもは知識もなければ判断力もない。子どもにとって最善のものは何なのかということ判断して実施できるのは父である医師であるということで、パターナリズムというのは親が決める、父親が決めるということなんです。これがほとんど1970年代くらいまでずっと続いてたんです。僕は癌だということはあっさりと病名告知されて、予後の告知までされましたけど、僕が看護師をやっていた頃、僕がターミナルケアに関心を持ち始めた30年前では病名告知されていません。癌だと言わずに癌治療をするので、嘘であるわけですね。嘘をついた関係で患者との看護関係、医療の関係が成り立つのか。それは無理やり成り立つんです。患者は嘘をつかれているとわかってても、医療なしでは生きられないから我慢する。そんな時代が長く続いたんです。でもそれではあんまりだということで、患者の病気の情報は患者の財産だ、だから患者に渡さないといけなくなった。これは患者の運動が実を結んでこういうふうに変わったわけですけども、一方で、日本の医療、特に精神科医療は患者の人権を無視すると、国際的には強烈な批判があったんですね。今回の意思決定支援もその流れにあります。障害者の権利擁護の条約に日本は批准しているんです。批准したにもかかわらず国内の法整備をしてない、ということやと国連から非難された。それで慌てた厚生労働省や国の役人たちが、法整備、ないし実施していますということを国際社会に証明するために一生懸命やっているわけです。だからガイドラインを作って、書類の山を集めようとしている。ケアの中にある嘘やごまかしをなくして、本当の意味で、対等な人間関係で「私たちの」と言えるような介護・福祉・医療が実現するた

めに考えているのではなく、行政責任を全うするという形で始まっているわけです。言ってみたら非常に動機が不純。でも、それでも全く情報なしに医師の思い通りの医療を受けていた時代よりはちょっとマシになった。時代はいい方向に流れつつあるかもしれない。でもこれを本当に自分たちのものにしないといけないというときに、意思決定支援会議のありようにみんなが参画する意図や構えがそれを保障するんです。意思決定支援会議の中身や手続きは保障してくれません。会議に自分たちが関わるということにどういう意味があるのかを今回は考えたい。

意思決定支援会議に 家族が不在であることをどのように捉えるか

西川 特に僕が思うのは、普通ならば必ずいるであろうお母さんがあえて参加されていないことです。このことをみんなはどんなふうに捉えるのかっていうことを考えてもらって、少しずつ意見を出してもらいたいと思います。いきなりは難しいかもしれませんが。例えば僕の妻にね、話したんですよ。自分の子どもの病気について、母親である自分にとっても、自分の子どものことだからこそ決定しにくい。生死に関わるような重大な決定を、我が息子であっても、息子じゃない自分がするっていうことの重責に耐えかねない。だから誰かに任せたい。本当なら、ちゃんとした医者なら、一番分かっているのは医者なんだから医者 に任せたらいい。でも医者は今、引き受けてくれないわけです。パターナリスティックなところから降りちゃって、あんたが決めなさいって丸投げしてるわけですね。情報をあげます、分らんかもしれないけどっていう形です。で、やっぱり母親やから見なきゃいけないって言われた時に、当然その決定に参画した親がその後も面倒を見るっていうことが前提になっているわけです。そういう人間だから意思決定を代わりにしてもいいよっていうのがみんなの理解なわけです。そうすると、母親はそういう介護のキーパーソンから離れることができない。その意思決定支援会議に母親として、キーパーソンとして参加したらもう降りることができなくなっちゃう。そうすると親なき後の介護っていう問題を自分がますます深刻なものにしてしまう。その時に、親はいつまでも見れるわけじゃないんだから、今見てくれる人たちが関わることによって、その人たちが親なき後を引き継ぐっていう構えで、会議に参加したらそういう風になるんじゃないか、どんどん広がっていくんじゃないか。親が会議に出てたら、あくまでもやっぱり大事なことは親の決定を優先してやろうってなる。やっぱり介護するという責任においても親が1番っていうふうになって、あとは単にアシストするだけになって、周りの人たちがケアの主体にならない。だから、それこそ自分の息子の世話を世間に広げる、私じゃなくてもこの子は生きていけるっていうような社会を作るためには、私がいけないことの方が大切だと考えられるのでは

ないかと僕の妻は言っていました。母親として考えると、最後まで面倒を見たい、でも自分も限りのある寿命を持つ人間なんだから最後までは見れない、その時に他人こそが大切になってくる。「他人たち」が大切になってくる。誰か1人じゃなく、いろんな人たち、親でもなく兄弟でもない人たち。だから、できるだけ多くの人たちが意思決定支援会議に参画すればするほど、その人をその後を支えていく人たちの層の厚みは広がるはず。しかし、現実には、意思決定支援会議の時にはその親や兄弟という重要他者を入れないというガイドラインはないです。むしろそういうのを絶対外しちゃいけないというふうになっているのが普通の考えなんです。今回あえて翠さんは自分は参加しないという道を選んだわけですけど、その時にこの支援会議に参加された親以外の人たちに一体何が託されているのかということ、受け手としてちょっと考えてみてもらいたいなとまずは思ってます。

会議には上がらない日常的意思決定 ―たけしさんの金髪

尾張 あと、大きな決断をする時にやっぱり意思決定という話が出てくると思うんですけど、西川先生がおっしゃったのは、大きい決断だからすごく悩んでるけれども、今までたくさんのことを意思決定してきたはずだと。で、それを見つめ直す、思い返してみることが今の決定に繋がっているはずだっていうふうな話もありました。

西川 僕、1つ聞きたいのはね。僕ね、金髪にしたいなって思ってますよね。やったら似合うかもしれないと思うんですけど、意思決定できないわけです。今の家族、今の僕の知り合いでは、その意思決定支援をしてくれる人が皆無なわけね。でも、たけしくんは鮮やかに金髪になって、クラブとか、金髪が似合うところに行ってデビューされてるわけでしょ。これ、すごいなと思って。だからあれもね、言ってみたら、脳梁切断術と同じ、身体に対する変化ですから。身体そのものも変わるし、生活も変わるし、人生も変わるわけです。あれはたけしくんが金髪にしてほしい、あそこに連れて行ってって言ったわけではないと思うんですね。きっと周りの人たちが意思決定支援をしたと思うんですけども。その話、是非聞かせてもらいたいです。

尾張 あの金髪に関しては、主に私とテンギョークラさんという方と一緒に決めてですね。みんな、今は美容室に来てもらって切ってますけど、その時にみんな大体坊主で真っ黒なんですよ。で、まあ、通常の若い男性だったら、私もそうですけど、1回は茶髪にしたいもんじゃないですか。それこそ利用者さんの坊主だって、誰が決めるのって言ったら、やっぱり親子さんなんですね。

西川 そっか、そういうことね。

尾張 そう。茶髪はたけちゃんだったら絶対似合うと思って、

私は茶髪を勧めたんですけど、テンギョーさんは絶対金髪がいいと。そういう話し合いをして、一応その時は、お母さんに「金髪にしますけどどうですか。絶対似合いますよ」と話をしたんです。それで、起きてる時だとたけしくん、絶対嫌がって薬品が散らばっちゃうから、寝てる時にやりましょうとなって、「お母さん、たけしくんが寝てるタイミングでやらせていただきます」というふうに言って。だからその時は、今日やりますとは言わずに、寝てて今だになっていう感じでやったんですね。一応お母さんから金髪にする脱色材のお金を出してもらったんですね。でも、金髪の息子にはお母さんはびっくりしてた。だいたいショックを受けていて。事前に話をしてたものの、やっぱり金髪の息子には親御さんはびっくりするんだなっていうことをその時に私は学んだんですね。

選択を迫ることが負担になる場合もある

西川 それって面白いですよ。面白いだけじゃなくて、どういう意味があるかっていうことを考えていきたいんですけど。できるなら人に決めてもらいたい、自分で決めたくないって思う事柄もあるわけですね。今回、僕、病気になっていろんな意思決定を求められることがたくさんありましたが、自分で決めたくないっていうことが山ほどありましたよ。ていうか、医療の場合、選ぶってインフォームドチョイスって言ってるけど、嘘です。するかしないかだけです。しなきゃ病院から出ていく。癌治療でも、嫌って言うとお世話になりました、出口はあちらですみたいな感じになっちゃう。でもその時やはり「します！是非してください」っていうふうにはならず、嫌だと言わなかったっていう形での意思決定が通ってしまうんです。だから、具体的には何をしたいっていう意思決定だけじゃなくて、したくないっていう意味の意思決定もあるわけです。

それに、ものすごい多数の選択肢があって、それを全部決めなさいと言われた時に、それは自分の自由と思うよりも、かえって猛烈な負担、過剰な負担に感じられてしまう。ジャムの試食が20何種類ある売り場と6種類しかない売り場、どちらの方がジャムの売れ行きが良かったかって、6種類の売場の方がたくさん売れる。マジックナンバーってあって人間の認知的な能力っていうのは、7プラスマイナスぐらいしか判別できないわけです。6つだとこの中からどれかっていうふうに選ぶことができて、自分が選んだと思えるわけです。20何種類あると自分が選ぶためにはものすごい比較対象の努力をしないとイケないし、よしんばやったところで本当にそうだったのかなと自分の評価に自信が持てなくなってしまう。自分の無力感とか自分の無能感を思い知らされてしまう。自己決定が私に対して与える悪影響っていうものに、あまりにみんな無頓着すぎる。選択肢が多ければ多いほど、その人の選ぶ自由が拡大すると我々は勘違いしてる。それが資本主義的な経済と相まってどんどん選択肢は増えるんだけれども、でも選択肢が増え

たことによって本当に満足度が上がっていくのか、自己決定感っていうものが強まっているかというところじゃない。ある意味、ある程度絞られた選択肢になった方が自分が選んだんだっていうような自己決定能力に関する自信と、自分が選んだんだっていうような気持ちが強まってくるんですね。で、実際に行動に対して満足度が増えるっていうのは社会心理の中で次々と明らかになっていく。

そうやって考えるとですね、選択を自分がしなければならいというのは一種の脅迫観念になるのかもしれない。個人主義っていうか、個人が自己決定、自立する個人でなければ意味がないとするような、アメリカ的な価値観に生きてる人間にとっては、選択肢がたくさんあろうと何があろうと、自分が決定することが1番意味があるっていうことですけども、そうでない場合、自分が決定しないということの方が知恵ある行動なのかもしれない。誰と結婚していいかわからない、もう恋がしたいわ、結婚したいわと思ってるけど、いい人がいないのよっていうようなことを考えないで、仲人さんに勧められる、お任せするみたいな。昔はそうだったわけですけど。今は恋愛してお互い結婚しようっていう両性の合意抜きにした結婚って意味ないと思われがちですけど、昔の見合いはそうではないです。タージマハルっていうインドの宮殿ありますが、あれは王様が見合いでもらった妻の思い出を忘れないために作った宮殿なんですね。もう世界で1番愛してる、でもそれは見合いで決まった。要するに、そういう結婚みたいな人生を大きく変えるイベントであっても、自分の決定に重きを置かない文化っていうものもあるし、幸せになるなり方も、結婚したことを幸せのゴールと考えるか、結婚してからの2人が幸せを作り上げていくものだっていうふうに、後に物語を持っていくのかで、幸せの位置づけまで違うわけですね。だから、単純に選択を自分がすればいいんだっていう前提も若干疑ってかかる必要があるかもしれない。

この時に、たけしくんができない選択を、周りが考えることに一体どんな意味があるんだろうとか、お母さんがいないのに考えてどうするんだろうっていうことを考えるだけではなくて、決定を依頼される、選択を依頼されるっていうことの意味をどういうふうに分たたちが受け取るのか。他者の人生に関わる決定や選択を委託されるわけですね。委託された自分は、本来自分はする必要のないことをしているのか、それとも他者の選択を依頼されたっていう何か1つの大きな出来事が自分の中で今起きつつあるのかを考える。自分が他者とういうふうな関係の中で生きるのかっていうことは皆さん自身に問われる場合にもなるわけです。だからそれに対する答えを考えないといけない。たけしくんがどうするこうするっていうこともものすごく目に見えやすいような結論のように思えますけれども、その前に自分がこれにどの構えで参加するっていうことをちょっと考えてもらいたいんですね。

僕は相手の苦しみていうものをなんとか和げて、できるだけ喜びを与えるっていう仕事ケアだと思っています。選択することが本人もしくは家族にとって自由というよりは非常な負担であって、その後の後悔に継ぐ後悔やためらいをずっと感じ続ける人生がもう目に見えているような選択を本人に渡すよりは、それを引き受けましょう、私たちが考えましょうってすることはもうケアになるというふうに思っています。ケアする人間として、支援という形ではあるけれども、他者の意思決定に入っていこうとするのかどうなのかいうことですね。ケアとこういう意思決定支援との関係性をどう考えるのか。自分とたけしくんを切って考えるのか。それともたけしくんと自分とは社会の中で生きているっていう私たちの「たち」の共通点をやっぱり持ってるんだっていうふうにして、私たちの「たち」としてそれを引き受けるのか。ここはね、とりあえずは考えてみないといけないかなと思います。

てんかんの手術は本人のためなのか、 支援者のためなのか —本来は両者は切り離すことができない

尾張 私はたけしくんと一緒に過ごす側として、てんかん手術を考えるとつか。やっぱり普段たけしくんと接していて、いつどこでガクってなるかわからないっていうのを考えながら散歩したり、遊んだりするというのがすごく難しいつか。やっぱり急にガクってなった時に支えられないから、階段の登り降りとかもビタつくっついてないと不安なんですよ。でもそれってたけしくんはやられたいのかな、絶対嫌だろうなって思うんですよ。私自身がそういうのが嫌なタイプですから。ずっと触って誰かついてるっていうよりも、たまには伸び伸び過ごして、行ったり来たりしながら、それをちょっと離れてただ見守るっていう時間は彼にとってはいいんじゃないかなって思うので、手術に対して賛成とまでは言わないですけど、なんとかかなるといいなと思っています。

西川 たけしくんの状態がどうなるかっていうことももちろんあるけど、手術によって自分とたけしくんとの関係、ケアのあり方がいの方になるだろうということですね。今のままだとこれはたけしくんにとって私にとってもいい関係とは思いがたいうってことですね。

来場者 今のすごく面白かったんですけど、ケアしてる者が介護者として、転倒するというリスクを負いたくないから、手術してもらったら少し私たちが安心できるというふうに聞こえてしまいました。

西川 リスク管理のケアなのか、それとも創造的なケアなのか。で、今はどうしてもリスク管理の方に重点を置かざるを得ない状況にある。でも、てんかん手術をすることによって発作が軽減すれば、リスク管理の責任というものを軽減してより創造的なケア関係に注力できるっていうふうにも理解でき

ます。

尾張 自分の不安を減らしたいから手術させたいんじゃないかっていうふうにも取れるってことですね。

西川 うん、それはあると思います。あのね、たけしくんの病気が治るっていうのは、たけしくんだけが良くなるんじゃないくて、周りも楽になるんです。確実に。たけしくんと周りの人は切れてないですね。あくまでも切れてるんだと考えると、関係がなくなっちゃって、辛くなるのも良くなるのも彼だから、彼自身のことであって、彼が彼だけで決めれるべき問題だっていうふうになっちゃうんです。彼が病気になるれば周りの人も普通ではられない。彼が痛めば僕たちも痛むっていう関係なら、彼が痛むことと自分が痛むことは同程度に深刻な問題になるわけです。

来場者 手術そのものの有効性とかに対する評価の問題だと思うんですよね。僕の中では今、手術そのものが病気に対しては効果的に働くかもしれないけど、彼の人格そのものに対してもメスを入れる可能性があるんじゃないかな、そういうことも含めて考えないといけないんじゃないかなと思っています。

生きる次元には生命・生活・人生があるが、 患者にとって特に重要なのは人生

西川 lifeっていう英語がありますが、日本語に訳すと生命とも訳せるし生活とも訳せるし人生とも訳せる。僕たちが生きるっていうことの次元にはこれがあるわけ。生物学的な生命の情報から言うと、てんかん発作っていうのは脳の局在的な発火が全体に及んで、それが原因で全身の強直性につながるというレベルの話ですね。それから、手術で脳梁離断術をするっていうのはこの生物学的生命のところにもで介入する対処する仕方。これについての専門知識は医学で、実施者は医療者です。でも、生命だけでなく、人は生活するわけです。生活というのは、生命があることは当たり前なんです。でもそれがイキイキと活動している。生きるっていうことの中に暮らしが含まれるんですね。暮らしがどういうものなのか。でも日々の暮らしだけでなく、人生としてどうなのか。言ってみたら、生命的に問題ない、衣食住にも困ったことはない、でも人生として自分は喜びのある人生なのか。自分の人生を肯定的に考えられるのか。もしくは他者から認められるのか。これによってすごい変わってきますよね。生命は生きてるか生きてないかです。これは自然科学的な自然法則に従います。生活は人間社会ですから、社会の慣習だとかそういうものに非常に影響を受ける。でも人生というものは一体何なのか。たけしくんがてんかん手術を受けて失敗した、発作は減ったけど生活のレベルは変わらなかったという時に、やっぱりてんかん手術したことは人生で間違いあったと思うのか、人生に無駄はないと思うのか。一生懸命介護してもちっとも良くならないという時に、関わったことをどう思うのか。

で、特に生活の部分っていうのは、「たけしと生活研究会」とかで色々議論されてるんですけど、今回は、生命の部分と人生の部分に関わるような問題設定になってきているわけです。でも生命のところに関しては僕たちにはできないですね。脳外科の専門医でもある程度の確率でしかできない。今いろいろガイドラインで出されてるのは、要するに治療の基本的なものに即した治療方針なのかどうなのかを見るため。やっぱり専門知識でもって医療からの提案については評価すべきやと思ってるんですけど、それは素人にはできません。知情意のやっぱり知の部分というのはかなりの巧妙なものなわけです。今回の場合でも、脳手術についての医療上のメリット・デメリットは、医者が手術するかしないかを決める時の判断にはなるでしょう。で、大切なのは何かって言ったら、やっぱり生活、人生のところ。そして一番影響が長引くのは人生です。人生において自分は誤ったって思うと、もう取り返しがつかない。だって1回だけです。でも生活は毎日あるわけです。生活って変わることできるんです。

直感的な判断と熟慮による判断

西川 選択の締め切りが近いのか遠いのかでもだいぶ違いますよね。で、判断する時にも直感的な判断っていうのは、大体自分の経験が根っこにあるわけです。でも、熟慮っていうのは論理的にやるので、あれこれ情報を調べてきて、いろんな方面から考えるので、すごい時間かかるんです。でもさっき言ったように、選択肢が増えるので必ずしも正しいとは限らない。人間の認知能力を超えてしまう場合もある。でも直感の場合にはうまくいった経験が根っこにあるので、なんとか生き延びる本能みたいなもんですね。それは大抵間違いないわけです。



その積み重ねで生き残ってきてるわけですから。そういう直感的な判断と熟慮による判断のどちらが適しているのかっていうことも難しいですね。

選択はアート —新しい時代や社会を作るきっかけになりうる

西川 選択と意思決定は似てるようで違うんですね。で、選択に関しては科学が成り立っているようなものが多いですね。『選択の科学』には、「選択っていうのはアートなんだ。なぜなら選択は想像するから。」というようなことが書いてあります。ただ、選択にはバイアスがあって、する選択としない選択がある。例えば、手術をする選択としない選択では、同じぐらいのリスクを示されたら、論理的根拠じゃなくてバイアスで選択する傾向が人間にはあります。だから、人間が考えて自分の意思で決めてるように思っても、様々なバイアスの影響の中で人は選択しているので正しいとは限りません。

例えば、ALSという病気があります。呼吸筋が麻痺した時に人工呼吸器をつけるかつかないか、患者さんに自己決定してもらうわけですが、しないっていう人が結構いるんですよ。人工呼吸器をつけたら家に帰る。家に帰ると家族が面倒を見ないといけないけど、家族にそんな迷惑をかけられない、家族も私にはできませんということで、人工呼吸器をつけませんっていう決定をした人がいるんですね。で、その人を支援する人たちが集まって、結局そのALSの人を病院から退院させて、地域で1人暮らしを始めさせました。全身性障害ですから24時間1年365日介護・介助が必要です。そのために行政と掛け合って、ヘルパーを組織しました。みんなボランティアです。その時にケアワーカーたちは、人工呼吸器をつけないってあなたは言った

けどこうやって病院から出て自立生活を支援するためにみんなが集まってきた、人工呼吸器つけないっていう判断はないでしょうって迫ったわけです。それで、彼は病院から退院して、離婚して1人暮らしになって、自分の友人たちで組織した介護のグループで1年365日1日24時間の介護を受けながら、今単独で自立生活をやっています。だから、自己決定を変えたのはケアワーカーたちです。それも1人2人じゃなく、組織として、ALSの在宅を支援するNPOを作るという形

で将来的なことも約束して実際に活動し始めるわけです。社会を変えていく、その先頭に立つのあなたです、人工呼吸器つけませんなんてこと言ってる場合じゃありませんっていう形で。そのために家族と別れるという大きな決断も彼はした。それに伴って周りの人たちが単に介助するだけじゃなくて、自分の人生も変わってくるわけです。それはもう人生だけじゃなくて、社会まで変えていくような力になりますから。だから選択はアートだっていう、1つの選択が新しい人生、新しい社会、新しい時代を作るようなきっかけにもなりうるんです。単純にサイコロをふって奇数が出るか偶数が出るかなんていうような直近の結果にだけ目を奪われるんじゃないくて、それが及ぼす様々な影響みたいなもの、可能性みたいなものについての想像力を働かすとやっぱりこれはアートだなという感じがします。アートを基幹に置いているレッツにおいて、選択をアートとして考えて、想像的に捉えるような見方っていうのもあっていいんじゃないかなと思いました。

選択のプロセスと家族の納得が重要

レッツササキ 今は手術しないっていう決断をしたので、喫緊の選択を迫られる問題じゃなくなったんですけど、僕がたけさんのてんかん手術の選択について一番考えたことは、それどう選ぶかっていうこと、その選ぶプロセスをどうするかが大事だっていうことでした。家族とかあるいは特定の支援者だけが決めちゃうんじゃないことをどう作っていけるのか、いろんな人と決めなければいけないんだっていうことをすごく思いました。ただ同時に、家族がある程度その選択に納得してることも必要だなと思って。というのは、たけさんの人生はこれからも続いていく、たけさんが介助者たちや友達と生きていくことはこれからも続いていくんだけど、その時にここでした決断を家族が納得感を持ってないでってことは、今後、たけさんがいろんな人と関わっていく人生にあんまりよく影響しないだろうなと。家族もそこでいろんな人とともに納得するってことが大事なんじゃないかと思いました。あとたけさんの友達的な人も一緒に決めないといけないなって思ったんですけど、僕の反省でもあります。なかなかそういう人を巻き込んで話をするって機会を作れないまま、ある一定の答えが出たという現状です。

準備や操作のための選択よりも 今どう対処するかのが構えが重要

西川 僕自身は手術なんかしなくていいじゃんと思ってるんですよ。僕、看護師なので、今てんかん発作が起きても対応するし、命に危険が及ぶことはないように看護します。だからいつ起きてもいいよと思います。起こさないために予防的にずっとそばにいたとかはしませんし、そんな予防的に手術なんかしなくていいじゃないかと思ってますね。それから、その選択

が幸せを約束するのかっていうよりも、どんなことがあっても幸せにしてみせる、てんかんを起こしても死なせない、ケアし続けるっていう構えがあれば、別にあれこれ悪いことを考えてなくてもいいかなと思ってですね。てんかんが起きた時にどう関わるかが大切で、てんかんを起こさないことが大切だと思わない。てんかん発作を何度も繰り返す人生でも、そのたびに周りからきちんとしたケアを受けていたら、てんかん発作のある人生が不幸だとは思いません。幸せってそんなあらかじめ計画して操作できるものっていうふうには思っていないところがあります。

日時：2024年10月9日（水）18：00～20：00
会場：たけし文化センター連尺町

DAY 2

尾張 通常だったら、意思決定支援会議っていうのは普段関わっているヘルパーさんや日中支援している福祉職員、親御さんなどが、これからどうしていくかっていうことを話し合ったり決めたりするんですけど、今回は外部の方と臨床哲学プレイヤーの西川さんも一緒に話し合って行きたいなと思っております。では、たけしさんの意思をどうやって決定していくのか、てんかん手術をどうするのかっていう切り口から始めていきたいと思います。

西川さん自己紹介

西川 西川勝です。大阪から来ました。小学校一年生の娘と一緒に来てて、僕の介助を手伝ってくれてます。僕、もともと看護師なんです。精神病院の看護助手からスタートして、15年くらい現場で働きました。その後、血液透析の仕事や高齢者介護の仕事にも関わり、いろんな現場を経験しました。もともと哲学科に行ってたんですけど、看護の道に入ったらそっちが面白くて、哲学の方は中退してしまいました。でも40代になって「臨床哲学」って言葉に出会って、昔お世話になった鷲田清一さんの話を新聞で見て、大学に電話してみたんですよ。そしたら「あの西川か!」みたいな感じで話が進んで、結局大阪大学で社会人として学び直しました。その流れで、大学の教員にならないかって声がかかって、コミュニケーションデザインセンターってところで11年間教員をしました。58歳で仕事を辞めた後は、大阪の認知症の人と関わる活動をやったり、重度心身障害の訪問介護事業所の理事になったり、ヘルパーさんたちと「ケア塾」って勉強会を毎月やってたりしてます。看護師時代、ためらいのナースってことで、自信を持って看護するタイプじゃなくて、ずっとためらい続けていたんですよ。

で、65歳になって、次々と病気が見つかりまして、腎不全、脳梗塞、肺がん…どれも結構シリアスな病気です。でもふと振り返ると、自分が看護師として関わってきた患者さんたちと同じ立場になってるんですよ。で、実際に患者になって分かることは確かにあるんです。病気の辛さはある程度想像できたけど、「患者でいることの辛さ」がこんなにひどいものとは思ってなかった。外から見ただけじゃ分からないことを今嫌ってほど味わってます。今年の3月に肺がんが見つかったとき、あと半年くらいと言われました。でももう10月です。今もう危篤状態でもおかしくないはずなんですけど。

もう一つ、宮沢賢治の「眼にて云ふ」という詩を紹介したいなと思います。すごく衝撃を受けた詩です。彼が出血がひどくて命が危ないって言われた時に書いた詩なんですけど、自分の体から血が湧き出てる状態で、「あなたから見たら私は惨憺たる状態でしょう。でも私から見えるのは、青い空と透き通った風なんです」っていう内容なんですよ。でもそのことをあなたに伝えられない、それが一番辛いっていう詩なんです。僕も今のところ、治療法はなくて、医者から死ぬまでの期間を伸ばすだけって言われてます。でも僕にとっては、こうやってレッツに来て話をするというのはやっぱり刺激になるし、喜びなんです。だから、大阪からわざわざ来ました。途中で倒れるかもしれないけど、万全に治療を受けながら死を迎えるっていうより、自分が行きたいところに向かって倒れる方がいいって思ってるんですよ。

人の幸せとかケアを考えると、「生命」「暮らし」「人生」っていう3つの次元が必要です。皆さんはヘルパーとして、人の暮らしを支える。だから、医学的なことは医者任せとしても、暮らしや人生についてはしっかり考えられる立場にいます。てんかんという病気や手術の医学的な側面にどうしても話が行きそうになるわけですけど、そこを一旦立ち止まってもらって、皆さん自身がたけしさんの暮らしと関わる中で、人の暮らしで大切にすべきものは何なのか、人が人と共に生きる時に人生において何が大切なのかを考えたいと思います。

たけしさんの紹介

尾張 たけしさんを簡単に紹介しますと、28歳男性、重度の知的障害、自閉症、大きい側弯もあります。そして大きなてんかん発作もあります。

てんかん手術の話が出てきた経緯

ササキ 今日、西川さんとたけしさんの意思決定支援について話そうとなったきっかけは、今年に入ってから、たけしさんのてんかんの治療の選択肢に手術が出てきたことです。しかも、その手術は開頭手術で、頭を開いて脳の一部を摘出する

という一度やると元に戻すことが難しい手術でした。ですが、新しい薬を試したことで発作が落ち着いているので、医療の側から手術の必要性はないと言われているというのが現状です。だけれども、選ばないといけないとなっていた1-2ヶ月前に、自分たちがどのようなことを考えていたのか、考えようとしていたのかを、今だからこそ一歩引いて考えられるのではないかなと思っています。僕は生活や暮らしに関するたけしさんの選択にはこれまで関わってきたし知見もあるんですけど、人生に関わる選択についてはまだ全然経験がないので、今後その選択に関わるための礎のようなものを今日探れたらいいかなと思っています。

たけしさんとてんかん

ササキ たけしさんのてんかんと付き合いは10代から始まっています。20代の半ばまではテグレートとデパケンという薬でてんかんが起らない状態が続いていました。ただ、その薬の副作用が強かったんですね。当時は親元で暮らしていたので、薬の選択は主に家族がしていました。2019年から連尺町での一人暮らしをスタートしました。その暮らしが始まって2年ぐらいしてから、25歳の冬に数年ぶりの大きなてんかん発作がありました。薬の副作用による嘔吐も続いていました。そこで薬を切り変えて、てんかんも副作用の嘔吐もなくなっていたんだけど、眠れなくなったり、発作の形が変わって、痙攣する発作ではなくて、急に体が硬直して後にパタンって倒れてしまうという発作がたくさん起こるようになってしまいました。それで去年6月、発作で転倒して骨折をしてしまいました。一時は歩けなくなるのではという心配もありました。その時そばにいた僕やヘルパーの野沢さんは冷静に対応したんですけど、もしそれ以外の人が関わっていたらどんな気持ちになっただろうとか、いろいろなことを考えました。

そういう発作がなかなかおさまらない状況が続いて、薬を調整してきたんですけど、家族とも相談して、今年の5月頃に、医者にてんかん治療のセカンドオピニオンを聞きたいとお願いをしました。それで6月に大きなてんかんセンターにかかったところ、「なんでこれまでしっかり検査をしてこなかったのか。彼の発作がどのようなものか、医療の専門家が診断名をつけないといけない。てんかん治療のガイドラインがあり、2年間2種類以上の薬を使って発作がおさまらない場合は、難治性脳てんかんと定義される。その場合、薬ではコントロールできず、おそらく手術である。」と言われました。そしてヘルパーが付き添って7月頭に検査入院したところ、やはり脳梁離断手術が効果的だという話でした。同時に新しい薬も試すことになって、眠気という副作用はあるんですが、発作自体はおさまっています。ヘルパーや家族で話し合いをして、一旦は手術はしないという選択をしました。診断の時に、今後発作が進行していくかもしれない、そうする

と今のような生活ができなくなってしまうかもしれない、だから医療としてはその前に食い止めることがしたいと言われて、未来を人質に取られているような感じがしました。

てんかんによる転倒への恐怖

レッツ夏目 発作がおさまる前は本当にいつ倒れるかわからないから、二人体制で、一人は倒れても必ず支えられる場所に常についていて。骨折や歩けなくなるかもしれないことへの恐怖が常にあった。手術をすることで、てんかんはなくならないけど、転倒を減らせるということが魅力的に聞こえた。

ササキ 骨折前のことを知っている身からすると、かつてのようにたけしさんとある程度距離を取ってゆったり過ごす関わり方ができなくなっていることのしんどさがあるよねという話をしていました。

手術について誰と考えようとしたのか

尾張 手術について考える時に誰を呼ぼうという候補は挙がってたんですか？

ササキ テンギョーさんとか、こうやくんとか、ヘルパーではない人たち。

周りの人の対応能力で てんかん発作が持つ意味が変わる

西川 精神科にいた時でてんかんの患者さんが何人もいましたけど、看護師は常に一緒に歩いたりはしません。てんかん発作が起きた時にどう対処するかは習得しておくんですけど、てんかん発作を起こさないように、というのは不可能なんです。てんかん発作があっても、それに対処できるかどうか。要するに、周りの人の対応能力によって、てんかん発作が持つ意味、暮らしに及ぼす影響が変わってくるわけです。てんかん発作の後の事故で死ぬことはありうるんですけど、てんかん発作そのもので死ぬことはないです。事故を防ぐ方法はいくらかもあるんです。でも、てんかん発作をなくさないといけないと医者もついつい説明してしまうので、問題を医療化してしまうんですね。



医療者は介護的なセンスを、 介護職（ヘルパーも）は医療的なセンスを

西川 医療と介護の専門領域をあまり分けすぎない方がいいと思っています。医療者も介護職的なセンス、つまり暮らしの視点を持つべきですし、介護職も医療的なセンスを持つべきなんです。医療者も介護者もそれぞれできることがあるわけで、そういうものをお互いがどれぐらい日常的に話し合っているかっていうことがすごい大切です。医療と介護をきっぱり分けてしまうと、その両者の間で患者さんがこぼれ落ちてしまう。例えば血液透析の時、機械の面倒を見る技師と患者の面倒を見る看護師って別れてしまうと、血液透析の様々な問題が両者の間に落ちこちやうんです。だから両者は手を繋がないといけない。両方とも専門性の高いことですから同じようにはなれないですけど、お互いがセンスを持ちながら協力する、相手がやっていることを理解するということではできるはずですよ。

そして、医療者が介護のセンスを持つのは非常に難しいです。頭でっかちになって医療のことしか考えないように専門家として育成されていますから。医療者の意識改革も大切ですけど、本当は介護の人たちが医療的なセンスを持って、ちゃんと話をできるようにしなくちゃいけない。ヘルパーも、医療的な問題をヘルパーの領域じゃないと思うかもしれないけど、ちゃんと勉強する構えを持つことはすごく大切なこと。

夏目 医療は体の状態を良くするというゴールがあるけど、暮らしはゴールがなく、何が良い状態なのか分からない状態。だから思考回路が全然違いますよね。

一つの専門分野の知識で暮らし・人生に

対応することはできない

西川 訪問介護だったら、訪問先の冷蔵庫の中にあるものでご飯を作らないといけない。相手の好きなものは何かとかも知っておかないと食事を提供するってことはできないんですよ。だから、訪問介護やヘルパーに関わる暮らしは一つの専門分野の知識でなんとかなるものではないんですよ。それこそ人生が入ってくると、人生は様々な困難とか経験を積んできた人によりやくばやっと見えかけるみたいなものなので、医学の知識を頭に叩き込んだところで何の役にも立たない。

自分の人生への感覚を頼りに 相手の人生を豊かに想像する感性

西川 たけしさんがたけしさんの人生についての1番の専門家なんですよ。彼は言葉や文章にはしないかもしれないけど、様々な影響と取り組みながら生きている。そういう人と関わっていく時に、相手が見ているはずの青空とか透き通った風があるかもしれないということ、てんかん発作ばかりの人生ではないということ、豊かに想像できる感性も大事だと僕は思います。

その時に一番頼りになるのは、自分が人生についてどう感じているかということじゃないですか。自分自身の人生にイエスと言えるのはどういう時か振り返る。僕も看護師として様々な患者さんの死と出会ってきて、助けられなかった悔しい思いもいっぱいありますけど、今自分が病気になるって、あの人たちが残してくれていったものが自分の支えになってます。だから、ケアって相手に何かをするだけじゃなくて、実際は相手から本当に様々なもの、人生の贈り物をもらっているはずなんですよ。たけしさんと過ごすことで自分はどんなものをもらっているのかを考えることが、たけしさんの人生の意味を明らかにし、人に伝えられるものにしていくんじゃないかなと思います。

尾張 アルスノヴァで働いている人は自分のやりたいことしかやらない人が多いと思うんですけど、たけしさんもやりたいことをやり切る、やりたいことに真っ直ぐなところがあって、そこは共感するというか。自分のやりたいことができなかったら死んだも同然と思ってしまう。骨折した時に、たけしさんがいなくなってしまうらどうしようという恐怖がありました。

大変さのラベルをつけるのではなく、 生きる力に感動する

西川 自分も末期だとわかって検査に対して恐怖や不安、将来に半ば絶望しかけた時もあったんですけど、とある看護師さんから「どんなふうにしても恐怖や不安は消えません。ただ時間は過ぎます。」とメールが来たんです。それを希望に眠りについたわけです。翌日、目が覚めたら、やはり息はしているし、脈は打ってる。この時、「俺の体は生きている。あんなに

恐ろしかったのに、心臓は縮むのではなく打っている。」と、生きる力はすごいなと思った。その時から、余命告知など、医学が様々な語る予測値の悲惨さを、「生きている間は生きている」と受け入れられるようになったんです。たけしさんも、外側から問題のラベルをつけることはいくらかでもできるが、本人は石を鳴らして今日も生きている。その姿とか力に感動する。それを忘れて、てんかん発作をどうするのかということだけに焦点化して議論すると、大切なことを見落としてしまうかもしれない。

てんかん発作をダメとするのは優生思想 ーてんかん発作があっても暮らしや人生を充実 させることができる

西川 てんかん発作がダメだというのは優生思想です。てんかん発作と共に生きるという社会のあり方もよしとしないで、医学的に対処可能なものは対処すべきというのは、優生保護法的な考え方なんです。医者の方の言うことはどっかで優生保護法的な考えがあるかもしれない。医療的センスは必要ですけど、価値観や倫理は医師が必ずしも優れているわけではないです。下手すると、優生保護法的な圧政的な立場に変わるかもしれない。だから、てんかん発作があっても暮らしや人生を充実させることができることを、医学とは違う方策で、ヘルパーの世界で作り上げていくことが大切かなと思います。

ご飯を食べることにまつわる困難・悩み

レッツ櫻井 脳梁離断の話が出た時に、僕はたけしさんの発作のことは知ってはいた。ご飯を食べないと薬が飲めないことに、ご家族も先輩スタッフも悩んできていて、僕もそれにすぐく縛られてしまっていた。たけしさんに「食べないといけないんだよ」と強いているところはすごくあって、ウルトラを始めた当初、3年くらい苦しかった。でも、やっぱりご家族の言葉は最強。薬が変わって、ご飯を絶対食べないといけないという縛りがちょっと緩くなった。関わりは…まあまだ2割くらいしか楽にはなっていないけど。結局、まだ食べないといけない。

西川 食べることに関しては認知症の場合でもよくある話。胃瘻にすると口から食べることが終わってしまうんですね。食べる能力が落ちると食べることができなくなるんで、命のために胃瘻にするかどうかは家族が判断するんですけど、みんな悩むんですね。それで胃瘻をしたとしても、あれで本当に良かったのかと家族はずっと悩むんです。認知症の飲み込む機能が衰えた方の食事介助で目の前で窒息死ということもある。その場合は仕事を続ける自信がなくなってしまう。でも、医者はそうなる前に胃瘻をすべきと言うんですよ。

死んだら人生は終わりなのか

夏目 暮らしや人生のベースに健康があるのではと思ひませ

んか？

西川 そうすると優生保護法的な考え方になっちゃう。

夏目 そうですね。でも命が維持できなかったら人生がなくなってしまう。

西川 人生は死んだら終わりか。僕はその辺りの考え方が最近変わってきている。死とは何か。死は全てを無にするのか。死を避けるだけで人生は充実するのか。いや、多分違うんじゃないかな。死んだら人間は価値はなくなるのか。人生の価値って一体どこにあるのか。こういう人の命に関わる仕事って、やっぱり死生観に辿り着くわけですね。そういうところまで付き合わないと、ケアに付き合ったことにはならない。

尾張 自分は死んだって人生終わりじゃないって思えるかもしれないけど、それをたけしくんに勧めようとは思わない。健康じゃなくなったっていいじゃんとは言えない。

西川 もう一つは、人為の世界に「死」が入っているかどうかなんですよね。人がコントロールできるところに生や死はあるのか。あるべき命のあり方が医療的な健康という話に行ってしまうとかなり危ない。障害や病気はない方がいいものになってしまう。

てんかんが医療の側にあって社会にないから恐怖の対象になる

来場者 てんかんを起こしたらダメなのかという話がありましたが、骨折などが予想されるのなら、コントロールできるなら絶対したいと支援者の方は思うだろうと思うんです。てんかん、ダメじゃないんですか。安全ということを見ると、歩いている目の前にどんどんマットレスを引きたいみたいになっちゃう。

西川 そしたら、歩くな、動くな、ということになってしまう。

来場者 それにすごく葛藤しています。電車で目の前の女性がてんかんて倒れてびっくりしたことがあったんです。

西川 てんかんがそれだけ、医療の側にあって社会にないことです。てんかんに対する社会の人たちの理解がなく、単なる恐怖の対象になっちゃうんです。障害でもそうです。障害のある人と付き合いがない人は怖いから、なんとかコントロールして排除する方向になっちゃう。てんかん発作も慣れてきたら、なんてことはないわけです。

転倒の心配によって関わり方が制限されてしまうことへの葛藤

ササキ おっしゃられたように、発作は大丈夫なんですけど、でも転倒はしてほしくないよねという話し合いをして、転倒がなくなるなら手術はする意義があるかもしれないという話をしました。発作とか何でもかんでもコントロールしたいわけじゃなくて、転倒っていうところなんですけど。「座ってて」というのも言う側も言いたくて言っているわけではなくて、もっとお

互いに自由になりたいはずなのに、転倒を心配するに関わり方が様になってしまう。お互いにハッピーじゃない。関わる側とたけしさんがどうしたら一緒に幸せでいられるのかを考えたいねという話をしました。

悪いことではなく、良い方向を考えて努力する

西川 安全を第一に考えたら、様々な制限が次から次へとやってくるわけです。不安は消えないんでね。悪いことを考えると悪いことばかりになってしまう。そうではなくて、良いことを考える。良い方向に努力するのか、悪いことが起こらないようにピピリまくるのか。これは価値観というか、人生の生き方ですよ。だから、良い悪いはないのかもしれませんが、それぞれが決めること。でも、ついこれが正しいと言いたくなっちゃうんですよ。異なる意見の持ち主同士が話し合うべき。黙って我慢してしまうのが一番危ないんです。

管理責任よりも応答責任

来場者 お互いがハッピーになれないと思うのは、自分の側が責任を負おうとするからですよね。その責任は一体何なんだろうなと思いました。

西川 責任には、管理責任と応答責任の2つがあるんですよね。みんな管理責任の方を考えてしまうんですけど、本当に管理できるのかってことです。管理不可能なものを管理するのは、無理なことをしないといけないということ。

先見の明ではなく後知恵が評価されるべき

西川 もう一つ思うのは、先知恵というか、計画を立てろ、起こりうる事柄に対してあらかじめ対処しなさい、先見の明を持ってケアに当たれと言われるでしょ。医療でも、将来・未来を良くするために治療をする。未来を読み解く力を求められるわけです。でも、人生で大切なことは大体後になってわかる。その後知恵が高く評価されていない。先見の明は専門性が高いですけど、一旦計画を立てて決めたら安心しちゃう。工夫や努力が続かないです。一方で、後知恵が評価されれば、試行錯誤をして、失敗から学ぶことができるんです。でもその代わり安心し切ることはないです。

来場者 計画性の一つのポイントとしては、同じ方向を向くということはあった方がいいと思うんですよね。やってみただけこうやった方がいいか、うまくいったから継続しようとか、いろいろと変えてみるのはその場での判断だと思うんですよ。そういうのは永遠に続くのではないかなと思います。

西川 計画は非常に専門知を要求すると思うんです。そしてその根拠を理論的に説明しないとイケない。一方で、後知恵は実践知なんです。自分たちの経験の意味を検証していくことです。てんかん発作を起こさないためにはどうするかという未

来予測に対する対処は専門的な知識でないと建てられない。でも、でんかん発作が起きた時にどうするかというのは、様々な工夫をしてみた実践や経験が少しずつ知識に変わっていくということ。

そういう意味で、介護は日々変わっていくものです。その中で大切なのは後知恵、試行錯誤や失敗から学ぶこと。実践が積み上がっていき、知恵が強くなるんです。先知知の場合は、評価はしますけど、うまくいかなかったときにもう一度計画を立て直すんです。やはり先知恵になる。計画ではずっと未来に対する対処に重点が置かれるということです。特に介護は後知恵を充実させるのが大切だと思います。意思決定支援会議で前向きなプランを立てるという方向で議論をするのでは、やはり専門家優位になってしまう。専門家優位のガイドラインができ、専門家以外は入る余地がない現場になってしまう。

医療は科学的な問題解決技法、介護は問題解決ではなく課題達成型

来場者 先知恵は専門的というか、科学的というのかな。科学的実験のように再現が可能なもの。

西川 そうですね。法則のもとでやっている因果関係。

来場者 そういう科学的なものを前提にして人生や暮らしを設計するのはありえないことだなと思います。そのありえないことをやろうとしている気がする。

西川 その問題の原因になったものは何か、問題の因果関係をどこで介入して断ち切るのかというのが科学的な問題解決技法なんです。介護は問題解決ではなく、課題達成型。こういう人生を送りたいか、どういう希望があるか。おそらく医療は問題解決がすごい強いと思います。でも介護の世界というのは、問題解決に走るより、人生を豊かにするにはどうしたらいいかという課題達成型のアプローチの方がいいんじゃないかと僕は思うんですけどね。

今回の会議の振り返り 一身内だけではないからこそ意思決定ではない話に

尾張 今回の会議はこういうスタイルにして良かったです。昨日も「私の」ではなく「私たちの」という話をしたが、全然知らない人も話していくうちに「私たち」に入っていくというか。たけしさんの周りの人たちが広がっているような気がしました。意思決定を完全に身内だけでやらない。

西川 完全に身内だけでやったら、意思決定の話ばかりになると思う。いつの間にかそういうことじゃなくなったのがいよね。

尾張 たけしさんの意思決定だからこういう話題が出てきたのかなと思って。他の人だったら、またちょっと違う形になっ

ただらうと思うので、他の人でもやってみたいと思いました。

来場者 意思決定支援会議ということでやってきたけど、意思決定の話じゃないなと思った。

支援する人たちが彼の人生にどう関わるのかという話。彼らの意思をどう把握するのかという話はほとんどしていない。でも、結局そういうことなのではないかな。彼が自分事として何を考えているかは分かりっこないわけで、結局、関わる人たちの関係の中でできることしかできないですよね。

相手が見ている世界や自由の考え方

西川 今日考えたことは大切なことだと思うので、ぜひいろんな場所でいろんな人ともう一度考えてみてほしいです。僕たちは病気や障害を持つ人たちに対して変な哀れみや同情を持ってしまいがちですけど、相手はそんな世界を見ていないかもしれない。

夏目 誰と付き合うにしても、自分だったら大変だろうなあ、嫌だろうなあということからしか話せない。

西川 「自分だったら」という価値観がいかに狭いか、いかに固いか。「自分だったら」という言葉は怪しいです。自分はそれほど大したものじゃない。

夏目 「一般的には」というよりはいいかなと思ってたのに。

尾張 そうしたら何を道筋にして判断していったらいいんだろう。

西川 それこそ自由というものは何か。セルフコントロールできることが自由。でもセルフコントロールをしないという自由もありますよ。全部人に預けてしまう。世界から全て享受する。他者と共に生きるといときに、自分をできるだけ開いて、できるだけ他者を歓待する。そういう生き方はセルフコントロールとは真逆になる。みたいなことを議論している哲学者もいるので面白いよね。でも片一方で、自分のことは自分でしなさいという、自立やセルフコントロールに価値があるとする価値観もあるわけです。見方を変えるだけで、どちらがどうだという議論ではないですね。

尾張 皆さん、すごいモヤモヤされたんじゃないかと思うんですけど、それをぜひ持って帰って考えていただけたらと思います。

日時:2024年10月10日(木)10:30~12:30
会場:ちまた公民館

寄稿

「いしけっていしえんかいぎ」雑感

文：西川勝

ぼくが浜松の認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ（以後、レッツと略称）を初めて訪れたのは、いつのことだったろう。ホームページで沿革を確認してみると2011年に鷲田清一先生の講演があり、2014年には哲学カフェ『かたりのヴァ』がはじまっている。この間ぐらいに、哲学カフェの進行役としてはじめて呼ばれたのだと思う。

それからの付き合いは多すぎて記録も持っていない。ぼくは大阪に住んでいるので、大抵は泊まりがけで浜松に行くのだが、ホテルに泊まることが多かった。たけし文化センター連尺町のシェアハウスには何度か泊めてもらい、ぐっと距離が縮まった気がしたのを覚えている。いつも夜遅くまで、レッツのスタッフたちと話していたので、生まれも育ちも縁のない浜松が友人の多い地元のよう気分になっていった。だから、今回あらためて滞在感想記を求められても困ってしまうのだが、2024年10月9日、10日のレッツ訪問はちょっと異なるとは違う。その理由は、訪問の用件が『いしけっていしえんかいぎ』の進行役を務めることになったからである。

この会議で、レッツの最重要人物であるたけし君のてんかん手術の是非を検討するというので、ぼくは暗闇の深い穴に飛び込むような気分で大阪を出発した。レッツに到着すると、慣れ親しんだ『かたりのヴァ』や『しえんかいぎ』の雰囲気を出すが、やはりちょっと違う。もともと進行役とし

てはおしゃべりの過ぎるぼくが、とめどなくしゃべり続けてしまう。沈黙することを怖がっている。その影響もあってか、参加者の発言も少ない。ぼくの焦りはますますひどくなる。どんな内容の会議であったかは、詳細な記録をレッツが残してくれているので、そちらを参照してもらいたい。ぼくとしては会議の後ずっと残っている不全感の根っこにあるものを明らかにしてみたい。

病気や障害によって自らの意思を表明することに困難を抱える人は多い。その人が医療や福祉の援助を受ける際に、本人の受諾の意思を確認する必要がしばしば生じる。そこで登場するのが「意思決定支援」という方策である。法律家や倫理学者などが医療福祉の専門家と協力しながら議論を重ね、一定のガイドラインが公開されている現状にある。そのことは事前に調べておいたので知っているが、レッツの「いしけっていしえんかいぎ」では、ガイドラインに従うという方法はとらなかった。通常ならば、最も本人に近い存在として家族の参加が求められるのに、レッツの場合、家族の意向もあって家族抜きで会議にしたという背景もある。自己決定から自己責任へという幻想の自立個人主義に批判的なレッツの思想が、ケアを家族に押しつける社会への批判にも論を深めていくのは当然の流れだろう。

「私の意思決定」ではない「私たちの意思決定」をめざし、私たちをどのようにして結び合い、支え合う

のが問われている。このとき、唯一の結論に決定することが大切なのか、今一度考える必要がある。是か否かの二者択一でしか答えはないのか、選択の前に問うべきは問題設定が前提にしていることに對する反省なのではないか。

人生は無数の選択に満ちている。しかし、最後の選択となり得るような究極の問いは存在するのだろうか。これが最後だと覚悟しても、次の選択は容赦なく現れる。究極の問いがなければ、究極の答えもない。常に探求の途上にあるしかないのが人生の真相であるとさえ思える。自分だけに閉じこもっては行き詰まる。狭い関係だと煮詰まってしまう。次なる出口は開くのは、異なる他者との出会いだろう。わたしが脱皮して私たちになるときに、未知の土地へと続く長い道のりを共に歩む仲間ができる。「こうした方がいいよ」と訳知りが顔に促すより、「一緒にしようよ」と誘い合う笑顔が、ぼく

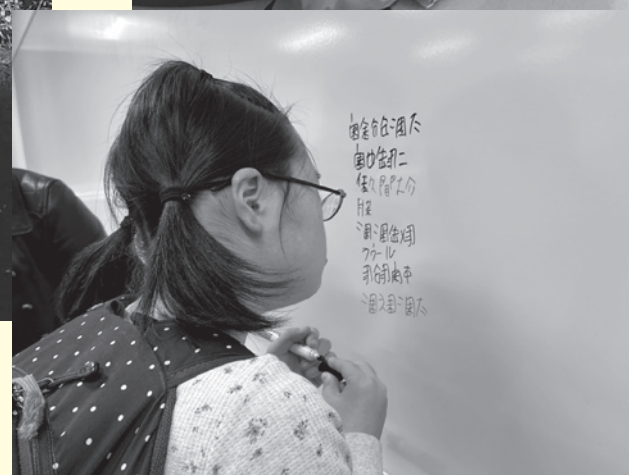
には望ましい。互いが喜べるようにするには正解は一つでは足りない。自分だけでは見落としがちな小さな宝物を見つけてくれる仲間がいれば、どれだけ幸せになれるだろう。てんかんという躰きの石をよけながら、たけし君の大好きな小石を見つける旅に出かけてみたい。





check!

「ひとインれじでんす」
各回に参加したスタッフの
所感はコチラから!





第5回
ゲスト

美学者
伊藤亜紗さん

聞き手：ササキユイチ

PROFILE

東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長、リベラルアーツ研究教育院教授。MIT客員研究員（2019）。もともと生物学者を目指していたが、大学3年次より文転。博士（文学）。主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社）、『どもる体』（医学書院）、『記憶する体』（春秋社）、『手の倫理』（講談社）。第13回（池田晶子記念）わたくし、つまりNobody賞、第42回サントリー学芸賞、第19回日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞受賞。

伊藤さんの紹介

ササキ 伊藤さんは美学者として、視覚障害のある方など、特性のある体を持つ人がどのように世界を捉えるのかという研究をされてこられています。ここ2年ほどは東南アジアにリサーチに行かれて、違う文化圏の日常生活の中で、特にケアに関して、どういうやりとりがなされるのか研究をされています。

レッツに滞在した感想と今日の目標

伊藤 失礼だと思いながらも、研究と称して、そこにある体の動きに引き込まれ、ついつい見てしまうんですね。昨日今日と2日間滞在させていただいたんですけど、情報量が多すぎて、まだ消化しきれておらず、このレッツワールドから距離を取れていない感じです。ちゃんと言語化ができてないんですけど、一緒に考えていただけたらと思います。

昨日10時にここに到着して、お昼ご飯をいただいて、その後、お昼休みの12:30～13:00ぐらいの間に2階ですごいミラクルを目撃したと思っていて。その動画があるので、皆さんと一緒に見ていただいて、分析できたらと思っています。

昨日2階で目撃した場面の動画 ～バンドメンバー紹介

伊藤 私、昨日の夜からこの動画を100回くらい見えています。何度見ても面白い、でも何度見ても分からない。音楽のライブみたいで、一体感があるというか、音や行動を通して曲を作っているように私には見えたんですね。

（写真を見せながら）彼らのセッションを勝手にバンドと呼ばせていただいて、そのバンドメンバーを紹介したいと思うんですけど、まずボーカルがりょうがさんという方です。マイクを持って歌っていらっしゃいました。午前中は歌ってなくて、私と一緒に滞在した知人に注文して絵を描いてもらっていたんですけど、お昼休みの時間はボーカルでした。

ドラムがるうなさんという方で、後半から私には番頭さんに見えたので、心の中で番頭さんと呼んでいました。番頭さんは、このときはドラムだったんですけど、午前中は逆にボーカルでした。流れる音楽に合わせてマイクを口に突っ込まんばかりの勢いでずーっと歌ってました。あと、めちゃくちゃ几帳面に漢字を書いていたね。そしてベースが佐藤さんでした。あとでその時のことを伺いたいなと思っています。

座っているのがさとみさんで、私の中では大福さんっていう呼び名

になってるんですけど、すごく体が柔らかくて、ゆらゆら体を折りたたんで音楽に乗っているんです。上半身が下半身にめり込むくらい折りたたんでいて、大福みたいだなと思いました。あと、身だしなみを気にしているのか、ドラムの金属の部分に映り込む顔を覗きこんでいました。

真ん中にたけしさんがいて、立ったり座ったりしながら、足元にあるチラシを破っていました。あと、叩く仕草もしていて、チラシの山を誇らしげに見せているように見えました。

それから、Tさんっていう方は私の中では配達員さんなんですけど、カメラを持つ私の前を何往復もしていて、物を配達しているように見えました。

動画鑑賞～言葉を使わない繊細な会話

伊藤 その動画をまずは見ていただこうと思います。曲はアンパンマンのマーチだと思います。

（動画を視聴）

番頭さんが結構前から太鼓を叩く準備をしているんですね。で、りょうがさんの「うーばんで」の声で、番頭さんは太鼓を2回叩くんです。2回目の「うーばんで」の声にも太鼓を2回叩く。そして2度叩いたら、番頭さんは片足で太鼓を蹴って片付ける。でも3回目の「うーばんで」には番頭さんは応じないんですけど、カメラの後ろで音が鳴っているんです。たまたま工事の音が入ったのか分からないんですけど、奇跡的に誰かが応答しているんです。

それに、番頭さんが太鼓を叩くと大福さんが後ろに倒れて、たけしさんは手を叩くんですね。番頭さんの太鼓でみんなが反応しているようなんですね。

そして、最後にりょうがさんが「アンパン！」と言うとみんながにっこりするんですね。

シンプルに言えば「グルーブ感」とか「一体感」かもしれないですけど、細かく見ていくと繊細な言葉を使わない駆け引きとか会話みたいなものがあるんだろうなと思います。



動画のセッションについて 伊藤さんからスタッフに質問

伊藤 ここで佐藤さんに教えていただきたいんですけど、昨日はたけしくんの担当だったんですね。だから、背中でたけしくんのケアをしてる状態ですね。

レッツ佐藤 そうですね。

伊藤 この時、たまたまたけしさんがいい状態だったんですね。

佐藤 そうですね。午前中、うんちもスッキリ出て、ご飯もしっかり食べて、絶好調でした。この日は偶然、久しぶりに担当だったんですね。で、たけしくんが「久しぶりじゃん、何かやれよ」って感じだったので。「（楽器を）弾けよ」「弾くなり、叩くなり、音楽やってくれるんでしょ」という顔をするのは昔からあるんですね。

伊藤 アンパンマンのマーチはこのバンドでは定番なんですか。

佐藤 いや、バンドというのは存在なくて、りょうがくんがカレンダーの前でウロウロしていたので、マイクを持たせたら語り出してくれた。マイクが好きな時と好きじゃない時があるんですけど、この日は喋ってくれたので、たけしもやりたいだろうなと思って、「よし、音楽やるぞ!」って感じになりました。

伊藤 番頭さんはなんであそこで太鼓を叩いてたんですか。

佐藤 僕は番頭さんとは木曜日と金曜日に会わないからあまり関わりがないんですね。いつもガムテープをいろんなところに貼って文字を書いちゃうもんだから、ピアノが開けなかったり、マイクに貼られたりして、そのテープを剥がすということはよくするんですけど。番頭さんのことは音楽の面ではあまり分かってないです。

レッツ曾布川 番頭さんは最近卒業して生活介護になったんですけど、その当時よく2階で過ごしていて、放デイの時間になると誰もいなくなって一人になっちゃうんですね。それで、僕がバチを渡して「叩いたら?」と言ったら叩いていたんです。

りょうがさんとの関わりに関する独自研究

曾布川 僕もりょうがさんとよくセッションするんですけど、僕はそれをりょうがさんの「うんこを呼ぶ儀式」と呼んでるんです。りょうがさんは内的感覚を大事にしているというか。彼はきっと、一般の人が感じるのより随分前からうんこをしたいということを知覚しようとしているんですね。うまくいかないとき2階から1階へ駆け降りてきて水を大量に飲むんですよ。多分お通じをよくしている。それが終わるとまた2階へ駆け上がっていくという感じで。

彼にとっての排便は性的快楽を伴う行為なんですよね。トイレの中で彼にとってはいろんな身体性が混じり合っている。我々がうんこするという行為をうんこするという行為だけとして認識しているのは教育の結果で、彼は全身で越境していくんです。彼のうんこするぞという時の声が生めかしくて色気があるのは、そういうことだと思うんですね。うんこしたくなったというときはマイクをバンと置いてトイレに走っていくんです。それはいつもセッションが終わるときなんですよ。

佐藤 知らなかった（笑）

ササキ りょうがさんと曾布川さんの関わりにおける独自研究というか、曾布川説。関わりのなかで見出された謎で、伊藤さんもうようによく分からないことに魅力がある。これに言葉を与えるのはすごく難しいというか。

僕は今、たけしさんの街での暮らしにヘルパーとして関わって、たけしさんの体を見ることが多いけど、例えばある仕様が「期待をしている」ように見えることがあるんですね。それを「期待」みたいな熟語で表現してしまうと、良さを捉え損なうような気がする一方

で、謎だからこそ言葉にしたいくなる。曾布川さんの見解は、そういった謎に対する際のパッションの発露でもあるのかなと思って聞いていました。

曾布川 りょうがさんが身体的に反応するのはビートなんですよ。メロディにはほとんど反応しない。ビートがあるとびょんびょん跳ねたりもする。たけしくんもビートが大好きなんですよ。で、佐藤さんは観念的なギターを弾く。精神的なところにアクセスしようとする。そこで起こっているのは、ある意味でディスコミュニケーションというか、うまくいかないけどあえてやっていく、たまに反応があるっていう面白さがあります。

あと、りょうがさんは言語を物質として使っているんですよ。彼の言語活動は、ジョン・ケージの「言葉より先に音がある」という感じ。彼が過去に聞いた音の記憶や想起でもある。僕は1回、彼に影響を受けてパフォーマンスをやったんですよ。シニフィエがなくてシニフィアンしかないと言って。

伊藤 りょうがさんはカレンダーを作っているとき、最初、スタッフに5番と言って5を書いてもらって、その後にいろんな単語を言うんですが、出てくる単語がカテゴリー別なんですよ。麺類の単語をひとつおり言い終わると次に楽器類の単語に移って、それが言い終わるとスポーツの単語が続くみたいな。図鑑などの記憶を参照しているんですかね。

曾布川 彼が過去に体験した順番なんだと思うんですよ。りょうがさんはお父さんもお母さんも日本人だけど、生まれたときの第一声が英語だったらしいっていう。セサミストリートが好きで、それが原因なんじゃないかという話もありますね。彼の発声は日本語のイントネーションではない。……ちょっと喋りすぎちゃった。

共在感覚の拡張

伊藤 先ほど映像で見たバンドも、日常的にここで行われているやり取りの延長に成立しているものだと思うんです。私はパッと来ただけだから、全てが偶然に奇跡的に噛み合っているように見えたけど、それは本当は偶然じゃないんだろうなということも想像しています。

1日半レッツにいて思ったのは、「いっしょにいる」の範囲がすごく広いということなんですよ。一緒にいなくても一緒にいる、見えていなくても見えているというような感覚。そういう感覚のことを、木村大治さんという文化人類学者の方が「共在感覚」と呼んでいます。木村さんはアフリカのバカ・ピグミーのフィールド調査に行っていて、バカ・ピグミーの人たちの一緒にいる範囲が広くて、視覚的に見えてなくても一緒にいると言っています。例えば、この壁の向こう側にいる人が急に話しかけてきて、すぐに答えるみたいなことがあるらしいんですよ。日本的な考え方だと目が合って話すので、視覚的に一緒にいるというのが強いと思うんですけど。特に都会だと視覚が優位になりがちで、見えている人とだけ一緒にいると思いがちだけど、それはその場所によって変わります。ここにいと、レッツの皆さんはその「共在感覚」を拡張させていると感じました。昨日、案内してくれた尾張さんが、3階にいても「2階のるうなさんの声がした」という話をしていて、視覚的には一緒

にいないのに、2階のことも意識にある。3階にいるんだけど、2階にもいるという感じ。3階にいた舞さんも配達員さんのことをずっと気にされていて、1階や2階で行われていることをすごく意識していた。それは音とか振動なのかなとも思うんですけど。周囲にアンテナを張る範囲が建物全体に拡張されているという感じがしました。昨日のスタッフさんとのディスカッションの中では、基本的に何が起こるかかわからない緊張感が常にあるから、アンテナを張っておく必要があって、注意を見えている範囲だけに限定しないようにしているとのことでした。だから、体を開いていないと危険というか、不確実性を下げる技法なのかなと思いました。その状態が利用者さんにも影響を与えているのではないかなと思います。だから、相手がやった行動にすぐ応答する。瞬発力とも言えるんですけど、一箇所にフォーカスしてないからこそ、どんな入力にも応答できる柔軟さだと、私には見えたんですよ。

意識にせずに、ただ、いる

伊藤 コミュニケーションが非言語的だからかなとも思いました。どうしても言語優位だとなんでも名前をつけてしまうので。自分が今やっていることにも無意識的に名前をつけていると思うんですね。私は今ここでみなさんに向かって話しているという自分なので、壁の後ろ側のこととかを忘れているわけですよ。今自分が何をしているかということに名前がついていなければ、前に向かって喋っているのと同じくらいのテンションで、後ろのこととか3階のことを考えられるのかなと思って。コミュニケーションは言葉を使っでやるというだけではなくて、自分の意識や注意の張り方の中にも言語的なパターンが入り込んでいて、自分はそれに囚われているなということをこの1日半ですごく感じました。名前をつけずに、ただいる、ということ忘れてたなというふうに思いました。

ササキ 一昨年と昨年、「ともにいるだけで学びになる」という事業をしたんですけど、文科省のテーマで、障害のある人の生涯学習の機会を広げていこうというものでした。その時、「学び」ってなんだろうと考えたんですよ。それこそ言葉を使って、何かできるようになるということを「学び」と捉えると、どうしても知的障害のある人はできない人になってしまうんですけど、そうではなくて、一緒に過ごしているだけで、いろんな入力があって、それに対して意識しなくても出力があるなと思って。そして、最初の年に考えたのは「変身する」。自分が考えてもなかったようなことを考えちゃうとか。それはある意味、自分じゃないものになる。それは「学び」なんじゃないか。しかも一緒にいるだけでそういうことが起こっているんじゃないか。それを僕らは現場で見ているのではないか。そういうことを最初のステップとして考えました。

伊藤 「学び」の対極は「飽きる」だと思うんですよ。学びがないと、ただの同じことの繰り返しで飽きると思うんです。でも、皆さんは飽きないですよ。それは学んでいるからなのかな。いろんな入力があって、言葉にすると同じ作業になって飽きちゃうけど、言葉にしないからこそ毎回の違いが違いとして受け取られて飽きない。そういうのが「学び」になっているんじゃないかなと思いました。

ササキ そうですね。側から見ると同じ作業に見えるけど、飽きな

い、飽きていない。同じことに見えるかもしれないけど「探究している」感じというか。たけしさんも28歳なわけですけど、紙や石で音を鳴らすって行為をやり続けている。童顔の可愛い印象とは全く違うすごい力強い手で。体自体がその行為に合わせてどんどん変わっているように思います。

ササキ 昨日のスタッフとのディスカッションの中で、噛み合わないことで生まれる自由があるんじゃないかという話があったんですけど。

伊藤 それがレッツから私が学んでいることですね。究極的には言葉と現象との関係かもしれないですね。常に言葉は大事なんだけど、全てはすくえていないわけですよ。すくえていないことを忘れちゃうと、人に全てを渡せるような気がするけど、実は渡せていないということに自覚的でありたいなと思って。だから、ずれてるっていうことは大事なんじゃないかなと思うんですね。

会話が飛ぶことを一時期研究していたんですけど、会話が飛ぶことはいい会話の条件だったりするんですね。相手から予測不可能な反応が返ってくる時にその人が見えるというか。以前、京都にいらっしゃる認知症の方にインタビューに行って、ずっと小学校の校長先生だった方なんですけど、「東京から来ました」と言ったら、新人教師だと思われたみたいで「人事が勝手に決められて困る」と言われたんですよ。会話は飛んでるんですけど、めちゃくちゃその人が見えるじゃないですか。いきなり来た私を彼の歴史の中で彼なりに受け入れようとしてくれていたのがすごく伝わってきたし、本当は全然話は飛んでいないんですよ。そのずれている部分こそ、言葉になっていないその人とか、その人の歴史が見えるなと思います。

ササキ 最初にお願いしていたのは、「他の人の体を面白がる」ということについてとか、自分の中にあるいろんな多様さなど、体を面白がることについてで、それを生きのびるためのエクササイズとして考えられるんじゃないか、その辺りのこと教えてくださいということでした。まさに昨日のレッツの具体的な一瞬を面白がる様をリアルに見せていただいて、ありがとうございます。そこで使われる言葉というものが持つ可能性と、取扱注意の側面についてのお話が聞けたと思っています。

〈質疑応答〉

ササキ 先ほどの拡張された共在感覚的なあり方は、一方で管理になりうるというか、支援と管理は表裏一体だと思うんです。支援／管理をする必要があるから、気にかける必要があるということでもある。

2018年にこの拠点を開いた当初は、正面玄関には鍵をつけないで、外の街と建物の中の境界がないような形で生活していたんですけど、色々な出来事や危うい場面もあり、議論をして、障害のある彼らがこの街にすることを可能にするための仕掛けとして鍵をつけることになりました。議論の中で、安全ばかりを重視した管理にならずに、どう遊びや信頼の部分を保てるのか、という話をしていました。ケアと規律は、0か100のどちらかだけに振り切ることはできない。

来場者 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』っていう本を初めて読んだ時にすごく衝撃を受けて、その後も伊藤さんの本を読ませていただく中で、次は自閉症や発達障害の研究をされるのかなと思っていたんですけど、ケアの方に行かれた。なおかつ、ケアってアジアっぽくなくて、ヨーロッパ的な「する／される」の関係が生じるような言葉だなと思っていてんですけど、伊藤さんがさらにケアだけじゃなくて、東南アジアのケアの研究の方に向かわれた理由が気になっています。日本はすごくヨーロッパ的な文化が入っていますけど、アジア的なものもあるわけで、ケアの視点で日本を見た時に面白い見方があるんじゃないかとか、考えておられることがあれば教えていただきたいです。

伊藤 ケアの人になったわけではなくて、体が好き。無限に体はあるので、永遠に終わらない研究をしている感じがあるんですよ。特に吃音の研究で、「乗る」と「乗っ取られる」という問題が起こっているんですね。自分に困ったことが起こった時に、独自の対処法を発明していくわけですよ。そうすると逆に、その対処法に拘束されて窮屈になるということが起こる。例えば、「机」が言いにくい場合、「机」と言わないといけない直前で「テーブル」に言い換えるとか。対処法なのに、その言葉でしか喋れなくなるという症状になってしまう。うまく体を乗らせるために編み出した方法に逆に乗っ取られてしまう。

制度も同じだと思うんですね。社会がうまくいくために制度が作られて、その恩恵にあずかって生きてるんだけど、逆にそれに縛られている感じがしたりとか。それを考えると、日本は制度が緻密にできているからこそ、乗っ取られ度が高めな社会だと思うんです。一方で、例えば東南アジアは制度がゆるゆるだから、乗っかり度が高めで、どう制度の間をすり抜けるかの知恵が生まれる。逆に制度が弱くて困っていることもある。日本と東南アジアは逆の問題とポテンシャルを抱えている。どうしたら乗っ取られすぎないか、乗って終わりにならないか、その知恵が身につくのではないかというふうに考えていて、それが私の中でのモチベーションになっています。

来場者 今、協同組合で不登校児の支援をしているんですけど、学校に行かない代わりに何かをさせようという強迫観念みたいなものが親の側にあることを感じるんです。自分の子どもも学校に行ってなくて、何かをさせられることをすごく嫌がるんですね。それは何もしていないことではないかとずっと思ってきたんですけど、今日のお話を聞いて、もっと流動的にいろんなことを体全体で学んでいるのではないかと感じました。

逆に、大人たちは共同労働とか自治活動を大事にしようとしてきたわけですけど、今はそれをやめようという方向に向かっている。自分たちを自分たちで集団で助けていくということを自治会などでやっていたはずなのに、それすらもやめていってしまうことで効率化しようとしている。持っているものを手放してから、大事だったなということを今更ながら感じて、取り戻そうとしているという動きが最近あるなと感じています。学校の中ではいろいろなことを管理されすぎて、それに敏感に体全

体で反応して、学校に行けない子どもたちがいる。そういうふうに、体全体で反応してしまう子どもたちについて、どう思いますか。

伊藤 自分もそういうところがあるんですよね。30代で初めて組織に就職して、半年ぐらい、自己紹介ができていくらい、話せなくなったんですよね。組織に入ることへの反応が自分に出たというか。その時は体操やヨガなどをしてほぐそうとしました。なので、言葉と同じくらい体も喋ってますよね。体も言葉と同じくらいを大切にすることを最初のステップにしました。

それから、自治会や大人の問題に関連して、歴史って難しいなっというも思うんですよね。制度が作られるのには理由があるのに、理由が失われて形だけ残ってしまう。昨日、瑛さんが、福祉の世界は総合支援法が2年ごとに改定されて、先進的な取り組みをしている、それがちゃんと制度に届くというお話されてました。自分は、制度と自由にやることを対極的に捉えたくないの、制度をうまく使いこなすという繋げ方を考えていたんですけど、時間軸で、自由にやるのが制度に届くという未来の歴史を見越した上で今の自分たちのやり方があるという考え方は私にとってすごく新鮮でした。

久保田 瑛さんは現場の声が届いたと言っているんですけど、正直、私は届いたかはわからないです。ただ、福祉の制度はものすごく幅が広く作られているんですね。大切なところは押さえていて、みんなが幸せになれるようにとかは明確にあるけど、やり方については書いていないんです。だから私たちはそれを運用して、こういう好き勝手にできる場所を作っちゃったんですけど、それに対してダメと言われたことはないです。

それと、「共生社会」は設立の時から考えています。自分は普通の人だったのに、たまたま障害のある子どもが生まれてきたから障害の世界に入ったら、ものすごい限定的な人としてしか接することができないこととか、生き方が限定されることが変だと思った。そう思っている人はたくさんいると思うんですね。自分たちは活動としてやっていて、「こうした方がいい」と言っではないんですけど、でもやっていたら、それを見ている人がいて、その人が制度に働きかけてくれる。だから最近は「共生社会」がよく言われるようになってきていますね。

それに今、施設はだんだんなくなる方向にあると思うんです。これまで国は施設を作る方に動いていたけど、これからは社会に馴染ませていくという方向にシフトチェンジしている。そこはすごく信用しています。

来場者 自分は、障害のある子どもたちではなくて、普通の子どもたちにアートを使った居場所づくりをしています。その中で、何かいいことが起こると体験的に思って、街中でアーティストとの小さな遊び場を始めたんですね。そこで、ささやかなことなんですが、言葉になかなかできないようなことが起こっていて、子どもたちやお母さんたちが居心地がいいと言ってくれるようになっていんです。アーティストがそこにただいるだけで、子どもたちの行為が変化し出している。そのことは特別なことではない、普通に起こることのはずなのに、貴重なことだと思われてしまう。それをどう外部

に伝えていくのかということが今のテーマになっているんです。手足を動かすことから他者理解や場づくりに広げていけないかと考えているんですけど、そのようなあり方を他者へ伝えていくためのヒントがあればお聞きしたいです。手足を動かすことかによって、技術ではなく倫理的なことが身につくと思っているんですけど、そのよさを人に伝えるにはどうしたらいいでしょうか。

伊藤 自分の大学院の研究室によく持ち込まれるテーマはその点です。ペテランの看護師さんで、若い看護師に教育をするときに、セオリーは学んできているけど、手を介したコミュニケーション、一対一の関係の中で良い関わりを探っていくということを教えられずに困っているの、それを学問的に示して教育に含まれるようにしたいという切実な悩みを持ち込まれる方が多いんですよね。確かにそれは抜け落ちてしまいがちな点だなと感じます。

それをどう伝えていくかということですけど、本当は、言葉ではなく体験できれば早いんですよね。おしくらまんじゅうとかしたらいいいですよね。もっと身体接触というか。ただやるのではなくて、その可能性を信じたプログラムがあったらいいなと思いますね。

『手の倫理』で触れているんですけど、ある体育の先生が、私の体育教育の最終的なゴールは、相手に失礼ではなく触れる方法を見つけることと仰っていました。単に早く走るとか、自分の能力を高めるためだけの体育ではなくて、他者との関わり方を身につける体育ですね。

来場者 「美学者」って何をする人だろうと思ったんですけど、「美学者」として今後どういう世界を目指していきたいと考えていますか。

伊藤 単に自分の専門が美学だから「美学者」と言っているだけです。美学は18世紀半ばにできた学問で、人間は知性だけでなく、感性でも世界を感じているという、感性の認識能力を認めているという歴史的な流れの中でできた学問なんです。

知性は、わかってやっていること。例えば、推論をした時、あることに対して理由を言える。知性は全てモニタリングしている範囲でやっている。でも感性は、「この絵いいよね」と思った時に、その思いは揺らがないけど、その根拠を示せない。感性はモニタリングできてないけど、その能力自体はあって使えているというもの。自分の中によくわからない部分があるという人間像が、感性から見たときの人間。美学はそういう学問だと私は思っていて、そこがいいなと思っているんです。よくわからないけどできちゃうという、ある種、人間のうっかりしているところに明るくいたいというか。今はなんでも根拠を示さないとけなくて、主観的なものが否定されがちですけど、人間がうっかりやってしまうことをちゃんと祝福したいと思っています。それはそれで大事だということで常に見ていたいというのが、私が美学者と言う時に意識していることです。

日時：2024年11月9日（土）13:30～15:30
会場：たけし文化センター連尺町

寄稿

レッツ滞在記

文：伊藤亜紗

2024年11月8日ー9日、一泊二日でレッツに滞在させていただいた。正直、そのときのことを文章にするのはとても気が重い。ふだん、いかに言葉にすがって生きているか。そのことを思い知らされたからだ。言葉という病にかかっている？ なんだか、自分がとても臆病に感じた。この病から一刻も早く離れないとまずいなと危機感すら持ったのだけど、その経験を記録に残すために言葉に頼らざるを得ない。矛盾している。

1日目のお昼過ぎ、2階でりょうがさんがマイクを持って歌い始めた。曲はアンパンマンのマーチ。「何のために生まれて 何をして生きるのか 答えられないなんて…」聞き覚えのある歌詞が、波間に見え隠れする岩肌みたいに、聞こえたり聞こえなかったりする。ポロポロンとギターを弾きながら、背中で応える佐藤さん。と、りょうがさんがシャウト「うーぱんで!」を発し（元歌詞の「そんな



伊藤さんが目撃したセッション

のは嫌だ!」）、これに番頭さん（みたいにみんなを見渡す机に座っていたるうなさん）がにやにやへと笑いながら長いリボンがついた棒で太鼓をダンダンとたたいて応える。その絶妙のタイミングに驚いていると、りょうがさんがもう一度「うーぱんで!」と叫び、再び番頭さんによる太鼓のレスポンス、しかしりょうがさんのダメ押し3回目「うーぱんで!」では番頭さんスルー、何事もなかったように叫びが波間に消えていく。その間、たけしくんはちぎったチラシの山をかき分けながら、何が起こるんだろうと期待するような様子で佐藤さんの近くで耳を傾けている。床にしゃがみ、大福のように柔らかい体をヘッドバンギングするように繰り返し折り曲げるさとみさん。Tさんは配達員のようにフロアのあちとこっちを嬉しそうに往復している。

奇跡のようなセッションだった。どこまでが音楽でどこまでが生活なのか分からない空間で、体の動きや、表情や、チラシや、床や、となりの家の騒音が、いろんなリズムで呼応しあっていた。レッツは「ひとりひとりの利用者さんが自分のこだわりを思う存分表現している場所」というイメージが強かったから、こんなふうに、利用者さんのあいだに張り巡らされた繊細な関係を目撃することになるとは思っていなかった。もちろん、それは一般的にいう「人間関係」とは少し違う。「私とあなたはいまコミュニケーションをしています」という同意がないままコミュニケーションが続く感じというか、電話をかけないで電話をする感じというか。うまく言えないのだけど、要するに、関わりのON/OFFがない

がゆえに、結果的にバラバラであるからこそずっとつながっているような印象を受けた。

なぜそんなことが可能なのか。二日間ではなぞは解けなかったけれど、面白かったのは、スタッフさんたちの感覚である。私に3階の宿泊設備を案内しているあいだ、スタッフさんたちは、足元から聞こえる音を手がかりに、一階下の2階にいる利用者さんが今何をしているのかについて話していた。つまり、3階にしながら2階をケアしているのである。普通、3階にいと2階の存在は意識から消え、関わりはOFFになってしまうものだと思うが、スタッフさんたちはそうではない。鍋を火にかけた状態でベランダで洗濯物を干しているような感覚だろうか？もしかしたら、ケアの仕事のプロならではのこうした「OFFにしない感覚」が、利用者さんたちにも伝染し、「バラバラでありながら同時にずっとつながっているような関係」を作り出しているのかもしれない。夜、近くのコンビニまで買い物に行った利用者さんも、ずっと、そこにはいないTさんが今何をしているかばかり気にしていた。

言葉は、ON/ OFFを作り出すスイッチなのだと思う。目の前の出来事やものに言葉を与えることで、私たちは、それとの関係をOFFにすることができる。もちろん、OFFが必要な場合もある。謎の不調に苦しんでいる人は、病名が与えられることで病気から距離が取れるようになるかもしれないし、暴力の渦中にいて麻痺してしまっている人は、自分が受けている暴力に名前が与えられることによって、状況を変える力を得ることができるようになるかもしれない。でも、あまりに言葉に依存しすぎてしまうと、世界が



制御可能なシステムのようなものでできていると勘違いしてしまう。先が読めない状況や整理がつかない状況を前にして「言葉を失う」という言い方がなされるが、これはOFFにできない、渦中から抜けられないでそこにいる、ということだ。

ちなみに、2日目のトークイベントでのスタッフさんの話によれば、りょうがさんが歌を歌うのは、うんちを降ろすための儀式みたいなものかもしれないとのことだった。かなり早い段階からうんちの気配を感じることができりょうがさんは、歌を歌いながら、排便のタイミングが来るのを待っている。りょうがさんは、「うーぱんで!」と叫んで番頭さんをけしかけながら、うんちの生成という体の中の出来事からも、自分をOFFしていなかったということだ。しかもその出来事を「うんちをする」と言葉で名付けてしまうのがまた罠で、本来ならそれに伴うはずの身体的快感から、私たちは自分の体を切り離してしまっている。目の前で起こっていることに言葉を与えて安心したいという誘惑と、それによっては何にも出会うことができないだろうという焦り。東京に帰ってからも、その余韻にしばらく取り憑かれていた。



PROFILE

1979年福島県いわき市生まれ。地域活動家。いわき市小名浜を拠点に、食、文化芸術、医療福祉、観光などの領域でさまざまな地域活動、文筆活動を行う。2018年、震災後の活動についてまとめた『新復興論』で大佛次郎論壇賞を受賞。編集者として関わった、いわきの地域包括ケア「igoku」ではグッドデザイン金賞を受賞。近年は、さまざまな課題の当事者を取り囲んでいる「共事者」をテーマに研究・執筆を続けている。

第6回
ゲスト

地域活動家

小松理虔さん

聞き手：久保田翠

理虔さんと『ただそこにいる人たち』の紹介

久保田 今日のゲストは小松理虔さんです。小松さんには、コロナの前の2019年の5月～3月くらいまで毎月1回レッツに滞在していただいて、「表現未満、」について考えていただくというお題で寄稿文を書いていただきました。それをまとめたのが『ただ、そこにいる人たち：小松理虔さん「表現未満、」の旅』という本です。2020年11月の、コロナのまっただ中に出た本だったので、トークイベントはできませんでした。だから、劇的に売れてる本ではないんですが、観光事業のツアーで必ずこの本を読んだという方がいらっしゃるんです。この本を読んでレッツのことを知って、興味を持って、それで来てくれた。だからすごい本で、本当にありがたい本なんです。売れる売れないではなく、私たちにとても大切な本です。

レッツを知るのにはまず『ただそこ』

久保田 レッツは毎年分厚い報告書をたくさん出すんですが、決して読みやすいものじゃないんです。今、レッツには正社員が20名弱いて、アート系・文化系いろんなところからやってきて、障害のある人と共に過ごしています。その中から感じ

ている共生社会とかアートとか文化とかをプロジェクト化して毎年報告書を作っています。自分の思いを詰め込むような書き方をするので、報告書は非常に読みにくいんです。その中で、『ただそこにいる人たち』が唯一読みやすい。レッツのことを知っていただくのに一番読みやすいものだと思います。私の母がレッツ設立からずっと応援してくれていて、会員にもなってくれているんですが、彼女が言うんです、報告書を一生懸命読んでも、全くわからない、と。だけど『ただそこ』が出て、この本を読んできた時に「あんたがやることがやっとなかった」って言ってくれたんです。この本は一人一人いろんな方々にわかりやすくレッツのことや「表現未満、」のことを伝えてくれたと思っています。

理虔さんを知ったきっかけ

久保田 私が小松さんを知ったのは、『新復興論』を読んだことがきっかけです。大佛次郎論壇賞を受賞された本なので、そんなに読みやすい本ではないんですが、アートの項目がすごく分かりやすかった。アートというものを入れて事業をやって、そこからどうなったかと言うのをわかりやすく書いて

いて。いろんな人たちがちょっとだけ幸せになっていくという状況が具に書かれていた。福島と原発の問題でアートというものを入れてみたという部分があって、これこそがアートができることだと、いろんな人たちが癒されていく過程にすごく感動しました。それでこの方にレッツにもきていただいて紀行文を書いてもらいたいなと思ったんです。

なぜ理虔さんをお呼びしたのか

久保田 小松さんは作家ではなくて地域活動家として活動しています。福島と原発の問題がなかったら活動しなかったとおっしゃっていて、私も1人の国民として非常に痛みを感じました。忘れられない土地です。そうした時代の中の変化、コロナ、震災、福島の問題を通り越しながら世の中はどうなっているのか、障害の人と共に生きる中でのずれ、これから生き延びるためにはどうしていったらいいのか、みなさんと議論したくて今日は開きました。

小松さん自己紹介

小松 東北の南端にあるいわき市からきました。こんなふうで紹介していただくとちょっと恥ずかしくなるような気がします。普段いわきでは地域活動家という肩書きで、活動が溜まると本にまとめるような活動をしています。今新刊の本がもうすぐ出るんですけど、九州の里山社さんからのオーダーで、『ただそこ』みたいなタッチで書いてくださいと言われたんです。『新復興論』はかための社会評論で、新しい本もそれを求められていると思ったんですが、『ただそこ』みたいに書いて欲しいと言われました。『ただそこ』みたいに登場人物が生き生きしていて、小松さんが考えたことを書いて欲しいと言われたんです。身の回りの人たちも、『ただそこ』の文体は理虔さんらしいと言ってくれる人が多いです。『ただそこ』を書いているときは、大体いつも、たけぶんに遊びに来て、一階でぼんやりして、夜に3階で書いていました。いわきでは独立して10年目になります。元々テレビ局の記者をしていました。普段は、WEB、パンフレットを作るみたいなことをお願いされることが多いです。たまに取材や長期的に関わらせていただく仕事もやってきます。中小企業の取材をすることが多くて、今でも企業のSNSアカウントをいくつも管理しています。WEBを作るっていうことは、いいところだけを100倍増しくらいで書くことなんです。でも、実際現場の人たちに話を聞くと、単純に魅力だけでは済まない、様々な問題とか悩みとかが聞こえてきます。取材者としてはそっちも黙ってられない。良く書くのは結構簡単なんですけど、ネガティブな話は仕事として、別の原稿に書くことにしています。そんなふうに、いいことも悪いことも書かせてもらってきました。漁業に関わっていた時、表ではWEBサイトやオンラインショップで魅力発信をして、別のところでは原発に溜まっている処

理水の放出などに苦勞する現場の声を伝えていく、っていうことをしていました。

ぐるぐるしながら目的地にたどり着く

小松 マーケティングの技術が発達してきていて、AIの力を借りると最適解が出てきます。専門家がこうしなさいと言い、成果の出やすいやり方が決まっているように感じます。でも福祉の現場は違って、少しずつ対象に近づいているみたいなやり方がある。ある方が、こんな話をしていました。アマゾンの原住民は、Aという地点から、少しずつぐるぐる周りながらBという地点に近づいていくんですね。でもAからBにつく最短距離を今の世の中は求めるんだと。ぼくも、最適解がすぐに出てしまう世の中だと思っています。だからこそ、そういう時間をかけて何かにたどり着いていくみたいな方法、アプローチの仕方や価値が認められていったらいいなと、久々にたけぶんに来て思いました。僕自身は、広告代理店的なアプローチもしつつ、ぐるぐるしていかないとわからないよねというアプローチも大事にしつつ、口に糊をしてきた数年間だったなと思います。レッツはぐるぐるの方の価値観を学べる場所だなと思います。

久保田 それとの戦いだったなと思うんです。レッツは分からないことをとても大切にしている。分きたいけどわからない、だから一生懸命やる、これがずっとやってきたことでした。私は元々建築系の仕事をしていて、アートの教育を受けているので、もやもやぐるぐる、すぐ答えが出ないことを悪いと思っていなかったんです。世間一般にはそれは嫌われます。答えはなんなの？あなたは何がしたいの？費用対効果は？と言われる。それに嘘をつく。現実はある簡単にできない。たけしを産んで障害者の世界に入った時に、嘘つのが馬鹿馬鹿しくなっちゃいました。わかんないものはずっと「わかんない」でもいいんじゃないの。一般受けしないことを言い始めていったんです。常にわかってもらえない経験を今でも続けています。

小松 テレビ局で仕事していた時、僕は数字の住人でした。何の意味があるのか、説明する必要があった。自分が今受けている仕事とか悩みには、自分の仕事・悩みである以上に、必ず社会性が帯びるはずだと思っています。

医学部生向けの講座・全人的医療

小松 今、医学部生の教育プログラムを考える仕事をしています。医学部生に向けた講座を持っているんです。医学の勉強もしたことないのになんで俺が、何か理由があるはずだ、と思いながらやっています。現場の先生によると、医学部生は今に限られた大学・病院の現場の中で勉強しているけど、病床がどんどん減っていく中で、これから医療の現場は、病院から自宅になっていく時代がくるそうなんです。その時患者さんがどうい

うライフスタイルで生活しているか想像できないと、家でケアしていくための方針が立てられない。これからの医師はアウェイの場所、つまり人々の暮らしの場所に行かなければならない。最後の看取りまで考える必要がある。ケアの柱となるのが「全人的医療」と言って、症状だけでなくトータルで人を見なさい、という医療です。どういうライフスタイルなのか、社会環境、孤立していないか、農村なのかどんな暮らしの場所なのか、家族性の疾患など、本人の背後にあるものを見なきゃいけない。つまり、人がどんな風景の中で、何に生きがいを感じているのか想像できるような医療でなきゃいけない。そういうカリキュラムを作ろうとなったとき、でも医学部の先生にはそれは教えられない。だから自分が医学部の学生を連れて街歩きをしながら街の背景を学ぶ、ということをやっているんです。

専門性が揺らぐ時代

小松 そういう意味で、今は専門性が揺らいでいる時代なのかなと思っています。専門性は突き詰めて考えていくけど、そこに正しさが生まれて、最短距離があって、最短プロセスができていく。でも人間ってそう簡単にプロセス通りに動かない。それが通用しない現場に行った時に戸惑ってしまう。そういう専門的なものを高める人が必要な一方、試行錯誤しながらよりベターな回答を、実践的にブラグマティックにやっていくことが必要とされている時代かもしれません。医療でも、その人全体を見て、ケアプランを考えていかなきゃいけないよ、と言うのは、いろんな人たちがそれぞれケアし合わねればいけない時代に入ってきたってことだと思っています。これはレッツに通って学んできたことと重なるんです。合理的ですぐに成果を求められる、というのではない価値観も認められ始めてきているのかな、と感じています。

久保田 私はクリストファー大学の看護の先生、福祉系の先生にも毎年2回呼ばれています。私だけが行くのではなく、その場所に利用者みんなを連れていくんです。私が喋っている間に利用者が色々バンバンやって授業が崩壊するような授業をします。授業を断られても困らないと思ってやっているんですが、でも毎年呼ばれています。コロナ禍後にクリストファー大学に呼ばれるようになって、それまでお互い知らなかったんです。彼らが行ってどんちゃんワーキーやって授業を崩壊させている。学生には戸惑って固まっている子もいる。先生たちが何を気に入っているのかわからない部分があるんですけど、でもこんなことでも許されるんだなというのはあります。看護学生にも、答えがはっきりしない名付けられない変な人たちが存在していることを知ってもらいたいと思って呼ばれていると思います。世の中のほとんどの人はまだそういうことに対してアレルギーがあるんです。まだそういう社会だと思っています。

小松 『ただそこ』を読んでくれた長野県の子精神科医の先生

が、式典で話をしてほしいとオファーをくれたんです。久保田さんの発言とかをプレゼンの中に入れて、レッツに来る利用者さんが散歩に出かける、ハブニングが起きる、でもそうしないと世の中変わらないじゃん、ということを紹介しました。まず知っていくことで状況が少しずつ変わっていく。でないと健常者が当たり前のように道を闊歩するところから何も変わらない。それでも、その場（精神科の先生、職員やご家族100人くらい）からは久保田さんの発言は過激だというリアクションもありました。トラブルになったら、何かあったらどうするんだと。

「ただいる」ことが育むこと

小松 レッツに来てる時に、ただいる、ということをしたんです。いわきに帰ってから、地元の障害福祉事業所に「ただいさせてください」とお願いしたんだけど、それが難しい。視察ですか？とか言われちゃうんです。結局理事長の部屋でお茶とか出されちゃう。誰もが自分らしくいられる時間を私たちも作っています、と社会福祉法人は理念に掲げますが、僕はいられないんですよ。ただいるってことがなんでこんなに難しいんでしょう。誰かが来ることで、利用者さんが驚いたら、とか、リズムが変わっちゃう、とか、そうになったらそうだったで考えればいい。

僕らもただいるだけでいい、っていう価値観を取り戻さなきゃいけないと思います。福祉の事業者のみなさんも、自分らしくとは思っても、制度の問題とか、（就労継続）B型とかA型とか成果出さなきゃいけないとか、福祉の中でも難しいんだなと思いました。福祉事業に関わっている人も窮屈で余白のない状態で仕事していたりします。ハブニングから学ぶというふうに考えられていなくて、若い人も失敗できない、迷惑かけたくない、波風立てたくない、間違えたくないというマインドがあると思います。追い詰められているように感じている人が多いから間違えたくないし、転落したくないし、成果主義的だし、すごく窮屈だと思います。福祉の職員は、誰もが自分らしく生きられるはずだよ、と思って福祉の現場に行くけど、大きな法人に行くと、やらなきゃいけないことを少人数でしなきゃいけないくて、なんでこうなっちゃったのか、という状況になる。もちろん政治の問題もあるけど、株価はあんなに好調なのに、余裕がない世の中になっている。もう少し間違ってもいいし、トラブルとかハブニングとかが文化とかクリエイティビティを育むんだ、という考えがあると、寛容であることが増していくと思います。

障害の子どもを持ったことを面白がりたかった／創造性＝変革

久保田 一応福祉事業をやっているんですけど、元々すごい違和感があったんです。もともと福祉事業がやりたかったんじゃないくて、たまたま障害の子どもを産んじやって、大変だ大

変だって周りは言うんですけど、実際大変なんだけど、こちらは面白いとしか思えないんですよ。わけわかんないんだけど、面白いじゃんこの子って。どこかワクワクしてしまっている。このワクワク感は誰にもわかってもらえない。福祉の人に聞くと可哀想だね哀れだねみたいな対応の仕方をされる。楽しくないんですよ、話してても。困ったことだけが目の前に突きつけられるんです。私は普通に子育てしたいのに、なんでさせてもらえないのと思ったし、療育施設に行ってもお母さんたちがメソメソ泣くんですよ。家族に許してもらえないとか、こんな子供産んじやってこれからどうしようとか、ずっとみなさん言っているのが、それがすごく嫌だった、耐えられなかったんです。自分がその世界に入ってしまったってことが耐えられない。そんなこと考えながら人生を送っていいのか、どうせ大変なんだったら面白がればいいじゃん、人はずっと不幸な気持ちを抱えながら生きるなんてできないんだから。自分達が幸せに生きられる場所を作ろうとするしかなくて、それがレッツになりました。

小松 既存の福祉は翠さんとたけちゃんを包摂できなかったってことなんでしょうね。

久保田 今でも福祉の業界をすごく信用しているところがあります。そこで働いている方は誠実だし真面目だし、勤勉できちんとした優しい人が多いです。いい業界だと思う。でも創造性を信じてない人たちが多い。要するに創造性というのは、変革ですよ。自分が変わる、子供が変わる、それは痛みも伴う、だけどやっちゃえみたいな。でも福祉は、そういうチャレンジングなことは、あんまり受け入れられない世界なんだなと思いました。

「色々な人たち」には「自分」も含まれている

小松 創造性は変化していくことだというお話が今ありましたけど、本当にそうだなと思うことがあって。最近県外で、福祉を学ぶ学生と、社会福祉法人の人たちの話を聞きに行って、そこで社会福祉法人の課題とか魅力みたいなものを社会に実装していくという「ふくしデザインゼミ」という取り組みに関わっています。福祉とかまちづくり、デザインに関心のある学生がいっぱい集まってくるんです。ただ、学生本人は福祉を目指して関心があると思っているんだけど、自分は何も変わらないで、同じ場所に居続けて、「こんなことを提案したらポジティブなことが起こると思います」というふうに、自分を変化する対象においてない、というパターンが多いように思います。創造することで変わっていくのではなくて、自分を確固とした立場に固定した状態で関わろうとする方が結構いらっしやる、障害の人はかわいそう、何か支援しなきゃというマインドで固まってしまっている人も少なくないように思います。他者のために何かをしてあげたいと思う、それはとっても大事なことなんだけど、そこに創造性っていうスイッチが入っていなかった

り、変化に対する怯えがあるのかもしれないけど、自分が他者に対して開かれていないんです。

レッツの夏目さんが、「世の中に色々な人たちがいる、その人と一緒に生活していくんだよと多くの人たちが語るけど、色々な人たちの中に自分を入れていない人が多いんじゃないか。本当は自分も色々な人たちの中にいるはずなのに、自分は色々な人たちの中に含まずに、自分は高い位置に固定して、色々な人たちと仲良くするのがこれからの時代必要だよねって言っているって嘘くさいじゃん」みたいなことをおっしゃってて、本当にそうだなって。自分たちは恵まれている人たちだから、かわいそうな人たちを支援しなきゃいけない、施しをしなきゃいけないみたいな、それも何もしいよりは全然いいんだけど、自分の中にある弱さとか生きにくさみたいなものを開かずに、高いところからそういうことを考えている人たちの嘘くささみたいなものが、逆回転してアメリカのトランプ現象みたいなものに繋がっているのかなと。

「かわいそう」の傲慢さ

小松 震災後、東京で講演すると「被災されてかわいそうですね」とばかり言われる時期が続きました。地元で夜な夜なクラブイベントとかをやっている、メディアが来ると、被災者の復興のためのイベントですよねと言われる。被災した人たちを私たちは見守っていますよ感をすごく感じるんですよ。すごい違和感があって、ある種、未開の人たち、かわいそうな人たちが何か克服するために努力しているのをみているというような傲慢な視線を感じたんです。今のこの時代に、かわいそうだなというだけでなく、逆に魅力だって、面白さだって、突き抜けた価値だってあるだろうし、「かわいそう」だけでは勿体無い、時に傲慢になってしまうなと思います。認知症、障害者、被災者、それらの言葉をただ知っているだけだと、認知症って不幸な終わり方をするんですよとか、自分を、障害とか福祉の世界から外れたところで、高いところから綺麗事を言っているということになってしまうんですよ。

「共事者」

久保田 この本で小松さんが名付けた「共事者」という言葉があるんです。なんとなくそばにいる人、そういうつもりでレッツにいたと言っていて、やっぱりそういう人がいる場とない場はものすごく違う。人は、上から見たいわけではなくて、見方がわからないのだと思うんです。中には偽善でやっている人もいるけれど、部外者だけど気にはしているよという人がいて、興味はあるけどどうしたらいいかわからない人が居られる場所、観光もそう。共事者という言葉の発明で、その言葉で活動が広がった、豊かになったと思うんです。「なんかいる人」そういう振る舞いを多くの人ができるようになったら、上から目線がなくなって、もっと関われる人が増えていくのかもしれ

ないですよ。

共事者のトリガー：偶然に受け取ること

小松 夏目さんと竹内さんが話してくれたことを思い出しました。小学生が見学に来る「GO!GO!たけぶん探検隊」という企画には、「もくげきシート」「これやってみたシート」の二つあって、それを記入することが小学生のミッションとして課せられるらしいんですけど、それめっちゃ共事者的だなと思うんですよ。「ちやう」「てしまう」って、共事者には大事だなと思っていて。東浩紀さんの「誤配」という概念を自分なりに解釈すると、意図せずに見てしまった、やってしまったというのが大事。目的と違う、偶然的に立ち会ってしまったり受け取ってしまったのが共事者のトリガーとなるんです。

「共事者」には、社会運動する人が、外から関わっていいんだという、動員のための時の言葉として活用されるパターンがある。男性だけどフェミニズムとかジェンダーとかの問題に関わるとか。自分は社会問題の一員だとするときの言葉として用いられるということがあるんです。だけれど、実は共事者は「想像しなかったんだけどやってしまった」みたいな含意があることが大事だと思うんです。例えば、特別養護老人ホームで、麻雀のボランティアを募集するとします。実際にやっているところも取材したことがあるのですが、麻雀打ちたいおじさんは地域の中において、麻雀したい利用者を図らずもケアしながら麻雀を打ってしまうということが起きる。「目的外ケア」みたいなのが大事で。よもや利用者をケアしていたなんて考えないで、後から気づくことが大事なんです。

これに近いことが、『介護民俗学』を提唱した六車由美さんにも言えます。六車さんは、おばあさんたちの調査をしていて、聞き書きしているんです。ケアではなく調査しているんだけど、おばあさんたちにとっては昔を思い出しておしゃべりする時間になりうる。豊かなケアの時間になっているっていうのがまさに共事者的だなと。自分の興味本位で関わっちゃったんだけど、豊かなケアを作っていく、誤配されていく感じだなと思います。西川勝先生が語っている「パッチングケア」もそう。そこにたまたま立ち会った専門的な知識がない人でも、弱さを抱えた人が来たとき、椅子を引いてあげる、声を掛ける、お茶を振る舞う、こういうとるにたらない日常の振る舞い、つまり小さなケアのかけらが、パッチングケアを作っているんだと。これに僕は共感したんです。僕らは100%のケアを作ることはできないけど、5ぐらい、10ぐらいならできるかもしれない。僕らも5人10人集まれば、プロの一人分くらいになれるかもしれない。素人でも一部分だけでもいいから関われる、興味でつながっちゃうみたいな偶然性を込めた言葉だと思っています。

外側にいる人が気軽に提案できるようになることで、関わりが増える

小松 オガちゃんが固まっちゃう話が『ただそこ』に出てきます。僕は職員じゃないので、オガちゃんは僕にとって利用者ではないんです。プロは強度行動障害について考えるだろうけど、僕にはわかんないんだから、普通にしているしかない。普通にゲームしたら普通に楽しいじゃん、それでいいと思うんです。正しい振る舞いを頭に思い描きすぎて行動できない人も結構いるんじゃないかな。

そういう障害とかケアの場をもっと開いていって欲しいと思ったときに、レッツの面白いところは観光だったり、こういう場で一般の人に、ケアとか障害について考えるチャンネルが開かれている場がありますよね。障害者と家族と支援者だけでよろしくやってください、というのは無責任だと思うんです。正しい知識を持った人で、っていうのは決まりきった人たちしか来ない。障害とか復興とか、決まりきった人たちしか関わっていないのと同じです。「健常者の皆さん、障害のある人に関わってください」とか言っても、優等生の言説として受け止められちゃう。ちょっと悪ノリでこんなことやってたらケアに繋がっちゃったみたいなことにもう少し価値を認めたいと思うんです。100頑張っている人の目線で10しかやってないというよりも、10でいいよね、と言える勇気が必要だと思う。僕みたいなノリで、10でもいいじゃんて語れる人が増えていけばいいなと思います。それは実は、福祉に関わっていない人の役割だと思っています。例えば水越さんが職員として言ってもだめ。「とはいえ福祉事業所の職員さんですよ」と見られちゃう。僕みたいな人間が、新しい関わり方を世の中に提案してみる。それで関わりが増えればいいなと。福祉の外側にどういう言語で伝えていくのかを考えないといけない。久保田さんが言っても、理事長として、ある種の正しさをまとった人に見えてしまう。そうじゃない福祉の内側にいない人が言っていると、当事者の人たちが楽になっていくのかなと思うんです。それは福島の問題でも同じかもしれません。大熊町と双葉町に、除染で出た土を30年間保管する場所があるんです。でも外部の人は「僕は原発とか放射能についても意見ないし、福島の皆さんの良きに計らってください」みたいな感じになってしまう。「それは福島の問題ですよ、福島で考えてください」っていうのは責任放棄のような気もしちゃっていて。そもそも電気を使っている人としての当事者性もあるよね、というふうになってももらえないといけない。外側の人が、俺も関わっていいんだな、と、気軽に、他人の顔色を見ることなく福祉でこんなことしたら面白そうだな、ということが言えることは大事だなと思って、「共事者」という言葉を言い始めました。

専門性を問い直す必要

久保田 一方で専門性がある。専門性をもう一回問い直した

方がいいかもしれないですね。福祉に関しては、保育、高齢者、障害にしても、専門家が当事者を見るときとなっているんだけど、それは要するに、その人たちに押し付けているのと同じなんですね。家族だけではどうにもならないから、なんとかしてくださいということで施設を作った。そもそもの問題を誰かに委託して行ったと思うんですよ。専門家に押し付けてしまうことで、関係ない人が生まれる。福島の問題もそうだと思うんです。専門家や地元の人に押し付けてしまう。沖縄の基地の問題も同じ。その人たちの問題としてすり替えてしまうっていうのはすごくあるなって思っ。なんとなくふわっと関わるんじゃないくて、自分ごととして一回受け入れて関わる、そういう体・マインドを作っていけないといけないのではないかなと思います。専門家に渡してしまうと、まずその人たちが疲弊する、そして社会から障害者や高齢者がいなくなることで、なかったことにされてしまう。高齢者施設があります、障害者施設があります、福島の問題があります、でも私の周りではクリーンです、となってしまう。このクリーンですと言っている社会がいかにダメな社会か、コロナの後みんな気づき始めた。つまり、なんの問題も起こらない、なんの問題も考えなくていい社会を作ったために、いろんなことを人間が考えなくて良くなったんですね。人間が身体的感覚を失っちゃったと思うんですよ。いろんなことを自分ごととして考える、そして首を突っ込んでいくことは大事だと思う。それには、物見遊山というか、気楽に関わることは大事だなと思います。これからは専門性との戦いかもしれない。福祉の人たちに専門性を捨ててど素人になりましょうと言っても、多分また怒られてしまうけど、でも、そうしないと共生社会は実現しない感じがするんですよ。専門性に分かれていくと、その人たちしかいない世界を作っていく。

「身体性」について

小松 専門性があるからこそ、それを段階的にマニュアルにしてアウトソーシングしやすくなったということですよ。障害などで苦しんでいる人がいるけど、専門家でやってください、そして自分の周りは穏やかで、自分の暮らしは揺るがない、それがいいと。それで効率良く回っていたんだけど、コロナ禍で誰もが飛沫に晒されてリスクが可視化されて、アウトソーシングするだけじゃダメだよと気づいた人が増えている気がして。人間はツルツルしたスマホの画面をなぞるだけじゃない。人間は自分達で土を掘り返し、自分達で食器を作り、さまざまな身体的スキルで自分の暮らしを作り上げてきた。かたや危機の時代に、身体的なものを取り戻していくことは絶対に必要だと思います。ケアの現場で、人ってこんなに重いんだとか、人のうんこってこんなに臭いんだとか、そういうわかったつもりになっている自分を疑って一から確認していくこと。レッツで佐藤さんが「佐藤は見た!!!!!!」の振り返りをやって

て、佐藤さんが利用者と後出しじゃんけんでいつも勝っているのを録画して。そこに細馬先生がいらっしゃって、人間にとってじゃんけんとはそもそも何か、みたいところから議論がはじまったことがあったんですよ。レッツがやっていることって、当たり前のことを当たり前にならずに、それってそもそもなんだっつけ、っていうところから始めること。そういう局面でこそ専門家が生きてきて、専門家が結論とか正しさを導き出すんじゃなく、みんなで考える場をファシリテートしているんです。

知的障害のある人がじゃんけんに勝てずにもやもやしている動画から、人にとってじゃんけんとは何かとか、知的好奇心をそそりながら、身体を考えるというチャンネルになっていた。なんでもアウトソーシングできる時代に、食べるとか掴むとか当たり前に使ってしまうフレーズをもう一度考え直してみるという動きがないといけない。便利さや快適さを疑って、失ったもの、福祉や、エッセンシャルワークと言われるものなど、見ずに済んでいるものをもう少し取り戻していくこと。世の中が進んでいくときに、直線距離ではなく、一瞬戻ってくる動きが重要だと思う。そういう身体性を取り戻していくことが多分面白くて、共事者を育てていく上で一役買ってくれるんじゃないかと思いますし、レッツのような、ケアの現場が生々しく残っている場所でそういうことができるといいのかなという気がずっとしています。

専門家に判断を丸投げせずに、自分達の暮らしや生きていくことの時間や行為を自分の方に取り戻す必要があると思うんです。立ち返ってくると、レッツにはそういうものがいっぱいあるじゃないですか。人と散歩しに出かけることとか、紙をちぎる行為の、表現の身体的心地よさとか、原点みたいなものがこういう場所には転がっている気がして。生身のミニマムな表現、まさに「表現未満、」もこの戻ってくる動きに入っているのになって気がします。

久保田 私の感じている身体感覚は小松さんのとはちょっと違うかもしれないです。言葉で名付けようとしなくて、ですね。ここの現場って言葉がない人がほとんどだし、言葉のやりとりができないんですよ。突然飛び出したり、叫んでいるくらいはいいが、飛び出していくとスタッフが止めに入らなければいけない。言葉で言ったところで何もならない。こちらが五感で動かなきゃいけない。ヒュってやったら手を出すと。そういう身体感覚、それも一つのコミュニケーションだなと。言葉に頼るのではなく、体で呼応していくというか。そういう応答をもう少し信じたり大切にしたい方がいい。

今の若い人はそれができるんじゃないかと思っています。今の学校ではいじめとか色々あるなかで、空気を読む必要があって、みんな繊細なんですよ。そういう意味での感覚が高い気がします。スマホをいじっているから身体感覚がダメ、じゃなく、言葉じゃない空気を読むってことにものすごく注力する感覚

が研ぎ澄まされていると思うんです。そういう人たちが作る世界は、私たちの世界とは確実に変わっていくだろうと期待しているんです。私たちが作ってきた世界は言葉で支配する世界で、感覚を鈍感にさせてきた世界だったと思うんです。お金持ちになる人、功績を作った人が評価される、病気になることは挫折、とか、ものすごく軸がはっきりしてわかりやすかった。でも今までの価値観が通じない世の中になると思うんです。だから身体性が大事なんじゃないか。今の世代の作る世界は、我々が作ってきた世界とは違うものになると期待しています。

小松 うちの小4の娘も空気読んでますね。所属するコミュニティによってキャラを変えながら。大変そうです。

久保田 ほぼそういう人たちが育っていくわけですよね。中には体も丈夫で頭脳明晰でお金もあるようなエリートもいるけど、それは氷山の一角で、ほとんどの人はとにかく生き延びる力を自分なりに蓄えていかなければいけない時代になった。その時代の方が私たちはありがたい。前へ前への時代だと、障害者は生まれた時から負け組みたいな言われ方をします。そうじゃない。どんな人も生きづらい時代は、我々にとってはいい時代になったなと思うんです。共感してくれる人が増えました。

小松 言葉に頼らないってことで思い出したんですが、「共事者」はしっかりと定義してはいけないんだと思っているんです。正しい共事者が生まれると結局また同じことになる。あなたは共事者じゃないねとか、あなたのやり方は共事的ではないとか、正しさを突き詰めてしまう。共事者ははっきりさせてはいけない、正しい共事者像を作ってしまったはいけないと個人的には思っています。言葉で定義することは悪ではないんですが、言葉づかいとか空気感を変えて付き合っていかなければいけないみたいなケアの感覚を持っている世代は、新しい地平を見せてくれると思います。3、4年くらい前に、演劇とか芸術に関わっている若者に、僕の活動を説明するようなレクチャーに呼ばれたんですけど、質問ありますかって聞いたら、「小松さんはなぜそんなにいつも怒っているんですか」と聞かれたんです。そりゃそうだろうと思いました。原発事故に対して怒ってるから、その怒りを忘れたら本当の復興には辿り着けないのでは？むしろ、怒りをみなさんが受け取って表現に落とし込んでほしい、ということと言ったんですけど、この10年で僕らが感じた復興観みたいなものが変わって来いて。僕ら第一世代は東電に冷静に話を聞きにいけない、でも若い世代は東電にも話聞きにいくし、いろんな人たちから声を聞き



たいっていうマインドを持っているんです。加害側に話を聞きにいくってことは、彼らが次の世代で、共事者だからできること。僕らは当事者だから、東電の幹部とはまともに対話できないと思う。でも彼らは、僕らが越えられなかった壁をするりと越えていく。当事者だからこそ少し寂しい部分もあるけど、むしろ僕らのように怒りを受け止めていないからこそ、これまでにない新しい復興の形を作れるのかもしれない。これを感じるのに13年くらいかかったんです。許さない気持ちを持ち続けるというのが新復興論に書かれていることなんですよ。でも若い人はあっちの話も気になる、原発推進側の話も聞いてみる。若い人たちを否定せずに、彼らが作る未来を見てみたいと思えるんです。

久保田 それがやっぱり文化だと思うんです。問題に対する活動が長く語り継がれていくようにするときに、文化が力を発揮していくんですね。

<質疑応答>

発信の仕方

来場者 SNSで企業のアカウントを管理してらっしゃって、一方で漁業関係での課題も発信しているとおっしゃっていたんですが、課題を抱えているものの発信の仕方って難しいですよ。具体的にどうやっていますか？

小松 魚屋さんや加工屋さんの公式アカウントを仕事でお預かりしているんです。福島の問題は複雑で、処理水について反対している水産業者が多い印象なんですけど、公式アカウントで反対というのを投稿してしまうと、「賠償金が欲しいんですよ？」とか「復興したくないの？」というアンチっぽいコメントが来ってしまうんです。公式アカウントはこういう状況だけど頑張ってます、ということしかなかなか発信できないんです。仕事としてはそういう公式アカウントを預かっているの、それとは別の媒体、noteとかで、自分の名前前で課題や問題を書

いています。あとは、取材された時に、漁業者の本音が外からは見えないうことになってしまっているの、直接的に反対の声を上げることも難しい状況だし、僕が聞いている状況など、知っている範囲のことを書くようにしています。

レッツという場に感謝

来場者 僕はメンタルの障害者で、当事者なんです。感謝を久保田さんと小松さんに申し上げたいと思いました。20歳の時に統合失調症になりまして。幻聴幻覚はなかったんだけど妄想はあって、一時期閉鎖病棟に入りました。今は49歳ですが、最近座禅を知って、A型にいけるくらいには復帰しました。福島でも精神の病院で入院している方々が必要ないのに長期入院を強いられていることもありますよね。20何年間も障害者をやってきて何が辛かったかという、とにかく寂しいんですよ。社会の外側に置かれる、別のカテゴリーに入れられるんです。統合失調症を隠すのは嫌だけど、みんなに言えば、友達だって離れていく。怖がって近づかない。そういう現状の時に、共事者という存在のありがたさ、レッツのような自由な居場所に可能性を見出してくれたことに、感謝申し上げます。

来場者 沖縄の問題と福島の問題は瓜二つなんですよ。パレスチナ問題は、アラブ人とユダヤ人が仲が良かったのが、イギリスの3枚舌外交で喧嘩状態になってしまった。朝鮮戦争でも同じ民族が分断されちゃうんですね。精神医学でも強制入院させられてしまうでしょう。20年とか拘束されてしまう。精神病院は巨大な牢屋。僕も病院に行った時9割くらいの人は普通なんですよ。本当は1年くらいで治るんですけど、10年もあるっていうのはおかしいんですよ。これらの問題は他人事じゃなくて自分ごと、繋がっているんですよ。全体を見ることが大切だと思います。レッツはイメージで考える人が多い。

小松 浪江町に研究施設ができることになって、どういう研究が必要なのかをリサーチするために精神障害のある人にも話を聞いたら、「復興する地域に障害のある自分たちは必要とされていない存在だと感じていた」とおっしゃっていました。もっと右肩上がりにしなきゃいけないのが復興だったんですよ。障害があって動けないとか、ちょっと具合が悪くてしばらく寝てないといけないという人は必要とされていないんですよ。だから、弱さを抱えている人たちには、居場所、帰る場所がない。そこまでの余裕がなかったのかもしれないけど、それが復興でいいのかと問われなきゃいけない。強さを持っている人たちが誰かのサポートを受けられる段階になって初めて復興のステージになっていくということなんです。こういうことはようやくこの2年くらいで語られるようになってきたんですよ。障害のある人が帰ることができずにいた、疎外されてたんですよ。

専門性について

レッツ夏目 さっき紹介いただいたように、いろんな人の中に自分もいると言っているにもかかわらず、当事者っていうカテゴリーを作ってしまうんじゃないかと思っているんです。佐藤さんと鶴見くんのじゃんけんの話、細馬さんが人の体とはこういうふうに動いて、など色々分析をしてくれたのは、そこでは福祉ではない世界に入っている。そこから福祉への興味ではなく、人間への興味になってほしいと思うんです。施設を運営するのに、生活介護のデイサービスは無資格でできるんです。もちろん責任者は資格がいるんですけど、従業員は無資格でいいんです。専門性って何かという話なんですけど、専門性はあるように見えて、作っているのは壁だけじゃないか。今日は私はこうすけ君のヘルパーとして参加しているんですけど、ヘルパーとして居宅支援をするときに、たった2日の研修で入れてしまうんです。だから、専門性は外から見える架空の何かじゃないかと思うんですね。放課後等デイサービス、子供が使う分野はすごく厳しいんですけど、そうじゃない分野は、なり手が少ないということもあって、すごく緩いので。専門性と福祉の幻想を、私たちは人間に立ち返って関わられたいいなと思っています。

来場者 広島県の高齢者介護事業所で介護をしています。私は新聞記者から介護へキャリアチェンジしています。私は逆に、専門性を軽んじられているんじゃないかと思うんです。介護はかなり専門性がある分野だなんて毎日感じていて。人の体は重いけど、技術さえあればやっていける部分がすごいあると日々感じています。福祉を開いていくとなった時に、開けるのは外の人じゃなくて中の人だと思っています。現在、鞆町に住んでいて、認知症の方が徘徊ではなくて、平気で散歩できるエリアに住んでいるんですけど、よく高齢者の方がコケてることがあるんです。コケてる人をいち早く起こしてあげられるのは専門職だと思っています。でもいち早く見つけるのは地域の人にしかできない。私たち専門家は倒れた人を起こす仕事に集中したいから、倒れた人を見つける仕事は地域の人がやってくださいという積み重ねで、今うちの介護施設は回っているんだと思います。あと、私のバックグラウンドを知らない人に、介護の仕事やっているって言った時に、軽んじられているなど感じるんです。ケアは誰でもできることだけれど、私が1年半かけて積み上げてる技術を誰にもできることと思われたくない、っていうもやもやも感じています。

レッツ水越 組織として、専門性という軸で習熟度があって、（固まって帰れなくなった人を）スムーズに早く帰らせることが利用者さんとの長い関係の上でできるようになったとしても、新しいスタッフがやると3時間くらいかかることが起こるんです。一回戻るんですね。スムーズな形ができてきた時に、戻る。理虔さんのぐるぐるの感じに近いと思います。どれがいいチームの在り方なのかなと思うんですが、怪我させないと

か、利用者さんの何気ない一言の意味がわかるスタッフはわかる、語弊はあるけど長い関わり合いからスムーズなコミュニケーションがつくられていく、そのほうがいいのかと思ったりもしました。でも新しい人が来てぐるぐるする。スムーズなコミュニケーションを維持することが大事なわけではなくて、ずっと1対1でやっているわけでない、いろんな人が混ざりながら、今回は通じないようなことが起こる方が、利用者さんにとっても、新たなチャクラが開くことがあるのかなと思います。例えば、理虔さんがきたから、オガちゃんが急にコーラで乾杯し出すことが起こったとか。専門性も道みたいに基準やルールがあってというよりは、これも専門性と呼んじゃっていいかしらみたい、専門性のずれみたいなのもあるのではないかなと思います。

久保田 専門性の質にもよるんですけど、基本的には必要ないと思っています。母親だったから、たけしを25年間介護し続けたんですよ。一番たけしの介護をしたのは私だから、母親だけど、ある意味たけしの介護の専門家と言ってもいいかもしれない。だけど、つくづくダメだと思いました。知れば知るほどダメになる。人間が人間の専門家になっちゃいけないですよ。人っていうのは、失敗も含めていろんな人と接して生きていくのが人間だと思う。その中に喜びとか悲しみとか呆れとかいろんなものが生まれるんですよ。福祉って、専門性で固められた時に、本当に面白くない人生しか待てないんだろなと思いました。ずっと私がいることが、私の幸せにもならないけれど、たけしの幸せにもならないだろなと思った。私が専門家であるがゆえに、常に同じサービスを繰り返し繰り返し提供しているようなものですよ。それって彼にとっては、地獄でしかないなって思ったんですよ。だってそのサービスしか知らないことになっちゃうから。レッツはご飯の食べさせ方もトイレの介助もそれぞれがバラバラのやり方でやっているんですよ。たけしはどうしているかっていうと、ちゃんとその人に合わせているんですよ、あんなに重度で知的障害が重いって言われている人が。たけしはそれで不満に思っているかもしれないけど、でも、この人はこんな感じ、あの人はあんな感じ、っていうのが楽しいんだと思うんですね、人生って。専門性の質にもよるけど、人間を相手にする人に専門性はないと思っています。

小松 僕は、原発事故があって放射性物質が飛散した時に、一部の専門家が「これぐらいの被曝で怖がっているのは中学生レベルの知識がないからだ」というような過激なことを言っていたんです。その時思ったのが、この人たちは放射能の専門家であって、コミュニケーションの専門家ではないんだなということでした。もちろん、コミュニケーション能力を犠牲にしても、専門性を追求めることで、福島の汚染が解明できた面もあるのでしょうか。そういう経験があったので、専門性とはなんだと考えるようにもなりました。地域の人たちって、専

門性のない人間ではなくて、自分の暮らしの専門家なんだというふうに考えるようになったんです。暮らしの専門性と専門家の専門性が合わさって、ここはやっぱり危険だなとか、ここには暮らし続けていいんだとか、手応えのあるデータが見えてくる。目の前にいる人たちにも何かの専門性があるんじゃないかなと、自分のもっている専門性は一部分で、相手の専門性をリスペクトした時に何かコラボレーションが考えられたらいいなと思いました。

専門家は専門性でバサバサ切らなければいけない時もあると今は思うですよ。国際的な学会のデータとか見て、あなたの言っていることはおかしいよという人がいる、その上で、地域の人たちのバックボーンを考えて専門性の出し方を考えないとダメだよねと。つまり、専門家と、僕みたいな素人との緊張関係が必要なかなと。全て専門性を持った人たちがいればいいのではなくて、専門家と非専門家がある種の緊張関係をもって、時に合意し、時に言い合える状況ができていないのかなと思います。僕自身は、自分は何の専門家でもないというのを売りにしているんですよ。プロの素人でありたいと思っています。翠さんの言うように人に対する専門性はいらないうっていう人もいつつ、開かれる専門性もありつつ、専門知を一部の人たちが占有しない、専門性についてみんなが言葉を吐き出せる場があるといいなと思います。

レッツ瑛 例えば、こうすけさんが何かしているのは彼が何かを知覚していて、私たちには知覚できない。専門性は能力と近接しているなと思うんです。私たちは言語能力に重きを置いているから、それが頭がいいと思っているけど、こうすけ君の知覚している能力と、ビジネスマンが3分間でプレゼンできるのも同じ能力だと思うんです。私たちが自分の暮らしのスペシャリストだと言ってのもの、一つ一つの専門性、能力が見出されたいいいし、そういう世界が広がっていったらいいなどお話を聞いてて思いました。

弱者／強者、被害／加害は入り組んでいる

瑛 理虔さんの論説を読んで、自分の強者性、男性性も引き受けながら、自分の言葉で答えて語っていくのが共事者なんだと書かれているのが、自分自身にもつながるなと思いました。

小松 以前、ゲンロンでトークイベントをしたときに、いわゆる「弱者男性」の話題になったんです。コメント欄に、「とはいえ理虔さんは強者だよ、僕たちが苦しんでいることなんてわかんないじゃん、ゲンロンみたいな場にきてほしくない」というコメントが流れていったんです。まあわかるなという気がしつつ。それからこんなこともありました。いわきで仕事と一緒にいる40半ばの人たちと、おっさんになって辛いことあるよねとクダを巻いてインターネットで配信をしていたら、若い人から「ホモソーシャルすぎるし、さんざんいい目を見てき

たお前らが弱さとか言ってんじゃないやねえ、欺瞞じゃん」とコメントがついて。俺ら、弱さを吐露もできないのかと辛くなったんです。でも、この辛さにも意味があると思っていて。確かにそうだな、これまで自分は個人主義的、能力主義的に生きてきた部分もあったなと。地域のくだらないエリート意識もあったのかもしれないみたいに思っていて。この話を、アメリカに結びつけてもいいかもしれないです。トランプを支持する人の中には、リベラルにとっての弱者の中に自分を入れてもらえないという疎外感があるんじゃないでしょうか。疎外ではなく、やっぱり包摂していくことが必要だと思います。自分の中には強さと、自分なりの弱さがある。どこかの部分では加害の立場だけど、福島にいらっしゃる意味で被害でもある。差別／被差別の立場は入り組んでいて、重なっていたり複雑になっていたり、被害者でもあり加害者でもあり、そういう複雑な状況を我慢していかないと、弱者競争、当事者競争になってしまうんです。「ネガティブケイバビリティ」の一言で片付けたくないという思いもあります。男であることによって考えずにすんできたこともあるなと思って。こういうことは、自分の中の弱さ、強さを客観視できて初めて思い至ったことでもあります。「きてほしくない」というコメントを引き受けて考えて、自分も楽になった感じがします。

夏目 専門性もホモソーシャルも随時更新していけばいいんですよ。

小松 自分の専門性に閉じずに開かれているからこそ、専門性を更新していける。

レッツ渡邊 今の話を聞いてて思ったのは「わかんねえよってことを教える人」を意識して自分がいること。観光の時とかお客さんに、たけしさんのこれどういう状態？って聞かれて、わかんないよそんなの、みたいな。なんで答えがあると思っているんだろう。わかんないって胸をはることを知っていただくのがいいのかなと思います。

小松 答えを出すことを控えることで、専門性が更新されていくきっかけになるのかもと思います。

防災について

来場者 震災のあと、何もやってこなかったなという反省なんですけど、防災に関心があるんです。私は本屋なので防災関連の本を並べたりしてるんですけど、全然反応がなくて。防災で自分の身を守るのっていうのがエゴイスティックな行為に思われるのかなと思っちゃったんです。防災で集めた本に、隣の人と挨拶をするっていうのも大切な防災です、って書いてあって。地域とかにも関心を持ったし、防災についても聞いてみたいです。

小松 防災とカテゴライズしなくても防災しちゃってる、みたいなのが、いわきでも実践されています。みんな、よもや自分の地域の中で災害が起こるとは思っていないんです。防災で

前提となっているのがボランティアです。ボランティアが基盤になっている。いわきでは、ボランティアしたくなる「仕組み」を作ることが実践されているんですね。利他的な行為としてのボランティアをしたくなるのがスポーツだとされていて、そこからもしたら防災とかにつながっていくかもしれないと、いわきFCのスタジアムを議論する中で話になったこともありました。楽しくできる仕組みを作っていく。ちょっと捻っていかないと防災は広まらないです。災害は自分のところには来ないとみんな思っている。それを前提で啓蒙していくしかないです。図らずも防災しているみたいなことを続けていけるといいのかもしれない。

久保田 浜松市の特別支援学校が、海から600mしか離れていないところにあるんです。私がPTA会長をした時に移転を打診したんですけど、移転には至らなかったんです。今度、建て替え話が同じ場所で持ち上がっていて、反対運動が始まるんですけど難しくて。そこの南区の人を敵にしてみようんです。南区は危ないよと言っているのと同じになってしまう。南区には福祉施設もあるから動かないでくれとも言われていて。だから、世の中そんなものなんですよ。ゲリラ戦しかないなと思っていて。怖がらずに、私はこうと言っていくしかないし、賛同してくれる人もいるし、反対意見があることは前提だと思うんですよ。私が反対運動するのは、自分の信条だと思うんですよ。やっぱりあんなところに学校があっちゃいけないと思うし、インクルーシブ教育というなら学校は街の中にあるべきだと信じているから。それを言うしかない。

来場者 政治とか戦争の話をしちゃいけないとか、すると嫌われるとか、つながっていると思うんですよ。

小松 1ヶ月本屋の名前を防災のBにするとか。

久保田 そういう楽しさが無いといけない。政治的な話をしても捕まる国ではないじゃないですか。それぞれの意見を言うていくしかないし、言っていんだという雰囲気を作っていくなくちゃいけない。でないとこういう会をやっている意味もない。言っていきましょう。

日時：2024年11月13日（水）18：00～20：00
会場：たけし文化センター連尺町

寄稿

福祉の担い手とは、 いったいだれのことを指すのか

文：小松理虔

クリエイティブサポートレッツが主催するダイアログのイベント「ひとインれじでんす」に参加するため、2024年11月、久しぶりにたけし文化センター連尺町を訪れた。浜松に来たのはいつ以来だろうか。少なくとも2年近く訪問していなかった気がする。みんなぼくのことを覚えてくれているだろうか。少し不安な気持ちで扉を開けたのだけれど、やっぱりたけぶんはたけぶん。久しぶりに会う人たちがみな「久しぶり!」と声をかけてくれた。中には初めて会う人もいた。あいさつを交わしたり、交わさなかったり、でも、ぼくがいるということはなんとなく受け入れてもらっているような気がして思わずうれしくなった。

ぼくにとって「たけぶん」は特別な場所だ。1年近くのあいだ定期的に通い、多くの時間を過ごした。そこで見聞きしたもの、感じたことを書き綴ったものは、『ただ、そこにいる人たち』という本にもなった。それを読んだ人からぼつりぼつり感想が寄せられることが増え、福祉に関するさまざまな仕事に関わらせてもらえるようになった。ぼく自身はまったく福祉の専門家ではない。知識もほとんどない。だから、これまでに経験したことを組み合わせていくほかないのだけれど、頭にあるのは、たけぶんに通っていたところに学んだこと。たけぶんで過ごした時間は、いまのぼくの「地域活動家」としてのさまざまなアクションにつながっている。だからこそ、久しぶりのたけぶんで、みなさんと、そして理事長の翠さんとじっくりとお話できる機会は、これまでの自分の活動

とレッツで学んできたものを重ね合わせながら振り返る、そんな時間になるだろうと思えた。

全人的に向き合うこと

ひとインれじでんすで、翠さんとひとしきり話したことが、レッツが目指してきたものが少しずつ認められ始めているのではないか、ということだ。たとえば、人の背景にあるものをぐるぐると遠回りしながら探っていくこと。明確な答えのない日々の現場に、おそらく想像力を発揮して立ち向かっていくこと。現場からラディカルに専門性を問い直していくこと。

あえてレッツ以外の話をしてみたい。いまぼくは、自分の地元、いわき市のかしま病院というところで、医学部生が参加する地域医療実習に関わっている。かしま病院では週に1度、医師ではなく地域住民から地域医療を学ぶ時間を設けていて、そこで講師を務めているのだ。学生たちと、まちを歩く。鹿島町がどのような歴史や文化があるのか、どんな風景が広がっているのかを実際目で見ながら、暮らしを想像する、そんなプログラムだ。

高齢化が進み、今後はますます訪問診療が増えていくと言われている。病院だけで事が済むわけではない。医師にとって医療の主戦場が、病院から地域、誰かの自宅へと移り変わっているのだ。患者がどのような家に、どのようなスタイルで暮らしているのか。「暮らし」への想像力がますます問われていくことになる。さらに、その患者の家族構成、近所づきあい、地域の特徴など環境・社会的な側面に加



え、病気をどう恐れ、あるいは恐れていないのかという感情面にも関心を持つ必要もある。けれども、そうした目線は大学内や病院内だけでは獲得しにくい。だから地域に出ていこう、地域の人たちと一緒に学ぶ場をつくろう、というようなプロジェクトが始まったのだ。

こうした地域医療の現場で必要とされるのが「全人的医療」の考え方だ。特定の部位や疾患に限定することなく、患者の心理や社会的側面も含めて考慮し、個々人にあった総合的な予防・診断・治療を行うものである。こう書くとなぞく医学的な言葉に聞こえるかもしれないが、要するに、「疾患の背景、個々人の背景を含めて診ていこう」、「その人をそうさせているものを探ろう」とする医療である。

かしま病院の医師から初めて全人的医療について話を聞いたとき、ぼくはすぐにレッツでの日々を思い出した。なにか突拍子もない行動をしてしまったとしても、その行動を責めるのではなく、一旦責任を棚上げして、その行動をせざるを得なかった理由、背景を探ろうとするのがレッツのスタッフだったからだ。レッツに通ってくる人たちは、その理由を口頭でうまく説明できない人がほとんどだ。だからこそ、スタッフがひとつひとつ行動を検証し、行動から読み取れる心理や状況をみんなで考察していく。そして、

自分たちの振る舞いを省みながら、新しいアプローチを考えていく。そんなレッツの現場に何度か立ち会ったことがあったから、ぼくにとって「全人的医療」という概念は、とても「しっくりと」きた。

全人的という言葉を「全体性」と変換してもいいだろう。個々の疾患だけでなく、それを統合する「その人全体」を診るということだ。たとえば、複数の疾患を併発している高齢者の患者さんがいるとする。それぞれの専門医が役割分担して、高血圧症とか糖尿病とか脊柱管狭窄症とか、それぞれの病気を治そうとすると、結果的にその人が飲む薬が膨大になり、クリニックに通う回数も増えてしまう。治療そのものが「暮らし」や「その人らしさ」を傷つけてしまうということだ。

その患者を「全体的」に捉えていくと、個別の疾患ではなく、その人が、全体としてその人らしさを発揮できる状態を維持することが大事になってくる。薬をたくさん飲み、毎日のようにクリニックに通う日々を送るのでなく、疾患によっては薬を減らし、場合によっては病気とともに生きるという選択をとり、クリニックに通う時間を減らして、仲間と過ごすことができる場や趣味に没頭できる時間を処方しようとするのだ。疾患だけ診ていたら、その人がどういう人生を送りたいのかもわからない。だから、徹底して人に向き合い、その背景を慮って想像する力が必要になってくる。キュアだけでなく「ケア」を実践するための力を、これからの医療人は育んでいかなければならないということなのだ。

ケアの担い手はだれなのか

最近では、「社会的処方」という言葉もよく耳にするようになった。「孤立」や「孤独」がもたらす健康被害が、さまざまな領域で検証されつつある。孤立のもたらす健康被害は、1日にタバコを15本吸うのと同じくらいになるという試算もあるそうだ。社会的処方とは、医療的な処置だけでなく、地域活動な

ど社会参加の機会を提供し、患者の健康や生活の質を向上させる取り組みのことを指す。こうした活動に関心を持つ医療従事者も多く、ぼくの関わっているかしま病院でも、具体的なアクションを生み出そうと、社会的処方を専門とする医師などを招いて学ぶ機会をつくっているところだ。

社会的処方をぼくなり一言で言うと「仲間を処方すること」になる。人はつながりのなかで自分を癒し、生きていくもの。手術やリハビリ、薬も大事だけれど、人とのつながり、仲間との出会いも必要であり、仲間たちの存在が、その人らしさを発揮できる状態にする「土台」になっていくということだとぼくも思う。社会的処方があちこちで語られる今、ようやくそういう価値観が科学的にも認められつつあるということだろう。

社会的処方を実践していくには、医療や福祉の人間関係の外側にも患者のつながりがあることが重要だが、その前提として、そのつながりを処方できるネットワークを、医療や福祉の担い手自身が持っていることも欠かせない。これをレッツに当てはめると、レッツの施設に通ってくる利用者が、レッツの職員だけではなく、その外側にも出会いの場を広げられる場があること。そして、その場を法人自身がつくり、さまざまな担い手とつながるネットワークを保っていくことが大事だということになるのだが、レッツの皆さんは、もうやっていた。

そもそもぼくは、レッツの手がける「観光」の取り組みを通じて施設に通うようになって友人が何人もできたのだし、「ちまた会議」に参加して、法人内外の人たちと語り合い、地域と福祉のあり方に思い馳せた。駅前の空き地で壮大に開催された「オン・ライン・クロスロード」では、みんなが混じり合う心地よさを感じることもできた。それらはまさにレッツによる社会的処方の取り組みだったといえなくもない。

全人的医療も、社会的処方も、当事者性や専門性の「外側」にある人が鍵を握る。だが、「外側」と

いっても、単に施設や病院の外側にいるだけで、多くの人たちに当事者性があり、皆それぞれに専門性を有しているとも思う。地域の専門家、おしゃべりの専門家、おせっかいの専門家や家庭菜園の専門家がいるし、それぞれに、なんらかの健康課題があったり、家族内の問題があったり、悩みがあったりする。その人ならではのさまざまな当事者性、専門性が発揮される場所がだれかの居場所になることで、社会的処方は成り立っているとぼくは考えている。

ひとインれじでんすでも、翠さんと「専門性」の話になった。翠さんはこう語っている。「専門性をもう一回問い直した方がいいかもしれないですね。福祉に関しては、保育、高齢者、障害にしても、専門家が当事者を見erとなっているんだけど、それは要するに、その人たちに押し付けているのと同じなんです」。

詳しく知らないから、自分とは関係がないからと無視を決め込むパターンもあるだろうけれど、関心がある人にも「当事者に迷惑をかけてはいけない」「まちがったことをしてしまうかもしれない」「専門家や当事者のほうがいい」と関係を避けてしまうパターンが少なくない。「正しく関わりたい」と考えるほど、自由さが失われ、逆に関わりが狭くなってしまいうのだ。これは、そのほかのさまざまな社会課題にも当てはまるかもしれない。

専門家と当事者にだけ任せておけばいいわけではない。専門家や当事者が語っていることだけが正しいわけでもない。専門性や当事者性を尊重しつつも、私たちが持つ専門性や当事者性も一緒にひらいていく。そこに、次の担い手も生まれていくはずだ。ぼくたちは、専門外ゆえ間違うかもしれないし、修正を余儀なくされるかもしれないけれど、そのたびに修正を図り、変化を受け入れていくことが大事だ。ワクワクしながら学び、実践を続ける。多様な人たちとともに「現場知」を積み重ねていくレッツに、これからも「共事」していきたい。



(c) SAMSON YEE

第7回
ゲスト

エトセトラブックス代表、編集者

松尾亜紀子 さん

聞き手：松宮俊文

PROFILE

1977年長崎生まれ。編集プロダクションを経て、河出書房新社に編集者として15年間勤務。2018年に独立し、フェミニズム専門の出版社エトセトラブックスを設立する。2019年、身近な話題を特集してフェミニズムを考える雑誌『エトセトラ』を創刊。これまでの特集テーマは「コンビニからエロ本がなくなる日」「We LOVE田嶋陽子!」「私たちは韓国ドラマで強くなれる」など。これまで刊行した書籍は、牧野雅子『痴漢とはなにか』、ベル・フックス『フェミニズムはみんなのもの』（堀田碧訳）、小山さんノートワークショップ『小山さんノート』など。2021年、東京新代田に「フェミニストのための書店」エトセトラブックスBOOKSHOPをオープン。

イントロダクション

松宮 今日のテーマは「つなげる、ともに生きる」です。松尾亜紀子さんに、エトセトラブックスのお話しや滞在した感想をシェアしていただきたいと思います。

エトセトラブックスの紹介

松尾 エトセトラブックスは、東京の新代田駅の近く、閑静な住宅街の中にあります。お店を開く時に、駅から近い、路面店である、駅までの道が明るい、女性も入りやすい、というところを大事にしました。エトセトラブックスは、まだ伝えられていない女性の声、フェミニストの声を届ける出版社です。その声は無限にあって、フェミニズムの形も個人の数だけ無限にあります。

名前の由来

松尾 エトセトラブックスという名前は、ジュディス・バトラーという思想家の『ジェンダー・トラブル』という本の一文「無限のエトセトラ」から名付けました。有史以来、言葉は男性中心主義の中で作られてきて、「その他」とされてきた声を拾っていきたいという意味で、エトセトラ、つまり「その他」ブックスと名付けました。

独立の経緯

松尾 私は15年間、中規模の総合出版社で編集者として働いていました。フェミニズムやジェンダーの本を作ってきて、その流れで独立して、2018年に出版社を立ち上げました。そしてその翌年5月にフェミニズム雑誌エトセトラを創刊（年に2回）しました。これまでに27冊の書籍、単行本15冊、エトセトラ12号まで出しています。当初から本屋さんもやりたいと思って、準備を進めていました。フェミニズムの本を3000冊集め、販売しています。2021年オープン当時に日本でフェミニスト書店と名乗っているのは1軒だけでした。今はフェミニズムをメインとしている店が増えてきています。本屋は、店長の寺島さんやスタッフのほたてさんの3人で営んでいます。

松尾さんの生い立ち

松尾 生まれたのは九州の長崎です。三姉妹の長女です。幼い時から男尊女卑の空気に満ちていて、親族の集まりでは女性だけが台所で働いて、男性は同い年の小学生の従兄弟を含めて座って飲み食い、それが普通だと思っていました。家では三つ指について父親を送り出していました。母も働いていたのに、母には三つ指について送り出すってことはなかったです。何事も父親に決定権があって、母親にあれこれ相談すると、「お父さんに言ってよ、お父さんが決めるから」と言われて。それも今思うと「はて？」なんですけど、そ

の時は普通だと思っていて。小さい頃は成績がよくて「女の子なのによくできる、男の子に負けない女の子」と褒められていました。それが内面化されて、それが当たり前だと思っていたので違和感はなかったですし、むしろ名誉男性（男のようにふるまう少数の女）的な価値観を内面化して育ってきたと思います。私は普通の女の子とは違うんだと。

ジェンダーとの出会い

松尾 10代になって、性のことになると恋愛対象の男性に何も言えないというか、Noと言えなくなってきた自分がいて、おかしいぞって、なんかどんどん私は弱くなっているって違和感があったんです。そういう感じでもやもやしているときに、福岡の大学時代、たまたま上野千鶴子さんの社会学の本を手にとって、「ジェンダー」という概念に出会いました。

編集という仕事を通して出会った女性作家

松尾 「ジェンダー」とは、とても簡単にいうと「男だから」「女だから」というように、性別で決めつけられることです。言葉を知って、あれが差別だったんだとわかるようになって。本が大好きだったので、絶対編集者になるんだと目指して、編集の仕事を始めたんですが、初めの会社はブラックで蛸部屋のようなところで働いてました。河出書房新社に転職して、そこで学んだことが多かったんです。本を作る過程で知ってきたことが私にとってのフェミニズムです。河出書房新社で、『世界文学全集（池澤夏樹責任編集）』という、20世紀以降の文学を集めるプロジェクトに参加したんです。全集を編むときに、その3倍くらい候補があって、100タイトルくらいを全て読んだんですよ。そこでものすごく多くのものを吸収した気がします。

出会った本

松尾 特に女性作家の本にすごく感銘を受けました。ジーン・リース『サルガッソーの広い海』（英）は、『ジェーン・エア』っていう広く知られた物語に、主人公のジェーンが恋に落ちるロチェスターっていう人物がいるんですけど、彼の悪い妻、当時の言い方で言うところ「狂人」と表現されて閉じ込められている妻の立場から書いた物語なんです。なぜ彼女が生まれたカリブの島から連れて来られてこういう目にあっているのかっていう、彼女の事が語られる物語です。そして、クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』（独）っていうのも有名な話なんですけど、アポロンに恋されて、それに応えなかったばかりに呪いをかけられた巫女の話なんです。自分が殺されることが彼女は予知できるんです。殺される前に彼女が自分を振り返る、これも一人称の物語です。こんなふうに、今までの物語を女性作家たちが書き換えてきたことを初めて知りました。

独立へと背中を押してくれた社会の動き

松尾 2010年代はSNSが発達して、そこで女性たちが内心を吐露するようになりました。自分が編集した本の感想が、SNSのなかでダイレクトに返ってくるようになったんです。母性神話をひっくり返す『ママだって、人間』（田房永子 著、河出書房新社）という本を出したときに、「3年ぶりにこのイベントのために、自分のために外出した」というお母さんがいたんです。まるで軟禁のようだと感じました。

そういった読者とのやり取りの中で気づいたこと、育ってきたものがたくさんあります。

社会の流れを確認してみると、2017年に伊藤詩織さんが自身の性被害を告発しました。このとき、一介の編集者だった私は応援できなかったという悔いがものすごくあって、その後悔が原動力になりました。2017年、アメリカを中心に#Me Too運動が始まりました。その後、2018年にトランプ政権になって、大規模なウィメンズ・マーチが行われました。そして2018年7月、東京医科大で女性を一律減点する不正入試が発覚したんです。このニュースを聞いて、これは何かしなきゃいけないと、私は初めて友人たちとデモを主催しました。デモをしてみたら、想像よりはるかに多くの報道陣が来てくれました。そして土日の報道番組で、私が「ぶざけんな」と叫んでいるのが放送されたんです。それを見た九州の親戚のおばちゃんたちから電話がいっぱいかかってきて、「あんたなんしょとね」と怒られると思って、怖くて最初は出なかったんです。でも「これはおかしい、よくやった」とおばちゃんたちが言ってくれたんですよ。塾の先生をやっていた一番怖いおばちゃんも、「ようやくあんたが言っていることがわかった」と言ってくれて、通じるんだなと思ったんです。それまで、たとえば本をつくっても営業部に「フェミニズム」って書いたら店頭で敬遠されちゃうと言われていて、「フェミニズム」と帯に書くのもためらったりしてたんですが、やっぱりはっきり言わなきゃダメだなと思って、独立する時はフェミニズムを専門にしよう、と思いました。ちゃんと言えば通じるし、言わなきゃ通じないこともあるなと思ったんです。

フェミニズムマガジン『エトセトラ』

松尾 独立した最初から、雑誌は出したかったんです。雑誌は自分の出版活動の根幹になるだろうっていう予感があった。年に2回、毎回ゲスト編集者を招いて作りたいテーマを聴きながら一緒につくっています。その中に20から30人の執筆者がいるんですね。まさに「エトセトラ」を可視化するというか、フェミニズムには多様なテーマがあって、決して狭い概念ではないことを示したいと思いました。表紙のデザインは福岡南央子さんという方に信頼してお願ひしています。店頭で表紙が並んだとき、もしくは電車の中で読んでいる時にそのままブラカードになっているような感じを福岡さんがデザインしてくれました。

エトセトラブックショップについて

松尾 出版社だけでなく、書店も併設して、本同士の連帯を本棚で見せたかったんです。フェミニズムは強固な“絶対”があるように見えますけど、性差別を無くそうとそれぞれがもがく、その表現の仕方は多様なんです。一人一派と言われているくらい。古今東西の歴史のその連帯を本棚で見せたいと思いました。もう一つは、コロナ禍で、とくにケアワークを押し付けられた女性たちが家の中に閉じ込められて、居場所が早く必要だと実感したんですね。それで書店を作りたい思いはますます加速しました。あの、3年間軟禁されたお母さんが忘れられなくて。コロナ禍でも本屋はかろうじて売上も下がらないくらいで、本屋だったら案外行きやすかったのかもしれない。店長の寺島さんが一緒にやると決めてくれたことが大きいです。彼女は元々別の書店で店長をしていて、彼女の作るフェミニズムの棚に感動して一緒にやろうと誘いました。寺島さんが集めてくれた本がエト

セトラの礎になっています。そして、もう一人のスタッフほたてさんがイベントやワークショップ、読書会などを担当してくれています。

影響を受けたフェミニスト書店

松尾 影響を受けた書店はいくつかあって、一つ目はイギリスのペルセポネブックスです。コロナ禍で残念ながらロンドンから引っ越してしまいましたが、半分出版社、半分書店の形態です。ここは絶版になった女性の本を復刊して販売しています。二つ目は女人書店です。台湾の有名なフェミニスト書店で、中は案外広くてセミナーとかもいっぱいやっているところです。日本には昔、京都にウイメンズブックストア松香堂（しょうかどう）という有名な書店があったんですが、2018年当時はフェミニスト書店と名乗っている店は日本になかったんです。だからこそ作ろうと思いました。今はフェミニズムをメインとしている店も増えてきています。

エトセトラブックスはどんな場所か

松尾 理想としては、本棚の前でたくさんのフェミニズムの言葉と向き合える場所であってほしいと思っています。フェミニストが本棚の前で、自分とは違うフェミニストに出会える場所だと思っていて。お客さんは、大学生から、ウーマンリブで活躍していた年配の女性までいます。お客さん同士の交流が結構自然に始まるんですよ。もう一つ本屋を始めた目的は、いろんな人たちの集まれる場所になればいいなと思っていたんです。南米のアーティストが来てくれて、下着に主張（「私の体は私のもの」とか「指図するな」とか）を刺繍してそれを飾るという手芸の会をやったり、版画のワークショップや、いろんな展示、最近は、女性たちがつくった野菜の販売会もしています。そうすると、展示やワークショップに惹かれて来た人がついでに本も見てくれるんです。フェミニズムの本屋をやってますけど、場所もやっているという気持ちもあります。いろんな人が利用してくれているのが嬉しいです。

小山さんノートのこと

松尾 『小山さんノート』という本を去年出しました。小山さんというのは、公園のブルーテントに長く住んでいた女性ホームレスです。2013年に亡くなりました。小山さんノートワークショップというのは、小山さんが残した80冊のノートを文字起こしたグループです。全部手書きの、物凄く綺麗な文字のノートを8年間かけて全部テキスト化したんです。なんでそういうことができたかという、公園に一緒に住んでいた人がいて、このノートを見ていいよ、と言われていたんですね。小山さんが亡くなった時、棺の中にノートを入れようとしたらしいんですけど、見てみると、直筆の物凄い筆致で大事なことが書かれているのを見つけたんです。小山さんと共生していた人たちやこのノートで小山さんを初めて知ったメンバーで週一回集まって、小山さんのことを語るというワークショップがはじまったんです。

小山さんノートとの出会いとその出版

松尾 2020年、東京の幡ヶ谷のバス停で女性ホームレスが撲殺されるという痛ましい事件が起こってしまって、彼女の一周忌スタンディングの時、小山さんノートワークショップの方も来ていて、ノートの一節を読み上げてくれたんです。私はびっくりして、読んだことが

ないものだなと思いました。ホームレスの日々が綴ってあって、自分の尊厳を守って自由になりたいということが書かれているんです。小山さんの生活は厳しく、食事も満足ではなかった。それでも、拾ったお金を持って、決まった喫茶店に通い、自分の想いを綴り、公園に帰る、というのを続けていた。ノートを世に出したいと小山さんは書いているんですね。誰かに読んでほしいという思いが確実にあった。『小山さんノート』は非常に好評で、たくさんの方に読まれています。何かを学ぶということよりも、小山さんのことをみんなで一緒に知っていく。ワークショップの方たちは「小山さんが特別な存在じゃないということを知ってほしい。女性ホームレスというのは社会から見えづらい存在だけど、この社会にいて、共に生きているんだってことは知ってほしい」といつも言っています。

フェミニズムの出版社だから任せた

松尾 これを出せたのは私の中で大きなことだったんです。途中で私は珍しく弱気になって、フェミニスト出版社から出しているんですかね、小山さんの書いたことは、必ずしもフェミニズムとして読まれない方がいいかもしれない、と言ったらワークショップのひとりが、「何言ってますか、私たちはこれをフェミニズムと思ってやってますよ」って言ってきて、「私たちにとってはフェミニズムですよ」と。ワークショップのメンバーの中にはいろんな人がいます。DV被害者の支援をやっている人、演劇をやっている人、一緒に公園に住んでいた人、引きこもりだった人とか、ルーツが韓国にある人とか。彼女たちのエッセイも本の中に収録されています。ワークショップのメンバーからは「フェミニズムの出版社だから任せたんですよ」と言っていたいたんです。フェミニズムとは一言も帯にうたっていないですし、考えずに読む人もいると思うんですけど、今まで聞かれていなかった女性の声を聞くことは、私にとって一番大事なフェミニズムです。「フェミニズム」とははっきり言わなければ届かないことは、雑誌エトセトラで言っています。この間、執筆者のひとりが言ってくれたのは、他の媒体では書けないことがこの雑誌では書けると。普段はマジョリティ男性にもわかるような言葉で書かなきゃいけないみたいな自己規制がはたらく、でもエトセトラでは自由に書けると言ってくださったんです。出版という活動においても、自分の思ったことを自分のまま言えるような場所を作っていきたいなと思っています。

レッツ滞在の感想

松尾 まず、居心地が良くて、びっくりしました。緊張しながら来たんですよ。福祉とかアートとか、障害者のための活動とか、そういう方面は不勉強で知らないことばかりだったので、私でいいのかなというのがありました。依頼がきたとき、重度の障害があり、自立生活センターを営んでいるフェミニストの知人に相談したら、「呼んでくれた人たちのためにはならないかもしれないけど、あなたのためにはなるよ」と背中を押してくれたんです。

爆音まで居心地がいい

松尾 昨日一日滞在して、実家みたいな居心地の良さがありました。なんとなく馴染んでいって、お昼ご飯を食べたら眠たくなったんです。2階にいいスペースがあって、利用者の方が寝てたんですよ。私もなんでもしていいと言われていたから寝てみたら熟睡しちゃって、利用者さんとお散歩に行く時間になるまで寝ていました。九州の実家では親族がたくさんいて、大人たちは宴会して子供たちは走り回って、ワイワイガヤガヤしていた記憶があるんです。うるさいんだけど居心地が良くて守られている感じ、なぜかその中ってぐっすり眠れていたなど。2階は爆音なんですよ。ボリューミーな音楽が流れているんです。私は普段は音楽があまり得意ではないんですけど、なんか爆音まで居心地が良かったんです。散歩はすごく楽しかった。

安心感のある場所

松尾 障害者の方たちが住んでいるシェアハウスに泊まって、住んでいる方の叫び声で2回くらい起きましたけど、ほぼ朝までぐっすり熟睡しました。私には小一の娘がいて、家でも2段ベッドで寝ているんです。家だと上からいつも娘に起こされるんです。それに比べたら、こたつもあるしのびのびできました。うちの店もみんなから居心地がいいと言ってもらえるんです。多分、ここにすれば否定されないみたいな、ここならフェミニズムの話をしてもいいっていう安心感があるんじゃないかと思います。レッツさんにもそういうところがあるのかな、スタッフの人たちがそういう空気を作っているのかなって思いました。場所ってやはり大事だなと感じた。

新しい拠点の構想

松尾 実は長崎に祖母がいて、102歳で去年大往生したんです。戦後、土地を開墾して、20人くらい住める広い家を建てて住んでいました。そこが空いてしまったので、もう1箇所拠点を作って長崎と東京を行ったり来たりしたいなと思っています。今はどんどん政治が窮屈になっていると思っていて、政府も行政も「少子化対策」とつければなんでも言えると思っていると思うんですよ。私の体は私のものだし、産む機械じゃないというのはフェミニズムがずっと言ってきた事なんです。ところが今、特に地方で、少子化対策という言葉で産めよ増やせよとされている。地方にいないと見えないこともある。祖母の家は山の中にあるからシェルターになるかわからないけれども、ここにいたいと思う人たちがいれる場所を作りたいと思っています。本棚を置いて、本が作れればいいなと。私がやっていることは、自分が本を作る理想の場所を作っているだけであって、自分がここにいたいなという場所で作っていたいと思っています。その過程でレッツにも呼んでもらえて。浜松でみなさんどんなことをやっているのか見させてもらって、代表にお金のことも聞いて、来られてすごく良かったです。

松宮 先々週にエトセトラブックスに僕も行かせてもらって、居心地の良さを僕も感じました。普通の大型書店に並んでいないような、松尾さんと作家さんとの繋がりがあるからこそ置いているようなZINEとかいろんなものが置かれていて、エトセトラブックスだからこそその店内なんだなと思いました。

〈質疑応答〉

生きづらさについて

来場者 自分は生きづらさをテーマにしている、自分は発達障害を持っています。ASDは構造化という言葉が使われるんです、それって多様化と逆の方向で、生きやすさってどっちにあるんだろうというのを話を聞きながら考えていました。

松尾 生きやすさっていうけど、みんな別に生きやすくないですよ。もちろん楽しいことや、やりたいことがある人はいるんだけど、むしろ「生きやすさ」みたいなものがどこかにあるって思われていることが問題で、自分と他人の生きづらさを認めることの方が大事なかなと思っています。でないといつまでも「生きやすさ」を前にぶら下げられて、お金を稼がなきゃならないとか、男らしくしなきゃいけないとか女らしくしなきゃいけないとか、痩せなきゃいけないとかに縛られてしまう。それで、他人の生きづらさを大事にできなくなってしま。小山さんノートにしても、小山さんは生きやすくはなかったけど、自分の尊厳だけは大事にしていた。そういうことをみんなで考えるタイミングにきているのかなと思います。

男性にノーが言えないことをどうやって解消したか

来場者 男の人と付き合った時うまくものが言えないというお話がありましたけど、それはどうやって解消したんですか？

松尾 やっぱり自分と同じような想い、Noを言えないことで苦しんでいる人がたくさんいると知った時に前に進めた気がします。

来場者 私も若い頃、うまくいかないことがあって、私と同じ想いをしている人がいるっていうことを学んだ時が乗り越えられた時でした。

松尾 Noと言っていいということをフェミニズムや性暴力の問題を知る中で学びました。あの頃、もっと自分のNoを大事にできていればよかった。そうすれば同意していない性行為があったときに、自分から進んでその行為をしたんだって思い込まなくてもよかった。私は性暴力に反対する活動もしているのですが、10代の頃の自分に向けてやっている部分もあります。

来場者 学ぶことによって解放される面があって、自分にも小5の娘がいるんですけど、より自由にこれから先の人生を歩んで欲しいので、同じように思うんです。ジェンダーに関することだけじゃないけど、学校のこととか、世の中の不条理とか感じたタイミングで色々話し合うようにしています。

もやもやの表明

来場者 飲食店で働いていて、オーナーと僕で話す機会がありました。その際に、オーナーが言うには、30代から40代の女性は採用しにくいという話があったんです。ライフステージでやめちゃうから雇いにくい。「どう思う？」ってオーナーに聞かれた時に、答えたくなかった。どうやってオーナーに言葉を伝えればいいのでしょうか？

松尾 それをやらないと差別だ、採用して当たり前だ！ とか言ったらそのおじさん（オーナー）もついていけないと思うけど、むずかしくてもやらなきゃいけないんですよとは言いたいですよね。でも、なかなか一対一じゃ言いづらいいのわかります。だけど、その身近な対話こそが、性差別をなくす一歩なんですよ。これ、よくジェンダーを

テーマに講演会とかしている友人が言ってたんですけど、そういう時は、名のある人がこう言ってた、というとおじさんは聞いてくれやすいそうです（笑）。頭ごなしにいうんじゃなくてその人に響くような言葉を言った方がいいから、男性の権威ある学者とかが言っていたいい感じのことを探して、っそれで伝えてみるとか。

バイアスを超えて、どう広めていくか

来場者 自分がいじめられたり差別される側だったので、自分を肯定するために差別する状況が生まれてきたと思っています。フェミニズムも思い込みやバイアスがあるから、広めていくときにどうやっていったらいいですか？

松尾 楽しくやることを一つの目標にしています。楽しさを見せつけるというか、隠さないです。エトセトラブックスは大きな店でもないし、個性的な人たちが集まっている感じです。それなりに楽しくやってますと言うようにしています。それを見て、楽しそうだなって誰かが思うかもしれないので。

松宮 雑誌エトセトラは見た目がポップで、手に取りやすいと思います。ビジュアル含め、フェミニズムを広めようとしているんだなと思いました。

『エトセトラ Vol. 3』について

レッツ夏目 エトセトラブックスを始めてから、結構年数が経っていると思うんですが、今フェミニズム界限、女性をめぐる社会はどんなふうに見えていますか？

松尾 2020年コロナ禍入りかけの時、身体をテーマに特集をやりたいと思ったんです。「私による私のための身体」はフェミニズムも障害者運動も言ってきたこと。自分ですら自分の体を思い通りにできないのに、国とか強いものに自分の体をコントロールされてたまるか。身体についての1300人のアンケートを長田杏奈さんと取って、その回答をみんなで読もうという企画をしました。そこから5年経って、状況はよくなるどころか、先日（2024年11月）バックラッシュですよ、ある政治家の発言、「30歳を超えて出産していない女性は子宮を取ってしまえばいい」というものがありましたね。トランプの第二次政権が決まって、アメリカでは昔からフェミニストが言ってきたスローガン「My body my choice」ではなくて、「Your body my choice」というタームが広がりました。つまり、「お前の体は俺のもの。」トランスジェンダーへの差別も激化している。これはいかんと思って、「私の体は私のもの」というトークイベントをやったら、500人以上申し込みがあったんです。私の体は私のものってもう一回強く言わなきゃならないタイミングだったんですね。申し込みには地方在住者が多かったです。地方にいと「少子化」と言われて、求められる圧力が強い、でも地方にいればいるほど同じ思いの人とつながれない。よりリアルにつながりたい時はどうしたらいいかしらと聞かれます。

今雑誌を作るならどんなテーマで

松尾 今だったらどういうテーマで作りますかという問いに対して、もう一回これ（身体）作らなきゃいけないという想いが強いです。お笑い芸人が自分たちの会合で女性に性加害したとされる問題も、彼がどうではなくて、女性をブスって罵ったり、セクハラして笑ったり、そういう暴力的な「お笑い」を、それを見て喜ぶ視聴者を含めて

みんなで作ってきたでしょうと。お笑い番組と現実は地続きですから彼がそういう場所で性暴力をしたってそれ自体は起こりうることだろうと思う。一人の悪者がいるんじゃないくて、みんなで作ってきたじゃん。これはお笑いだからって子供たちと笑ってたわけじゃないですか。そういうのそろそろやめましようって言っていかなきゃいけないと思います。

草の根でフェミニズムを始めるには

来場者 男の人が下駄履いてるとやっと言えるようになったと思っていて、女の人は裸足かというむしろ纏足だなと思っています。フェミニズム界限が良い方に変わってきているなっていうのはすごく感じていて。一方で、断絶というか、言っている人たちとそうでない人たちの線があるなとも感じています。浜松で、松尾さんの話を聞こうとしている人たちがいるということに勇気づけられます。どこから始めたらいいのかな、っていうのをすごく感じていて、草の根的なものの始め方を知りたいと思っています。

本でつながる

松尾 私が始めた頃よりは、フェミニズム、フェミニストというワードを口に出す人は断然増えました。8年前よりはふつうに言い合える状況だと思っています。実際地方でどうやって繋がれるかをよく聞かれるんですよ。ひとつは読書会ですね。読書会は初めてみる活動としてはハードルが高いようで低い。フェミニズムとは書いてなくても、誰かと語り合いたい本で、誰かと集まって読んでみるとか。あとは、ZINEを自分で書いてみるとかもひとつあります。

自由なかたちでデモに参加する

松尾 あとはデモですね。デモを主催する時に、デモじゃないけど本屋さんで長田さんの本を読み合うとか、連動してくれる方がたくさんいて、1人でデモに立つのはハードルが高すぎるかもしれないけれど、地方でも自由な形で広がればいいなと思って始めたんです。自由にやってもらいたいと広く言っています。東京のデモをきっかけに、浜松でもやっていますと言えるし、意志を同じくする人が来るかもしれない。意外と楽しそうにやっているとアンチも来ないです。

過去からの蓄積とつながる

松尾 あとは、見えてないだけで、地域には昔から活動している先輩たちがいて、地域の男女共同参画センターにいけば、その方たちの蓄積があります。蓄積を溜めてる方たちに繋がるのも大事なことです。

レッツ久保田 レッツは24年間やっているが、浜松にはそういう活動をしてきた人たちがたくさんいると思います。

語り合える場に行ってみる

久保田 障害など一度辛い目にあった人たちがもう一回再生していくという部分では、昔の社会の障壁にぶつかるんです。それをどうやって壊すかではなくて、こういうふう to 苦しんでいるとか、なんなんだろうと語り合う場所がたくさんあります。レッツもそういう場を作っているし、いろんなNPOも作っています。

福祉施設も人権の問題は非常に重くのしかかってくるから、そういうことで考えている人たちもいます。浜松はそんなに捨てたものでもないですよ。人口が多いだけに、どうしても声大きいマッチョな人たちに覆われちゃうけど、私たちも生存しているし、ぜひうちなんか遊びに来てくれればなど。やっぱり松尾さん言ったように、1人2人から始める。フェミニストという言葉を使うのがいいかどうかわからないんですけど、自分のことに寄せて話すということを始めてみるとか。面と向かって話すのはとってもいいと思います。

松尾 小山さんノートの読書会どなたかやってくださっているんですけど、体のことを話そうとか、戦争について話そうとか、そういう話す場を作ってみるのはいいですね。フェミニズムっていう看板かけてなくても、社会運動している人たちのところに行ってみるとか。この場所にも何人かいますよね。フェミニストって言っていないけど、その思いを持った人たちはいますので、探してみてください。

レッツ高木 私は強気なのに気弱なので、フェミニストとも名乗れずにいたんですけど、研究会をやって、ベル・フックスをみんなで読む会をやったんです。すごい怖かったけど、いろんな人が来てくれて、人権のこととか言うのびびってたけど、朝鮮人虐殺の読書会だったり、少しずつでもやると仲間が見つかったりします。最終的には仲間がいなくなつて自分のできることをその場でやるんだ、と言う強い気持ちはまだ持てないんですけど。政治的な手芸の部活も企画したりします。ぜひ一緒にやりましょう。

フェミニズムと男性の関わり

来場者 政治的な手芸の文脈の中で、フェミニズムって、男性の立ち位置ってどうでしょう？集まりの中で、男性も手芸しても良い？男性の関わり方ってどんなふうにしたら良いんでしょう？ローカルな話と、エトセトラでやる話と、お聞かせいただけたらと思います。

高木 前に研究会やった時とカルキズムのZINEとか作った時とか、男性も来てくれたんですけど、男性が責められている気がしたりとかして、難しいなと思いました。

男性同士でお茶をしてほしい

松尾 誤解を恐れずに言うと、私はまず男性同士お茶をすることから始めてほしいなと思っています。男性どうしお茶を飲んだりしたことありますか？男性同士お酒を挟まず、話し合うっていう方が大事だと思うんですよ。女性と話す前に、男性同士で話してよって思うことはあります。

ベル・フックスの「フェミニズムはみんなのもの」

松尾 もちろん、ベル・フックスも言っている通りフェミニズムはみんなのもの。ただ、黒人の理論家である彼女が言っているのは、それまでのフェミニズムはホワイ to フェミニズムだと批判しているんです。それまでのフェミニズムは中産階級の白人のもの、そこに自分達が入っているのか、と批判している、抵抗の言葉なんです。最初からみんなのものなんですと男性が言うのとは全然違うんです。黒人の女性が言ったって言うことに意義がある。もちろん開かれている場所にするのは大事なんですけど、成り立ちが違うんです。

エトセトラに來たある男性

松尾 エトセトラブックスにも男性が来ます。ウエルカムです。この前來た男性は、自分は介護の仕事をしていて、社会的には意識のある方だと思っていたが、婚約者がフェミニズムに目覺めて、それこそあなたは下駄を履いてきたでしょ to、私は結婚制度に反対すると行って婚約破棄されたそうなんです。自分がまさか生きているだけで誰かを踏みつけているなんて思ってもいなかった。どうしたらいいですか、 to。フェミニズムについて全部知りたいです to 話にきたんです。全部は無理ですよ to 答えました。よくよく話を聞くと、結婚制度のこと to、男性がなぜ加害者だと言われるのか to ということに自分に引きつけて考えたい to ということを話してくれました。そういう切実なことを腹を割って話す体験が男性同士では少なすぎる to と思います。

安心安全な場所の大切さ

来場者 私たちが住んでいるのは、昔ながらのコミュニティの力が残っているところなんです。中山間地に行くと、人口減少で、男性だから女性だからと言っている場合ではなく、もう残っている人たちでそこの地域を守っていかなきゃならない状況なんです。まずは男どうしで腹を割って話し合うみ to いな状況じゃ無くなってきているのかな to と思います。だから女性も男性も関係なくウエルカムで受け入れちゃった方がいいのかな to と思います。

松尾 一概には言えないですけど、場所の安心性だったり、ルールのわかっていない人が入ってきた時に、せっか to くそこで紡がれようとしたことが、話せなくなってしまうことがあります。安心安全な場所が大切だ to ということがわかった上で、きてくれるのはいい to と思います。

来場者 松尾さんは、おばあさんの家は、居心地がいい to と思っていた to と言っていましたよね。そこには、男性もいたはず to。

松尾 犬も鳥もいました to。

来場者 楽しそうに女の人だけで手芸をしながら、腹を割ってフェミニズムについて話してみたい to と思ってやっている to 思うんです。女同士で集まるからこそ話せる場もある to と思っていて、男性がその集まりに入るか入れるかではなくて、自分で集まりを作ってみた方がいい to と思います。

松尾 おばあちゃんちが楽しかったのは、女は台所、男は居間、の台所の方がすごく楽しかったからです。文句を言いながらも料理を作る。男も女もいたから楽しいでしょ、 to というのはちょっと乱暴かな to と思います。記憶は細部の積み重ねなので、男性はいっぱ to っていて嫌だったけど、女たちでワイワイしていた時間もある to 否定できない、それが大きい to ですね。

来場者 名誉男性という言葉があるように、女性だけの集まりに、名誉女性 to という人がきた時に、ああ、 to となる to 思うんですよ。

松尾 エトセトラブックスは私たち3人だけでやっていて、その楽しい場所を大切にしているんですよ。そうする to ころやってこの浜松のレッツみ to いな違う場所とも繋がれます。（松尾補足：「男も女も関係なく」については、どちらの性にも決定権があり、同意が大事にされる関係があ to ってはじめて語れることなのかな to と思いました）

日時：2024年12月7日（土） 13:30～15:30
会場：ちまた公民館

言葉に捕まらないために、 場所で生まれた言葉を紡ぐ

文：松尾亜紀子

クリエイティブサポートレッツの松宮俊文さんから、「ひとインれじでんす」に来てみませんかとの依頼をいただいたのは、2024年6月のこと。私はふだんフェミニスト出版社として本や雑誌を刊行したり、フェミニストのための本屋を経営したりしている。その頃私は、よっぽど無理でない限り、自分あての講演や執筆依頼は受けると決めていた。謝礼の数万円でも本の制作費の足しにしたいのっぴきならない資金繰りの理由もあるが、自分たちの場所を脇目も振らずつくってきた6年目、立ち止まらず続けるためにも、ここで一旦、他の人たちの活動を近くで見たい気持ちが強かった。レッツの依頼を断る理由がなかった。

とはいえ、日頃から講演依頼を受けることが多い男女参画センターや学校などと様子が違い、松宮さんやスタッフの落子さんとのオンライン事前打ち合わせを経てもなお、重度の知的障害のある人たちが利用するレッツがどういう場所で、自分がそこで何をすればいいのかイメージが湧かない（おふたり

の説明は、とても丁寧でした）。自分の話がみなさんの「役に立つ」ともハナから思えないし、まあともかく行ってみようと思えたレジデンス初日の12月6日、アルス・ノヴァをひと通り案内をしてもらったのち、「自由に過ごしてください」と言われるとは！

2日目のトーク@ちまた公民館でも報告した通り、それで私は、何をしたかという、爆音がどんどん響く2階、片隅のソファで少し、いや小1時間くらい熟睡させてもらった。チラシを千切った山のなかすやすや寝ているたけしさんや、音楽に乗って踊る利用者がいて、1階を含めて整頓と騒がしいカオスが同居する居心地のよさがあり、えい、もう知らん、睡眠不足だし寝ちゃえ！と思ったのだ。エトセトラブックスの書店も「居心地がいい」と言ってもらえることがある。選んだ本を並べて、好きな音楽をかけ、お客さんには基本的に干渉しないが、お尋ねあれば知っている限りお伝えするし、会話も楽しい。言うはやすし行は超むずかしい「自由にお過ごしください」を、私も、少し体現できていたのかも。

その後、松宮さんに優しく揺り起こされ、利用者さん達の散歩や買い物に同行した。一緒に散歩したまーくんはすごく重いリュックを背負っており、店頭に置かれた無料のパフレット類をもらい歩くのが好き。商業施設で本屋や「デパ地下」を巡り、駅前広場で自販のコーヒーなど飲んで休憩。その広場にはホー



ムレスの方たちが住むことがあり、地元の方たち主催で、弊社刊の女性ホームレスの手記をまとめた『小山さんノート』の読書会が開かれたという。確かに雨風

をしのげそうな造りだ。本屋が、駅前広場が、社会が、社会で生きるあらゆる人に開かれる場所であって欲しいと、楽しさのなかにも、しばらくそれだけを考えた。

夕方からのスタッフの皆さんとのトークは、自分の脇汗がたらたら流れる感覚がまだフラッシュバックする。さっきの居心地のよさと同じ強度で、アウェイとはこのことかと実感した。こんな場所をつくっている人たちの前で、自分の活動を説明する緊張。自己紹介せねばと「フェミニズム」が「ジェンダー」が、と聴かされて眠たかったですよね、私もみなさんの話しか覚えていないです。代表の久保田翠さんの、存在が周縁に追いやられがちな重度障害者たちの場所を街なかに建て、社会（外部）をここに連れてくることで障害者たちの存在を社会に開いていく、というお話に、自分がここにいる前提がようやく少し掴める。たけし文化センター連尺町は施設されていて、利用者は自由に外には出られないのに閉塞感がなかった理由もわかった気がする。その後も滞在中、久保田さんから「言葉」を信じてないと数回聴いた。が、自分たちの活動をこんなにも丁寧に緻密に言葉にしている方たちがいるだろうか。アート、表現、福祉、社会運動……そんな定まった言葉に捕まらないために、言葉を紡ぐ活動がなされているような。

その後の打ち上げでは、皆でしゃべってマッコリの甕を瞬間にどんどん空にして、スタッフの方たち



が大好きになる。トークもマッコリを飲みながらやれたらよかった（すみません）。

その晩は、重度知的障害のある人たちの暮らすシェアハウスに宿泊。生活の場にいきなり他人が泊まると、生活者にストレスじゃないのか？と逡巡するも、久保田さんのお話が頭にリフレイン。ケアワーカーのおひとりが並の声のよさでなく、訊いてみると元は劇団関係の仕事をしていて、現在ここで働いている。劇団にいるより面白いですからねと。なにかまた掴めそうな気になるも、そこで暮らすまいさんの大きな声を聴きながら、また爆睡。

翌日の一般の方が来てくれるトーク場所、ちまた公民館も路面で街に開かれた良い所だった。前日まーくんと遊びすぎてトーク用のパワポは途中までしか出来てなかったが、レッツでのわずかな滞在を経て、自分たちがフェミニズムを開くために出版社をやり書店をしていると言葉にしてみると決めていた。言葉でフェミニズムを伝える仕事をしながら、これまで自分はとにかく実践あるのみで、それじゃもう足りないからレッツに来たんだろう。活動がそうであるように、言葉もまた過程なんだと改めて知った2日だった。ちまた公民館に来てくれた、浜松周辺の方もありがとうございました。私もまた、こちらで場所を続けていきます。





PROFILE

1996年三井物産株式会社入社。主に金属資源の投融資案件の組成、トレーディング業務を担当。デトロイト、ニューヨーク、ロンドンで合計10年の海外駐在を経験。2010年にハーバードビジネススクールのリーダーシップ開発プログラム(PLD)を終了。2017年にヤマハ発動機株式会社に入社、経営企画、新規事業関連業務を担当し、2024年から執行役員新事業開発本部長、2025年1月から現職。CVC活動の中心であるYamaha Motor VenturesのChairpersonを兼務。

ヤマハ発動機株式会社 執行役員 CSO
経営戦略本部長 兼 Yamaha Motor Ventures Chairperson

第8回
ゲスト

青田 元 さん

聞き手：久保田瑛

瑛 「生きのびるためのエクササイズ」というトークシリーズでは、自分たちが生き延びるために、いろんな価値観に触れるということをテーマにゲストをお呼びしていますが最終回が青田さんになります。そして今までお呼びしたゲストの中で一番異業種なのが青田さんだったと思います。今日はですね、青田さんに聞く、新規共創事業のリアルみたいなテーマなんですけど、まずは青田さんとヤマハ発動機さんがどんなことやってるんだらうっていうことから話を広げながら、そういうビジネスの世界にいる青田さんがこういう福祉施設兼アートNPO という特殊な場所に来てどんな感想を持たれたのかという話、そしてフリートークに入っていきたいと思います。

ではまず早速、自己紹介からお願いしてもいいでしょうか。

青田さんの自己紹介

青田 ヤマハ発動機で、1月から経営戦略本部長をやっています。青田といいます。よろしくをお願いします。私、出身が岡山県なので実は浜松は何の縁もゆかりもない

んですが、岡山と浜松は実は共通点が結構多くて、80万人都市なんです。街のサイズとしてはかなり近いと思います。商業都市っていうのも似てるかな。18歳まで岡山にいて、その後東京の大学に行って、最初の仕事は三井物産という総合商社に入り21年間、鉱山開発の仕事をやってきました。2017年にヤマハ発動機という会社の新規事業担当の応募がありまして、そこに手を上げて移籍をしました。新規事業担当から、それから経営企画を2年半ぐらいやっているの、ヤマハ発動機に来てからは新しいことを作る仕事か、会社全体の方向性を整える仕事か、今年の1月からは両方をやることになりますね。

会社の話をしますと、ヤマハ発動機は全体の売上の94%が海外です。2兆4000億の売上のうちたった6%しか国内に売ってないんですよね。だから日本ではあまり広告を見かけない。でも会社の中は完全に日本語の環境で、経営も開発も基本的には日本語でやってる。ただ取締役会は英語ですし、僕が司会をやっているグローバル会議はやっとな英語になりました。

また全体の売上を100とすると、60%ぐらいがバイク、スクーターや電動アシスト自転車とかタイヤが付いている乗り物ですね。で、20%が船とか船外機とかの水の上の乗り物。残りの10%ぐらいがロボティクスっていう領域です。ヤマハ発動機の雰囲気とか文化についてはヤマハ発動機も兄弟会社であるヤマハ株式会社も、車を作らなかったのは結構大きなポイントだと思っています。車を作るにはかなりのリソースを割かないといけないわけですけど、結果的に値段の競争になって、かけたリソースとエネルギーを取り返せない。もしヤマハも車に全リソースを注いでたら、ダメになってたと個人的には思ってるし、少なくともバイクが1番大きな商品になってはなかったと思いますね。

新規事業をやる理由

瑛 ありがとうございます。あと、経営戦略本部長と新規事業開発本部長、この2つの事業の詳細を教えてくださいもいいですか。

青田 経団連の資料を見ると、日本の上場企業では、初めて社長になる人が80%ぐらいなんですよね。日本の会社は大体、東京証券取引所に入れば60年ぐらい保つので、少しずつやることを変えていかなきゃいけないと思うんですよ。日本では、会社ごと潰して新しい会社を作るよりも、優秀な人材が集まり、長く働くので、その人たちを使って次のことをやる方がいいんです。僕らも一緒に、ヤマハ発動機っていう会社を将来どう持っていくかということと、新しいことをやる話は切り離せません。

新規事業の例

瑛 新規事業開発部ができたのは何年ぐらいからなんですか。

青田 僕が入った2017年にはもう始まっていて、その時は多分20人くらいの組織だったんですけど、今は海外を除いて106人、海外を入れると多分200人ちょっとなんじゃないかな。

瑛 新規事業ってどういうものか、具体例とか教えていただけますか。

青田 新規事業が今のヤマハ発動機のモノづくりの延長線にあるならば、僕の仕事ではないと思っています。そうではなくサービス系の事業を行っています。今行っている新規事業にはアフリカとインドでオートバイを買えない人たちにオートバイを貸すという事業があります。毎日オートバイを借りた人が物を運んで10ドル稼いでくるんだったら、そのうち3ドルを僕らはもらって、残りの7ドルは皆さんのポケットに入れてください、で、1年半経ったらこのバイクはあなたのもの

のになります、みたいな事業です。それに、日本ではもうバイクに市民権がないんですよね。時間が経てば経つほど失われていく市民権をどうやったら長続きさせられるかということで、今1番成長してる国でバイクを入れれば長続きするかなっていう思いもあります。

瑛 そのような商業的な目線もありつつ、一方で、若者の貧困率とか失業率がすごく高くて、そのバイクさえあれば、Uberとかタクシーとか、すぐに職につけるみたいな、社会的なミッションも達成しているっていうような事業なんですよね。

青田 そうですね。やっぱりこの世の中には僕らが思ってる常識じゃないものがいっぱいあるんですよね。さっきのバイクの事業をやってるナイジェリアで言ったら、65%の人は定職についてないんですよ。失業率6割って言ったらすごく悲しく聞こえるかもしれないけど、彼らはセルフエンプロイド、自分たちは自立してる言うんです。そういう人たちが65%いるからできる事業です。僕らの常識で日本に座ってるだけだったら、ナイジェリアのその環境は分らないじゃないですか。海外シェアが94%という日本の外に物を売っているから見える世界があります。僕らが何をできるかっていうのをちょっとずつ集合知の形にして考えています。

ヤマハ発動機の風土、浜松や日本に対する思い

瑛 今回、青田さんは2日間お時間をいただいて、実は部下の方を4人連れて滞在していただいたんですけど、ヤマハ発動機さんなりの風土とか、浜松に対する思い、それこそ6%の日本に対する思いとかはありますか。

青田 株主や従業員などいろんなステークホルダーがいますが、僕の考えではその中に地域が入っています。なぜかというと、僕らは工場や会社をこの地域で運営して、生きていますが、そこで働いている従業員の人たちは地域にサポートされてなかったら暮らせないわけですよ。家庭ゴミの回収1つでさえ地域にサポートされているわけです。間接的な地域支援は、例えばサッカーチームやラグビーチームの運営があると思いますが、もうちょっと直接的に関わることが大事なんじゃないかなっていうのは自分の課題です。

レッツに滞在した感想

瑛 ありがとうございます。昨日4名の方と一緒に滞在していただいたんですが、率直にどうでしたか。感想とか、グッときたポイントみたいな具体例があったら教えていただけますか。

青田 自分にとっては鏡みたいな感じがしました。結局、障害のある人たちから受け止めるメッセージが言葉としてあん

まりないので、自分がどう考えるかっていうところと、自分がやった行動に対して、想像して納得するしかないんだなって。多分、初日の僕だろうが、10年経験してるプロだろうが、同じなんじゃないかなって思ったんです。感想という点では、僕より舟生さんの方がの方が話せると思います。

舟生 新事業開発統括部で、青田の下で新事業開発を担当している者です。青田は、0から1をクリエイトする、発想も飛び回る方なんですけど、私はどっちかというと枠にはめる、割と真逆なタイプです。レッツの感想についてはですね、私も実はこういう施設に来るのは生まれて初めてで、行く前からドキドキしていたのですが、扉を開けて入ったら、皆さんすごくフレンドリーで、利用者の皆さんもニコニコして自然に振る舞われていて、こんな幸せな空間があるんだっていうのがまず衝撃でした。その後、お散歩で佐鳴湖とお寺に2人の利用者さんと一緒に行かせていただきました。2人とも生き生きされてましたね。あと、当社から来たもう1人が利用者さんとお散歩でデパートに行った時も、利用者さんが一目散にロレックスに走って行って、周りが大丈夫かって焦ったという話を聞いたり。すごく楽しい時間を過ごさせていただいたのが本当に嬉しかったですね。僕は普段、磐田に住んでいるので、あんまり浜松は歩かないのですが、散歩っていつになっても楽しいなと思いました。

社会共創事業

瑛 ここから青田さんに、社会共創事業とは何かというところからお聞きしていきたいと思います。
青田 1つは、社会共創活動の「共創」という言葉が意味するのは、「自分たちが苦手なことがあるんだったら、得意な人と一緒にやろうよ」ということなんです。もう1つは、社会課題の解決ですね。社会に自分たちが役に立つのかもう一度見直して、新しいことをやる際に、自分たちがやるのが社会にとってネガティブになるのならばやらないようにしよう、ということですね。そして自分たちが社会の基盤に何かを返していく際に社会の基盤に対するアプローチ方法がなかったり分かっていないのならば、そこを分かっている人とやった方がいいよねってということで、「社会」という言葉を置いてます。

ただ僕は去年1年間、死ぬほどAIと付き合ってみて、社会課題の解決はもう俺がやらなくてもいいかって正直思っています。それよりは課題を見つけられる人の方が大事だな、と思い始めているんですよ。多分、そういうことができる人はAIに置き代わらないと思うし、そういうことに気づける人になってもらいたいと思うんですよ。レッツに来て単に僕らは見学することしかできないかもしれないけど、レッツにどっ

ぶり浸かってる人には見えないような課題が見つけれられるんだったら、僕らには多分機能がある。自分たちがもし鍛えるものがあるとする、そこなのかというのが、社会共創とか課題解決って言葉から僕が今考え方を変えようとしてるところです。

瑛 なるほど。私たちの活動がなぜ「アート」という言葉を使ってるかという、アートは解決はできないけど、問題に気づくことができるからです。問題を社会に提示していく。そうしたことが、アートNPOのミッションなので、その感覚はすごく似てるなって思いました。

青田 アートっていう世界に対して、ビジネスの人たちから見てもそこが大事だって逆に追いつただけかもしれないね。僕らはどちらかというと賽を投げられたものを受け止めてから考える人たちだったけど、僕らの中にも賽を投げる人がいないと、もう個性やユニークさがない、その人でなきゃいけない理由がなくなってしまう気がします。

非財務指標

瑛 また、お打合せの際に社会共創事業の中で、非財務指標を重要視してるというお話があったのですが、そこを噛み砕いて教えていただけますか。

青田 「財務指標」は分かりやすい言葉に変換すると売上や利益なのですが、それとは別に、「非財務指標」を提示する会社が増えてきています。会社は稼ぐだけじゃダメ、株主から見ると稼ぐ以外の指標も大事だねってということで、それらを評価するために「非財務指標」があります。自分たちのミッションを示す時に何を大事にしてるかを金額指標以外のやり方で表現し始めています。最近は働いている人の満足度やエンゲージメントなどをまとめて「人的資本経営」と言い方をしています。僕は企業が生きていく中において、人が大事だと思っています。だから、もしレッツに株主がいれば、「この人をどうやって育てているんですか」とか「この人はどういう人たちなんですか」っていうのを企業としては説明しなきゃいけない。僕はその説明を、働く人の持続可能性について表現する指標にちょっとずつ変えていきたいという思いがあります。

「財務指標」と「非財務指標」に対して、先日、TDKさんという会社が人に関する指標を全部まとめて「未財務指標」という言い方をしていました。「ここで育てた人は必ず会社の財務指標に貢献します」という言い方をしたんです。僕はこれはすごく良いアイデアだなと思いましたし、こういうふうに僕も整えていきたいと思いますね。でも単純に研修に多く出せば良いという話ではないので、一体どういう人を育てたいか、それに合った人の育て方ってなんだろうと考えています。もし

かしたらレッツに2年間研修に出すことかもしれない。例えば、レッツがやりたいことがあった時にそれを回せるだけのお金とか、人の採用を、うまく両サイドに納得がいくようなストーリーが作れると、共創関係が綺麗に生まれていくかもしれない。共創関係は両方が幸せじゃなきゃいけないんです。どっちかが搾取する関係は共創じゃないんです。

瑛 Win-Winともまたちょっと違いますか。

青田 Win-Winは、成長しなきゃいけないですよ。要はパイを増やして2人で分け合う話だから。そうではなく互助関



係でもいいと思っています。常に成長神話を僕らは持つてしまうんですが、別に成長しなくてもお互いが分け合えばそれはそれでいいんじゃないかな。

瑛 ありがとうございます。大企業の共創事業というとなんだかハードルが高く感じますが、今いただいたお話のように、Win-Winではなくて、互助の関係であること、それは私たちのNPOがやっているような、お互いが生き延びるためのプラットフォームを大小関係なく作ろうみたいなところから入っていくのも、共創と言えるんだなと思い、すごくエンパワメントされました。

企業にとっての「弱さ」「できなさ」

レッツ久保田 お話ありがとうございます。大体、障害のある人たちは社会から距離を置かれてきた長い歴史があります。マジョリティの方から見ると、守ってあげなければいけない、助けてあげなければいけないという対象だった。でもコロナが大きかったと思いますが時代が変わってきたような気がします。今日の青田さんの話の中にもあったように、とにかく儲ければいい、会社が大きくなればいいっていうだけではない、違ったフェーズの社会を作っていかなければいけないという時代に入ったなと思います。その中で私たちが、やっ

と企業の方々と何か共創できる時代がやってきたのかもしれないと思いました。そこで、「弱さ」や「できなさ」みたいなものの価値を私たちは追求しています。「弱さ」や「できなさ」というのは、ほとんどの人がマイナスのイメージを持ちますし、排除しなければいけないものと捉えられているかもしれませんが、そこにももしかしたら価値があるのかもしれないと思っています。なので一流企業で、94%海外で勝負している会社の方々にとって、その「弱さ」や「できなさ」にどういう価値があるのか。それから、CSRやボランティアの意味ではなくて、「弱さ」や「できなさ」がどういうふうに関わると、自分たちの企業にとって何かためになって、また新しい想像力みたいなものに変えていけるのかどうか、そのようなところをお伺いしたいなと思います。

青田 会社の中に優秀な人とできない人がいた時、できればみんな優秀になってもらいたから、できない人にフォーカスを当てないんですよ。でも、もしかしたらそこを認めると、もっと違うことが起きるかもしれないというのが、昨日今日で僕が考えているテーマです。あるいは、「弱い人やできない人がいていいじゃん」と認めさせるためにはどのような構造が必要なのか。またその構造で最終的に自分たちのパフォーマンスは

元よりも良くなったというのをどのように証明するのか。その方法を考えていくのは面白いなと思いました。僕らはまだ多分、障害がある人よりも会社の中における弱い人を認めるのは遅れているような気がする。見たくない、触りたくないってみんな思ってるかもしれないっていうのが率直な感想です。

擬似体験か、リアルな体験か

久保田 いわゆるエリートと呼ばれる人たちを大きな企業であればあるほど雇っていくわけですね。そもそも弱さみたいなものは本当はいろんな人たちが持っているはずだとは思いますが、あえてそれに着目するっていう機会はなかなか少ないとは思うんですね。だけど、そこに着目することによって何か新しい価値観や創造性が生まれる時代がやってきてほしいと思っているんです。それは一方ですごく怖いことかもしれません。自分が弱くもなっていくし迷うし悩むし立ち止まることにもなるんですよ。どうしても人は健康であれば健康であるほど、それを受け入れたくないものだと思います。でもそういう健康である人たちがあえて弱さを擬似体験するか、人間には想像力があるので一緒にそれを感じてみるようなプログラムがもし本当に生まれたらどうですかね。

青田 僕は逆のことをイメージしていて、バーチャルで想像

するとか疑似体験するって本当にできちゃうんですよ。でもフィジカルな体験ってもうできなくなってるんですよ。だからあえて僕はフィジカルにこだわる方がいいんじゃないかなって思うんですよ。やっぱりもっと実体験させるようなプログラムが増えていくような気がするし、本当に人の価値観を壊すようなこととか、人を成長させるようなことはやっぱりリアルな体験でしかないんじゃないかなって僕は逆に思いますけどね。

子育てというリアルな体験

久保田 もう1つ聞きたいんですが、私は一番生々しい体験っていうのは子どもを生んだ時だったんですよ。育てる中でなんだこれっていう、もう異文化体験どころの話じゃなくて、自分の今までの価値観を全部投入しても理解できないっていうものが生まれました。だからといって放置するわけにも逃げるわけにもいかず、とにかく何かしなきゃと向き合ったことが1番リアルな体験だったような感じがするんですよ。企業の皆さんだって子どもや家族はいるし、その生々しい体験を実はいろんなところできるチャンスはあるはずなんですけど、そこは割と簡単に乗り越え超えちゃうんですかね。

青田 例えば30代の前半で子どもができたとして、時々ご両親に手伝ってもらうとかあるかもしれないですけど、本当に核家族になってくると、もうパートナーと向き合うしかないですよ。パートナーと向き合った時って、押し付け合いもあるし学びじゃなくなっちゃう、損得の議論になっちゃうような気がして。子育て中の私の部下も、特にコロナ禍のタイミングで1LDKに住んでいて、夫婦共にリモートで会議に入っている後ろで子どもが泣いている景色を何度も見してきました。僕はあのタイミングで、本来だったら家にいて子どもの面倒を見てなきゃいけないあの世代を酷使してたんだなって思っただけです。ただそれが共有されずに、コロナが終わって、この経験とか辛かった時間が終わった、また日常に戻れたって皆思ったんです。本当はあのタイミングで、もう1回振り返って会社として何をしなきゃいけなかったのかとか、次の世代が子育てしていく中でどうすることができたのかとか、対話もしなきゃいけなかったんだと思うんですけど、もう昔に戻った感じがあって。これは自分の反省事項ですね。

〈質疑応答〉

弱さ・できなさが特異性のきっかけに

来場者 弱さ・できなさの話に関連してですが、僕は養蜂をやっていて、生き物が好きでいろいろ進化論などを調べています。生き物は環境が変わると、その環境に適用できな

くて、弱さ・できなさが出てくるんですよ。これって事業もそうだと思うんですよ。助けてほしいから技術を教えてと言って、隣でうまくいってる人に技術をもらってしまうと次の何か変化があった時に対応できないと思うんですよ。そう考えた時に、弱さ・できなさっていうのは、特異性を持つきっかけになり得るなと思います。なので、常にものを考える時に、「なんでこうなったのか」じゃなくて、「次に何をするか」を考える必要がある。こういう場で意見を交換し合えることがすごく面白い場だなって思いました。

青田 1個だけコメントすると、恒久的に今の組織が続くのだったら、今の発想で動いているし、今の発想で動いてきたんだと思うんですよ。組織論と進化論は比較されるんですけど、組織論で進化論が持っていない点を1個挙げるとすると、時間軸ですよ。スピードがないと生き残れない時に、進化を待てないという気がしますね。だから、共創活動は個人的にはセカンドベストだと思っています。全部自分たちでやって、悩んだり苦しんだりしながら克服して生きていければベストだと思います。しかしそれをやっている時の企業としての悩みは、だんだん先細りして良い人が入ってこなくなるということです。もう1つは、時間が経てば経つほど取れるパイも小さくなるかもしれないということです。この2つと戦う時に、どうするのがいいのかなっていうと、他の人と一緒にやる。それは長い目で見ると、組織のオリジナリティや独立性を失うかもしれないと思いつつもやっているような気がします。

子育てや家族の定義

来場者 子育ての話について思ったことのシェアなのですが、資本主義は、資源を消費して急速に成長する手段のように僕には見えるんですね。そのときの消費される資源には人間も含まれると思うんです。それは再生産ができない仕組みだなんて僕は思っています。子育てをする、つまり資源である人を再生産すると、資本主義においては個人は不利になる、それをしない方が競争社会や資本主義においては有利になるっていう形が明確にあるので、基本的に少子化は今、問題視されているけども、いやこれは僕らが望んで作った世界だと思うんですよね。なので、じゃあどうするかっていう新しい価値観を作らないといけないんじゃないかなと思っています。それと、僕は蜂蜜屋さんをやってるんですけども、今年から社内食堂みたいなものを作ろうと思っています。うちは瓶詰めを沢山しないといけないのですが、瓶詰はいつでもできるので、出社時間や帰る時間を自由に行っています。そしたら働いている人は見事に主婦ばかりなんですよ。みんな主婦で、帰って家事をしないといけないから、うちのお店は4

時までなんですよ。そこでちょっと考えてみたんです。例えば、5人いて、みんなが帰ってそれぞれ1時間、合わせると5時間をかけてご飯を作るのに対して、うちでみんなで1時間かけて5人分作れば、4時間の時間という資源が作れるなって思ったんですよ。それがきっかけで社内食堂を作ろうかなと思っているんです。

家族の形とか、会社と家庭を曖昧にすることをしてみていて、ちょっとうまくいき始めている過渡期になっていて、面白い状況です。

青田 僕、新明解国語辞典のすごいファンなんです。今までは、「夫婦が子どもを持つ」ことが多分1番ミニマムな家族の定義だと思うんだけど、「1つのキッチンを共有する」のが家族の定義になってたらいいなって今の話を聞いて思いました。それは多分レッツがやってることでもあると思うんだけど。

弱さを捉え直す

来場者 先ほど出たリアルな体験が必要だったということに対してですが、実はうちの会社でも最近ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョンの啓発活動が盛んに行われています。私もそういったワークショップに参加しました。そこで、VRのゴーグルをつけてADHDの脳内を体験するというのがあったのですが、私にはそれをつけてもイメージしづらかったんですよ。やっぱり頭の中で何を考えてるのかっていうのはVRだとわからないし、こういった場で実際の体験をしてもらうっていうのはすごく重要なことだと感じました。

あと、同じくその時のワークショップで講師が、障害とは連続性を持っていることだと言っていました。だから、医学的にそういった診断のつかない人は福祉の制度から外れてしまって、すごく居づらい環境になってしまってるのは問題だなと思ってます。あとは、そういった連続性があるということは、ひょっとしたら私自身にも何らかの障害があるんじゃないかなっていうふうに思うような時もあります。

それと、先ほど久保田さんがおっしゃった、「弱さ」「できなさ」の価値をなんとか追求できないかというところに絡んで、近年だと、例えばUSのIT企業なんかでは、インクルーシブデザインをやるような組織が体制化されていることがルール化されている。企画設計の段階から障害者でも使えるようなものにしていきましょうっていうことで障害者の意見を取り入れながらものづくりを進めていく方法なんですけど、私も技術部門でものづくりをしている視点から、そういった動きが広がってくるのはすごくいいことなんじゃないかなというふうに感じています。

瑛 青田さんをお呼びする際に話していたことなのですが、

社会の中で、今なぜ、障害がある人が弱いて呼ばれてるのかを考えてみると、単純に強い人たちの言語的にコミュニケーションが得意であるとか、体が丈夫であるとか、認知がマジョリティの中で成立しているということが知性として社会の中で認められてるからだと思うんですね。それは大学とかも含めて体系化されていってるし、今は競争社会の中で3分プレゼンみたいな形で、言葉が優位な時代だなと思います。一方で、今私たちが使っている言語的な知性ではない、身体的な知性なのか、何の知性なのかわからないんですけど、何かがそこに存在しているんじゃないかなと思うんです。だから、私たちは今、相対的には弱いと表現されているけども、別に弱いとは思っていないっていうのが個人的な感覚です。身体知が強いとか感覚知が強いとか、あとレッツのメンバーさんのそれぞれの何か特殊な持ってるものが単純に健常者のマジョリティが感じ取れてないだけかもしれない。障害というものにグラデーションがあるように、知性にもグラデーションがある。よく使われる知性が強いと言われ、よく使われない知性は弱いと言われてる。そんな俯瞰したような感覚で私は捉えています。

日時：2025年1月11日（水）13：30～15：30
会場：たけし文化センター連尺町

ひとインれじでんすに参加して。

文：青田元

私が小学生のとき、クラスメイトに「Fちゃん」という子がいた。

当時、学校の中に養護学級というクラスもあって、Fちゃんはそこにいくオプションもあったけど、僕らと一緒に同じクラスルームで、同じ日常を過ごしていた。

通学も一緒。給食も一緒。

今回、たけし文化センターで過ごして、最初に思い出したのはFちゃんのことだった。

当時の自分が、なんらかの形で、レッツで時間を過ごした経験があれば、彼女との接し方は違っていただろうかもしれない。あまりにも自分に理解がなく、あまりにも幼稚だったかもしれない、と。

時間は戻せないで、今思ったことをしっかり記録して、次の時に活かせれば、そう思った。なので、この記録を残そう、と。

自分の中に体験が、ある間に。

今回のイベント参加について

クリエイティブサポートレッツの活動は、改めて僕が説明する必要もないかな。引用するなら、ここ（<https://cslets.net/wp/>）かと。

元々、今回のお話をくれたのは、久保田瑛（あき）さん。このNext Local Leadersのイベント（<https://forbesjapan.com/articles/detail/52685>）審査員を私が務めていて、彼女がピッチする側だった、というのが知り合ったきっかけ。コロナの時期は、なかなか会えなかったけど、また改めて色々な話をしましょう、ということで、今回の「体験滞在」につながっている。そう考えると、このNext Local Leadersから、伊達くんとか、中谷くんとかと関係が始まったという意味では、感慨深い。

▼ひとインれじでんす

様々な分野の専門家が、レッツの運営するたけし文化センター連尺町やちまた公民館に滞在します。知的障害のある人たちと過ごしたり、スタッフと話してみたい何を思うのでしょうか。文化人類学者なら、劇作家なら、編集者なら、それらの風景はどんな風に見えるでしょうか！？滞在2日目に公開トークもあります。（レッツのチラシから抜粋）

ということで、様々な方々が宿泊し、経験を共有してきた「ひとインれじでんす」のゲスト最終回に招待してもらった。

レッツの活動をもう少し知りたい、という方は、同じnoteのプラットフォーム記事を参考に。

【note】たけしと生活研究会の記事一覧
<https://note.com/takekatsu2019/all>

私は、今回一緒に散歩の時間を過ごしたササキさんの「ウンチ奇談（<https://note.com/takekatsu2019/n/n7b49a96d89fc>）」がとてつもなく好きだ。僕らはマイクロバイオームも、腸内環境も、人間の体をまったく理解できていない、と気づかせてくれたEntry。感謝。

個人的には、このWiredの記事（https://x.com/wired_jp/status/1877188675068637461）も、このササキさんのEntryのおかげで、非常に解像度高く読めました。リアル・ファクトフルネス。多謝。

あるいは、Youtubeでも、雰囲気伝わります。

のヴぁてれび
<https://www.youtube.com/@NovaTVlets>

私のバックグラウンドは、他の参加者とはちょっと毛色が違う。

社会学、哲学、文化人類学など、福祉のテーマに少し

関わりがある世界に比較すると、「同じ地域」の「グローバル企業（になりたい）」会社のCSOでは、だいぶ距離が、あるなあ、と。当初から持っている差異。

その1：体験滞在の振り返り

いろんな経験をさせてもらったのだけど、ちょっとそれらの気づきを以下の通りまとめてみた。

アクションごとに生じる（受け手の）ルーティーン：

- ①案外ほったらかしで、観察から入る。
- ②おかまいなしで、絡まれる、巻き込まれる。
- ③自分の想像力で相手を理解しようとして、理解した気になる。
- ④自分の行動が相手に与えるインパクトが皆無ということを認識。
- ⑤時々なされるフィードバックに喜び、小さい裏切りに愕然とする。



青田の似顔絵を描いてくれているところ。

上記のルーティーンは、感覚的に5分に1度位発生する。

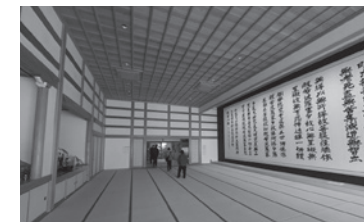
イベント発生時における確変

散歩、食事、演奏、ダンス、買い物などの、ビッグイベント発生に、適宜参加を問われる。その際に、大きなインシデントを目撃したり、加担したり、傍観したりして、距離感が狭まる。

時々、確変が入ったりする。



買い物の帰り道に、確変イベントが発生したところ（終盤）



サイズで圧倒してくる書に負けじと歩く散歩チーム（龍雲寺）

その2：トークイベントで話したこと

3Fで一泊させていただき、翌日も施設内で時間を過ごす。土曜日も仕事をしている私としては、かなりのおんぴりとした土曜日の午前。午後からトークイベント。知り合いの顔もちらほら。ありがたい。

私の話は、自己紹介、体験の気づきの共有、現在の組織の課題、自分の行っている「共創活動」への想い等。今回のイベント、あるいは福祉と企業という視点での対話項目として、いくつかMemoを残すとすれば、こんなところだろうか。

①一見関係のない人的資本経営と、「共創活動」の関係性

日本の上場企業のCEOは、80%が初めてCEOを務める。ある企業に入社して、のぼりつめてCEOになる。最初にして、最後のCEO経験がほとんど。対して、海外ではプロ経営者と呼ばれるCEO専門職が存在していて、20%しか初めてCEOになる人が生まれない。F1ドライバーで考えるとわかりやすい。多くの場合、他チームから移籍してくる（=他社のCEO経験者が別の会社のCEOに任命される）。なかなか下のClassからのステップアップは狭き門（=同じ会社の下役職からCEOに昇進する）。日本の事例は、全ドライバーが、他チームに移籍せず引退、新しい若い世代に総入れ替えるような感じ。

だとすれば、CEOになる人達には、圧倒的な経験をしておく必要がある。そのために、機能で分化された組織で上り詰めるだけではなく、新規事業などで、小さな失敗をする経験、あるいは小さな会社の財務諸表の管理、それに加えて他社と何か一緒に仕事をするということで、「共感性」を身につける必要があると思う。よく使うけど、「Put her/his shoes on」という共感を

身につけるための体験。このために、新規事業開発というフィールドを使うことを最近考え、形にしていきたいと思っているという話。

レッツにすることで同様の経験ができるような気がする。

今の世界は、「感覚知」「身体知」よりも、「論理性」「言語性」が重要視される時代。羽柴秀吉なら、口が達者な私より、敵の侵入に対する感度が高いだけし君を雇うのでは？と。

求められるものが変わってきた世界により、評価される知恵も変わってくる。

②Noと言われるまでやめない企業文化における仕事の進め方

この企業文化に沿った人材が育つ、あるいは仕事の進め方が異なる、というのは、組織で仕事をした人間には理解できると思う。ただ、自分がどういう会社で働いているのか、他社との対話がなかりせば、自分の立ち位置を理解することもままならない。

どのような企業文化であるかによって、仕事の進め方、人材育成の方針は大きく変わる。

私は自分のやっていることが、他社でそのまま通用すると思っていない。いつも、その注釈をつけながら、公共の場所で話すことにしている。

他社と様々な会話をすることで、改めて自分の組織の特徴に気づくことができる。

よくネクタイの例えを出す、自分で自分のネクタイを選ぶと似たようなデザインと色になる。それは好きな色だから。友人に選んでもらうネクタイは、思いの外、自分がいいと思わないものが選ばれるが、そのネクタイをしているとよく褒められる。それは第三者の視点から見た自分に似合うものだからだ。

福祉の領域で、レッツが進める自由度が高い組織は、必ずしも今の福祉の現場と現実では、マジョリティ側ではなく、異端と受け止められかもしれない。ただ、現場にいる人であればあるほど、この活動に賞賛と拍手を、そしてそこに踏み込めない自分の現状に対するやるせなさを感じることも多いようにも

思った。

③組織運営における「評価制度」について

あんまり、この点は深く考えずに発言したのだけど、「職場」である以上、その人のパフォーマンスに対するフィードバック、即ち評価という仕組みが存在している。

常に課題を感じていることだけど、福祉施設で働く方々を評価するというのは、非常に難しいのではないかと、思った（実際には、そんなに大きい課題ではないのかもしれないけど、営利集団の我々にとって、このトピックは大きな課題）。

④課題解決よりも、「課題発見」する力

AIを使っていると思うことだけど、課題を解決するということの一般化がものすごい速度で進んでいる。どうでもいい課題に気づけるか、しかも、そんなに大仰なものではなく、小さい課題（得てして、課題は小さい、どうでもいいことが多い）を取り上げることができるのか。

連続起業家のけんすうさんが、「めんどくさい」を解消する話をしていて、そこで、Backspace Keyを押すのに、一体年間でどのくらいの距離を小指が移動しているか、定量化して（3km／年）、ソリューションを出した話が面白い。

<https://open.spotify.com/episode/7jZVoN6ZVWs45ygVrs35i9?si=iCg6oyzgRiyxRSmeyYWdZg&nd=1&lsi=18a767bbc0cd4043>

これこそ、課題を発見する力だと思し、思いの外、この能力は皆が持っている訳ではない、と思う。

⑤アートの役割とこれから

「何かに新しい気づき」あるいは、代表の翠さんの言葉を使えば「違和感」を独特の形で与えてきた「アート」の役割を、他の方法で提示しようとしているのを目にする機会が増えた（株式会社コテンに代表されるようなSocial Venture、田淵さんのZebra企業など）。

社会に対してアートが提示してきた方法論は、企業というフィールドでも有効なのではないか、と思う部分も対話した。

反対に、実行フェイズまでもアートが担当しなければ、不十分な方法論とを感じる人も出てくるかもしれない。例えば、かしだしたけし (<https://kubotamidori.hamazo.tv/e8596509.html>) は企業内でも機能するようにも思し、企業の研修として、レッツを活用することも想定できる。

違和感を与えること、下の⑦にも通じるけど、企業内の弱い部分の気づきになれば、と思うところもあり。

⑥Win/Winと、ゼロサムゲーム

共創活動は、お互いにメリットがないと続かない。これをWin／Winの関係と置き換えても良い。特に企業が行うジョイントベンチャーなど、この権化。一方で、夫婦の子育ては、何故か、Win／Winとは言わない。なんとなく、共通のパイを取り合うゼロサムゲーム、2人の間に引かれる役割分担の線の位置を、どれだけ自分に寄せれるか、ここの議論をしているように思う。

今後は、ビジネスの世界で行われている「成長に基づいて得られた利益を分担し合う」文脈で語られることを福祉や、子育てというような家庭生活に下せないだろうか。

あるいは、成長しない世界でも、Win／Winの関係を話し合う方向性の議論、もしくは、全く別の視点で家庭というものを再定義する（コミュニティでの子育て）等、可処分時間の再配分など、選択肢は色々あると思った。

<https://x.gd/Porul> がヒントになれば、と。

⑦組織の中で、「弱さ」「できなさ」を認める意義、その仕組み

これは難しい判断かもしれないが、案外面白いと思った気づき。

企業はこれまで、マッチョで、明晰で、自分自身の犠牲を厭わない人になれ、と言われて人材育成をしてき

た。いわば、会社にとって都合のいい人材。少し高い報酬だったり、出世だったり、研修だったり。

でも、価値観の変化で、管理職になりたくない、という人も出てきている。

本来、組織が持っている力を最大化しようとするれば、弱い部分、できないこと、を褒め称える文化を醸成し、全体の力を結集できれば、強い組織になり得るのではないかと。

その弱さを認める作業に、翠さんの言う、障がいのある方々が普通にフロアにいる違和感、そこから生まれる対話をベースに、個々人の弱さに組織として向き合う力を獲得していくのは、面白い。

できるかどうか別にして、ここにも可能性がある。

まとめ

昨年のNatural Leadership研修でも、感覚知を学び、今回も感覚知を鍛えるシリーズだった。言語値でやってきた自分が、改めて自分の感覚知に向き合うことで、言語知にあまり依存しない自分になっていきたい。

【note】Natural Leadership研修の振り返り。
<https://note.com/jimaota/n/n29f054309985>

最後に。

このような機会を与えてくれたあきちゃん、お忙しい時間をなんとかやりくりしてくれて、少しでも対話の時間を作ってくださった翠さん、また我々を受け入れてくださったスタッフの皆さん。

そして、我々に気付きと、成長の機会を与えてくださった利用者の皆さん。

心からの感謝を。

【note】Hajime Aota
ひとインれじでんすに参加して
<https://note.com/jimaota/n/n29bacff7eda4>



京都哲学研究所×クリエイティブサポートレッツ
コラボレーション企画

“できなさ”の 現場から考える

今年度は、「価値多層社会」の実現を目指し、
国内外の産官学民からなる「京都哲学研究所」のみなさんにレッツに滞
在してもらい、対話を重ねる事業を始動しフォーラムを開催。
その様子を誌面に掲載します。

トーク実施日 | 2025年1月27日（月）

参加者 | 京都哲学研究所、京都大学出口研究室学生、
認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ スタッフ

出口 KIPというのは京都哲学研究所、Kyoto Institute of Philosophyの略です。今日はKIP、京都大学、同僚のワダ・マルシアーノ先生を含めた混成チームで来ました。私は、たけし文化センターへは2度目の訪問になります。それから一昨年、京都大学の学園祭に、レッツの皆さんが1泊2日で来られました。この1泊2日のイベントは、皆さんを招へいたワダさんが監督をされて、映画になりました。

ワダ タイトルは、『障害と健常』っていうんですけど、60分弱の短いドキュメンタリーで、それは京大3部作のまず第1の作品。

出口 京都哲学研究所は、2年前の7月に設立されました。最初はNTT、その後、日立製作所、読売新聞、博報堂にもファウンダーに入っていて、今日はそこから出向されている方も来ています。日本を代表するさまざまな業種の企業と、哲学のコラボレーションということで、非常に珍しいケースというか、日本で多分、初だろうと。私やKIP共同代表理事のNTT澤田会長も、各国を訪れていますが、海外でも珍しがられます。一方で、同じようなムーブメントが、今、世界中で起こっていることも確かです。だから世界が、ないしは時代が哲学を求めているというふうなことを私も肌で感じているような状況です。
KIPが一番の旗印に掲げているのが、価値多層社会。日本というのは、東アジアの伝統的な文化の上に、19世紀の半ば、西洋の考え

が入ってきて、それが今、交わらないような仕方でも共存している。悪く言えば分裂してるのかもしれませんが、相反する考えが多層をなして、最終的に1人の中で同居しているという、これがわれわれのパーソナリティーだとすると、同じことが社会全体にも言える。そういったいろんな価値観を、多層を成すなり方に則した仕方——マルチリングルに発信していくというのも、この研究所のミッション。そういう話を世界のあっちこっちでしたら、割と共感をしていただくケースが多い。

なるべく一つに染まらない価値観っていうのを、この研究所では出していきたい。私自身の価値観もあくまで提案。唯一、絶対的に正しい価値観ではない。価値観の選択肢、ポキャブラリーを広げる。これが重要なことだと思っています。

私の価値観は、一言で言うと、二つのターン。180度ターンする、これまでと考え方をごろっと変える、そういったような意味です。一つが「Weターン」。I-私を中心とした社会から、We-我々を中心とした社会。そういうふうに言うと、全体主義みたいな社会に行くのか、と言われるんですけど、「I」がなくなったら、「We」ではなくなります。Weというのは、必ずその中にIがある。1人だけで存在することができるような「I」というのは、これは実はイリュージョンだ、錯覚だと。そういうことがこのターンの前後で明らかになると私は考えています。皆さんの自我というのは必ずあるわけですけども、

手を挙げるとか、歩くとか、全ての身体行為は、Weがないとできない。私は単独行為不可能性というふうに呼んでいますけれども、そこから出発した「IではなくてWe」、というふうな考えであります。全てのことが一人でできる、というのが、近代の一つのイリュージョン。結婚するかしないか、どこに就職するかしないか。人の意見を聞くのはいいけれども、最終的に一人で決めなさい、我々はそういう風な近代の教育を受けてきました。それは一人でできる、という前提の上に組み上げられてきた教育であり、価値観。その中で教育されてきたので、一人で何かしなきゃいけないという強迫観念を持っているわけですけども、私のこの「Weターン」の基礎、一番になる考えで言いますと、どんなことであっても、一人でできることは一つもない。

例えば決めるということであっても、実は一人では決めていない。自分のことを、いわば独裁者のように決める権利、専決権、専決能力と呼んでいますが、そんなこと実は幻で、誰も持っていない。われわれはどんなものであっても、いろんな人の意見を聞いている。それは単に意見を聞いているだけではなくて、共同で決定しているんです。私はいろんな決定をしていますよね。最後のボタンを私が押す。最後のボタンを押すということと、一人で決定するというのは決定的に違うわけですけども、どうもその辺りが誤解といたしますか、混同されてきたのではないかと。混同されてきた結果、「できること」が主軸に置かれてきた。「できること」に人間の本質とか尊厳とか、かけがえのなさがあるというふうに考えてきた近代。

英語で言いますと、「できること」は例えばケーパビリティですね。「できないこと」はその逆ですから、インケーパビリティで

す。ケーパビリティからインケーパビリティへ、そこに人間の基軸を置き換える。「できること」から「できなさ」へのターン。これの上に初めて「IからWe」へのターンというのが乗っかる。その二つのターンをセットにして、旗の一つとして掲げていこう、というふうに考えています。私がレッツに非常に共感を持った、ないしは久保田さんも共感を抱いていただいたのは、やっぱりこの「できなさ」をむしろ主軸にしていこう、そのスタンドポイントだというふうに思います。

障害者の教育、政策というのはずっとなされてきましたが、「障害者であっても、こうやって頑張れば、こういうことができるようになった」という、「できること」の神話の中に、障害者のかたがたをいわば動員する、そういった側面もあったんだろうと思っています。できなさターンでは、その動員をやめましょうと。久保田さんも、まさにそういうお考えを持っておられたということで、これは何か一緒にやりましょう、というような話になりました。

単独行為不可能性は、みんな抱えているんです。こういった社会の中で、それがちょっと見えないっていうんですかね。場合によっては、自分って一人で生きていっていると思ってしまう。われわれ、通常の健常者はそうだと思いますけれども、単独行為不可能性が、可視化されている、顕在化されている存在こそが、いわば障害者。障害者は何ができない、欠如している存在。これ、哲学で欠如態というんですけども、欠如態じゃないんです。もちろん、われわれみんな、いろいろな形で欠如しているわけですけども、単独行為不可能性は、みんな持っているの、これに対して、欠如しているとか、満足しているとか、というのはあり得ない。それが顕在化してい



るのか、隠しているのか、ないしは、無いつもりになっているのか。その違いでしかない。

われわれは普通、どのような行為をするときも、必ずWeの一員として、Weに助けられて生きているわけですが、自分で健康者だと思っているときは見えなわけですよ。一人で頑張って試験を通ったから、今、ここにいるんだとか、そういうふうに思っているわけですが、それは誤解でしかない。健康者は、健康者のトラップで、Weが見えない。自分で健康者だと思っているということは、Weなしで、一人でやってきたというふうに、誤解をしてしまってる。

障害者はそうじゃない。ここにWeがある。私、ここに最初に来たとき、僕が言っていたWe、一つはこれだというふうに思いました。壮君をはじめ、障害者といわれている施設利用者の人たちを、スタッフの人、ヘルパーさん、このコミュニティー、建物全体、いろんなものが全てWeの一員として支えている。みんな、これ、Weの中にいるというのが、これだけ明確な形で見れる場所、これはなかなか少ないというふうに思います。久保田さんの一つの思想だと思いますけれども、障害者のいる所、障害者のかたがたがおられるときにはWeがあるわけですが、今の社会はどこかの街外れの施設にそれを隠そうとしている。そこに、ないしは家庭の中に、見るべきWeが隠されている。たけし文化センターは、浜松という大きな街の一番真ん中で、丸見えのような仕方では、Weが顕在化されている。できなさターン、Weターンを掲げている研究所としては、やっぱりこういう場所に来させていただきたい。

以下、KIPメンバーの自己紹介と滞在中の感想

荒木 KIP事務局の荒木と申します。私自身はNTTの社員で、出口さんと一緒に共同代表理事しているのが、うちの会社の澤田会長ということもあって、事務局業務もさせていただいております。ここに来させていただいたのは2回目ですね。1回目来たときはちょっとドキドキというか、どうしたらいいのかなとか、もしくは何かしないといけないのかなっていう感じもあったんですけど、むしろ、きょうは場所が分かっていたのもあるし、何もしなくていいやっていう気持ちがあったのがあって、すごくリラックスできる感じがしました。普段から何かしないといけないことに追われているので、ここにいるときは何もしなくていいっていう時間が拝見できたなと思いました。

岡本 KIPの賛助会員になりました、靴下を作っている会社の、岡本株式会社という会社の社長をしております。意味がはがされるような感じで、すごく不思議で初めての体験、経験というか、全然、言葉になってないんですけども、無理に言葉にせず、もうちょっと味わおうと思っております。

東 読売新聞からKIPのほうにお手伝いに入っている者です。今日の取材の様子もKIPのホームページのほうに掲載させていただきますので、よろしくお願いします。

以下、京都大学メンバー

佐々木 初めまして、佐々木と申します。私は出口研究室で今、勉強させていただいております、もともと大学で哲学を勉強して、

いったんベネッセに就職して、退職をして、大学院で入り直しました。去年、京都大学のNFにいらっしゃったときに哲学対話ということで、もともと哲学対話は興味があったので、そこにも参加させていただいております。私自身は言語哲学をやりたいと思っていて、言語にする前の感情とか、そういうのもすごく重要だということへの気付きがありました。今日、この場に来て、言葉にすることと言葉にならないこと、どういうふうに考えていくかみたいなのを、またあらためて、多分、今日はもやもやして、でも、すごくいい刺激をいただいで帰れるなっていうふうに思っております。

吉川 同じく出口先生の研究室の吉川と申します。きょうは何気なくというか、何となく一緒にレッツの皆さんと過ごせて、別に無理して話し掛けようとかもなく、楽しい時間が過ごせたという感じです。

渡 出口研究室で博士後期課程一回生をしています渡と申します。実は高校生のときに父親が脳梗塞で倒れまして、それからいわゆるヤングケアラーということをやっておりました。実際、介護ということをやってみますと、情ではやっていけないということがあって、そこで恐らくこれから治る見込みがない父親を、なぜ介護するのかというのをずっと考えていました。今回このレッツのイベントに参加させていただいて、ケアをしていくことの意義というものを、またあらためて考えてみたいと思いました。ありがとうございました。

岡本 学部3回生の岡本です。参加させていただいたきっかけは、11月祭で行われていたレッツさんとのイベントに参加していた知り合いに紹介してもらいました。その人が問題意識を持ったらしくて、すごい熱弁をされて、こういう活動があるんだと。その人に聞いて初めてこの活動の存在を知ってしまして、今回のイベントのお知らせが入ったので、じゃあ、行ってみようということで参加させていただきました。

松本 出口研で事務員をしております松本と申します。今回2階で利用者さんやスタッフさんとライブをやっているのを聞かせてもらって、久保田さんが表現未満とおっしゃってましたけど、本当に表現だなと思いながら聞いてました。利用者さん達の言葉は日本語になってないとか文章になってないとかはあるかもしれませんが、表現だし、ちゃんとコミュニケーションを取っていると思いました。こちらやスタッフさんが補って汲み取っている部分もあるんだろうなと私のほうでは感じました。

ワダ 京都大学文学研究科で映画メディア研究を教えますワダ・マルシアーノと申します。まずレッツに最初にぶつかったのはオンラインだったんですね。私は映像研究をしているので、いろんな面白い映像を探しているんですが、そこでレッツが常時アップロードしている定期的な映像なんですけども、それがものすごく面白くて、これは行ってみるしかない、この空間を見に行くしかないっていうので、3年、4年前ぐらいに来たんですね。それが初めてで、ものすごいものを発見したというふうに思いました。

出口さんや同僚の話を聞いていると、われわれ研究者がある意味、理論のレベル、言説のレベルでいろんなアイデアを世の中に投げ掛けていくことができるわけですが、それを地に足の着いた、現実のところにと落とし込んでいくというのはすごく難しいことで、私たちにとっては不得意っていうか、トレーニングされていな

いところなんですね。そういった意味で、今のコラボレーションというのは、ある意味、われわれが思っているよりはもっと意味があることなのかもしれないというふうに私は見えています。頑張ってほしい。

京都哲学研究所 × レッツ意見交換

出口 先ほどWeターンという話をしました。IよりもWeにフォーカスする、そういった社会のビジョンを描いていこうと。でも、Weになったからといって、ユートピアになるわけでもない。1人の同じ人間が悪いこともすれば、いいこともするのと同じように、良いWeだっているし、悪いWeだっている。悪いWe、これはWeの中心が誰かによって占有されているWe。例えばある国の中心を誰かが一人が取っちゃった。これは独裁制-dictatorship。ある社会の中心を、ある特定の集団だけが取っている。これは社会的な不平等ですよ。生態系の真ん中を人間だけが握っている、これは悪しき人間中心主義です。

それに対して、一つのWeの良い在り方、これは「中空的We」と呼んでいます。中心がない、中心が空だ。誰も専制君主がない。全ての利害を一身に握っていて、全員を自分の手下として自分の利害に奉仕させる、そんな構造が成り立っていないWe。これを一つの良いWeとして目指すべきだ。という話を、世界のあちこちでするんです。今、国際社会、ビジネス、どこでも中心の取り合い、ゼロ・サム・ゲーム、そういった競争をやらされている。そういうものから降りることで、決定的な不利益を負ってしまう。そんな状況で「あなたの言っているような中空的Weは、理想論としてはいいかもしれないけど、本当にそんなものがあり得るのか、ないしは、どうやってそっちに行けるのか」という質問はよく受けます。

私は今、「中空的We」を探す旅をやっております、この夏には、屋久島の屋久杉の森、たまたまそのときはワダさんもいたんですけども、そこに行って、あ、ここに中空的Weがある。例えば屋久杉ってものすごく長年、生きてきた森の王者のようにも見えるんですけども、その屋久杉が全ての中心を握っていたら、生態系は崩壊します。特定の種、それが屋久杉であっても、人間であっても、例えばシカとかそういったものであっても、それが中心を全部、握ってしまったら生態系は本当に崩壊する。生態系というのは、中心が空でないと、生態系はそもそも成り立たない。ここに中空的なWeがある。そういう発見をしました。

今日、もう一回、発見をしました。たけし文化センター、レッツの一つの中心は壮君ですよ。そこから始まったというお話でした。まずは家族の中。でも家族だけでは大変だから、Weが大きくなっていった。ここの中心は壮君であり、利用者のかたがたなんですけど、これが今日もちょっとお話を聞いて、謎なんですよ。何をやりたいのか、なんでこれをやっているのか、何十年も一緒におられる家族にとっても、いまだに謎なんですよ。謎っていうのはこれ、エンプティーだ、空だ。だからdictator-独裁者になれないんです。(中心の) 本人が分かっている、これをやれって命令が出たら、これは独裁国家。ワンマン企業の社長さんとか、亭主関白のおうちみたいなもんですよ。壮君は中心の一つではあるんだけど、この中心が何

をやりたいのか分からない。ここに一つの中空の在り方を見つけた。これを世界で言って回ろう。

私のもう一つのキーワードは、フルフィルメント。この生を満たす。壮君、エンプティーである中心がなんかやりたいことがあって、そこに表現未満という言葉を与えて、なるべくそれをやらそうと。他にも謎な人たちがたくさんいて、みんな何かやろうとしていて、100パーセントはできないけど、それをなるべく満たす、全うさせる。例えば私の人生、何をすれば全うなのか、私本人も分かってないわけです。でもやっぱり生きてる以上は、何か全うするということがあるわけです。生きてないもの、例えばこの机にも全うっていうのがあるはずで、これを全うさせるってのはどういうことか、これ、やっぱり常に一番の最大な謎なんです。ここではその謎が正面に出ている。

フルフィルメントっていうのは、人間が他者、人間だけではない動物、生命だけではなく無生物に対して、やれる最善のことだと思っているわけですが、これはここで本当に毎日のストラグルとして、表現化すると。そうやって全うするっていったって、それは難しいです。全うって簡単に衝突するんです。この人の生を全うしようと思ったら、僕の生が全うされないとか、そう簡単に納得っていうのは、成立できない。つまりあつという間に衝突を起こし、あつという間に葛藤する。これが全うのポイントです。

これを乗り越えるための特効薬みたいなものは無い。だからわれわれは苦勞しているわけですが、私が考えている一つのやり方は、衝突している人たちがいたら、どうやってその衝突を乗り越えるか。例えば共同行為をつくる、大きなWeを提案する。それで100パーセント、葛藤がなくなるなんてきれいな話にはなりません。でも、二つ対立しているものがあれば、一緒に何か共同行為をする。そのことによって乗り越える。これが私もしかしたら人類に取り得る唯一の可能なやり方かもしれないというふうに考えています。会議って共同行為なんです。もやもやを抱えている人たちが集まってきて、話をする。100パーセント晴れ上がることはないかもしれない。でも、ちょっとはましになる。個人間の葛藤を、共同行為の場をつくることによって解消する。ここでやられている会議というのは、それ自身が一つの共同行為。「I」が持っている対立、行き詰まり、そういったものを一つ上の次元で特化する。そういった一つの試みじゃないかなと、今日あらためて思ったことであります。

久保田 ここにいるのは、社会のルールが分からない人たちなんですよ。ルールを守れないと、社会に参加するってことができない。なので、障害の人たちだけが集まってケアされる。だけど、果たして社会のルールというのが本当に正しいのか。われわれがそのルールを守るのではなくて、社会側のさまざまなルールを、いろんな人たちが見直してくれないかなと思っている。今回、世界で勝負してくれたのか。社会のルールを、守れない側が変えることってなかなかできないんですけど、ルールのど真ん中にいる人たちが、そのルール自体を疑ったり、変えたりするきっかけって、どうやって皆さんはつくれるのか。

岡本 会社は「何ができるか」というところで基本的に回っています。その世界だとゼロ・サム・ゲームになっていく。商売はやっぱ

り競争なんですね。それをずっとやってきているんですが、結果として、みんな疲弊してきています。だから、このまま本当に幸せになれるのかというのが見えない。何かしないといけないなというのを思っていた中、そういう思想に向けて、何ができるか。

例えば人事制度の評価というものも、今は「何ができたか」が起点の評価なんですけれども、じゃあ、できないということを起点に、評価の制度、仕組みを作れないのか。出口先生の言葉を借りると、ウェルゴーイングという、その状態を何とか評価していけたら、組織として元気になっていくのか。

お聞きしてみたいなと思うのは、あえてこの中心に場所を選ばれて、実際にレッツを始められたときに、周りからの反対というか、そういうのがあったのか、なかったのか。もしあったのであれば、それをどう乗り越えていかれたのか。

久保田 建てる前に説明をするから反対運動になるんです。それだけ嫌われてるし、知らないっていうこと。取りあえず怖い人たちだとか、やばい人たちだとか思われていない。そんなひとたちに動かされたくないから、言わないでやりました。義務ではないんです。建ててから説明すればいい。

問題はやっぱり起こしますよ、いろいろ。だけど、お客さんとして見れてくれるっていうのは、街の良さですよ。住宅に飛び込んだら、犯罪になるんですけど、お店に飛び込んでも、ちゃんと商品を買ってくるとか、謝りに行くとか、そういうことでお客さんとして見てくれる。

久保田 最初から開き直ってるので、「え？ 私たちそんな悪いことしてましたっけ？」みたいな振る舞いで行くんですよ。そうすると、向こうも、あれ、何言ってたっけみたいな感じになる。あと、自分のことじゃないから言えるのかもしれないです。自分がお菓子食べに行っちゃったりとか、壊してきたわけじゃなくて、やっているのは利用者さんなんですよ。ある意味、利用者さんのせいだから、わたしたち職員が謝りに来ました、許してねって頼むっていう感じです。そうすると意外に許してくれるんですよ。

中原 僕も同じ疑問があって、ヘルパーとして一緒にバスに乗ってるときに、結構、騒ぐんですね、利用者さんが。そのときに、どう振る舞ったらいいですかって聞いたら、「当然の顔をする」みたいなこと言われて、僕らが、それが問題だというふうに認識をして、そういうふうな感じにしていると、周りも問題だと思って振る舞ってしまうんですって。だから、「それが当然」のような顔をしていると、何も言われんっていうことを言われて、実際やると、確かに今のとこ一度も言われたことないので、すごいなと思っています。

ワタ 質問です。考えてみると、できなさ加減っていうのは、単に精神障害だけではなくて、お年寄りで認知症になって今までやっていたことができない人とか、身体障害の人、足がない人、目が見えない人、勉強しても勉強できないので、引きこもりになってしまった人、いろんな人がいたと思うんですよ。世の中にそういうふうな、「できない」という形容詞が付く人はたくさんいると思うんですけども、ここで話をしているところ、われわれの大きなゴールは何か考えるときに、それはやっぱり、できないことを可視化していつて、今までみたいに隠蔽していった形ではなくて、それを、もう少しみんなが、

あって当然だよ、世の中こんな人、いっぱいいますと、それを具体的にするために、どういうふうな方向で進んでいったらいいかなっていうことを考えてもらっちゃいますか。

久保田 私は1人の人間としてはそんなマイノリティーではないなと思ってます。自分で何でもできちゃうんですよ。だけど、壮も含めて、ここにいる人たちは、いろんなことがいわゆるできないと言われてる人たち。そのできないとか、できるの基準が、すごくあいまいだなというふうに思うんです。学校はちょっと違うと思うんですね。例えば京都大学に入るためには、ちゃんと共通テストでちゃんとこまで行かなきゃいけないとか、明確な基準があるけれども、世の中のできる、できないの基準って、意外にあやふやだなと思うんですよ。

社会の状況が変われば、壮たち含める彼らは、いろんな人たちに何かを伝えられる人になれるのではないかなと思っているけど、誰もそんな基準を作ってくれない。だから自分たちで基準を作って外に出していこうとして、「表現未満、」や「たけし文化センター」っていう言葉が生まれた。ただ、本当に、焼け野原に一滴の水を垂らすみたいな行為だとも思ってます。今日、こうやって、企業の方とかがお見えになったりしてきて、少し時代がちょっと変わってきたのかなっていうのだけは感じますけど。できることをとにかく続けてやっていくしかないかなと思っています。

夏目 できなさっていうところで、さっきから引っ掛かって、ちょっともやもやしているんですけど、できなさって言った途端にできるっていうことのア義語になってしまう。私たちが「表現未満、」って言っているのは、存在があること自体を認めるって言っているので、そこにできるとか、できないとか、表現があるとか、ないとかっていうよりも、そこにある、その行為そのものをまず丸ごと、いいとか悪いとか、できるとか、できないとかではなくて、丸ごとあるねって、いるねって言うていくこと。それを障害者の権利だとか、人間の尊厳だとかいうふうに言わないのが、やっぱりレッツのアートNPOとしての立ち位置かなと思っているので、将来っていうか、行く未来としては、私が描いているのは、ケーパブルか、そうでないかっていうことではなくて、いるか、いないか、一緒にいるかどうか。そのこの景色の中に、いろんな人がいるかどうかっていう景色を見られるかどうかってとこかなって思っています。

尾張 今まで私がやってきたっていうのは、ひたすら楽しむっていうことなんです。福祉とかではやっぱりできないこと、弱点を強みとか、割と肯定的に捉えていくっていうのをよくやるんですけど、でも、どうしてもできないっていうのはあるよなと思っています。例えば、ノブちゃんって背高い女の子がいるんですけど、背が高いから、あんまり下のほうをしっかりと見てないんですよ。一緒にいて、ふっと隠れると、もうノブちゃん、探せないんですよ、私のこと。そうやって、ノブちゃんは下のほうを見れないから、見れない、できないんだけど、すごく楽しいなって思って、そういうふうにどんどん楽しんでいくっていうのがきっかけになるかなと思って、ずっとやっています。

瑛 結局、壮は象徴でしかないというか、さっき先生がおっしゃってたような、想像するしかないっていうところが、本当にやっぱりスポーツとして機能してるなっていうふうに思うんです。「たけし文化セ

ンター」とか「表現未満、」っていう言葉も、言葉自体にそこまで意味はないんですけど、今、尾張さんが言ったように、遊ぶっていったことができる装置として、言葉が機能してるのが面白いなって、個人的にはすごい思っています。

今も言葉だったりとか、ちまた公民館みたいな場所をつくって、人々が遊べる装置みたいなものをつくるのが、アートの力だっていうふうに、すごく思います。できるとか、できなさみたいなお話だと、さっき夏目さんが言ったように、できるとはなんだって問いをされなきゃいけないところが結構、難しいなと思っていて、先々過ぐらい、ヤマハ発動機の新規事業開発部の本部長さんが、同じように観光に来ていただいて、お話ししたときに、同じく色んな弱さのお話とかにもなったんですけど、やっぱり価値多層社会のように、いろいろな状況が変わる世の中で、できるとか弱いことみたいなのが、逆に障害のあるかたがたしか感じられない何かとか、自閉症のかたがたしか感じられない世界があって。

それは、身体知で、もしかしたら、すごく豊かな世界があるかもしれないけど、言語知の私たちには、もう知覚できない世界なのかもしれないねっていう話があったりして。わたしたちは言語に頼り過ぎて、もう身体知を失ってしまっている側なのかもしれない。そういうふうに、時々、反転させて考えることができるのが、支援の面白さだったりとか、ここの場所の面白さだったりとかって個人的に思います。

岡本 徹底的な無目的というか、意味がはがれ落ちていく感じ。いかに自分が日々、レポートなり、院試なり、就活なりっていう、ある目的に対して何かをするっていうのに、慣れ過ぎているんだというのが、すごい新鮮だった。あと、目的なしに、それを全部、受け止めるというのが、できないというのを肯定するということにつながると思うんですけど。

もう一個、ここ来る前は「できなさを肯定するとき、ネガティブな感情も必要じゃないか」、毒されているかもしれないけど、「かわいそう」って感情が、支援の手を差し伸べるためには必要なんじゃないかと思ってんですけど、一緒に散歩するときに、車来てるから危ないよって手を差し伸べるとか、どこかに行きそうなときに呼び止めるっていったときに、自覚すると、すごいニュートラルな感情で手を伸ばしていました。これが毎日重なったらどうなるか分からないんですけど、自分が思っているよりも（ネガティブな感情は）必要なものではないのかな。

本当にそのまま受け入れるっていう感情で人を支援することは可能なのかなと思ったんですけど、ただそのまま受け入れる、そのまま受け止めるっていうのと、同時にどこかに、やっぱできるに越したことはないというか、もっと言えば、できるようになって、本人が喜んでくれるには、それに越したことはないっていう感情がどっかにあるような気がしました。例えば、本人がこのお菓子が欲しいって言ったら、何時間かけて、何軒も回って、そのお菓子を探すとか、できないを肯定するんだけど、やっぱり本人の意志、できるようになりたいとか、こういうのを見たいとかっていう意志は、どっかにそれは尊重するべきだっていう絶妙なバランスがここにあるなって思ったんですね。

ただ、それを世間が受け入れるかっていうのは難しいところ。そこに目的とか理由とかがなくて、ただ、純粹にそうあるだけっていうのを、世間に受け止めてもらえるかってすごい難しいと実感しました。哲学もそうなんですけど、この哲学の難問が解けたら、こういう利益が社会に生まれるとか、どうでもよくて、ただ、ここに矛盾があるとか、この哲学者のここは誠実じゃないのを、何としても解きたっていうように、哲学をやるうえで理由はなくてただ気になるからなんです。そこに利益があるかどうか分かんないんで、打ち出そうとしても、本当に相手の価値観に押し付ける、受け入れてもらうことしかできない。これを受け入れたあなたに、こういう利益が出ますよっていう論調だと、すごい納得してもらいやすいんですけど、それすらもないから、本当にこれを受け入れてくださいっていうまになっちゃうんで、その点同じ難しさを抱えてるな、と思いました。社会に出すために、本音が建前かを立てざるを得ない状況になっているのが共感したというコメントです。

松本 出口先生ができなさやWeという概念には共感できるんですけど、実際、どこまで具体的なものに落とし込めるのか、どういうふうに足掛かりをつけていくのか疑問でして、そこら辺を教えてほしいなと思っています。

出口 先ほどの翠さんの話ですごく僕も共感してて。哲学なんていうのは、実は根拠ないんです。言うしかない。こういう新しいことをするときに、「これで本当に変わりますかとか」とかそういう質問はいろいろ受けるだろうと思います。成算がなくても、やらないといけない。われわれは成算があって、生きているのではないんですよ。皆さんも成算があって、大学院に行っているわけじゃない。立派な哲学者になるかどうか分かんないけど、来ているわけで、立派な人生を生きれるかどうか分かんないけど、生きちゃってるんですよ。やらざるを得ない。生きるということ、哲学をやるということ、京都哲学研究所をやるということ、レッツをやるということも、多分、そういうことなだろうというふうに思います。

重要なのは、希望を失わないこと。絶望しちゃったら、未来はない。絶望しないという、ある種の力が要るかもしれない。そうじゃないと、動かないし、人が集まってこないし、ムーブメントはできない。僕が絶望しちゃったら、京都哲学研究所、その日、終わりでしょうね。われわれはどっかで、いい意味で非常に鈍感というのがあって、哲学もそうです。京都哲学研究所も、みんなにやるかどうかお伺い立ててたら、多分反対されて、そこで終わる。やりますって言って、ぼんってやらないと、物事は動かない。レッツと同じ。もちろん、もっと現実にとすとすると、成算もないといけない。来年度こうするとか、今年度こうする、それは必要ですけど、われわれは成算があって、生きてるんじゃない。これが一番重要なところ。問題は、自分たちがやれることは、それぞれの場所まで、ものすごく限られてる。いろんな形、いろんな人のムーブメントが起これば、変わるかもしれない。成算はないけど。

佐藤 希望を持つって、すごい勇気づけられて、めっちゃよかったです。（レッツに勤めて）13年になるんですけど、今日初めて、ギターは一人で弾くものじゃないっていうのを大発見して、うれしかった。めっちゃハウらせるんですよ。ハウらせるっていうのは、アンプの前

でぼーんってギターの骨、つながなくても共振して、ぼおって鳴るんですよ。それをダイスケ君が「うえい」ってやってるギターの後ろにどどどってダブって、こんな面白い楽器ないじゃんって。それと今日の出口先生が言ってることがオーバーラップして、よかった。ダイスケ君は、僕が何かやるとちょっかい出してきて、2人で歌ったりとか、ギターの棒を、僕がプイーンって鳴らすのが分かってるから、うおお〜って、いたずらしてくるんですけど、これがWeだなんて。

中動態のことも思い出しました。能動でも受動でもない。國分功一郎さんの本、頑張って読んだんですよ、いろいろ。全然、分かんないんだけど、そんな難しいこと言ってないんだよね。だけど、前も同じようなことを言われたなって思い出したんですよ。だから今日、俺とダイスケがやったギターのハウリング、ぼこすか殴り合いながら、中動態だ！って今、思ったし、これが希望だ、これがWeだって今。それは僕、全然それを求めてやってたわけじゃなくて、ただ面白からやる。だから、今日、ギター、じゃらんってやっても、すげえよかったし、6人でアンサンブルやるから生まれる、グルーヴが一番興味があって、そういう体感は、すごい信じてきてよかったなって今日も思いました。細馬宏通さんが来たときに、じゃんけんでいたずらして、利用者が困惑してる動画を見て、めっちゃ面白がってとか、ササキさんが流して、困惑してたんですけど、あれ、よかったなって思って。一緒に遊ぶ。毎日を大切にしたい。それが希望だって、強く思いました。明日、頑張ります。

出口 両動態という言葉もあります。中動態はギアでいうとニュートラルな状態。両動態はギアが二重に入ってる。遊びってのは多分、両動態だと。

佐藤 遊びをもっと大事にしないと。一緒にやるの、いいですね。音楽はすごいいいよ。もっとみんな、やれよ。

曾布川 バンドを若い頃やってて、ベーシストが神経質だったんですよ。おまえキーずれてるぞとか、僕は別にうるせえぞと思いつつながら、でも、彼がせっかく気にしてくれてるんだと思って、気にして。低音が気になるんですよ、今も、ずっと、上でどんどんって（音が鳴っていたけど）、聞いてた人、います？ああいう音が気になって。自制するっていうのは多様性だとか、多様性って僕、あんまり好きな言葉じゃないんだけど、中動態にしてもそうだし、何かやるぞ、みんなが平等で自由で表現してとかっていうのを、言うのは簡単なんだけど、実際にはみんなギターとかボーカルばかり聴いちゃうし。僕はギターとボーカルやってたんですけど、そんなに聴かないでほしいなって思いながら。ベースをもっと聴いたほうがいいのになとか。実際には、こっちもすごいメッセージっていうか、なんかあるんですよ。なんか起きてるから鳴ってるし、外の車の音も聞こえるし。ここの職員はよく聞いてるんですけど、こうやって1階にいても、3階の舞ちゃんがで叫んでるのが聞こえてくるとか、コーラスみたいに。そういうのが一体どうなっているのかとは思いますが。

それこそ、京都哲学研究所さんは出口さんが絶望したら終わっちゃうんですか。さっき、おっしゃってた中空の構造を言うなら、出口さん、絶望されてたほうがいいんじゃないかと思うんですよ。話を聞いてたら、今、全然、中空的な構造になってないなって。少なくとも壮さんは、別に空じゃないと思うし。僕がくみ取れる限りでは、

壮さんと意思疎通した限りでしか関わってないというか、壮さんの空の部分にアプローチしてないので、それは別に誰であっても同じ。よっぽど自分が好きな相手とかだったらどうにかしようとするかもしれないけど。いろいろ実際にやっていくとなるといっぱい見るんですよ。

尾張 Weについてもうちちょっと知りたいなと。さっき佐藤さん、これがWeだって思ったって言ってたんですけど、私はそういうふうにしたことはなくて、どちらかというとネガティブなイメージが強かったりして、Weというのがなかなか広まらないっていうのは、そういうこともあるんじゃないかなと思うんですけど、いいWeっていう具体的な何かがあったら、もうちょっと詳しく教えていただけるとありがたいなと思います。

出口 いろんなWeがある。私が言ってるWeは、こうやって僕らが生きて行為をしているときに、結果としてそれをサポートしてくれている、全てのメンバー。それは人間だけではないですし、邪魔しようとしている、反対意見（を出すメンバーも含まれている）。意図や意思がないような動植物たちもいるわけですけども、自分が何かをしていることを結果としてサポートしている、支えているWe、それが一番広いWeだというふうに思っています。よく使う例で言うと、サッカーのチーム。試合をするんだったら、味方もいるけど、敵がいないと試合ができない。そういった意味で敵もWeに入っている。悪いWeの分かりやすい典型例、これは全体主義的なWeです。Weを固めて、そのWeの外を「やつら」化して、そこにミサイルを落とす。これは悪い例です。もう一つ、中心を占めている一つの価値観とか、利害で全員をがんじがらめにするような、これも悪いWe。日本でよくあるのは、真ん中に実は誰もいないようなふりをして、でもお互い空気を読めみたいな形で、お互いの首を絞め合っている。これを私はのっぺらぼうのWeって言ってますけど、これは非常に分かりやすい悪いWeです。そうでない良いWeをどうやってつくっていくか。中空っていうのはその一つのやり方だろうというふうに思います。

久保田 全く分からない暗中模索の中を、自分なりに切り開きながら、何かに結び付けていくっていうのがアートの行為だなと思っている。だから、誰も知らない、誰も見たことがない世界を見ていくっていう希望を持ちながらやっていくっていうのがいいんだろなっていうふうに思ったし、そういう意味で京都哲学研究所の皆さんと何かが一緒に何かできたらいいなと思いました。今日はありがとうございました。

※この文章は、2025年1月27日に実施された京都哲学研究所「"できなさ"の現場から考える」トーク音声を基として文字起こしされた約4万字のテキストを、約1万8千字にまとめ直したものです。





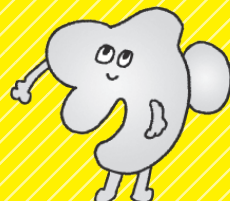
- KASHIDASHI TAKESHI -

かしだしたけし

重度の知的障害のある人たちが全国の拠点にお出かけし、
その先の土地で皆さんと過ごしたり、交流する事業「かしだしたけし」。
今回は、国分寺にある元社員寮を改装したシェアハウス
「ぶんじ寮」に滞在した様子を掲載します。

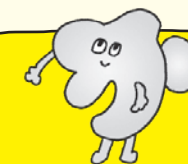
お出かけ先
募集中です！

メール件名に「かしだし」と
書いてお問い合わせを。



かしだしたけし in ぶんじ寮

尾張美途



コウちゃんと川ちゃん「トーキョー」に行く

10月15日(火)-16日(水)、1泊2日で国分寺にある
誰でも住むことができるシェアハウス「ぶんじ寮」に泊
まってきましたよ。

「ぶんじ寮」で行われる川ちゃんとアーティストのあ
なるちゃん、スタッフ曾布川の音楽セッション用の衣装
を買うため、まずは中野駅へ向かった。中野ブロード
ウェイ前でぶんじ寮メンバーのAkiさんと松島くん(ウ
ルトラのヘルパーでもある。)と合流して衣装探し、し
かし、アニメのキャラクターのフィギュアに見惚れる川
ちゃん、手を繋いで車に戻りたがるコウちゃん。



いざ、ぶんじ寮へ！ ゲストルームに食堂やキッチン、
お風呂、中庭、屋上などの共有スペースがあり、晩御
飯の時間になると、広い食堂にはどこからともなく様々
な人が集まり、賑やかに。その傍らでいつもと違う緊張
感を感じるセッションが静かに執り行われました。

夜は食堂で「taboo持ち寄り×かたりのヴぁ」を開
催、ぶんじ寮のメンバーや東京在住のレッツにゆかりの
ある方々と一緒に哲学カフェをしました。テーマは「他
人と一緒にルールをつくること」。ルールが無いことが
持ち味のぶんじ寮ですが、暗黙のルールが出来てきた
りするようで…。ルールがあった方が暮らし易くなる人
がいる一方で、苦しい思いを抱える人もいます。住人も変
わるし、ライフスタイルも変化していくもの、それに合わ
せてルールも変えていければ良いけど、一度決まった

ルールって変え辛い。手をかけ、時間をかけて決めた
ルールなら尚更。異なる思想の人たちが共に暮らすた
めに「ルールを決める」のは誰のため？何のため？



その後、繊細なコウちゃんは眠れず、職員は交代で
朝まで見守った。翌日は電車に乗って渋谷駅で降りて、
スクランブル交差点を通り抜け、代々木公園へ。公園
には散歩する家族連れやカップル、バイオリンを演奏す
る人、ウクレレを練習する若者達などで賑わっていた。
水飲み場のそばでコウちゃん恒例の水浴び！スブラッ
シュフォトシューティングと称して開催した。

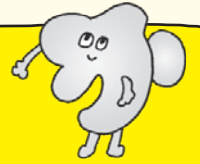
最後は竹下通りで川ちゃんのお土産探しに四苦八
苦。それでも決まらず、結局、国分寺の駅でクッキーを
購入し、無事に浜松に帰ることができた。

掻い摘んで書くとこんな内容だけれど、「ルール」と
「迷惑をかける」ことに関して思うことがあった。また
どこかで共有したい。



かしだしたけしレポート

曾布川祐



東京行きに同行したK君は、他人と一緒に風呂に入りたがらなかった。裸を見られるのが恥ずかしかったらしい。男同士なら気兼ねなく裸の付き合いができと思っていた私の考えは甘かった。何度か促したが駄目で、K君は結局一人用のシャワールームを使って身体を流した。一方、同じく同行したT君は身体も洗わずに浴槽に飛び込んだため、溜めてあったお湯をまるまる駄目にしてしまった（T君は、大便の後の尻の拭きが、いつも不十分なのだ）。

そんなドタバタで私は開始予定時刻から35分も遅れてイベントのテーブルについた。皆、トークを始めずに私を待っていてくれた。私には、それが驚くべきことに思えた。「待つ」ということは「潜在的なものを信じる」ということで、それはいつでも私にとって難しいことだからだ。

私の同僚を含む10人ほどの参加者の方々がすでにテーブルを囲んでいて、入り口から一番近い席が私のために空けられていた。扉を開けると、一歩半でその席に座ることができた。テーブルの後方の窓際にはzoomの繋がったiPadが固定されていて、その画面には浜松にいる同僚たちが映っている。すべてが知性的な引力を中心にしてパースペクティブが測られている、という印象を受けた。往々にして、それがイベント＝出来事というものなのだが、それにもまたいつも驚かされずにはいられない。何も起こらないようにして、何かを起こすこと。日常的な事物の裡に沈み込んだポテンシャルティをいかにして顕現させるのかについて、常に取り組んでいる人たちがいること…。

夕食を食べそびれていた私は、食べながらトークに参加した（このとき食べた同僚が作ってくれたポトフが、二日間の旅程で食べたものの中で一番おいしかった）。あまり食べすぎると腹が重くなって頭が使い物にならなくなる。気をつけながらゆっくりと咀嚼した。

「ルール」という言葉は、尻取りで使うと嫌がられる。ただでさえ少ない「る」で始まる言葉をもう一度探させ

る言葉だからだ。日常的な言語体験の場でも、「ルール」という言葉には相手の言葉尻を取ってやろうという力が働いている。「ルール」は尻の取り合いによって、有効化することも無効化することもできるからだ。日常でも尻取りでも、「ルール」という言葉を使うときには、同時に気も使うことを求められる。

イベントが始まった。皆で「ルール」について話していると、少しずつその言葉の指すところのものの輪郭が浮かび上がってくる。発言者の多くが「ルール」という言葉を自明なものとして使っているが、実際にはそれは話しながら徐々に見えてくるようなものなのだ。あらゆる言語は、使われ始めた途端に、辞書的な意味から飛び立ち、そこから離れていく。初対面の人たちが集まって、その場で一つの言葉が確かなものとして熟成されていくには、それなりの時間を要するということだ。

言葉の輪郭がはっきりすると、それをズラすこともできるようになり、議論に厚みが生まれ、その発生について語ることもできるようになる。すなわち、「ルールとは何なのか?」といったメタ言語が使えるようになる（しかし、私たちは本当ならば、「ルール」についての長い歴史を語ることはできず、共有した短い時間におけるその発生と成長についてしか語ることはできないのではないのではないか?なぜなら、私たちが本当に共有できるのは、それについて共に語り合ったこの時間なのだから）。

イベントの終わりの近づいた頃、参加者の方の一人から、「法律」に対する言及があった。たしかに、「法律」は「ルール」と共通するところのたくさんありそうに思える。一つの国の中で暮らす以上、法律は避けがたい強制力を発揮する。その参加者の方は、「法律は国家が暴力を独占するための道具だ」というような強い表現も使っていた。暴力の独占…。それは確かに国家の持つ欲望であるかもしれない。しかし、それは本当に実現されているのだろうか？

『リーサルウェポン2』という映画のラストシーン



に、上の問いについて考えるためのヒントがあるように思える。この映画の主人公は二人の刑事だ。船の上で片方の刑事が撃たれる。撃ったのは、外交官特権を持つこの映画の悪役だ。悪役はその特権ゆえに、その国の法律で裁くことができない。言わば、治外法権でやりたい放題、というわけだ。怒ったもう一人の刑事は悪役に向けて銃を構えるが、悪役は余裕の表情を浮かべる。外交官特権という「彼の国の暴力」によって守られている悪役は、「此の国の暴力」を行使する刑事にはどうにもできない、はずである。しかし、刑事が構えている一丁の銃には、引き金を引くだけで行使できる「個人的な暴力」が留保されている。それは、刑事が代行している「此の国の暴力」であると同時に、刑事自身が彼らの意思で遂行することのできる「自由意思の暴力」なのだ（「自由意思」は、三次元世界に生きる私たちに特有の性質だ。そのことを表現するように、このときの悪役は刑事を頭上高くから見下ろし、刑事はそれを見上げるといったような立体的な構図が採用されている）。結果、刑事は悪役に向けて発砲し、発射された弾丸は悪役の頭部を撃ち抜く――。当然、半分は「此の国の暴力」の代行者である刑事は、その代行範囲を超える暴力を行ったのだから、何らかの措置をとられる必要があるだろう（映画でその部分は描かれていない。恐らく、正当防衛を装うなどして、うまいことやったのだろう）。しかし、ここから、私たち一人一人の手にはすべからず「暴力」が握られており、それを行使するための隙間は常に私たちの日常の中に見出すことができる、ということを確認することはできそうである（私たちは、程度の差こそあれ、誰しもがある程度は法律を破りながら暮らしている。そして、裁かれざる犯罪はわんさかある）。

私たちは、独占された暴力の下でおびえながら暮らしているだけの存在ではもちろんない。だからこそ、こうして一つの場に集まり、それぞれの意見を交わすことに何らかの意義を見出してもいるのだ。私たちは暴力を行使することも、他者からのそれを避けることもできる。それが、空間性を持つ「三次元」の「自由」だ。私たちは、物事を右から見ることも左から見ることも、上から見ることも下から見ることもできる。だから、右から見た私の意見は、左から見ている別の人からは違ったものに見える。上や下から見ている人とは、「同じものを見ている」という確認をし合うことすら困難かもしれない。それが、三次元世界で生きる＝自由意思を持って生きる、ということの意味だ。私たちが共有する場と、私たちが私たちであることの集団性、それらが個々の自由意思を持つ個人の集まりなのだということは不可分に結びつけられており、相互に関連しながらその意思の実現と同時に制限でもあるという複雑な空間の織物を織り上げている。

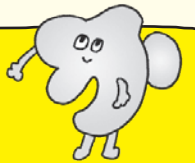
K君は、イベントの間中ずっとテレビでサッカー中継を見ていたが、終わり際になってそのまま寝てしまった。T君はソファでごろごろしながらニコニコしている（彼は、その後も夜が開けるまでソファから離れなかった）。私は出してもらったポトフを食べきれずに少し残してしまった。カーテンも雨戸もない会場の窓の向こうは暗闇で何も見えず、部屋の中にいる私たちの姿を反射している。

私には、不明瞭なものほど自由な力を持っているように見える。しかし、捉えられぬものは共有可能性を持たないし、それが「わたしのもの」になることもない。わたしがわたしであることを逃さぬように、彼が彼であることを逃さぬように。しかし、常に逃げ道はあり、そこには誰でもない人、何でもないもののための居場所がある。私は今どこにいるのか。わたしはテレビの前で眠い目を擦るK君を誘い、コンビニを求めて夜の闇の中へ出て行った。道中、K君に「ルールって何だと思う?」と尋ねると、「しらん」とだけ応えてくれた。

note記事【taboo持ち寄り会×かたりのヴぁ vol.22 他人と一緒にルールをつくること 20241015】より引用

レッツ×ぶんじ寮滞在＝「かしだしたけし？」

Aki Iwaya



わたしはどこに立てばいい？

るんるん るんるるるん～、Akiです！

そんなわたしは、「かしだしたけし」でかしだされた「ぶんじ寮」側の人間としてこのレポートを書こうかな、となんとなく思っていた。

だがおそらくそれは無理で、破綻している。

あたりまえだがわたしはぶんじ寮を代表できない。少なくともぶんじ寮には明確なリーダーや管理人がいるわけではないため、一義的に述べることはできない。

それにたけしくんはこなかったし、いつのまにかヌルッとぶんじ寮に滞在することになっていた感じもある。

ひとまず、この「わたし」を起点として使い、あの1泊2日がどういうものだったのかを、わたしの身体とへんてこな技法によって言葉に変換しながらこの場に置いていくことになりそうだ。

ぶんじ寮？

「ぶんじ寮」とは、立ち上げ時のクラウドファンディングサイトの文言によれば、

「おとなもこどもも、持ち寄ってつくる、安心と冒険とが同居する一人一人の居場所」だそうだ。https://motion-gallery.net/projects/bunji_ryo

ところで、実際はどんな場所なのか？

それはこれまでの歴代の住人や来訪者がそれぞれに掴んで、言語化したりしなかったりしたらいいと思う。

そして当然ながら、SNSやインタビュー記事に出ている情報が実際のごく一部に過ぎないことは確かだ。

レッツとの関係を思い出してみる

レッツの人はけっこうぶんじ寮にあそびにくる。

去年11月に久保田瑛さんがぶんじ寮の住人ミーティングに参加したり、何人か東京に用事があるとかのタイミングで遊びにきたり、元スタッフの人もきたり。

わたしのほうは、レッツに結構前からなんだか滞在したことがある。焚火をしたこともあったし、私の背の高

い友人がイベントをさせてもらったりとかも。

そんなわたしだが、初期からの住人としてぶんじ寮の4号室（最も粗末な奥の部屋）をまつしまくんとシェアしている、が多拠点のため常駐ではない。そもそも始まって5年目となり、すべての期間で常駐した人間など、いないのではないかな？

そう、わたしの自己や活動の紹介はもう、このサイトをみてほしい。

<https://akiwaya-vscollective.studio.site/>

（複数の専門知を掛け合わせてあれこれ、そのためのリサーチやその場にいる口実として記録、ともだち同士を紹介するためにネットワーキングを行ったり。

無理にわかりやすく言うと、「専門は「人が集まること」の脱構築。オルタナティブスペースやコレクティブをまわって、色々しています」）

事実の記録

ようやくなのになさっそくでわるいのですが、今回の滞在期中の「事実の記録」に関しては、レッツのスタッフ尾張さんの投稿を読んだらいいんじゃないかな。<https://note.com/takekatsu2019/n/n96c35ca2ae10>

わたしは、わたしが自分の目でみて体験し、感じたことを置いていこうとおもう。

事前の打ち合わせ

滞在については事前に簡単な打ち合わせをしたけど、ゆるいものだった。

わたしからは、ぶんじ寮にあまり大きな期待はしないほうがよいと伝えた。それよりも、なるべく余白をもって、目の前の出来事に対応できたらいいんじゃないかと。

余白についての記述は難しい。

わたしが映像イメージを記録媒体として採用することがあるのは、時間そのものを感じてもらうことや、弛緩

し間延びした時間の存在を映像に触れる人に提出したいからという動機もある。その反応だって言語でなくて構わない。

だが、今回は文字を用いる。

まつしまくんのことを少し説明しようかな

はい、忘れないうちにまつしまくんのことを説明しておくね。

彼はぶんじ寮4号室のシェアメイトで、数ヶ月前からはレッツでヘルパーのバイトを月の3分の1?くらいはしている気のいい人間で、ともだち。

今回のレッツとぶんじ寮の間にいるような人間、といったらわかりよいだろうか。とはいえ、まつしまくんなので、たとえば2日目の半分以上その場にいなかった。

ちょっとシャワー浴びてから追いつくね、先行ってて！とか言ってそれきり。でもまつしまくんは、ただその場にいることがうまい。気づけば、お茶をいれてくれている。

思い出したこと

そういえば、なんかのときに「ぶんじ寮でなにかしたいとき、はじめから許可とかとらなくて大丈夫です。なんかおこったらそこからはじめましょう」って言ったっけ、許可とったら負けですからって。そしたら夏目さんから「うちも同じです」ってかえてきた。

【taboo持ち寄り会×かたりのヴぁ vol.22 他人と一緒にルールをつくること】を、初日の夜に開いた。

開催レポート兼考察noteのなかから、私が書いた文を引用しようかな。



場のルールなどちょっと独特なので、確認してもらうとよいかもしれない。

いわゆる対話とも毛色が違うこの「タブー持ち寄り会」は、社会的なコミュニケーションバイアス（相手に気をつかって褒めたり、口づぐんだり等）を減らし、自他間の外的対話と自己の内的対話の双方が共存できる場をイメージしてスタートしたもの。

私は、他人と一緒にルールをつくるのなら、その他人＝相手とコミュニケーションがとれる/意思疎通がどの程度可能か?によって、大きく左右されてきた、との経験を置いた。

そして、意志疎通ができない、と感じた後の私の判断によってこそ、私の人生が構築されていくように感じているということ。

そう、コミュニケーションのとれない状況や圏域に反発でき、外に出ていかれる人間はいい。だが、外に出て行けない人間はどう扱われるだろうか？

レッツのスタッフ曾布川さんの視点とあわせて、note全文はこちら。

<https://note.com/mamangao/n/nf8a33f3d80dc>

フリーライティングが いい のかも

実はレッツのみんなが帰ってから日が経ち、なかなかレポート執筆の話が具体化しなかったため、だんだん私のなかの記憶が薄れてきてた。

なので、率直で実用的な備忘録として（自発的に勝手に）書いたのが、以下の文章。

ちなみにフリーライティングとは、「自己検閲をはずして、頭のなかを流れている言葉をなるべくそのまま全て書き残す」書き方のこと。詳しくはこのnoteを参照 <https://note.com/mamangao/n/nce33a881b232>

”10/15。

レッツのメンバーがぶんじ寮に来て朝まで、っていうか3時まで喋ったこととか、

覚えてること、

もう忘れ始めてるって思い始めてから少なくとも5日は経ったいま、から書いている。

誰に向けて書くかといえ、わからない。でも多分先の

自分や自分が経験したことに興味を持ちそうなまだいないあなた。アーカイブといわれてもいいかも。

レッツのメンバー、メンバーってのは、利用者とスタッフのこと。そこに半分レッツでぶんじ寮のまつしまくんも含めるか、私はぶんじ寮側の人間にカウントされてそこにいた。観察しながら、半分主体でもある。「かしだしたけし」っていうかたけしくんいない。かわちゃんとかが。こうちゃん元気かな。

覚えてることは、手とか何度も繋いで、ぶんじ寮に中野から向かう車でも隣で、何十分も隣でいたのに、急に「誰?!」ってでかい声でこうちゃんに聞かれたこと。で、あき!って言い返して、それからあき!って言われ返して、概ねそれ以降あき!って呼んでくれるようになった。

自分は普通のことだとおもったけど、スタッフやまつしまくんは笑ってうれしそうだった。変なの。普通のことじゃんっておもった。相手から聞かれたから自分がこたえたら、向こうがそれをうけいれただけ。「自分は名前もよんでもらえないで『電車』ってよばれるのに」ってまつしまくん。それはまつしまくんと目の前の他人との距離感の生成プロセスの帰結でしょ。受け付けたくないタイプのわらい。ただの他人ってだけで、そこに障害の関係する余地はないよ。

特定の障害を自分の利益になるように隠れ蓑として活用して、全部「力」（パワーの伴った我が儘）で自分の意志を集団に通し続けるプロセスは、うけいれがたい。使い分ける主体の存在が見過ごされてるのでは。「全敗」って表現した人がいたけどおれは試合やめるまで「負け」は確定してないからやめてない、って返したこと。そこは意地負けない勝負でしょ。

でもね、やり返す以外の勝負の仕方もあるんだよ、粘り勝ちとか、勝負じゃない関係性に持ってくとかね。感情をフラットに、総体として保つこと。その都度の、瞬間単位の凸凹や上下はあっていい、でも最終的にバランスはとる。それが二項対立やつまらない対立を回避した、人間の知恵だと思う。性急な結論に落ちないこと。プロセスに留まって続ける、をすること。さっき人類って書こ



うとしてやめた。でもこれが知恵なのは間違いないし、こういうのをこそバトンするために書いてる。読ませる。読ませたい。自分も読みたい。「私」はただの知恵の乗り物にすぎない、バトンして、風に乗って落ちて、その土地にあった方法で発芽してくれたそれでいい。ボトルシップのような、そのなかに入れられた手紙のような言葉は知恵に化ける潜在性を伴っている。

私の日記、ほんとともっと色々あったけどいまでくるのはここまで。11/1の深夜2時。

そういえば、あの日の3時まで話したことは、ぶんじ寮が4年経ってチャレンジより守りや摩擦回避が優先される集まりになったって、そこにいた住人たちと。でも初期からの住人が己の声にまわりついた強さを鑑みてあまりでしゃばらないでいる自制の空気があった。みたいなのやりとりを、隣で断続的にレッツのスタッフが聞くともなく聞いてた空気。そんで自然にしりとりみたいに、外部に対する情報の出し方をわかりやすさ重視でない、複雑さやプロセスを編集せず外に観てもらうほうがいい、って言葉がでた気がする。自分は賛成した。対外的なイメージに当てはまる、当てはめたいことにおさめるために自分から自己編集する行為は危険で、かつ最高につまらない。情報がある種の生命だとしたら、自傷に近いとおもうよ自己編集はって書きながら思ってる。命のない集団はただの自己延命が目的になった装置だよ。自分はそんな集団には興味がないな。

――

インタクションが起こったか？

観察されることは起こったか？

名前きかれた、こたえた、覚えてもらった、わたしも覚えてたよこうちゃん

代々木公園の自販機まで小銭ごそごそ探してたら、かわちゃんから買う飲み物のアドバイスもらった（銘柄を指定された）

散歩、サウナ　鼻歌　スキップー存在の輪郭を形作るそれらの必要

非意味はミトコンドリア、意味との連関が存在の輪郭をつくる

両者のネットワークとしての人間”

あれから2週間後くらいに、わたしはたまたま鏡の立場になった。

福祉施設を訪ねて、その施設の利用者やスタッフと一緒に朝まで過ごした。

自己紹介などはしなかった。

食材を近くのスーパーに買いにいった料理して、夜更かしして甘いお菓子や辛い麺を食べて散歩して、雑魚寝したら朝だった。いつのまにか知り合っていた。なんか馴染んでますね、とかスタッフの人に言われたのもデジャブだった。

いつのまにか地元の新聞記者の人も一緒にいて、翌朝みんなで朝ご飯たべて解散するころに過ごした時間の感想を聞かれた。困った。言葉が出てこない。

特別なことをした感じがなかったから。

特別でないことに「日常」という言葉を当てるのは、なんだか変だ。日常は日常的に使う言葉ではない。

「普段から人同士として出会っておけば、災害みたいに困ったことがあった時にも安心じゃないですかね。」と言ったらしい。聞かれたからこたえた、そういうときの言葉だ。それが数日後に新聞に出ていたとのこと。わたしは、この「カギ括弧」がまわりつく構造が邪魔だとおもっている。「わたし」と同じくらいに。

こうちゃんもかわちゃんもぶんじ寮や東京で過ごした時間は、本調子でなかっただろう。

それはそうだろうと思う。わたしも寝不足だったし。

だから2週間後に逆の立場になったときは、耳栓を持参して寝袋で寝た。1回目の夜のいびきのことをおぼえていたから。これは2回目だからできたこと。

だから、2回目にまた会えばいい。

今度は何を持ってきたらいいか考えたり、みんなで相談しておいてほしい。わたしでよければ、アイデアも出せるし。

自分が浜松に行くのもいいかもしれない。

耳栓を持って行くのも、それ以外をもっていくのも、何ももっていかないのもありだと思う。

いろんなアイデアを交換したい。

とりあえず、焚き火なんてどう思う？

そういえば「かしだしたけし」ってなにをするものなのか、対面で聞き忘れた気がする。

それも聞いてみようかな。

この文章について

好き勝手に書いて、異物感や多面性を均して、統一感をもたらすための編集は行わなかった。わたしの人間観の反映かもしれない。

Aki Iwaya (岩谷 聡徳)

VS?collective メンバー

『自分の「声」で書く技術 自己検閲をはずし、響く言葉を仲間と見つける』2024 英治出版（企画・監訳）
『オルタナティブスペース&コレクティブ～もうひとつの現実のつくりかた（仮）』2025 刊行予定

”オルタナティブスペース”＝既存の社会になかったから、自分たちで編み上げた居場所
”コレクティブ”＝人が集まったことで発生した、有機的な運動体

<https://akiwaya-vscollective.studio.site/>
<https://x.com/mamangao>
<https://www.facebook.com/aki.iwaya.5>

新しい価値創造

～福祉・アート・文化・障害・まちづくりが混然一体となる

文＝久保田翠（認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ代表）

認定NPO法人クリエイティブサポートレッツは2025年で25年を迎える。

障害のことなど全く知らなかった私が重度知的障害者（たけし）を生み、育てる中で感じる社会との齟齬が活動に代わってきた。

健常と言われる人々は、当たり前前に学校に通い、社会で働き、結婚し家庭をつくり、あるいは一人で生きていく。自分の人生を自分で選択し、時には挑戦したり、あきらめたりしながら生きている。しかし障害者になった途端、その選択が普通ではなくなる。

重度知的障害者は言葉を持たない人が多い。「私はこうしたい」と言葉で表現することができない。そうなるとさらにその生き方は紋切り型の、時には人間として扱われていないのではないかと思うような生き方を強いられる。

私は親であって当事者ではない。しかしその違和感はお自分のことのように降りかかる。当の本人はのんきで、どんなことが起こっても割と平気に過ごしているが、その現実には私は愕然とする。そして誰が決めたのかわからない様々な規制や規範の中で生きることは、まさに暴力性をはらんでいるし、柔らかな差別だと実感してきた。

しかしこの感覚はなにもたけしただけのことではないと感じる。女性だから、母親だから、大人だから、社会人だからと押し付けられている様々な価値観。それに苦しむ人たち。社会にルールがあることを否定しているのではない。しかしその時世に合わせてルールは変えるべきなのではないか。

レッツは、重度知的障害者が作り出す「世界観」をアートの手法を用いて顕在化することを得意としてきたNPOだ。それは同時に様々な枠組みや価値観、ルールを「問う」活動だといっている。

コロナ禍後、社会の潮目が大きく変わった。世界的なパンデミックは過剰な経済やグローバル化は必ずしも人々の幸せにつながらないことを気が付かせた。人が幸せに生きるためにはお金も必要であるが、やはり困ったときに「助けて!」と言えるコミュニティ、隣人がいるのかどうか。そしてどんな人も、お互いの持てる力を提供しあいながら生きる共助の文化も必要であること。それは血縁や地縁、同族といった今までの枠組みとは違い、全く新しい関係性を作り上げてく時代となった。

最近、レッツには企業の方々の見学がめっきり多くなった。今いたところで「共創社会」や「地域共創」という言葉が聞かれる。今までのCSRや社会貢献とは違って、事業（産業）

自体をクリエイションしていくことが求められている。そして、レッツの活動が何かのヒントになるかもしれないと思う人々が増えている。これはチャンスである！

昨年度から始まった「新しい価値創造」の事業はそうした背景の中から生まれた。私たちの活動にある今の時代だからこそこの「価値」とはなにかをここで考えてみたいと思った。

今年度は特に様々な分野の有識者にレッツを体験していただきながら（ひとインれじでんす、フォーラム）、「ここにある価値」を考察してみた。また、自外に出かけ、いままですでに出会ったことがない人たちと出会い、思考する機会（かしだしたけし）を多く行ってみた。また、毎月1回行っている観光事業（タイムトラベル100時間ツアー）や、月2回ペースで受け入れた見学、月2回の哲学カフェ（ミドのヴぁ、かたりのヴぁ）を活用して、皆さんと議論を重ねた。また地域と仲良くなることも目的に行っているアートイベント（オン・ライン・クロスロード [2021、2022]、お祭りごっこ～みんなで作る凸凹まつり [2023、2024]）も4回実施してきた。

ここから見てきたことは、いままで訳が分からない活動と言われ続けてきた、福祉、文化、障害、街づくり、アートを横断してきたレッツの活動が、ようやく多くの人々に理解されるようになったことである。福祉であり、文化事業であり、アートであり、まちづくり。それらすべてを包括しながら障害者福祉が行われている。そしてこの傾向は今後全国に波及してくだろう。同時に私たちは、こうした活動をより深く、広く進化させていくことが求められている。今はなんと命名していいのかわからないが、こうした横断的な活動がより必要な時代となったのだ。そして、重度知的障害者の社会的なとらえ方も確実に変わっている。

レッツは2028年を目標にもう一つ活動場所を作ろうとしている。「たけし文化センター連尺町」は、浜松市中心市街地に重度知的障害者の拠点を作り、同時に地域の文化創造発信拠点を目指した。彼らの文化を多くの人と分かち合いながら、新しい文化を作り上げていく試みである。2022年からは自から考えるまちづくりを実行し（ちまた会議、まちづくりを考えたら福祉にたどりついた）多様な人の居場所としてのちまた公民館という実験場所も作った。そして今度の場所では、「暮らし」をテーマに、障害者だけではなく、多様な人とこれからのコミュニティや暮らしを共に実践していく場所としていく。障害者の枠を超えて、一人一人が個人の幸せを思考し、実践していく拠点を作りたいと考えている。そしてここでの多様な人たちとの思考・実験が次なる「価値」につながっていくのかもしれない。

文化庁委託事業

「令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

「表現未満、プロジェクト」新しい価値を共創する～哲学・学び・アート・場づくり

《事業データ》 事業数：計242回

1・新しい価値創造のための思考と実験

- ①新しい価値創造のための研究会議の実施
 - 研究会 11回
 - 視察・打合せ 10回
- ②かしだしたけし+かたりのヴぁ 20回
- ③ラーニングプログラム（タイムトラベル100時間ツアー） 16回
- ④価値創造実験のフォーラム、京都哲学研究会と共同で研究事業 1回

2・人が集い、学び、交流し、語らい、思考し、ともに生きる「表現未満、センター」の実践事業

- ①ちまた公民館継続と表現未満センターの設立
 - 視察・ワークショップ・見学 3回
 - ちまた公民館事業 103回
- ②出張ちまた公民館@公共施設
 - 出張ちまた公民館 8回
 - 凸基地ワークショップ 14回
 - 他団体とのコラボレーション企画 7回
- ③「表現未満、スクール」～「生きのびるためのエクササイズ」の実施
 - ひとインれじでんす 9回
 - クラブアルス 2回
 - かたりのヴぁ 12回
 - ミドのヴぁスペシャル 9回
 - ちまたトーク 10回
 - 福祉講座 1回
- ④シラス隊（ボランティア隊）ミーティング 6回
- ⑤地域の祭りを作り上げる～お祭りごっこみんなで作る凸凹まつり

認定NPO 法人クリエイティブサポートレッツ

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがいが」を乗り越えて人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つめていく場を提供し、様々な表現活動を実現するための事業を行い、全ての人々が互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりを行う。

特に、知的に障がいのある人が「自分を表現する力」を身につけ、文化的で豊かな人生を送ることの出来る、社会的自立と、その一員として参加できる社会の実現を目指す。

そして、知的に障がいのある人も、いきいきと生きていけるまちづくりを行っていく。

【事業概要】

たけし文化センター連尺町

重度の知的障害者を核としながら、様々な人たちが集い・学び・交流する文化センター。

ちまた公民館

誰もが利用できる私設私営の公民館。
人々が出会って集うことで生まれる街の可能性を実験する場所。

障害福祉サービス事業所 アルス・ノヴァ

障害のある様々なメンバーが利用する福祉施設。
連尺町と伝馬町の2 拠点で活動中。

ヘルパー事業所 アルス・ノヴァULTRA

重度知的障害者の「文化的で自立した暮らし」の実現を目指し、生活のアシスト活動を行っている。

ホームページ



ちまた公民館 (Instagram)



たけし文化センター (Facebook)



生きのびるための エクササイズ2024



のヴぁてれび (YouTube)



凸凹まつり2024

